OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	ラ・アラウカーナ : 第二・三部
Author(s)	エルシーリャ, アロンソ・デ; 吉田, 秀太郎
Citation	大阪外国語大学学術研究双書. 1994, 12, p. 1-421
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80055
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

大阪外国語大学学術研究双書12

アロンソ・デ・エルシーリャ

ラ・アラウカーナ

（第二・三部）

吉　田　秀太郎　訳

1994

大阪外国語大学学術研究双書12

アロンソ・デ・エルシーリャ

ラ・アラウカーナ

（第二・三部）

吉　田　秀太郎　訳

1994

Publications of Osaka Universitiy of Foreign Studies, No.12. 1994

Alonso de Ercilla y Zúñiga

LA ARAUCANA

SEGUNDA Y TERCERA PARTE

Translated from Spanish by Hidetaro Yoshida

目次

第二部
読者に …… 1
第十六　歌章 …… 3
第十七　歌章 …… 252
第十八　歌章 …… 41
第十九　歌章 …… 61
第二十　歌章 …… 75
第二十一歌章 …… 96
第二十二歌章 …… 112
第二十三歌章 …… 126
第二十四歌章 …… 149
第二十五歌章 …… 175
第二十六歌章 …… 195
第二十七歌章 …… 209

第二十八歌章……225
第二十九歌章……244

第三部

第三十　歌章……259
第三十一歌章……276
第三十二歌章……289
第三十三歌章……313
第三十四歌章……335
第三十五歌章……352
第三十六歌章……365
第三十七歌章……378

訳　注……398
訳者あとがき……413
追加参考文献……421

読者に

先般行った約束に従い、少なからぬ困難と労苦を押してこの物語を継続する。さて、この『ラ・アラウカーナ』の第二部には私の要したその労苦の成果が窺えぬやも知れぬが、本書の読者は、かくも無骨にして変化に乏しき書を――というのも扱うことは終始同じであり、しかも真実という人跡稀な道を常に歩まねばならぬ故だが――二冊とも書くに当り要した労苦のほどを想像していただけると思う。私に同行することに飽きない筈はないと思えるからである。そこで、かかる事態を避けるため、可能な限り諸々の事どもを折り混ぜたき気持は禁じ得ないが、しかし文体は変えぬことにした。その理由は私の以下に述べることばが本書の持つ欠点を補ってくれるものと願うからである。また本書の中にわが国王陛下がサン・カンタンの攻略と入城で以て示された高邁な御心を話すことをお許し願いたい。何故ならその同じ日にアラウコ人によるコンセプシオンの砦に対する攻撃があったためである。更にドン・フワン・デ・アウストリアがレパントの海戦に於て勝利を収めた事についても扱いたい。ところで、特筆すべきこの二大事をかくも粗末な場所に話すのは甚だ無謀と云うべきだが、然しアラウコ人たちはその様な扱いに相応しい。彼らは三十年も前から自説を堅持し、嘗てその手から武器を離した事なく、大きな町々や富を保護しないからである。彼らは敵を利せぬ様にと自分たちの家や財産を焼き払った。彼らはただ乾燥した土地と（尤も我々の血でしばしば潤うのだが）未墾の不毛の地のみを保守する。そして彼らは確固たる意志を以て、筆を持つ者たちに多大の材料を提供している。私は多くの重要なことを敢えて書かずに残す故、我と思はん者はそれをされるがよい。私の仕事は私の提供するのと同じ志で読者に受け容れられるなら十分その任を果したものと考える。

SEGVNDA PARTE
DELA ARAVCANA, DE DON
Alõſo de Ercilla y çuñiga, Cauallero dela or/
den de Santiago, gentil hombre dela
camara dela Mageſtad del
Emperador.

DIRIGIDA ALA DELREY
don Phelippe nueſtro Señor.

EN MADRID.
En caſa de Pierres Coſin.
Año 1578.

Con priuilegio de Caſtilla, y de Aragon.

『ラ・アラウカーナ』第二部　初版本表紙

第十六歌章

この歌章で嵐は終る。イスパニア人のコンセプシオン港への入港とタルカグワノ島への上陸、オンゴルモの盆地でインディオたちが開いた総会、ペテゲレンとトゥカペルの間にあった不和、及びその事で結ばれた協定が含まれる。

痞(つか)えしわが声よ出でよ、そして
天地の動きを
止めるほどの効き目もて
喧噪と哀れなる嘆きを追い払え、
名声よその高鳴る喇叭もて
衰えし精根を鼓舞し
丸き地球の際限まで
干戈(かんか)と憤慨と新たなる戦を及ぼせ。

おお、主よわれに恵みを与え給え。
そは今こそわれにとりて無上の助け。
かくも甚だしき危難にわれははや
救い給う主の好運しか目に入らぬ。
わが願いを篤と御承知あれ。
御聞きのわが声に力を与え給え。
やがて荒ぶ海原も主の傾聴の様を見て
その怒濤を鎮めるであろうほどに。

主よその御船に頭を廻らし
この只ならぬ苦難を救い給え。
僭越を顧みず申せば
たとえ驕れる海が
苛酷なる運命の掟に抗い
巌をその根元からし
その高き怒濤を大空と混ぜようとも
すべてはこれ主の御心次第なれば。

かくの如く航海を妨げ、
久しく争れし主張の
主の決め給いし期限を
敢えて伸ばそうとする
運命や立ち開る海と吹き荒ぶ嵐の
執拗さにも拘らず、
われは期す、わが壊れし船が
目指す港に着くことを。

強大なる四大は結託して
か弱き船に敵対し
その未来の場所を越えて
今やその秩序を失い
御し難く激しく怒り狂い
騒き乱されて
原初のカオスと混乱さながらに
古来の不和と力の中で入り混っていた。

かくも多くの敵と戦い
抗い壊れた船は
片舷を水面に没せぬばかりにして
強大な怒濤に立ち向かった。
されどもはやその怒れる風と海に
抗いきれず降伏し
酷烈な波に襲われながら
屹立する不毛の巌に接近する。

迫り来る死を目前にして
歎きの声と涙はいや増したが
峻烈な西風に奪い去られて
遠くの岩の凹みを傷つけていた。
操舵手も水兵も悉く
狂ったように秩序なく歩き回った。
「弛めろ」と叫ぶ者、「帆を上げろ」と叫ぶ者。
或る者は帆脚綱に行かんとして帆綱に向かう。

人びとは交錯し、
恐怖のために混乱して妨げ合う。
或る者は声高に懺悔し、
神に過ちの寛しを乞い、
或る者は誓いを立て、或る者は約束し
或る者は遠き母に別れを告げた。
大いなる恐怖はつねに
歎きと祈祷と叫び声を募らせた。

片や厳しき天空は
そのまま大地に届くかに見え、
片や荒れ狂う海原は
尊大に膨れ上がって天に上る感があった。
こはそも何たることか、永遠にして力強き父よ、
僅か一隻の舟を海と風と空が
かくもその力を尽くして
苦しめることがさ程に重要なのか。

アミクラスの小舟(一)も
かほど執拗に風に海に嘖(さいな)まれはしなかった。
それ故脆き木材でできてはいたが
この世の重みと存在を支え得た。
はたまたユリシーズの舟も、トロイから
最后の日に脱出せし艦隊も
かくも怒れる風に襲われはしなかったし、
立騒ぐ波もかほどに逆巻くことはなかった。

自信も強靱極まる気力も
時ならぬ恐怖に萎え、
戦慄すべき死の相が
各自の顔に刻まれていた。
彼らは皆、はやその運命に屈し
枚済の望みを全て打ち捨て、
運命の支配に身を委ねる
定めなく彼方此方と走っていた。

折しも抗い難い荒波の一撃が
渦巻く風に包まれて、呻りつつ、
舳近くの舷側の太綱を断ち切り
はや傾けるガレオン船を襲った。
だがこのとき特筆すべきことが起った、
前檣の解けし帆布の端が
激しくはためきざま
巻き留め置きし錨の爪に絡まった。
錨は宛然弛みし杭の如く
元の場所から引き抜かれ、
風に翻弄されながら
悉く打ち砕き傾壊させた。
だが彼等を忘れ給わぬ神は
その恩恵を遅らせ乍らも
幸い舳の斜檣の曲った突起に
錨をしかと把えしめ給うた。

帆は固定され、その刹那
ガレオン船は正しき針路をとった。
そして烈しい波風にも拘らず
舵をとって船を西風の風に向かわせた。
突如迎えたわれらの喜びは甚だしく、
不意を打たれし恐怖心は
苦難と歓喜の極みを
同時に耐えることが出来なかった。

さても俄かな喜びが
不安と懸念を追い払うや、
かつまた既に見放されていた手足の
冷え切った血潮が復元するや否や、
豪気で辛酸をなめし者たちは
涙に濡れるその顔で天を仰ぎつつ、
敬虔なる祈りと犠牲を捧げて
神の恩恵に感謝した。

だが膨れ上がった荒海と
吠えて止まぬ御し難き風は、
執拗に音を立てつつ
船を攻め立てるがその努力も空しい。
曳航船に繋がれた
フェリーペ王の運勢はいま
空までも浸さんと望む
泡立つ高波の上を滑って行く。

この時、暗く閉ざせし霧は
猛る風に吹き散らされ、
われわれは東にエラドゥーラを
そして南にタルカの島の浮かぶを見た。
われらの幸運と憧憬の
アラウコの大地は確認せれ、
ペンコの岩肌の現れるを見て
後ろ向きに港に入った。

其処は怒れる北風の猛威と
舷側を烈しく叩く
不断の波にも耐え得る
小さき島に護られていた。
弓形に伸びる長い岬が
疲れた大小の船が
確かな定泊所と優しき保護を受けるべき
入江と静かな窪みを作っていた。

破損し制御を失った船が
太い綱に繋がれ、錨に固定されて
高い山々の陰に投錨した。
錨はその頑丈な歯で大地を噛んだ。
高い帆が巻かれるや
陽気な戦の響きが
萎縮せし気力を
伸ばしてくれた。

その小島には気骨のある
頑強にして好戦的な人々が住んでいる。
彼らは好運により其処に運ばれし
只一隻の船を見て
「戦だ」「戦だ」と喜々として叫び
狂暴な武器を手に手に
奇襲せんとして急拠
船に向って押し寄せる。

阻しき断崖の麓に
彼らは隊を組んで現れる。
いかなる危険、侮辱にも
決然たるわれわれは
素早く武器に立ち向かう。
先の苦難と嵐により
いかなる危険も激戦も
われわれには物の数ではなかった。

新なる気力と共に
われわれは小舟を目指して駆けて行った。
さもなくば船は陸地遥かな浅瀬に
座礁する恐れがあった。
船は広い両の脇から
二隻の小舟を吐き出した。
その中にわれわれは
飛び乗って鈴なりになった。

これは詩的な架空の飾りでなく
確かにあった、まことの話である。
或る驚歎すべき事件だったのか、
不可思議な兆し、悲しき告知だったのか、
それとも厳しき辰星の強制によるものか、
または前代未聞の急変か、
或いは世界の動きが——最もあり得る事だが——
別な定めになっているためか。

疾風はすでに鎮まり、イスパニア人が
大地に足を踏み入れるや否や
やにわに雷(いかづち)が落ち、
彼(か)の雲の帳を鮮やかな焔と化した。
そして突然蜥蜴の走り行く如く
彗星が天空を引裂くのが見えた。
海は吠え大地は大いなる重みに
圧せられているかの様に悲痛な呻きを上げた。

そのとき俄に凍てつく様な恐怖が
混乱せし土着人の力を殺(そ)いだ。
彼らはあの類希なる現象と
悲しくも不可思議なしるしを見て、
己が滅亡と未来の不幸を告げる
不幸なる予兆と考え、
己が破壊と敗北を告げる
永遠の抑圧をめかすものと見た。

この事に恐れをなして彼らは我慢ならず
哀れな生命(いのち)を救わんとて
今は屈したる武器を放棄し
密集せし部隊を離れて行った。
彼らは遂に父祖の棲家を捨て、
女、子供や食糧と共に
筏や丸太に乗って
人知れぬ道を逃れて行った。

時を移さずわが軍は人気なき
人家や小屋を駆け巡って
粗末な食糧が持ち去られているのを
到るところで発見した。
そして丹念に
すべての道を塞ぎつつ、
洞窟や深い茂みに
失跡の土民を探索した。

其処に身を潜めていた幾人かの
哀れなインディオは見つけられ、
まだ恐ろしさに気付かずにいた
集落の若干の者が急襲された。
だが我らは彼らの身柄を保証し好遇した。
履き物、鉢巻、衣類を与え、
優しい言葉で安心させ、
各自の家に無事送還し、

われらの行動の意図と
主たる目的は宗教と、
聖なる秘蹟を軽んじ
受けたる定めと誓いし信仰をば
不実にも踏み躙り
無法の武器を取りし
洗礼受けし反逆者たちを
救うことだと解らせた。

そして若し嘗て抱きし
キリストの掟に帰依し、
偉大なるカルロス五世に対し
誓いし信仰に戻らんとするなら、
他の一切において
自由に振舞うことを許し、
合法的な如何なる徒党も申し合せも
保証し確約する旨を伝えた。

やがて軍用と日用に
好都合な道具類を、
誰にも妨げられることのない
適当な場所に取り出し、
そして皆の者で熱心に
或る者は丸天幕、或る者は庇や大天幕を張り、
或る者は火を燃やして使い慣れた鍋で
海水を含んだ小麦を炒る。

すさまじくも黒き夜の闇が
天より降りて陸海を覆い、
時ならずも急ぎ
世界を闇黒の布に包み込む。
丸天幕も大天幕も、悉皆の物が
強風により薙ぎ倒され、
新たなる波乱によって小島は
根底から吹飛ぶかに見えた。

しかし遂には遅き待望の朝が
雲の群を駆逐し、空を清め、
暗き空と湿りし大地を
喜びで充たした。
やがて忍耐強きわが部隊は
好天の不安なのを知り、
熱心に厳しき冬の猛威の
後片付けに勵む。

或る者は逃げ去りし土民の
藁屋根を素早く剥がし、
或る者は板や木の枝や葦を
新たな家屋の屋根に置く。
そして砂地に深く固定された
丸太棒の上に
数多の小屋を建て
かくて僅かな土地に村を作った。

さながら小鳥たちが
必要に迫られ、
人里離れた片隅に
藁や羽根や小枝を
嘴にくわえて往き来しては
粗末な巣を作るように、
見るからに不毛な土地に
各自それぞれ己が寝所を作る。

われわれは全員湿気の多い
沼沢地に宿営し、
努力と工夫によって
厳しき冬の猛威の後片付けも終え、
必要なる武器を整え、
仰天せんばかりの大音響と共に
強化された大砲を放てば
辺りの土地も海も振動した。

遠き戎の地にて
住民はその珍しい大音響を聞いた。
アルパカもビクーニャも虎も獅子も
不安げに彼方此方を歩き廻り、
海豚(いるか)もゴカイもイモリも
その深き洞の中に身を潜め
泉も流れ早き河も
当惑してその流れを止めた。

轟音は国中に響き
呆然と立ち尽くす者もいた。
嘗て圧えられし事のない頑丈な頚も
萎えたる胸に垂れた。
この様にして到来を知った彼らは
戦を告げる楽器を鳴らし、
浜辺の至るところにその輝く
軍旗や旗印を靡(なび)かせた。

オンゴルモの盆地には
十六人のアラウコの酋長と
関係する地域の
幾人かの名だたる長が集い
全員大方われわれと
一戦交えたき一念にて
場所と時刻と気構えに関して
一同は協議に入った。

彼らの中にレンゴもいた。
彼はその勇名故に作戦の会議に加えられた。
諸氏も覚えておられよう、
マタキトにて死者の間で意識朦朧たりしが
やがて我に帰り
血の気こそ失せたりとはいえ、
猛る死の勢に気力で耐え
遂に幸運にも逃れし男。

彼らの中心に座せるカウポリカン、
彼の言を聞かんと
静かに待てる
一同を目で囲みながら、
悠揚迫らぬ態度で
厳粛なる語調の声を上げ、
沈黙を破って意とするところと怒りを
吐露して言った。

「勇猛果敢なる諸君、
（諸々の兆候（きざし）より判ずるに）
吾らを不朽の者となすべき
あの幸う（さきわ）約束の時は到来した。
幸運は遥か東方より吾らが
僅か一日にして亡すべく
数多の者共を束ねて齎（もたら）した。

「彼らの血と命を奪うことにより
諸君は完全にその剣を不朽たらしめ、
圧えられしわが自由の定めは
元の自由なる力を取り戻すのだ。
その定めは遥かなる国々にまで及び、
不可侵かつ神聖にして、
辰星の下に生きる万人が
その下で等しく暮すためのもの。

「仍て、これらの者共は狂いし考えにて、
諸君に対し無恥なる行動に出で
諸君の土地と安住の場に
旗を展げて侵入したが、
その傲慢不敵は
新たなる懲罰を受けねばばらぬ、
遅延が彼らの希望を膨らませ
彼らに力と知恵を授ける前に。

「されば、余は結論として
（諸君の賛同が得られるのなら）
最善を尽くして彼らに
奇襲を加えることにした。
己が力と腕により、他に
切り開く道ありと思う勿れ。
怒れる武器を両の手に
彼らと黒白をつけねばならぬ。」

彼はこう云って言葉を終えた。
そして厳めしき老人ペテゲレンは
兵として且つ聡明な助言者として
最長老としての意見を
具申する。「おお、隊長諸君、
余は真先に血を流すことを拒む者ではない。
仮令（たとえ）年老いて凍てつくかに見えようとも
この胸には熱き血が沸々と滾（たぎ）っている。

「されど唯一余を押し止め
戦に疑念を抱かせるものがある。
それは、或る通報によれば
敵の数は多く大部隊を成していること、
されば明白にして都合よきことは
大々的な行動には努めて出でざること。
そもそも過小評価することは常に
危険なる痛みを招くものである。

「彼らの陣取れる場所は
元来堅固にして人里離れ、
海と高き岩に取囲まれ
至るところ自由にして防備が整っている。
されば彼らの言に耳を貸し
拒否も反対もせざることこそ
効き目があり都合がよい。
聞くのみなれば何人も義務を負うことはない。

「如何なる害も及ぼすまい。その間に
お主らは人々を集め準備し
秘かに対策に必要且つ好都合なるものを
整えることが出来よう。
困難に際してはその対策を施し、
如何なる不便も解決し、
平坦なる道を切り開き
然る後に行動に移るのだ・・・。」

彼はそれ以上云えなかった。怒りに燃えし
勇者トゥカペルが物凄い声で
彼を遮り斯く言い放った故である。
「眺めるのみの人は名誉ある戦を企て得ず。
仮令国中が危険と考え
引き退っても
余は仲間なく唯一人と雖も
武器を取り大義の為に引受けよう。

「お主らは若しや幾度も証明済みの
御身らの力に不信を抱きしに非ずや、
槍投の業においても
将又刀を振り回す腕力においても
様変わりせし様子、
且つ御身らの勝利は汚されて
賤しくも見すぼらしき徒党になし下り、
われらの名誉と信用が傷つけられるとは。

「余がこの腕に力を有し
会議において声を有する限り、聞き給え、
如何にペテゲレンが勝手な事を云おうとも
事は武器による決着を求めている。
されば、別なる道を切り進まんとする者は
先ず余のこの脇腹を切り開くべし。
何故なら、演説でなく鉄の戦棍こそが
奴らを納得させる筈だから。

「人に賞められたき者は
戦場で発揮する力と
大胆さのみで十分、
余はお主らに、余に出来得る事を明かにしよう。
だがお主らは賢者と見做されたき一心から
恐怖心を分別と叫び、
且つ身を危険に曝さぬために
一切を談合によりて解決せんとする。」

ペテゲレン答えて言う、「お主には
理性の居場所ありし例なし。
余は老人ながら一人にて戦い、
お主の狂気の無謀を懲らしめたい。
鞣革にても鎖の網にても
槍にても或は戦棍にても可なり。
時到りなば余は理性よりも長き
手を有する事を示すであろう。」

トゥカペルの天を仰ぎ見る顔の
何という憮然なる様。
目から燃え立つ火を噴き
地面には一瞥も与えずに言う、
「かくも傲慢なる考えは
所詮トゥカペルの怒りの基、
されどわが名誉とお主の齢に鑑み、
助太刀を頼み給え。」

老人答えて言う、「未だ嘗て
余は如何なる時も他力に頼りし事なく、
且つ又わが血道は未だ涸渇したるに非ず、
お主を存分に懲らしむべき
腕も衰弱は致しており申さぬ。」
しかし甥のレンゴが、つと立ち上がり、
彼の言を遮り、こう言った、「差支えなくば
余が伯父に代ってお相手致そう。」

「合点承知、異存はない」——とトゥカペル
叫ぶ——「それと加えて更に十人」。
だがオロンペーショが席を立ちて言う、
「レンゴ殿、お主には拙者がお相手致そう」
「拙者も亦そなたの僭越を窘めてやろう」
と猛々しくレンゴが応える、「しかも
更に言えば、従兄弟御を倒せし後は
お主の脅迫と挑戦は知れたもの。」

トゥカペルは彼に言う、「先ず
お主を存分に懲らしめて進ぜよう、
オロンページョは手間はかからぬ程に。
お主はどう逃れようとも余の虜となろう。
いざ出て参られよ、いざ、其処を離れよ、
徒らに時を遅らせるのは好まぬ。
我らに武器や時間や意志のあるは
ここにて直ちにそれを使わんがため。」

若しもその時高貴なる
酋長たちが中に入り、
明白なる運勢がみごとに
事の結着をつけるまで、
かかる脅迫や尋問を
中止し、遅らせよと要請しなかったら、
レンゴとペテゲレンは同時に
武器と道理で彼に答えたであろう。

カウポリカンはもはやトゥカペルが
日毎、戦時平時を問わず
傲慢なる言葉で無礼にも彼らを
煩わすのを見て我慢の限度に達していた。
たが事を穏便に済ませる必要があった。
時節がそれを求めていたのである。
されば彼、荘重にして穏健な懇願の形で
彼の怒りを緩和し、火を消し、
そして戦争の終結後、
老人とトゥカペルが一対一にて
柵の中で自由に闘い、
その後にトゥカペルとレンゴも同様に
武器を以てその大義を明確にすることが
彼らの間で受諾され、決定した。
騒ぎが静まったとき、コロコーロが独り、
一同の者にこう言った。

「高邁なる酋長の諸君、
長年に亘る経験によって、
これからの出来事を調べる吾らに
分る事をば述べさせてもらえるなら、
我々は持てる力をただ
己が破滅のためにのみ費し
強力なる刃を、起ち上がれる
己が喉めがけて投げているやに余には思える

「諸君の破滅と余の疑惑の
確かなる標として
既に運勢の神は躊躇(ためら)い
我らの空は濁り始めている。
巨大なる建物も一度傾くや
遠からず倒壊するに至る。
偽りの礎石の上に建つ機構は
自(みずか)らの重みにより倒れて行く。

「されば、余の意見に誤りなくば、
諸々の椿事と兆候から、
弛みし地形の上に建つわが建物が
倒壊し、戦の営みが
賤しく低劣なる行為と化し
空しき高ぶりに基く
諸君の傲慢が遂に瓦解するを
危惧するは蓋し当然。

「我らはラウタローが斃れ
不名誉至極にも三本の旗が失われ
部隊が潰滅し、野獣の餌食として
風と日に曝され、横たわるのを見る。
我らの力と名声は霧散し、
野には異国人者共が充ち、
勇ましき武器は規律を乱して
その持主の胸を狙う。

「かくて、盲目的な手落ちにより
将に自らの腕と力で
他ならぬ敵を利すれば
祖国は亡び自由は死滅する。
医学に従うことなく、
野獣的な嫌悪すべき情念を抱きて
健全なる助言を受け容れぬ時、
病は癒し難く致命的となる。

「我ら何故にかくも激しく
我らの血潮と威力を減じ
民間の武器に身を包みて
敵軍に力と権利を与えるや。
何故にかくも激しくこの
無敵の団結を裂き、
我らの大義と正しき武器を損い、
悉皆の不正を正当化するや。

「アラウコの国が
自らの手により破壊され、
その美徳と力を窒息させ、
不名誉なる名と共に
異国の法律と政府の下に
置かれ、苛酷なる隷属と
久遠の首木につくを望むとは諸君、
如何なる怒りと狂える恨みを自らに抱きし故ぞ。

「本来の姿に立ち戻り給え。諸君は
徒(いたずら)に疾走し、却って転落を早めている。
その激しき行動を抑え給え。
そは諸君を更に傷つける故に。
諸君を畜生のごとく征圧せんとする
敵には対し座してそれに堪え、
有益なる助言、忠告には
堪えることが出来ぬのか。

「かくの如く敵を眼前に控え
確固たる気力を以て、
厳しき運命の神の仕打ちを待つを望まず、
己が刃で己が身を傷つけんとするは
確かに気力の欠如と匿してはいるが
相当なる軟弱さの徴である。
強固たる胸は死によって終える事を欲せず
その試練に耐え抜くもの。

「偖、しかし諸君の体には精気が潜み、
時として過多になる。余はこれを是認せず、
この土地は、否、この世界は
諸君の武勲に満ち充ちている。
たが内輪の事は止め給え、
而して共通の善として
愚かにも兄弟愛を破ることなきよう心掛けよ、
我らは一身同体なればなり。

「もし吾が疲れし齢と長き日々に
幾許かの尊敬を信用ありとせば、
この古き白髪と、余を動かす
公共の善への熱情を見よ、
諸君がその執念を
軈(やが)てイスパニア人の勢運傾き
共通の大義の定まるまで
暫し引き延ばさんため。

「されば、さて余は御身らの分別に期待する、
そは御身らをよき道に導くが故。
その他の理由は枚挙を望まぬ、
理性は御身らにとって、いと強き力を持つ故。
それらの理由は仍て置き先ず
第一に我らを引留め
その欲望を制御し制限するのは
用具の数の少なさである。

「諸君が目にする中央の入江が
我々を到るところで寸断し
我々の意図と通行を妨げている、
通行に何の対策もなく、
従って敵は合意と
新たな方策を買って出る。
我らは夢それを受容れようとは思わねど
彼らの言に耳を貸しても傷はつくまい。

「さればこの道を通じ
彼らの意図を理由を探ろう。
それが妥当ならざる時は
全面的な決裂も可能、
またこの期間に我々は
武器や物資の補強をすべし。
これらこそ所詮、事実上
この権利を左右する筈。

「だが高名なる諸君、事を正しく導く為
忠告しておく必要がある。
我らの外面上の意図は
常に平和を目指すものなるべし。
我らは軟弱なる精神にして
力と希望の挫折せしものと見せかけ、
彼らにとって絶好の餌たる
金鉱に富む土地と見せるべし。

「恐らくはこの条件にて
彼らを強力なる島の砦よりおびき出し
偽りの和睦によりて彼らを安心せしめ
策略によりて彼らを死に至らしめるであろう。
而して戦は噂だにせず素振にも見せず
彼らが安全な通行と無事の入城を信じて
陸地に到着し得べく
我らはその場から離れよう。」

老賢者の言葉はここで終った。
左程に恐れ、不便を味わう割には
危険は軽過ぎるなど
様々な意見があった。
しかしプレン、リンコーヤ、タルカグワーノ、
レモレモ、エリクーラなど最も慎重な人々が
古老の考えに賛成し、
こうして下位の者は上位の人に従った。

それにより、若く高潔なる
ミジャラウコが派遣された、
彼は雄弁にして経験豊富、
慎重にして聡明、積極的にして器用、
とある正直者にして名誉ある資産家の
様子と外見を装い、
イスパニア人の意図と目論みを探索し
場所、人数などを調べる筈であった。

彼は（時に応じて）最も都合よき事を
酋長たちに教わり、
細長き丸太舟に乗り込み、
時を移さず旅に出た。
そして迅速な櫂に推されて
程なく我らの宿舎に到着した。
そこで妨げもなく自由に、
早速部下の者と共に安全に飛び降りた。

港には涼風を受けて
わが方の三隻の船が
武器、兵員、兵糧を満載して入っており、
これらにより当方の陣営は強化されていた。
戦の道具の立てる音と
人々の動きは慌しく
ミジャラウコはその様に感心し、
且つは眩惑されて暫し立ち止まった。

されども、気付かれぬ様、密かに
その雑踏の中を横切り、
利発な眼で見回し乍ら
武器、兵員、活気の様子を捉えた。
そして、今後の事を心に描くと、
海は船で一杯、陸は武装した
兵士と武器で充満した様を見て
所期の目的は困難に見えた。

ドン・ガルシアの宿舎に着くや、
私も他の人々と兵に其処に居たのだが
節度ある儀礼を尽して
我々に陽気な声で
彼なりの挨拶をした・・・
だが私の声は歌い疲れて
もはや調子を保つこと能わず
止むなくこの歌章を終えることにする。

第十七歌章

ミジャラウコは使者としての役割を果たす。イスパニア人たちは島を出る。ペンコの丘に要塞を築く、アラウコ人たちが彼らを奇襲しにやって来る。これと同時にサン・カンタンで起っていた事柄が語られる。

敵に対しても疑わしき友にも
決して耳を拒むべきではない。
彼らを用心深いと見做せば見做すほど
彼らも相手を警戒させるもの。
聴くことによって一層よく
真偽の程が理解できるし
話しぶりや仕種から、つねに
その意図は明らかになる。

偽りの仮面と奇異な振舞いにより
一層当惑させる積りも、却って
目覚めさせ、知らせ、正道に導くもの。
隠したる程露るるはなし。
適確に目的が見え
是非、益不益が判明する
如何に用心深き曖昧な言辞からも
必らず何かが推量できる。

将又、技巧を凝らせる胸中からも
何らかの考えは窺えるもの、
何故なら言葉は遂にその役を果す故。
聞き手に分別ある場合は尚更、
言葉が兆しを与えなかった例はなく
沈黙が秘密を明した例もない、
更に言えば、黙せる愚者を
識別する程困難なことはない。

隊の長たる者、敵の技術と状況、
意図と企てとその根拠、
敵は思慮深く沈着か、それとも無謀か、
動きは鈍重か軽快か
怠慢か勤勉か、軽率か慎重か
一貫性なく優柔不断か決断力に富むかを
充分認識する事が重要
且つ必要である。

されば蛮人の元老、
敵の意図を知らんとして
慎重なるミジャラウコをば
友軍の姿と声を装はせて遣わした。
彼は倍加せる気力と表情で
礼儀正しく、後にも述べる如く
四方八方に頭を廻らせ乍ら
荘重な声でこう言った。

「幸(さきわ)わう隊長はじめ御一同様、
拙者は偉大なる元老の声と権威を以て
和睦のためにアラウコ国の
国王より遣わされし者に候。
打つべき手も無きため
恐怖と臆病から
不名誉にして愚鈍なる方法をとることに
決定せしめとは思し召さるな。

「最果ての領土を防衛し
その手によりて確保する
アラウコ国の偉大なる名と信用が
如何なるものか貴公らも御存じの筈。
また基督教の目的と熱意に動かされ
大いなる分別と修錬の末
その教義を広めんとして渡り来し
貴殿たちのことも存じ候。

「かかる次第にて、
貴公らの示せし見本が証明し
且つ貴公らの良き評判と名声が
明るく声高にそれを室言致しおれば
拙者は我が方に関し確言しに参りました。
拙者は貴公らに保証致します。
提案される甚だ望ましきこの和睦は
酋長全員の承諾せし事である旨を。

「偉大なる元老は御身らに関する
若干の話を聞き、
賢明なる一致と見解にて
宜(むべ)なる原因、理由に鑑み
和睦を受諾せん意向に候。
公正実直なる条件にての協定を、
純朴なるこの土地の罪も無き
数多の民を苦しめる事のなきように。

「もし御身らが愛を籠めてお求めの
不可侵なる信仰と誓いと
我らが自由なる意志により提案せし
快く確かなる受諾が
我らの民も国々も
時と共に損われるに至ることなく
これらの事が等しき名誉と
正しき協定によって定着せば

「防禦も抵抗も無く
カルロスを友とし主として讃えよう。
而して無償の奉仕と服従を
我らの意志により提供しよう。
されど若し御身らが暴力にて事を為さんとせば、
我らはその前に己が子を食すであろう。
御身らは我らの刃が決然と
己が胸を貫くを見るであろう。

「だが平易なる取決めにより、何の憂も無く
御身らは国王のらめ旗を掲揚するだろう、
我が国は武器を捨て
両の腕を開きて御身らを迎えん程に。
慈愛深き天は確固たる永遠の平和を
吾人に叫びかけ、
過ぎ去りし事は永却に
沈黙の中に埋もれることを認めるであろう。

ここで彼は言葉を終え
独自の方法と習慣に従い、友愛の念を示し
その行動において常に我らの心と
彼らの邪心を満足させた。
そして野蛮なる力は衰え、
敵に力なく而もその
財宝は豊かなることを知り
我らの意気と貪欲は募った。

使者の言を聞き終えたドン・ガルシアは
彼を快く迎え入れ
大略、提案された友情と申出に
感謝している旨、且つ
国王の御名の許にその善意の提案に対し、
彼らが濫りに屈辱を味う事なきのみならず
多くの苦役から免れるべき
待遇で応える旨返答した。

やがて二人の召使に命じて
更なる保証として若干の贈物を取出させ
色とりどりの衣服と
鉢巻、ビーズ玉、絹帯、
そして高貴な隊長や男子には
立派な徽章や衣服を贈った。
ミジャラウコはそれらを礼儀正しく
お辞儀をして受け取った。

かくて、感謝し恩義を感じたる
友としての面持と仕種で
折目正しく別れの許しを乞い
乗ってきた舟に戻った。
そして何時もの熱心さで
日が山の彼方に没する頃、自国に着いた。
そこでは彼の高貴なる者共から
歓喜の中に迎えられた。

万事が整い、好機到れりと見て
酋長たちは集まりを解いた。
そして兵士たちを分散させた証拠として
各自を平穏の中に家庭に帰らせ、
そこで音もなく密かに
敵を欺いて武器を用意した。
各自心を一にし、
一大事に備えながら。

我らは当然疑いつつ
そこに二ヶ月余滞在した、
そして苛酷な冬の雨や
厳しき風に耐えた。
だが、この時期が過ぎると
敵の意図を探るべく
我らは島の宿舎を放棄し
本土に居を構えることに決めた。

威勢よき百三十名の若者が
我が宿舎に集められた。
勤勉で勇敢なる
選りすぐりの頑丈者、
適切な武器や道具を
我らは秘かに用意した。
私も彼らと共に
運を試すべく加った。

近くの海上に聳える
小さき安全なる丘に
我が少数の軍が害を蒙ることなく
宿営できるように、
深く広い溝に囲まれた
頑丈な塀を建てるためである。
すでに出発進行中との知らせのあった
馬が到着するや直ちに

欺瞞の顔と二心ある友情を抱いて
秘かに武器を整えていた。
蛮人どもの邪悪な意図は知れる筈であった。
彼らが動き出せば
忽ち一斉攻撃を加え、
されば敵は気力と勇気を挫(くじ)かれ
恐れ戦(おのの)き、和睦を乞うに違いなかった。

誇高きアラウコ人が
武器を手にしていながら
妥協の道を望む等と思うは
正気を失える空想であった。
だが百三十名の瑞々しき若者は
適切なる敏速さで
黙せる夜の他は
支援も無き儘本土に移動した。

そして此の地では時は
夜が昼から奪い持った
様々な時刻を
処女座が回復し(一)
短き日中を急ぎ伸していた頃であったが
夜明けが夜の星を駆逐する前に、
丘の頂には人々が立ち
物資は横溢するかに見えた。

或る者は鉄棒を、鶴嘴を、鍬を持ちて
深き濠を掘り開き、
或る者は湾曲せし巾広の小刀、
斧、鋸、鉞(まさかり)、鉈(なた)で
太い木の幹を切り、
板枠、薪、粗朶の束で
地面に固定し、
防弾壁と幕壁を築いた。

かの有名な都市の仕事に
情熱を燃やし夢中になり
専念したテュロスの人々も(二)
か程に彼方此方を慌だしく動きはしなかった、
又油断せる敵なる娘婿の
四散せし軍隊を取り囲んだ
ディラキウムの奇蹟の柵を築きし(三)
カエサルもか程に早くはなかった。

山頂が我々により
部厚き城壁と深く広き
濠によって囲まれ、
八基の重き砲門が備え付けられ、
アラウコの眼前に
イスパニア王フェリペの旗が立てられ、
退位せる父君の下臣たちと共に
あの国を領有せし程には。(四)

かくも恐れられし尊大なる国に
百三十名の男が一日余で
かくも困難にして危険な事業を
成就し得たことは
前代未聞にして、
大胆且つ果敢の証左であり、
勇気と云うよりも無謀の成せる業と
軍慣れた人々の間では考えられている。

我が軍は粛々と進み
やがて恙なく砦に着いた。
場所の高さと恐怖の火薬が
行軍を安全平易にした。
広々とした幕帳により隔離されて
然るべく定めたる命令通り
我らはそこで全員一体となり、
運命の女神の庇護を頼んだ。

饒舌の噂の神ファマは早くも
アラウコの地域領土を天翔り乍ら
キリスト教徒の軍勢の手薄さを
口から口へと伝播していた。
人びとは虚(うつろ)な響きと
空しき轟音に恐れをなした。
確かならざる事もいつしか確かな事となり、
確かなことは、不吉な場合、倍増する。

其の様な謀略の声が
敵の耳に達するや、敵は
互いに交された確約や
扱いや協定を尊重せず、
俄かに急拠糧末、武器、兵士を整え
遅延は無用とばかり直ちに
我らへの仮措なき
襲撃を決意した。

そのためタルカグワーノに結集せし
我が陣地より僅か二マイルの地点で、
大胆豪気を誇る
威勢よき若者グラコラーノが
声高に言った、「おお偉大なるカウポリカン、
もし此の進言に多少の価値あらば
某(それがし)は約束致す、明日の襲撃において
我が幡を一際高く揚げんことを。

「而して大将軍たる貴下及び全員を
某の所業にて満足させたき所存。
此の使い慣れにし槍もて進み
敵の胸に風穴を開ける所存。
此の両の腕(かいなり)が武器と武具を
駆使する最初のものとならん。
上りの坂が如何に困難にして
万事が如何にそれを妨げんとも。」

彼はこう言い、蛮人共はこの時、
はや星も姿を見せていたので
隊を組み足早に要塞へと
夜陰に乗じて接近していった。
そして密かに一大断崖に位置して
山の麓に控えて
じっと明るい曙光の見える
時刻を待った。

危険の故かその時私が
書こうとしていた事が念頭にあった故か、
その夜私は落ち着かず、
瞬時も休むことが出来なかった。
かくて、想像に耽り夜も眠らず
静穏ならざる空想をとかく巡らせ乍ら
この物語の記憶を
筆に托して吐露したい。

暗き夜の無言(しじま)と
人々の憩のさ中に
記述を続けようとした時、
突然私に異変が生じた。
関節の悉くを氷が切った。
視力は俄に曇り
努力の試みも空しく
筆は手から離れ落ちた。

悲鳴を上げようにも
不意の出来事に妨げられて空しく
鋭き痛みと顕著なる疲労が
私の力と感覚を奪い去った。
されどこの凄まじき一時が過ぎ
元の状態に戻ったとき
噴(さいなみ)みの甚だしさ故
宛ら長き患の後の感があった。

嘆息まじりの労苦の末
暫く苦しみが和らぎ
損われ窪みしわが両の眼は
激しき消耗のため閉ざされた。
此の様にして五体は弛緩し
心地よき眠りに陥ちた。
そして五感は
いと高き処に引き籠った。

噴まれた五体が、快い
憩に身を委ねた途端、私は
大地を揺るがさんばかりの
大音響を聞き、やおら
高慢な素振りと激せる姿の
一人の女を眼前に見た。
その背丈と堂々たる姿から
頑丈で荒々しきベローナだと知った。(五)

足から腰まで衣服をつけ
腰から頭まで鱗状の
燦めく武具で固め
腕に盾を持ち腰には巾広い剣を帯び
右手に堅き長槍をかざし、
恐るべきフリアイ(六)に囲まれ、
怒れる赤き顔にて
全員戦(いくさ)の火と燃えている。

女は私に言った、「おお畏れる若者よ、
気力と自信を奪い起こすべし。
其方に幸福と上々の首尾を齎(もたら)す
好運なる時を掴み、
愚鈍にして怠惰なる無為を逃れよ。
心と希望を遠大にし、
其方の望みおりしより大なるものを求めよ。
天は其方の味方なり。

「其方が執筆に勤(いそし)むを見て
その徴候(しるし)にも著しき如く——
猛く厳しき武器の行使にも(七)
筆の乱れは絶えて無し——
其方の痛く忠実なる働き様に鑑み
我は己が務めとして
其方が限りなく敷延し得べき
或る場所に案内したい。

「そは肥決にして百千の花咲く原野
その地にて其方は一等有名なる大戦の
資料をば数多く見出さん、
その地にて其方は詩の糧を得ん。
且つ若し其方が貴婦人や恋に関し
韻文にてその甘き悩みを詠みたくば
空前絶後なる
大人物と麗人を得ん。(八)

「我に伴い来れ」と遂に女は言った。
私は感激して女が鷹揚な足どりで
堂々と元の場所に戻るのを見て
その道をば付き添って行った。
右と左にアトランテと
アペニンの二つの山を後にした。
左程の大きさもなく
茂みも左程厳しくない二つの山を。

我々は広大な野原に出た。
大自然がその寛大にして巧な手になる
豊饒な美しさを繰り広げ
種々のいみじき働きにより
木の葉や緑の間に
真白き菖蒲(あやめ)や真紅の薔薇、
蘭草、蜜柑、麝香草、
白百合、素馨(ジャスミン)、董を扱き雑(ま)ぜていた。

そこでは清らな泉が囁(ささや)き
心地よげに大地を横切り
そして穏かに微風を吸い乍ら
緑の草と数々の花を喜ばせていた。
色鮮かな小鳥たちは飛びながら
生い茂った樹々を渡り
その歌声の旋律は
甘美な調和を成していた。

処々に車座を作り散在している
大勢の優美な妖精たちを私は見た。
或る者は様々な遊戯に打ち興じ
或る者は馨(かぐわ)しい草花を摘み
又或る者は優しく美しい声で
甘い恋の歌を口遊(くちずさ)んでいた。
サテュロスやファウニや森の神は
奏で慣れたチターや竪琴を持っていた。

そこはあらゆる遊戯と運動に役立つ
爽快な場所であった。
前者を選ぶ者あれば潔きディアナ神の傍で
厳しき作業に就く者もあった。
豚が横切り鹿が通り
兎が跳ね、悪戯好きの
羚羊や野山羊や麑(のろ)の子が
可憐な草花の間を戯れていた。

傷持つ鹿の後を追い
平原を山に向かって横切る者、
毛も剛き豚を疲弊させて
勇ましき猟犬を助ける者、
用意せし小鳥を飛ばして
練(きた)えたる猛鳥を空高く翔らせる者、
鷺を果す者鳥を果す者、
盛時の雄鹿を屠(ほう)る者、雌鹿を屠る者。

この土地の中程に
真丸い姿も露な
錐形の丘があった、
悉皆の土地より一際(ひときわ)聳え、
如何でかは知らねど一瞬の中に
私は猛きベローナに引かれて
その頂上に立っていた、
私は呆然をなり、事の次第が解らなかった。(九)

突然高所に立った私はしばしその状態で
篤と眺めることもし得ず、
唯恐る恐る彼方此方に
臆せる目を向けるのみであった。
私は雑多な嗅いを運び来る
優しく穏やかな西風を吸った。
丘はその頂上に至るまで
緑なす草に覆われていた。

いと高き所故
身軽き隼も一飛びでは上り得ぬ程だった。
一抹の恐れを抱きつつ
見下せば其処は空の近くかと思えた。
そこから見渡せば
未知なる蛮人どもの
一等隠れた遠い土地を含む
広大な一円が見えた。

その高みよりベローナは私を見て
こう語った、「約束のものを其方が
見得る時間は僅かなれば
我はこれ以上止まっては居れぬ。
見よあの招き集められし大軍を、
フランドルとフランスの境の
枢要なる砦からは
火薬の煙が黒々と立ち昇る。

「カルロス五世は数多の敵と
その国民を征圧せしめた後
無敵の大君として
南北の極地を踏み、
運勢と空しき気分に打ち勝ち、
その意図と目的を確実にし
帝国の称号を
めでたき時に残した。

「そして民衆を統括するという
慈悲深き御心により、
彼の胸中に抱きし思召によれば
地上のものは微小なりとして
目と心を天上に向け、その
悉皆の王国と称号身分を辞し、
双肩に担えし重荷を
御子(みこ)の肩に移し給うた。

「御子は退位せし父の
勝利に輝く華やかな経歴を見て、
希望を現実の物にせんとして——
そは兼ねてより万事に於て為せし事乍ら——
初めて訪れし絶好の機会に
敵なるフランスの
自負と誇りと高慢を奪わんがため
かの大軍を集めた。

「其方が眼前に見るあれぞサン・カンタン
空しくも己が崩壊に抗う。
主要なる牢獄、高貴にして
偉大なるフェリペの憤慨に応わしき砦、
内部には提督と(一一)
その指揮と訓練の下
土地の防衛に当る
歴戦の勇士が屯(たむろ)する。

「其処では見ての通り、
敵の陣営は三つに分けられている。
右手にはカセレス(一二)がその部下を配し、
フェリペの軍旗はためく。
左手には手早きナバレテが(一三)
メガ伯爵と共に居り、城の部分には
フリアンが(一四)イスパニア人、ザクセン人、
ワロン人の三つの国民と共にいる。

「我々は激しく絶え間なき戦いが
其方に良く見える所に到着せり。
壊れし城壁からフェリペの兵士たちが
剣を手に手に攻め入る様を見よ、
猛烈なる襲撃と極まる危機を、
そしてさしも強きフランスの崩れる様を。
比類なく厳しき運命には
防ぐ方なく、不落の城塞もない。

「此の場を直ちに立去り
あれらの部隊に加わるこそよけれ、
燃え上がる互いの心を
新たに掻き立てんがためだ。
其方は此処より様々な武器と国民を
篤と眺める事が出来よう。
そして夫々の運命に就き書き記し
夫々を正しく評価するために。」

程無く女神とその連れの者は
空中を犇き乍ら滑行し
道を曲がる事なく、一瞬の中に
宛ら速き光の如く、サン・カンタンに下り立った。
其処では燃える火を更に煽り乍ら、
敵共の間を往来し
彼らの内心に怒りを抱かせていた
友なる不和の神と合流した。

この時猛き軍隊は
突撃の合図と共に
埃立つ突風となって
防戦激しき城壁へと駆けて行く。
私の見たこの光景を説明し得る
豊かな言葉持つ人はいずこに。
私にその蓄えは乏しいが
次の歌章で能うる限り試みたい。

第十八歌章

国王ドン・フェリペはサン・カンタンを攻撃し堂々の
入城をする。アラウコ人はイスパニアの要塞を攻撃する。

陛下の偉大なる真価を
些少なるものに減じ
かくも高貴なる御方を
拙なき文に托さんとする無謀な者は誰か。
仮令筆は華やかる原野を
墨も豊かに軽やかに走ろうとも
主題と素材が相抗うため
総てを破壊し減少する。

私が敢えてそれを行わんとするは
狂気の沙汰と思われるやも知れぬ。
冷静に考えれば自らも
正気の域を逸脱していると分る。
陛下に恒に仕え奉らんとする切なる気持が
私に常にこの道を走らしめ、且つ
恐らくはこの筆の拙なさと
黙せる云葉の愚鈍さを減ずるであろう。

且つ又陛下の恩情こそ（私の
自負と大胆はそのお蔭）
今私が願うところにして
私の乏しい理解力を豊かにする。
若しも陛下が何人に対しても
拒み給わぬ事をば私にも与え給うなら
偉大なる事柄を語るには相応しくない
嗄れた声だが風に向かって張り上げたい。

又私は陛下の寛大なる御心を信じ
正当なる理由を以て請願しているので
何卒御耳を拝借出来ます様希い奉る。
唯それだけで私は御厚情を得たものと考える。
話を元に戻し、
先の歌章で私はわが隊が戦場を
三つの道に分かれて突進し
要塞を襲い突破した旨述べた。

扨て電光石火の攻撃にて
防戦の射撃に立ち向かい、
勇猛なる胸と迅速なる手で
悉皆の物を壊し蹂躙しつつ
一番態勢の整いし側の部分目指して
戦の壁に到達し、
敵味方相対して
持てる気力と武力を試し合った。

フランス人は雄壮に
武器と防具で以て
熾烈なる攻勢と血に飢えし
敵の心に抵抗する。
だがイスパニア人は
抵抗に遭う度に勢いを増し
執拗且つ忍耐強き豪勇で
閉ざされし一番困難な個所を突破する。

攻防戦蘭(たけなわ)の城門の
只ならぬ争いと騒ぎと混乱と
奇怪なる死と、強力にして堂々たる
腕の振り下ろす打撃と損傷の夥(おびただ)しき事。
頭は首まで、否、それ以下に沈み
肉体は小さき破片となって飛散し
荒々しい剣の力に対しては
胸当ても兜も充分ではなかった。

広場の至る処で
気力と勇を鼓しての防戦が展開され
打撃を受けた武器と馬具の
金具の状態は惨憺たるものであった。
驚異の厳めしき大砲、
弾丸、火薬、タール、松脂
油、鉛、硫黄、テレビン油等、
物資が散乱していた。

そして頻に槍や矢の
烈しい雨を降らせ、急拠城壁や
天井より剥ぎ取りし
岩、板、丸太棒を投げた。
凄じい怒りと甚だしい執拗さで
止る処を知らず傷つけ殺し、
こうして互に火と血と憤怒に包まれて
乱れに乱れていた。

或る者は恐れる事なく
自信に満ち奔放勇猛に城門を守り、
或る者は生き延びんが為に恐怖に抗い
希望にその努力を繁いでいた。
或る者はもはや生を望まず
死で以て復讐を誓う。
そして累積する彼らの遺体によって
敵の進攻を阻まんとした。

抑え得ぬ勢激しき
水の流れと突然の増水が
障碍物により阻まれるとき、
水は沸騰し増大し
遂には一層の力と勢で
唸り乍ら吐け口を求め通路を開き、
その障碍物を突破し
勢い烈しく押し流すように、

フランス人はその力も
如何なる抵抗も空しく、
フェリペの運命の流れによって
押し流されたために
最早如何とも為し難く、止むなく
その勢に屈し、
カセレスの揮いる勇猛なる
敵軍に入城を許した。

そしてこの個所に於て提督は
寄せ来る敵に抵抗を試みたが、
攻め来る力と勢に対しては
所詮それは十分でなく、又そう有り得なかった。
他の者たちと共に虜となり更に
勝ち誇る猛き隊を前に
永遠に記憶さるべき悔恨を残して
悲しき運命に従った。

正に此の時他の場所では
巧者ナバレーテが奮戦していたが
もはやフランス軍は相手ではなく
破竹の勢いでイスパニア軍は進入した。
そしてフランス軍はその腕を鼓舞した
猛き軍神マルテにも拘らず
夥しき破壊と血腥(ちなまぐさ)い戦で
全滅し、それ以上は動けなかった。

其の部処の防衛を委ねられていた
アンダローは其の甥で捕えられた。
さてフリアン・ロメロが攻める
第三の突破口を見よ。
運勢の中断が宣言されて
停止せる運命に道を開き、
ドン・フェリペとの握手を求め、
かくて勝者は全軍フランスに進入した。

程なく恐怖と凍てつく寒さが
疲弊せる国民の志気を削いだ。
そして濃密な空気と高い空を
皆の者の嘆きと悲鳴が切り裂いた。
彼らは武器を地面に放棄し
今は生きる事こそ得策とばかり
惨めな逃亡によって
陣地を捨て命を守ることにした。

だが勝者たちは敵の恐怖と
妨害されぬことを知り、
折角の勝利を血で汚すまいと
両腕を高くかざし、戦を中止した。
そして更なる打撃を加えることなく
嘗ての血腥き怒りを貪慾に変え、
軍人の一般的な役得たる
待望の鹵獲を始めた。

鋲打ち並べたる扉を叩き壊し
強化された錠前を破る者、
槍と太綱を開いて攀じ登り
窓や天井から侵入する者、
彼らは見落としのない様にと
至る処を掻き回し破壊する。
家屋は二階も下も探し回り
小止みなく走り乍ら手当り次第吟味した。

何処かで或は近所で突然
火の手が勢激しく上がるや
人々は不意の半鐘に
素早く走り対策に加わり、
そして至る処で遠慮なく
出入りし、昇り、降り、
或る者は引きずりつつ、或る者は背負って
炎の中から家財を取り出すように

勝利を誇る軍人たちは
速かな手と軽やかな足で、
食欲そそる甘き獲物の
扉を窓をそして隙間をこじ開け、
いそいそと櫃(ひつ)を綴織を、
寝台を重ね置きたる物を、
そして重要と思しき物を、
細大洩らさず運び去る。

寡婦や孤児や娘たちの
遙かな家までも貫き通す
懇願と叫びと嘆きの声も
飽くなき貪慾を弛めはしなかった。
寧ろ容赦なく彼女らを押しのけ
最大の抵抗のあるところ
最大の収穫ありと信じて
最も固く守る処に突進した。

はや街路では乙女たちが
厳しい状況に美しい顔を曇らせ
運命を嘆き苛酷なる定めを嘆いて
保護者もなく運に任せて走っていた。
又憐れにも尼僧たちが彼女らの
規律と閉居を破り
呆然とするばかりの恐怖に駆られて
右往左往していた。

だが温情のフェリペは
彼らが突入する前に
全員に心して女性と祈りの館には
手をつけては相成らぬ事を、
且つ又友好的な人たちとは
危険な争いや問題を起こさぬ様、
そして掠奪と戦利品については
各自の好運に従うべき事を命じた。

恐怖に駆られて彼方此方を
当て所もなく彷徨う女たちを
フェリペは召し集めて
安全な場所に置いた。
彼女らは忠実なる番兵に守られて、
戦の残虐さから保護された。
彼女らの家屋でも掠奪はあったが
その純潔は保たれた。(二)

基督の教えと書かれし戒律に
従順なる勇士たちは
この事に関し冷静に振舞い
その素振りだに見せなかった。
騒乱と雑踏、
多くの混乱と少い分別により
市内の被害は増大し
各地に火の手が上がった。

其処では焔が俄に勢を得て
濃く鮮かな閃光を発し
涼しき西風に煽られて
星にまで昇らんとしていた。
惨めながらも幸運だった人々は
悲痛な叫びを口々に発し
純心な目で天を凝視し
失神し悲しみを尚深くした。

哀切な叫声が至る処で
空しく空中に谺し、
恐怖に戦(おのの)く悲しみのフランス人は
止むなく敵の武器に向かい、
恥を重んじ身を投じた。
彼らは弱者として閉じ籠り、
燃え立つ焔に焼かれるよりも
自ら求めていた死に方を選ぶ。

だが情も深き国王の優しき御心により
猛々しき武器は鈍り、
その敏速にして懸命なる対策により
戦火の激しさは悉く消え、
遂にもはや防禦も抵抗もなく、
サン・カンタンの内部に投宿した。
既にフランスの鍵は手中に収まり
パリへの道も平坦になった。

日は既にやおら燃える
南半球に傾かんとしていた。
私は無上の喜びを覚えつつ
今まで述べた出来事を眺めていたが、
その時ふと私に話しかける一人の女を見た。
その衣装は雲よりも白く
荘重にして容姿も崇拝に価し
見るからに尊敬すべき人物であった。

彼女は言った、「確実にして真の
予言者たる妾(わらわ)の言葉は
仮令有り得ぬ事と思われようとも
信じられよ、虚言でも幻でもなく
彼方の高御座(たかみくら)にて
永遠なる父の命ぜられ望まれる事。
運命、時間、死など
いと強き物も其の御方に従うものぞ。

「イスパニアとフランスの間にかくも根強く
焼え盛る戦も恨みも、
相互の側の努力により
一致、妥協を見出すべし。
而して取り決めによりサボイ公爵(二)は
元の領地を回復し、併せて
仏蘭西にとりて有益にして西班牙に名誉なる
他の多くの有益なる手段も生ずべし。

「而して友情と確固たる基礎に立ち
平和が益々確保されるために
エンリコの最愛の娘と
フェリペは婚姻の契を結ぶことになろう、(四)
だが残酷にして足早の死は
早々にこの二人の結合を壊すだろう。
何故ならこれはいと高き天と
運命の掟と神の御心の定めるところなれば。

「時恰もフランスは腐敗し、
カトリック教の掟を歪め
冒涜の武器を振りかざして
王に対する当然の服従を拒まん。
而して自由なる生活を餌に
不義なる人々の軍隊を作り
教会と誓いを立てし己が国王に対し
悪意を募らさん。

「旧来の傲慢と罪業により
王国は崩壊寸前に至り、
而してカルロスは邪悪なる兵士共により
危険なる状態に追い込まれん。
荘厳なる寺院も崇敬される事なく
倒壊する所となり而して他ならぬ
神と秘蹟も彼らの悪意に屈し、
侮辱されるであろう。

「されど其方たちの王は速かな神の御心により、
時を移さず未来の被害に備えて
必要なる厳格さと火の意志を以て
西班牙にてこの苦痛を阻むであろう。
此の邪悪なる悪臭が根治せば
落着きし仇なす武器は
勢よく東方に向い、
ペニョン[五]にその艦隊を兵を派遣せん。

「仮令最初の一回では
望む効果は得られずとも、
第二回目が巡り来り、さしも峻しき
ペニョンも攻略され
而して道の安全は確保され
モリスコたち[六]は恐れをなして
冬の港の厳しさに
勝ち誇れる艦隊も引揚げるであろう。

「其の時ハンガリーからイスパニアに
二人の高貴なる皇子
至高の帝王とマリア[七]の子ら、
カルロスの娘にしてフェリペの姉が到来し
皆の歓喜をいや増し
かの宮廷と誇らしき時代を築くであろう、
兄の名はロドルフォ、もう一人はエルネスト、[八]
二人は程なく名声の基を築かん。

「而して彼らはその高貴なる仕事を約し
齢小にして望は大、
年と共に美徳を増大するであろう。
甚だ賞讃さるるに相応しき美徳と齢、
そして彼らには優れし価値と
か様な皇子に教養を授けるに相応しい
ディートリタン男爵[九]の躾が
光り輝くのが見えるのであろう。

「やがてその翌年には
基督教の全世界を
強力な異教の艦隊が威嚇し、
海岸も打ち震えんばかりの
巨大なる砲門と多数の兵を乗せて
東に向かって航行せん。
やがて周囲が二十レグアのマルタ島に
到着し、其処に投錨するであろう。

「其処に於て騎士団長(一〇)と
他の異国の隊長らと共に
艦内の此の中心に集るべき騎士たちは
懸命に対策を練るであろう。
而して常に大いに満足し
防衛にては奇蹟とも考え得る
事柄を断固実行して
強力なる包囲陣に久しく抵抗をするであろう。

「両者の間に陸で海で
低地で山で干才が交えられよう。
而して九度目の熾烈なる襲撃にて
サン・テルモの要塞(一一)は破られよう。
その出来事は洗礼受けし国民を
多大の危険と恐怖に陥れる筈、
何故なら港にはトルコの艦隊が
二つの入口より自由に攻め入るだろうから。

「陣地も城壁も濠も壊され
悉皆の希望が危機に瀕する時
其処において銘すべき捧事、すなわち
危険にして困難なる企と
恐れを知らぬ豪勇が見られよう。
生々しき傷口と悲惨なる死と
永遠に書き留められるべき
大いなる事件、限りなき出来事が。(一二)

「だが最早人の努力では不十分にして
且つ力はその酷使に耐え切れず、
城壁も濠も既に平坦になり
希望は地面に堕ち、
血に飢えし非道なる蛮人が
彼らの上に刃を振り降ろす
その時こそフェリペに何が出来
彼が如何に恐るべきかが万人に知れよう。(一三)

「何せ彼の艦隊の一部と
少数の兵士のみにて
運と信用に導かれて
オットマンの勢を粉砕し、
悲嘆に暮れるマルタを復活させ、
信じ難き損害と打撃により
逃亡の帆を風に張って
敵は退散するだろう。

「軈(やが)て一年を経て、強力なる
軍を揮いてソリマンが自ら
陸路著名なる羅馬(ローマ)の皇帝
カエサル・アウグストゥスに対抗して、
大パーニアを疾(と)く横切り(一四)
右手にトランシルバーノを
且つ後方に広きダルマキアを残し、
コルバシアの(一五)辺境を下り行かん。

「奥(おく)まりし場所の要塞シゲは(一六)
四週間に亘る包囲により
遂に援軍を断たれて
寧猛なるソリマンに占領されるであろう。
だがこの困難を極める企てと同時に
生命も末期を迎えるべし、
恐れる死は定められし行程の末
その流れに終止符を打つ程に。

「片やフランドルにては近々
神を離れし国々が
邪悪なる誤謬と異端に毒され
平穏を乱すであろう。
而して国王フェリペに謀反し、
種々の手段を用いて悪業を為し、
長きに亘って不安なる
情勢を齎すであろう。

「又自由を得んとして
繁栄のグラナダ王国では
モリスコ共が蜂起するに至り、
恭順を誓いし国王に逆らうであろう。
かかる変化は初めは
軽視され止むを得ぬものと考えられ、
為に誉ある血と勇士たちの
多大の損失となるであろう。

「この戦には粗末な身形（みなり）に扮した
一人の若者が秘かに赴くであろう。
その止事（やんごと）無き王族の血筋が
困難なる企ても遂行せしめるのだ。
運命は彼に対し有名にして
突如たる幸運を約束した。
この若者はカルロスの御子、未だ養育中の身、
暫くは隠されているであろう。

「今述べし如く、彼は
父が死の時を迎え、正式に
彼を御子を宣するまで仮の姿を続けよう。
やがて時至りで彼の運勢は極めて好転し
万人により愛されるであろう。
率直にして努力家、勇敢にして強力、
その人の名はドン・フワン、さて此処で
今はこれ以上は言えぬし明かすことも出来ぬ。

「動顛せるモリスコ共に
若き身空で戦を挑み、
砦を破り占拠し、
彼らを山奥深く退却せしめ、
其処に押し込め、
遂に反乱の地を鎮め、
悪の根と種をば
他の地方に移すとだけ言っておこう。

「此の戦が終結すると独逸より
イスパニアの女王アナが(一七)
貴婦人や大勢の名士を伴い来り
国王ドン・フェリペと結ばれるであろう。
其処では類希なる華やかさと威厳を以て
嘗てカスティリアの有名な国王の御座所なりし
古きセゴビアの地にて
豪華なる華燭の典が催されるであろう。(一八)

「二人の皇子は父君に呼ばれるであろう。
彼はその日諸国の新らしき高御座を
譲りロドルフォをば
ハンガリー高御位に就けるであろう。
されば、ジェノバに向けて船出し、
ロンバルディアを経て
ダヌビオの心地よき河畔に沿い乍ら、
有名な都市ビエナに着くであろう。

「怪し気なる空模様も
ようやく終る候(きざ)しを見せ、
戦の勢いと激しさが
衰え静まるかに見える頃、
野蛮なる地方にて
残忍なるトルコの軍が
強力なるベネチアに対し
再び動きを開始するであろう。

「而して各地より集めたる
強力なる艦隊を動員して
近くの有名なキプロス島に
抑制されていた怒りの丈をぶちまけ、
無慈悲なる厳しき刀で
嘘偽の、不実なる言葉の許、
ファマグスタを陥落せしめ侵入して
その土地を占領するであろう。

「これに依り彼らは傲慢になり
艦隊の兵員を増強し、
高慢なる意図と予測を以て
世界の残余を総て軽蔑し、
天の力までも無視して
イタリアへの路を航行するであろう。
其方らの罪科より生じたる
彼らの自惚れと残虐さは夥しきものとなろう。

「だが、己が功徳が足らずば
自らの血と受難によって他人の債務を償い
呻き声一つにも忽ち
当然の刑罰を改め、
其方らの為に慈悲心を垂れ給う
いと高き神は、彼らの意図に反して
厳しき一撃にて蛮人の
野望と傲慢の鼻を挫かれるであろう。

「何せはや罪深き国民の
疲弊ぶりや甚だしく、且つ基督教徒は
邪悪なる者共には敵となり
その強き腕を揮うであろうから。
かくて、神の御力により協定が生れよう。(一九)
そして教皇とベネチアの元老院が
その力と民を
強力なるカトリック王と合わせるであろう。

「彼は万人に喜々として
栄えある連盟の総帥に選ばれよう。
幼き頃、無名のまま
粗末な身形（みなり）で巷を彷徨せし若者が。
だが妾は彼の未来については
公表することが出来ない、
運命は其方に幸運よりも長き生命を
約束し居れば其方がそれを見ればよい。

「だが若し其方がこの戦の
前代未聞の未来の出来事と
史書で読まれし事なき
最大にして著名極まる事を知りたいなら、
いと細きラウコ川の流れる
狭き峡谷を隅々其方が通る際、
レバノン山麓の岸辺に
飼い馴らされし一匹の麋（のろ）を見るであろう。

「其方、注意深く、広々とした
平原に出るまで追い駆けるがよい。
その平原の際に其方は片側に
鬱蒼（うっそう）と繁る森の入口を見るであろう。
而して秘かに臆病なる麋を追えば、
繁みの中程の窪みし
岩かげにいと小さき
隠れ家を見るであろう。

「其処は人の住み得ぬ所故
人跡も小道もないが、
嘗て名だたる強者だった
一人の厳めしき老人が住む。
其方はその老人から御し難き魔術師
フィトンの住処を聞き出せるであろう。
而して其方はこれから生じる筈の
驚嘆すべき数々の事を教わるであろう。

「未来の事に関しては
これ以上其方には語るまい、
其方が作業を進めんがため
今其方に語るべき事柄の
素材と余地は十分と思しく、
大いなる機会が其方に味方しおる故。
妾には唯其方が聞きしことのみが、
許されているに過ぎぬ。

「旦し若し軍の神の猛き怒に
其方の筆の調子が狂い
或いは又其方がその厳しさを
他の優しく楽しき物と混合したいなら、
振り向きてイスパニアの貴婦人たちの
美しさを見られよ。
妾は彼女らの秘めたる美徳ゆえに
愛の女神が敢えて大地を焼き尽さぬ事に驚く。

「然し待て、妾にとっても先ず大切なのは
其方が容易に目にする事を信じるよりも
来るべき危険を未然に防ぐこと。
そは其方が危険から逃げ遅れず、
且つ又最後の時を待つ事なく、
己が力と妾の助力を当てにせざるため。
仮令妾が後にそれに立向わんとしても
其方は目を閉じ妾を見まい程に。」

おお、実(げ)に不可思議なるは人の心。
振り向く勿れと言はれし時、
唯その言葉を聞きしのみにて
私は意欲が俄かに湧き、
この様にしてそれからは
健やかな忠告に従うことなく
振り返ってしまった。すると忽ち
楽園の如きものを見た。

愉しき草木に取り囲まれた
肥沃にして甘美なる所、
空は一際美しく見え
地面には千種（ちぐさ）の花が咲き
緑なす牧場を横切る
音も高きせせらぎの近くに、
私は自然の生み出す
美のすべてが集っているのを見た。

周辺の貴婦人たちはかの幸（さきわ）う
イスパニアの花咲く淑女たちであった。
明るい太陽も月も星も
彼女らに敬意を表してか暗く見えた。
そして彼女らは皆、頭に
金髪の三つ編み、結び目、紐に
とりどりの形で巻かれた
芳（かぐわ）しい花飾をつけていた。

彼女らに思いを寄せる数多の
著名なる男性が彼方此方を散策していた。
彼らは品良く優雅な愛に憧れ
意中の人を追い求めていた。
或る者は希望に支えられ、
或る者は己が富を頼りに
夫々陽気に、満足げに
瑞々しき高き思いを楽しんでいた。

此の時希に見る速さと勢にて
空しき風に連れ去られて
私は山の高き峰を後にし
愉しき肥沃な平原に下りた。
もし私の記憶に欺きなくば
私は其処でわが案内人を右手に見た。
彼女は私の陥りしかかる危険な状態を見て
些かおびえ困惑の体（てい）であった。

何故なら私は足が地面に着くや
それまで私の祝界を塞いでいた
愚鈍にして粗野なる薄衣が剥がれ、
物欲しげなる目は輝き、
愛の火と軟き氷が
血管を通って溶けて行き、
反発の勢いと強固なる胸も
愛の力に屈服してしまったから。

やがて私は愛の詩歌に
専念したい気持になった。
そして文体も変え、厳しく
血腥き戦には構わず、
彼の地と、かくも麗しき婦人たち、
中でもとりわけ一人に就き
詳しく知りたいと思った。
私の運命は彼女の足下に平伏していた。

彼女は未だうら若かったが
落ち着きぶりと分別は成熟していた。
そして彼女の星と運命と私の幸運は
彼女の目を私に向けさせるかに見えた。
私はその美しさに心を奪われ
彼女の名前が知りたかったが
彼女の足許に一つの書き付けがあり
バサン家のドニャ・マリア(二〇)と書かれていた。

彼女の事を更に知らんとして
分別ある案内人に顔と声を向けた。
その途端、蛮人共の武器と唱和の
騒音と凄じき大音響が
わが甘美なる夢を醒まし、私は
「武器だ、武器だ、早く早く」の声を聞いた。
そして叫び声と武器の響きは
高き空を劈(つんざ)かんばかりであった。

この混乱に私は半ば眠りつつも
素早く武器を取りに走り、
兼ねてより定められたる場所に
準備を整えて駆けつけた。
その時いと猛き雄叫と共に
粗き山の斜面から
大勢の人々が、そして茜さす
アウロラの東の方に現れた。

やがて又西の方から
劣らず高き叫声も勇ましく
夥しき軍勢が現れ、さしも猛き軍の神も
その豪胆さにたじろがん許りであった。
だが逐一述べる事は
疲れた身にはもはや不可能なれば、
次の新たなる歌章にて
総てを篤と明かしたい。

第十九歌章

イスパニア人ペンコの要塞に。グラコラーノ、城壁を襲う。船舶の警備のため駐留していた陸海軍の兵士が沿岸で行った戦闘。

麗しき淑女たちよ、貧弱なるわが歌が
御身らの礼讃で以て始らず
わが賤しき詩行が
愛の思想と恋の沙汰に捧げられぬは
わが多忙甚だしく、扱うことの多きゆえ。
有閑なる作家他に数多あれば
彼らが日夜を費し励むがよかろう、
そのための素材と余地は十分なれば。

又仮令私が本意なくも
この事柄とその進展から外れても
御身らに対し義務を果さんとする
大いなる望みが正しき道に戻してくれよう。
そして仮令飾りや都合よき馬具が
私に不足せんとも人事を尽さんとする
わが意図と、わが技巧の欠点に対する
御身らの補完で十分であろう。

だが宜なる理由から
愁嘆するイスパニアの人々は
私を大いに急立(せき)て
先の歌章で諸氏も聞いた
恐るべき威嚇と雄叫で
要塞の周囲を瞬時に包囲して
彼らを悩ます夷狄の事以外を
歌う余地は与えてくれない。

山の高みの極まる所に
強力なる三個の部隊が姿を見せ、
全員が同時に立ち止まって
辺りの様子を偵察した。
濠と城壁が発見され猛攻の
合図と共に三個の隊は夫々行動を開始した。
何人も死を免れ得ぬ程の
恐ろしき武器を振るいながら。

色とりどりの高き羽毛に飾られて
かの尊大なる提案と大いなる約束をせし
忘れ難き若者グラコラーノが
焦げ茶色の太き槍を振い乍ら
鍛えられし腕と大砲から放たれる
弾丸と槍の豪雨と煙を突いて
全員の可成り前方を
真直ぐに進んで来た。

程良き距離に達するや、長き
槍を斜に構え勢激しく攻め立てた。
そして大地に確(しか)と石突きを据え
一跳びで広き濠を超えた。
そして槍を手に這い上り
敵対する武器、槍、矛、
剣、そして大弓にも拘らず
誇らしげに城壁の上に登る。

槍を刺された猛る雄牛は
烈しく柵を襲い
凄じい力で集中する兜器と
群なす人間に抵抗するが
安全の頼みと思しき物も壊し
防衛の壁を強力に倒す
無謀にして好運に恵まれた
この堂々豪気の蛮人には及ばない。

其処では所在無き武器をば手放し
（それを操ることは不可能であった）
噛みつき、蹴り、殴り乍ら
自分一人で敵陣の占領を目論んだ。
彼はかくも多勢の力と勢に対し
胸と頑丈なる盾を利して
投石、打撃、殴打、剣の一突きを
実に器用に撃退した。

四面を武器で囲まれ、その場に突立ち
素手のまま彼は己が約束を果していた。
そして適切且つ大胆に
敵陣深くに己が死を求めていた。
すでに満身創痍となり乍ら
空しき意図と気力を振って頑張れば
法外なる好運に味方され
致命的な打撃は免れた。

かくて、愚かなる要求に固執して
鉄の間に身を投じ
恰も泡吹く狂犬が相手の
弱点目がけて襲いかかるが如く
身の危険も顧みず
厳しさ極まる箇所を改め
我慢強きその胸を狙う
周囲の百千の剣を一蹴する。

かかる場所に一人いて
無謀なる自信に従い
己が意図に不信を抱かぬは疎(おろ)か
寧ろ些かの希望を抱いて
素手にて一兵士に襲いかかり
両の手から槍を奪取し
それに飛び乗り
濠と共に死をも超えんとした。

だが定めなき運命の女神は、すでに
彼の命(いのち)の保護者たることに飽きていた。
時恰もとある逞(たくま)しき腕より
放たれたる石は彼に命中し
激せる石は大半
窪(くぼ)みし顳顬(こめかみ)に埋没、
跳躍せんとしていた彼は高みから
空を切って逆様に落ちた。

(二) トロイのエウリシオが

空飛ぶ臆病な鳩を見て
急ぎ弓に矢を番えて放つと
矢は勢よく飛んで貫き
鳩は身を撚り乍ら
丸き毛玉となって地に堕ちた様に
負傷した若者は助ける人もなきまま
深い濠の中に落ちて死んだ。

正に三十六ヶ所の傷に
哀れ肉体は貫かれて、
その数を締めくくる
額の最後の打撃なくとも彼は斃れた。
そして、勇敢なる蛮人が
正々堂々と勝ち取りし槍は
濠に凭れた格好となり
その一部が露な姿を見せていた。

だがその襲撃に同行を約し
彼程に大胆には
振舞わなかったとは云え
濠まで向かった若きピノールは
勇敢なる友の斃れし姿と
高く突出る槍を見て
さっとばかりに手に取り
逃げるが得策とその場を去った。

だが正確にして苛酷なる運命に対しては
手腕も器用も益なきもの、
且つ又その様な死神の手から逃れるには
敏捷で軽やかな足も十分ならず、
何故なら逃れんとする人をそれより早く
強腕の打撃が見舞う故、
意図と道を変更せし
足早の蛮人に起りし如く。

男は僅か数歩進んだ時
二発の砲弾に見舞われ
背から胸に貫かれて
あっと云う間に体は二分し地面に倒れた。
だが魂は即時には抜け去らざりしため
助けようと駆けつけた二人の兵士の
一人は彼にその煩わしき槍を捨て給え、
それを持つは身の危険と忠告した。

軈(やが)て喇叭の響も高らかに
彼らは太き槍をば高く翳(かざ)し、
怒りに燃え、整然たる列をなして
破竹の勢で濠に到達した。
其処にて止むなく整え直し
弾薬と矢を放つが、
その数極めて夥しく
広き大地も太陽も覆うかに見えた。

扨ても此の時マルティン・デ・エルビーラ、
これが我がイスパニア人の名前であったが、
今は亡きグラコランに奪い取られて
失いし槍を遠くから眺め
痛く羞恥心を抱き、怒りに燃えて
名誉挽回を決意し
其処にありし狭き戸口より
槍も持たず単身進み出で

天をも地をも蔑みつつ
眼前に迫る巨体の
勇敢なる若者に挑んだ。
その男表情も厳めしく
長槍を振り回し乍ら
その太く長き槍の穂先を
左に右に、或いは真直ぐに向け
敵の胸をば試そうとした。

そして厳しく槍を投げつければ
彼は五、六歩後退(ずさ)りさせた。さしも
堂々のイスパニア人も正気を失い
あわや死神の手に身を委ねるかと見えた。
だが勇者として、又冷静なる者として
腰を確と据え、身を引き締め
素手にて槍を掴もうとした。
だがこの考えは空しかった。

そのインディオは器用にも伸び伸びと
後方に軽く飛び退き
太く頑丈なる槍を振り回して
更なる一撃で雌雄を決せんとした。
されど機敏なるイスパニア人は、中に入らんとして
それを捌ぬ退け槍をば掴み
急立てつつ、相手の意志に反して
胸を合わせての一騎打ち。

而して相手が秘かに待ちし短剣を
素早く奪い取り
五、六度その脇を刺し
心臓への道を探した。
瀕死の蛮人はすでに血の気無く、
所構わず怒り狂いし魂も萎え
その巨体ははや血も魂も抜けて
冷たく地面に横たわった。

地面に倒れた敵を見て
勝利は確実と勇敢なるイスパニア人は
失われし槍と名誉を回復した。
城門の彼方に勝ち誇り引き退ると
戦友たちは彼を認めて
忽ち彼に扉を開き
大勢の大拍手と歓声と共に
その内部に迎え入れた。

この時早くも敵の軍勢は
陣地に総攻撃を企てていた。
彼らは勝利か死かを決意して
砲火と投石を潜り抜け突入した。
そして累々たる屍を超えて
生ある者は立ち上がり射撃を開始、
その確かな狙いは鮮明に
隠れた標的を浮き上がらせた。

或る者は木の枝や土や木材で
深い濠を速かに覆い
或る者は身軽さを自認して
危険なる飛び降りを試み
そして最後になった者たちは
近くに届きたい一心で
懸命に前進し
手当り次第に相手を投げ込んだ。

されど我が方の火縄銃や
粗石その他の投下物により
死者や負傷者は夥だしき数に上り
濠は忽ち埋まり平坦になった。
そこを通って大胆不敵な敵兵共が
恐れを捨て去り攻め立てて
守備堅固なる場所に達し
我々と剣の業を競わんとした。

そして大胆なる意図の下に
熾烈なる戦闘が再開される。
更に豪気なる他の者たちは
槍を用いて城壁をよじ登る。
蛮人の勢と行動には
いかなる高所も安全ではなく、
いかに険阻なる地も
彼らは登り挑戦する。

我が方は城壁の上に立て籠り
彼らを撃退し押しのけ痛めつける
槍と投下物を用いて
彼らを転落させ、蹴散らす、
されども他の者は軽傷を負いしのみで
困難なる攀上を遅らせぬは疎か
俄かに勇を鼓して
斃れし者と交代する。

かくて彼らは陸続と、
名誉を求め恐怖を捨て
絶えず速度と兵力を増加し
打撃の勢を募らせる。
彼らは防衛線を突破し
窪める盾にて身を覆い
我方を苦しめ、さしもの陣も
危機に瀕した。

この時猛れるトゥカペルが
堂々と城壁に姿を見せた。
節くれ立ちたる太き棒を手にし
五体は光る網に覆われていた。
臆病なる者共からなる大勢を
凄じい勢で蹴散らし、
塞がれし小道を突き破る
毛深きリビアの獅子のように。

怒り狂える高慢なる蛮人は
眼前に現れ妨げるものは一切
味方の兵と武器も構わず斥けながら
城壁の辺りを彷回する。
猛きトゥカペルがその日示した
希に見る努力と勇敢さを
見事にまとめ叙述するための
言葉と声が私は欲しい。

無数に備えし槍や兵器も
彼に抗するに充分でなく
屈強なる腕も部厚き胸も
彼を攻め立て阻止することが出来ない。
山なす兵士も武器も
為すところなく殲滅(せんめつ)され
剰(あまつさ)え彼はこれに飽き足らず
大胆にも陣内に躍り込んだ。

そして危険に力を加え
強力なる戦棍を振り回し、
或る者をば敗走せしめ或る者をば潰滅して
常に益々多くの土地と名声を獲得した。
遂に彼は苛しい打撃に耐えながら
右に左に傷を負わせ
彼我に損害を出しながら
武器と兵士の間を横切った。

又西側においても
ペテゲレンが攻め立てていた。
我が軍にとっては悲しくも
彼は要砦の頂上に登り、
その勇ましくも燃ゆる心は
彼の内なる好戦の熱をば
宛ら緑なす溌溂たる
青春にあるかの如く広げた。

然れど長くは続かなかった。
一発の弾丸が炸烈し
彼の頑丈な両の盾から
頭を奪い去り、かくて
その首尾よき戦に終りを告げたのである。
これに引き続き更に別の弾が
同じ箇所に放たれ、彼に続くグワンピコル、
スルコ、ロンゴミーリャとレポピーアの命を奪った。

船中に留り居し人たちは
突然の騒ぎと慌しさを見て
或る者は丸腰のまま跳び上り
或る者は円盾を持ち、或る者は胸当てを着け
或る者は小舟に乗り或る者は海に飛び込み
逸早く海岸に辿り着かんとして
銘銘が同僚を待つことなく
呼ぶべき人物を呼んでいた。

こうして彼らは懸命に泳ぎ或は舟を漕いで
厭わしくも広き海を横切り
そして念願の海岸の砂地に
全員、殆んど同時に足を下ろした。
其処で彼らは秩序正しく
僅かの間に一中隊を編成し、
友軍を助けるべく敵の
砲火の真只中を進行した。

彼らが海から足を出すや否や
猛然たる突撃の閧(とき)の声を上げつつ
下手より騒然と
対抗する中隊が出現した。
真先に駆けつけたのは
目立たんとする意欲と意図を以て
他の者たちに先んじようとした
駿足の大胆なる若者フェニストンであった。

我が方は態勢整え大胆に
決然と行軍を続け
対する敵に攻めかかった。
巧者ユリアン・デ・バレンスエラ
待つことにさえ我慢ならず
劣らぬ足どりと果敢さで
剣を手にし、円盾を胸に
フェニストンを迎撃に出た。

最初に襲いかかったのは
予期せる通り敏捷なフェニストン、
軽やかな意表をつく跳躍と共に
重々しい棒を振り下した。
されどバレンスエラ、円盾を高く翳(かざ)し
両の手で打撃を受け止めると
宛ら山の崩れかかりし如く
彼は呆然となった。

彼が広き円盾をば頭上に振り下すと
(その打撃は殊の他厳しかった)
その若者しばし意識を失い
呆然となり地面に両手をついた。
だが、朦朧としながらも直ぐ様立ち上がると
完全に意識を回復し
さっとばかりに横様に身を翻し
振り下される戦棍を避けた。

丸太棒の重さと力は夥しく
半ば地中に埋もれた、
バレンスエラは蛮人の当惑を見、
且つ時を計らいつつ
速かに足と腕を使って
剣で相手の胸を縫った。
熱く真赤な剣を抜くと
返すその手で相手の顎を真二つにした。

アラウカ人は既に狙い定まらず
所構わず彼に掴みかかった、
だが若者は別の道を試して
短剣を抜き、交戦する。
彼は素早く力をこめて
三度釘を相手の体に埋めた。
敵はも早殆ど凍てつき、
両足と強い節くれ立つ腕を地面に伸ばす。

その時すでに其の場にて
手を拱く者は一人だに居ず
寧ろ各自いそいそと危険なる
最も必要なる所に駆けつけていた。
激しく干戈の交わる
大音響は凄じく
宛ら空全体がその固定されし枠を外れ
地面に落ちたかの如くであった。

他方、上手の城壁では
相変らず熾烈な、湧き立つ様な
戦いが続いていた。
そして彼我の勝敗は混沌として決め難かった。
空中には千切れた麻綱が舞い
熱く流れる血の小川が
幾筋となく濠に流れ込み
屍が早くも漂っていた。

この様にしてここかしこで華々しく
陣地と名誉をかけて鬩ぎ合っていた。
或る者は熱心の余り死骸を足場とし
或る者は死体となって人に倒れかかる。
ドン・ガルシア・メンドーサは部下と共に
蛮人の猛烈なる攻撃に
十分なる抵抗を企て乍ら
その本営を死守した。

片やドン・フェリーペ・ウルタード、
ドン・フランシスコ・デ・アンディーア・イ・エスピノサ、そしてポルトガル人・ドン・シモン・ペレイラ、
ドン・アロンソ・パチェコ・イ・オルティゴサが
アラウコ人の猛攻に抗い
持てる力と勇ましき剣のみにて
大軍の入城を阻止し
奇蹟的奮闘ぶりを示せば

片やバスコ・フワレス、
カリーリョ、ドン・アントニオ・デ・カブレラ、
アリアス・パルド、リベロス、ラサルテ、
コルドバ、ペドロ・デ・オルモス・イ・アギレラも
高き砦の上に登り
敵を散々傷めつけたれば
その数無数ではあったがその側の
城壁は全面的に確保された。

それに劣らず奮闘せしは
フワン・デ・トレス、ガルニカ、カンポクリオ、
ドン・マルティン・デ・グスマン、ドン・エルナンド、
パチョ、グティエレス、スニガ、ベリオ、
ロンキーリョ、リラ、オソリオ、バカ、オバンド、
仮に我が才能に支障なくとも
語り尽くせぬ程に
彼らは様々な活躍を為した。

その側での損害は甚だしく増大し
流石に寧猛なるアラウコ族の力も弛み、
勢を削がれて、向き合ったまま、
彼らは足並を揃えて後退した。
他の者共は予想外の被害に鑑み
これまた狂気の企てを放棄した。
だがトゥカペルは要塞の中に留り
殺傷を繰り返した。

彼はこの事態に失神せざるのみか
怒り狂い、残忍さを剥き出しにして
彼方此方を勢烈しく走り回り
至る所で希に見る損害を与えた。
ブスタマンテとメヒーアを蹂躙し、
ディエゴ・ペレスとサルダーニャを倒した。
だがもはや私は長々と語ったので
この大破壊の歌章を終りにしたい。

第二十歌章

アラウコ軍は多数の兵を失って退却する。トゥカペルは重傷を負いながらも敵中を突破して逃亡する。テグワルダがアロンソ・デ・エルシーリャに数奇にして憐れな身の上を語る。

如何なる人も先ず己が力を
確かめずして約束してはならぬ。
諺に曰く、軽々に約束する人は
必ずやがて後悔すべし、と。
言葉こそ万難を排し請け出すべき
真の担保にして、
敵に対して約束を守るは
共通の権利にして明白なる掟である。

この掟を余所(よそ)に浅ましきこの時代に
行われる習慣がある。
徒に希望を膨らませるのみで
実行もせず守りもしない約束により
吾人が宙に浮かぶ
空しくも愚かなる信頼は
その害が期待に勝るとき
地面に落ち、幻滅を齎(もたら)す。

私自身に関する限り、
己が記憶が如何に機能し
書き始めしこの書をば完成せんと
如何に注意深く述べたかを覚えている。
私が扱う辟易すべき無味乾燥の事柄は
甚だしく潤(うるおい)なく不毛なれば
末々まで只ならぬ労力を約するもの、
そこから潤を引き出すは難事。

私は花園を通り
芳(かぐわ)しい種々の花を摘み
企てと計らいの中で
物語、虚構、寓話、恋愛を扱(こ)き雑(ま)ぜ
果てしなく駆けて行き
喜々としてそれを手に入れたものを、
嗄れた刺溌(ラッパ)と太鼓の音を追って
茨の坂道を歩かせたのはそも何者ぞ。

総ては戦と危険、
不和と火と血と敵意、
憎悪と恨み、激怒と猛り、
無謀と憤怒と大胆、
立腹と怒りと復讐と残酷、
死と粉砕と争いと残忍さでなければならぬのか。
私に勝る力を使い果たして
流石の軍神(マルテ)も辟易している事であろう。

だが私には忍耐が必要、
強要せしは他ならぬ自分の意志なれば。
されば陛下、謹しんでお願い申す、
大胆にして勇敢なる蛮人が
お詫びする暇(いとま)を私にくれぬと言う
私の言葉に御機嫌を損われないことを。
襲い来る敵の勢い左程に激しきため
私も手を急がせる事が肝心。

彼奴は閉ざされし猛獣の如く
彼方から、はたまた此方から
厳しくも血腥き突進を開始し、
至る所に同様の損害を与える。
若しも天に昇る術を見出せば
頭脳の冴えし男なる故
非常なる誇りを以てそれを行い
猛き軍神の至高の玉座をも襲ったことであろう。

だが唯一人、深手を負い、
而も蛮人共の軍は潰滅し
猛き鉄が悉くその頑丈にして
勇ましき胸に向けられている故
山が阻しく切り立つ
とある場所に引き籠った。
その側面には城壁こそなかったが
二十尋を超える絶壁になっていた。

その折恰もダイダルス(二)のものよりも
確かなる翼を持てるが如く
高所より見事に飛び下りれば
その両の翼に支えられた格好になり
力強く軽やかな身の証明をした。
その飛び下りは命に係るものだったが
構わず堂々と蛮人は地上に落下した、
宛ら身軽く素早き豹の如く。

地上に降り立つや否や
無数の弾丸が彼を目がけて発射され
心ほどには早くはなかったが
下に着く前に彼に追い付いた。
その様たるや凄じく一瞬の中に
十箇所以上を傷つけた、
されど彼を倒すには至らず
彼は一歩も片足も損われなかった。

痛く傷つきし己が身を見て
彼は飛び降りんとせしことを後悔し、
激しく燃える火となって
何時になく猛々しくなり
再び戦場に戻り、豪りし
損害の復讐を望んだが
その考えは理(ことわり)なきものであった。
山は切り立ち、道は無かった。

彼は五、六度困難な道と
運命の女神の助けを試みた。
彼を駆り立てる勇気と気力が
不可能をも可能にした、
宛ら飢えた残忍な狼が
小羊たちの柵を取り巻くように
彼は彼方此方を歩き廻り
あらゆる処を取り囲んだ。

だが頭上より驟雨の如く降る弾丸に
所詮は空しき業と見て
片側に引き退ると、平地では
慌だしくも猛烈なる戦が始まるのを見た。
宛(さなが)ら放たれし瑞々しき鷹が
臆病なる鳶を遮り
空高く舞う鷺に
凄じき勢で襲いかかるが如く。

堂々たるトゥカペルは
甲斐なき無謀な試みを止めて
別なる側に立戻り、血腥い
激戦地に向い行く。
折しも多大の兵士と血を失い
自信を喪失せし異教徒の軍は
早くも山麓を行く軍旗に
従いつゝ退却した。

にも拘らずその勇敢なる蛮人は
毫もその企を変えようとせず
寧ろ側面より厳しく攻めかかり
打撃を加えて大軍を蹂躙した。
そして彼らに恐るべき痛打を加えつゝ
右へ左へと自由自在に渡って
敵軍を傷つけ倒しては
十分な道を開いた。

其処には倒れる者、全身不随となる者、
苦痛を訴える者、呻き声を上げて嘆く者、
此方で斃れる者、彼方で意識を失なう者、
彼に場所を譲って遠ざかる者もいた。
彼は武装せる長き中隊の列に
大きな門と広い道を作った、
恐ろしき稲妻が突如として
濃密なる空気と雲を破るように。

その様にしてトゥカペルが
広々と基督教徒の中隊を切り開き
敵どもに達すると彼らは軽やかな
足どりで退却した。
その長々しい黒い帯から
一羽として飛び出すことなく
調和と秩序を保ちながら
夏空を渡り行く鶴のように。

われわれは少数ながら
彼らが背を向けて進むを見て
犇めき合いながら砦を出た。
そして広野にて中隊を組み、
勝ち戦に乗じて
程よい足取りで彼らを追った。
だが蛮人の待ち伏せを恐れて
急ぎふり返った。

襲撃の激しさは凄じく、長く、
日はすでに中天に達し
東からの距離と
西からの距離とが同じだった。
われわれはも早確信を持ち、
太陽がその行程を終え
兵士の仕事を軽くする
夜の時間に委ねると

熱心に片時も休むことなく
塞がった濠の辺りを清掃し、
随所にあった太い横木や
架けられた橋を取り除き
最も弱い個所はいずれも
勤勉に十分な防備に改め
烈しい勢に耐え得べく
陣地を強化した。

夜の闇は急速に大地を覆い
大地は光を放棄した。
人々は各自立ち去り
銘々の場所に引き籠もった。
緊迫した状況では何人も免れ得ぬ
看視と歩哨が割り振られた。
私は偶々(たまたま)砦の下の斜面の
三交代の第一番が当った。(二)

其処では日中の働きに加え、
十五時間もの武装を解かざりしため
時ならぬ睡魔(すいま)が私を悩ませ
肉体は疲労困憊していた。
然し此処彼処と一時も立ち止まらず、
往き来しながらそれに耐えた。
此の様な次第で私は
自分の足だが信用できなかった。

湯気立つ栄養豊富な食事も
幾度も器を変えし古き葡萄酒も
休みの習慣や癖も
これ程の眠気を齎したことはない。
手渡されるまま片手一杯の
いと黒き黴（かび）の生えしビスケットと
味気なき天水のみが
私の命（いのち）の綱であった。

またその配給は時には
二握りばかりの小麦であった。
塩不足のため海水を用いて
草の葉と兵に煮て出された。
沼地の湿った土地が
私の眠る上等の寝床となった。
常に武装し常に整頓し
手はペンを持つか槍を持つかの何れかだった。

こうして私を執拗に悩ます
眠気と共に歩みながら
且つ物音一つ立てず分担の区域を
端から端へと巡回していたとき
私は斜面の片側に白骨と化した
夥だしい数の死体を見た。
それはあの日我が軍の
火縄銃が与えた損害だった。

暫く経って後、私は
警戒の目を見開き聞き耳を立てていると
時折死体のある方向に
微かに物音のするのを感じた。
その音の終りにはいつも
悲痛な長い嘆き声があった。
そして再び死体から死体へと
移り歩くかに思える物音がした。

夜は甚だ陰気に暗く
確かに物を見分けることはできなかった。
私は事の成り行きを見極めるべく
（当然なすべき事を遂行するためだが）
茂みに身を潜めつつ接近し
やがて音のする所に達した。
そこには秘かに死者たちの間を
四つん這いで行く黒い姿があった。

私はその姿を見て納得せず、
今もあの時の恐怖を忘れないが、
剣を手にし、円盾を胸に、
神の御名を唱えながら、素早く近寄った。
だがその者は真直ぐに立ち上がり
怯えた声と卑屈な懇願ぶりで
こう云った、「旦那様、どうか御慈悲を、
私は女です。一度も刃向かった事はありません。
「もしもわたしの苦痛と只ならぬ不幸が
貴方の心に憐憫の情を起こさず、
貴方の血腥い剣と猛き怒りが
正義の限界を超えたなら、
又もしも憐れにも悲しき薄幸の
一未亡人に貴方がその剣を振ったと
正しい天が公表したなら
貴方はその手柄でどんな名誉を得るでしょうか。

「お願いです。もし幸にして
或いはわたしの運の様に不幸にして
貴方が真の愛と純なる信念で以て
優しく愛したことがあるのなら
この亡き戦友たちの間に横たわる
亡骸を私に葬らせてください。
正しいことを拒む者は
不正を是認し自ら不正な者となるのです。

「野蛮なる戦にもなお潜む
この様な敬虔な行為を妨げないで下さい。
出来るから何でもするというのは
一種の暴君の徴です。
この私の魂に彼の遺体を探させて下さい。
その後で猛く厳しくして下さい。
苦しみの極みにある私は
死よりも生を恐れていますから。

「これ以上傷つく不幸を私は知りません。
又味わったことのない幸福に勝る幸福もありません。
残った者は全部無くなればよいのです、
わたしの優しい友は亡びたのだから。
天は残酷にも私の体を彼の体に
合わせて死ぬ事を許さずとも
この悲痛な心が彼の後を追うのを
如何に意地悪でも妨げはしないでしょうから。」

こう云って彼女はその苦しみを
一撃の下に終らせるよう私に懇願した。
だが未だ疑念と混乱の状態にあった私は
欺かれていることを恐れ、
我々の様子を探りに来た
間諜ではないかと疑い
暫くして確信するに至るまで
彼女の真意を信じなかった。

私は確かに疑念を抱いていたが
(彼女の顔は夜に覆われてはいたが)
その恐れざる様と大いなる沈着ぶりを見て
彼女の述べる一切を真実と思うに至った。
また裏切られた、報われぬ盲目の愛が
夫を探しに彼女をここに来させたのだと。
彼は最初の攻撃のとき
一際目立たんとして一命を捧げたのであった。

貞節なる愛を貫く彼女に
心を打たれ同情した私は
其処を出て彼女を伴い
指定された部署に戻り、
彼女に気を確かに、忍耐力を持ち
その嘆きをすべて語るよう、
そして苦痛の火を消し、
安堵するよう懇願した。

彼女は云う、「ああ悲しき哉、
私は死ぬ迄決して安堵できません。
私のこの測り知れぬ苦しみは癒す方なく、
凡(あら)ゆる苦しみの中で最も強いもの、
されど、私には耐え難いことですが、
敢えて私の苦(にが)き不運の顛末を述べましょう。
恐らく私の苦痛は深刻であるだけに
それを掻き立てる事により命が尽きるかも。

「私の名はテグワルダ、不運なる
酋長ブランコルの不幸な娘です。
美貌故に多くの男性から徒に愛されましたが、
愛や心配から自由な時もありました。
然し間もなく運命の女神は
私の自由と愉しき身分に機嫌を損い
私の喜びを痛く妨げ、遂に私は
思いがけぬ不幸に死んでしまいそう。

「数多の男たちに求婚されましたが
彼らに感じたのはただ軽蔑だけでした。
それに対して父は不満でした。
誰かの求婚を承諾する様私に懇願しました。
しかし私は率直で自由な考えから
父の懇願を却けました。
私の考えを改めさせようとするのは
冷え切った鉄を打つに等しく愚かな事でした。

「私の気まぐれで不躾な返答にも拘らず
意志強固なる求婚者たちは攻勢を弛めません、
むしろ新たな証明や口説きで
彼らはその空しい要求を強めました。
そして舞踏会や遊戯やその他の催しで
私の固い意志を変えさせようと努めました。
しかし彼らの策も仕掛けも
私の気持を変えることはできませんでした。

「私のこの我儘と思い上がりは
間もなく最後の日を迎えました。
ああ、私の人生の最後の日であって欲しかった！
でもそれは無理でした、余りにも私のものでしたから。
草葉茂る平原を潤おした後
その名と水をイタタに委ねる
緩やかで流れも清きグワレボ河が
横切る村のある所に

「私は愚かにも欺かれて
祭りを見に行くよう要請されました。
それは私を破滅させる筈のものでしたのに
私はた易く承知させられました。
やがて正しい道は険しく、太陽は
私に触れるに相応しくないと思ったのか
不思議な手筈と計略により
長い道や通り道が木の枝で覆われました。

「私は幾つものアーチを通って
綺麗に作られた座席に着きました。
並々ならぬ立派な出来栄えで
装飾には自然という匠が手を貸していました。
澄み切った水が周囲で囁き
木々は風に戦(そよ)ぎ
目と耳に心地よく
音を立てていました。

「さて私がそこに腰を下ろすとすぐ
高らかに荘厳に楽隊が奏で始めました。
広い柵と杭の囲みから
驚くばかりの人々が現れ
銘々己が部処に引き下がって
手慣れた闘技を開始しました。
而も非常な静けさのため居合わせた人々には
それが生きた人間というよりも絵と思えた程でした。

「皆色とりどりの衣装と出で立ちで
余断を許さぬ目的を目指す
一見いずれも競技者に見える
多くの立派な若者たちがいましたが
私は誰と誰が勝つのか
誰と誰が負けるのかも考えずに
ゆっくりと自由に思いを巡らせ乍ら
彼方此方に楽しみを求めていました。

「斯様なことに関心のなかった私は
彼らの競争の終ることを望みながら
高い木々を眺めては
自然の業に思いを馳せ、
或いは牧場を横切る水を眺めて
様々な小石の数を数えたりして
心配や愛や不運とは無関係と
確信し安心し切っていました。

「意外にもその時大きな騒ぎと叫声が
(その様な競技には必ず起きる事ですが)
一群の中から持ち上がったのです。
それは私を驚かせ慌てさせました。
何事かと思い
早速側にいた人に
叫声の原因を尋ねましたが
私はむしろ知らない方が良かったのです。

「その人は言いました、『若く凛々しい
モレグワーノがいかに他の若者たちの
すべてと闘(たたか)い、彼らの背中を平原に
着けたかを御覧になりませんでしたか。
そして早くも美しき貴女の手の花環を
勇者を賛える徴として
勝ち誇る陽気なその額に
飾るのを待っていたとき

「『緑と紅の衣装を纏(まと)った
あの身形(みなり)の良い堂々たる若者が
難なく彼を地面に倒し
彼の得ていた名誉を奪ったのです。
さればた易き軽薄な人々は
これを驚歎すべきできごととして
その若者の力を賞揚して
あの騒然たる声を発したのです。』

「そして再試合を望む
マレグワーノも、今のは
不幸にも不運の為せる業であり
力と技にかけては拙者が勝ると申し立てた。
しかし明確な協定により
取決められた条件がそれを拒んだのです。
気分十分の相手の若者は
大声で同意すると言ったのですが。

「然し審判らは当然の事ながら
何れの側の要請も認めぬばかりか
この件に関して一切の異論を
認めようとは決してしません。
むしろ二人が私の前に進み出て
公式の許可をとりつけ得ねば
互の共通の意志により
その意図を取り下げるよう勧告しました。

「この時私の所へ犇きながら
あの人たちが大勢詰めかけました。
私のすぐ側まで来ると
諍い(いさか)の騒ぎと叫声を止め、
勝った方の若者が声を上げて
謙虚な、礼儀正しい態度で言いました、
『何卒ご慈悲を賜りたい、私の所業は
それに価しないかも知れませんが。

『私は他所者であり、御高配に
与る(あずか)資格はありませんが、
貴女の生来の奴隷として
お仕えし、生き、そして死ぬ覚悟です。
私はここで辱しめを受けていますが
私のこの申出に見合う徴(しるし)として、
もしも御許し下さるなら
私は再度マレグワーノと闘いたい。

『そして更に何度でも、彼が望むなら
私は彼の満足のゆくまで行いたい。
そしてこの証明と権利により
第一人者となることを望みます。
私はこの事により、更に大きな名誉を
貴女の御前で得る事を信じています。
されば、貴女の限りなき絶大なる力により
この定めを破り、私共に許可を賜りたい。』

「こう云い終ると彼は恭々しく一礼して
私を見つめ返事を待っていました。
しかし私は分別も弁(わきま)えもなく
彼の言葉に聞き入りながら彼を眺めました。
許可を与えるのみならず
も早彼の勝利を望みさえしていましたので
私は彼に返答しました、『私は出来る事として
自由に喜んでそれを許します。』

「やがて堂々たる面持で
両者は一斉に私に暇を告げました。
そして人々の大騒ぎする中
彼らは閉ざされた広場に入り、
付添いの者たちは両者を公平に分け
日が低くなったとき
二人だけその場に残しました。
彼らは互に速かに相手の方に近づきました。

「彼らは或る一点で見(まみ)えると執拗に
闘技場の中をかなりの距離歩き回った。
或る時は相手の周囲を廻り、
或る時は横様になり、或る時は右に、
或る時は高所に上り、或る時は下り、
或る時は胸を突き合わせて身を縮め
呻きながら非常に接近したので
互に呼吸すらできなかった。

「両者は音を立て、戦を再開した。
その二人の姿と立てる音は尋常ではなかった。
他所者の若者は早くも
力不足と稚拙な技は恥とばかり
相手を地面より持ち上げ、呻き声と共に
凄じい打撃で憐れなマレグアーノの
背中を地面に倒すとその男の
意識も丈夫な骨も失われた。

「やがて大勢の人々に伴われ、
審判員が彼を連れて私の席に来ました。
彼は私の足許に跪き
約束の賞を賜りたいと云いました。
それが彼の星だったのか、私の定めだったのか
又この様になった諸々の原因も分らぬまま
私は体が震え、燃える火が
全身を走り抜けました。

「あの新たな事態に私は
痛く取り乱し動揺していましたので
斯くも大いなる危険のさ中にあって
一瞬呆然となり、困惑していました。
然し我に帰り、落着きを取り戻すと
其処に早くも私の膝元に頭を垂れる
勝利者の額に
厳粛に花飾を着けました。

「しかしその時私は
貞節な恥じらいの目を下げると
若者は気前よき申し出にて
私の耳を傾けさせたのです。
結局彼は立ち去りましたが私から満足を持去り、
私の五感は混乱しました、
何故なら私には恋と苦しみが同時に始まり
一歩踏み出すや早くも終りに達したからです。

「私は、理性も自由も意志も
すんなり身を委ねる
自由な力と反逆の気分が
自分を急立てるのを感じました。
気がつくと燃え盛る火に
私の冷たい胸は焦がされていたのですが
恥じらって伏せていた
臆病な恍惚とした目を上げました。

「羞恥心と自制の手綱が
突然、勢激しく切れ、
私は彼を物欲しそうな視線で追い、
こうして一層傷を加えたのです。
私は彼を見るだけでもう、不幸にも
彼が善い人に思えたのです。
その様にして彼の行く処
私の目と心も同行しました。

「その頃私は彼が恒例の
競走に備えているのを知りました。
定められた道の終点までは
一マイル以上の距離があり
優勝者には七宝で囲まれた
指輪と見事に仕上げられた
大きな緑玉石が
この不幸な手で渡される筈でした。

「競技には四十人を越す若者が
賞を受けようと姿を現し、
各自が足を一線に揃え
用意を整え注意深く合図を待った。
合図を聞くや否や
全員が一斉に出発した。
その速さは凄じく、殆んど
足の裏が地面の砂に着かぬ程でした。

「しかし若い他所者クレピーノは、
これが彼の本名でしたが、
烈しい勢で風を切って
先頭に達しました。
紅の旗は遂に長い競走に
終りを告げた最初の人のものとなり、
彼はその走破により、
周囲の熱狂する大衆に報いました。

「そして厳粛な勝利を携え
満場の広大な広場を一周しましたが
やがて指輪を受け取るべく
私の許に立ち戻りました。
私は恐怖の戦(おのの)きを隠しながら
（一同の者が私に注目していたのです）、
当惑と恐れの峠を越すと
彼に自由と指輪を同時に与えました。

「彼は私に言ったのです、『お願いです、
私からそれを受取ってください。
その贈物は小さく貧弱に見えますが
差出す私の真心は大きいと貴女に断言します。
貴女の御厚意によって私は富み、
こうして心と力が私を偉大にし、
も早私にとって困難となる
如何なる事業も無くなるでしょう。』

「私はいとも丁寧に、
（これぞ女を完成させるもの）
彼に応えて指輪と共に、其方の
意志も受け取りましょうと言いました。
この時居合わせた全員が
私の周囲に幾重もの花環となり、
今は楽しき座席から私を降ろし
父の館へと運びました。

「私は人々に満足ぶりを見せようと
少なからぬ力と我儘で
絶えず燃える火の如く募る
私の苦痛を三週間に亘り隠しました。
そして父であり主人である人に
従順を誓いに来たと見せかけ
彼の希いと私の望みを果さんとする心を
彼に合図と遠回しで分らせました。

「そして父上にこう云ったのです。
私は父上からこれと思う人あらば
夫となし、親類を作れと言われていたので
あなたに従うべく彼を選びました。
その人の名はクレピーノと言い、
勇気があり運が強く、名門の出です。
併せて分別があり、正真で親切、
その上賞賛すべき条件の持主です。

「父は落着いた嬉しそうな表情で
私の意見を最後まで聞き
私の頬に口づけしてこう言いました。
『一切をお前の自由な意志に委せる。
お前はその分別と真摯(しんし)な意図により
立派な人物を選ぶと信ずるからだ。
そしてクレピーノはその育ちの良さから
大いに尊敬され期待される人物である。』

「彼は意志と命令によって
私の名誉と望みを満足させ
若者たちの空しい争いと
その根拠を断ったので
不幸にして悲しき結婚は
公式な行事として取行なわれました。
今日で丁度一ヶ月になります、おお過酷なる
運命よ。不幸と幸福の何たる隣合わせよ。

「昨日まで私は幸運に満足していました、
その反対を恐れも懸念もせずに。
今日、血腥(ちなまぐさ)い苛酷な死が
万物を地に倒してしまいました。
この不幸に如何なる慰みがありましょうや。
すでに如何なる策も役立たず
而もこの大不幸に見合う幸福の無い所で
天は如何なる代償を私に与え得るでしょうか。

「これが事の次第です。甘き生の
かくも確かな終りの話です。
こうして私の自由と束の間の喜びは
永久の苦しみに転じたのです。
さて貴方のせいで、記憶が
傷口を更に深くしました。
この苦しみの代償として、お願いです、
私に夫を葬わせて下さい。

「肉を食む猛禽に遺体を
食い千切らせるのは、
又野犬や猛獣がその
飽くなき胃袋を充たすのも良くありません。
されど非情にももはやかくも正しく
理にかなえる事を望まぬとあらば、
その剣と残酷な手で私たちを
死と墳墓で平等にして下さい。」[三]

ここで彼女は話を終え、さめざめと
泣いたので山をも感動させた。
彼女の悲痛に誘われて私も
共にその喪に服することとなった。
今や彼女を慰めるだけでは十分でなく
彼女に対する如何なる申出も十分でなかった。
彼女はただ最後の手段、最後の恩恵として
死と犠牲を乞うのみであった。

別な個所にで同じ歩哨に立っていた
ドン・シモン・ペレイラがもし
時間の終了を告げに来なかったら
そして彼も亦少し離れた所で
話を聞いていたが、耳にせし事で驚き
わが申出を新たな申出にて確約し
彼女の慰安を手伝ってくれなかったら
私は甚だしき歎きと混乱に陥っていたであろう。

すでに足早に天空は回り
大小の星を大海に注ぎ
南十字星は時を告げつつ
夜の静寂の中を
南々西に傾いていた。
その時我々の申出でに痛く感謝して
テグワルダが嘆きを抑えるのを見て
彼女をわが宿舎に連れて行った。

そこで彼女は誠実な
同伴の夫人たちに見守られた。
そして近づく夜明けが
夜の黒いマントを剥ぐのを待った。
さてさて皆が憩い私が歌ういま、
この状態で朝まで暫く措いておくのが
理にかなった事と思われる。
私も休息を必要としている程に。

第二十一歌章

テグワルダは夫の遺体を見つけ、その上に涙を流し、
彼を郷里へ運ぶ。サンティアゴとラ・インペリアルから
陸路イスパニア人と馬が到着する。カウポリカンは部下
の者全員の閲兵を行なう。

かくも十全（じゅうぜん）な愛の証しを誰が行ったろう。
吾人がきょう目前にする
美しくも不幸な蛮人に匹敵する
かくも敬虔なる心の表明を誰が見ただろう。
名声の神よ、彼女を偉大にし、
わが低き声を上げ高く響かせ
彼女の事を知らしめ、永遠に
人々の口から口へ伝えさせ給え。

有徳の婦人を侮蔑するを
常とし職業とする
辛辣にして毒を含む言辞の
有害な行使は止めよ。
熟々（つらつら）考えるに、ただこの兆（きざ）しのみにて
実際は何もないのに、
悪意は彼女らを咎め
固き轡（くつわ）と恥ずべき罰を加える。

阻しき名声の頂に登りし
幾多の女性を吾人は見ることか。
ジュディク[一]、カミーラ、ウィルギリウスが
不当にも中傷するフェニキヤのディド、
ペネロペ、夫のために犯された寝床を
血で洗いしルクレシア、
ヒッポ、トゥシア、ビルヒニラ、フルビア、クロエリア、
ポルシア、スルピシア、アルセステス、コーネリア。

これらの女性たちの一人に
美しきテグワルダは名を連ねる。
敬虔なる愛故に価値ある
希に見る功績に輝いているからである。
かくて、彼女らの所業を凌ぎ、
最も有名なるものの中で一際(ひときわ)光り、
その名は早くも不朽となり
永久に讃えられることであろう。

（先にも述べし如く）彼女は
己が運勢により期待された通り
僅かの恩恵にも感謝しつつ
妥当な場所に確かな同伴者と共に引籠った。
だが曙と新しい光の到来と共に
わが弛みし手足を掴え戻りし
心地よき眠りではあったが、
悩ましき懸念で目が覚めた。

彼女の許にと私は急いだ。
悲しき涙を流す女は
束の間もその痛ましい
苦しみと嘆きを減ずることがなかった。
私は女に夫を引渡し部下の者を添えて
無事立去れるように計らうと
確と約束して大いなる
同情を示し、彼女を慰めた。

女は思いがけぬ親切に涙を流し
両の腕を私に差し出し
安全の保証を乞うた。そこで私は
抱えのインディオを呼び、
彼女と共に出発し、彼方此方を探した。
遂に死者たちの間にわれわれは
丸き弾に貫かれて血ぬられた
凍てつく死体を発見した。

眼前に変り果て、涸れし顔を見た
憐れなるテグワルダは、
即座に凄まじい形相で
取り乱して倒れかかった。
そして自分の顔を擦り寄せ
止めどなく流れる涙に濡れながら
生命を吹き込めぬものかと
彼の口や傷に接吻した。

「あな悲し」——と彼女は言った——
「これ程の苦しみの中で私はどうすればいいの？
この絶好の機会に、なぜ私は
理不尽な愛を清算できないの？
いまなぜ無気力にも一杯呷って
一思いにこの苦しみを断ち切れないの？
何てことでしょう、私に死ぬことさえも
拒むこの不公正さは？」

こう言い乍ら死にたき一心にて
手を白き首にきつく当てたが、
それ以上は出来ず、悩める顔も
髪の毛も構わず掻きむしった。
私はそれを止めさせようと努めたが
防げる相手ではなかった。
死なんとする激しい意欲と
切望は左程に強く大きかった。

わが大いなる説得と懇願により
その切望が稍(やや)和らぎ
異教徒らしき意図と愚考を翻す
彼女の約束に私は確信を得た。
抱えのインディオたちが手早く
板の上に萎えて冷たき遺体を載せ
数名の者が肩に担いで
彼女の召使たちの待つ処に運んだ。

だが戦端の開かれし状態ゆえ
攻撃や無法なる扱いを受けぬ様(よう)
隣の丘を超えるまで
私は部下の兵を付添わせた。
ひとたび安全な地域に入るや
彼女は真直に道を歩み、
受けた好意ある待遇に感謝して
私に別れを告げた。

私は己が部処に戻った。その週は
濠や壊れた城壁の修復や
傷める部分を改造のために
われわれは働き通した。
勤勉な努力により遂に防備を整え
気力も十分に、規律正しく
公然の事と知れ亘る
敵軍の到来を待った。

同時にわれわれは我が軍の主力が
武器弾薬の備えも万全に
千頭の馬と二千人の射手を擁して
マポーチョを発ったという情報を得た。
だが雨多き冬季の増水せる
流れと沼と湿地は
馬や衣類や兵士を奪い
彼らを是非もなく足止めした。

ある朝、何時ものようにいると、
一人のインディオが急拠わが陣地に到来し、
こう言った、「おお無謀なる狂気の人士よ、
逃れよ、真近に迫れる死より逃れよ、
不屈のアラウコの軍が
其方らに襲いかからんとしている、されば
城壁も防備も役立たぬばかりか
其方らの助かり得る場所も我は知らず。」

同様の知らせを昼過ぎに
山に住む友なる酋長が齎した。
襲来は確かなりと断言した。
地上の総ての勢力を擁し
戦のための用具と機械、
橋、梁、丸太、板の他に
技巧を凝らせる防衛装置など
いかめしき武器を備えて。

これしきの事で我が軍は消沈せず
寧ろ直ちに来ることを望み、
最も士気の少ない者も大胆に
最も危険な場所を所望し、
敏速且つ好ましき秩序を保ちつつ
必要な一切を整えて
心得たりとばかり、多大の人命を
脅かす筈のその日を待った。

我々はまた間諜を努めるインディオから
黙せる夜の終らんとする頃、
敵は間違いなく三方より我々を
襲うべしとの情報を得た。
されば神の助けよりも
人の助けを疑っている折、
山の頂より突如として
わが方の軍が整然と現れた。

互いの側での狂喜、
整然として堂々たる様、その動き、
猛りたる軍神の嘎れし大声、
風に靡く無数の旗、
無数の隊旗、標旗、軍旗、
角笛、棘叭、人声、雄叫び、
馬の嘶きと鼻息の音、
この大いなる満足の様を確かよく描かむ。

互に愛しみと礼節の籠った
言葉で語り合い、
馬や兵士たちのために
居心地よき場所が供せられるや
われわれは様々な大小の天幕を
狭き平地に数多く設営したので
その様は恰も其処に
一つの都市が生れたかの様であった。

近くに迫る蛮人の軍が
新たな同意と分別ある見解にて
その意図と方針を変えた原因は
この援軍の到来にあった。
コロコーロは狡猾且つ賢明に
大方の考えに反し
言葉を尽して説得し、
全員を彼の意見に従わせた。

尤もそれ以前に実は
その件に関する大きな意見の相違があった。
だが結局、その厳しき決定の執行は
既に名声の高まりつつあった
到着したばかりのイスパニアの軍の
更に確かな情報が得られるまで
当分の間これを延期し、
強力な軍隊を退かせる事にした。

だが我が軍の兵士たちは
民族の秘めるあの勇気を示さんとし、
怠堕を嫌い、敵地に
乗り込まんと意欲を燃やし
沸き上る情熱を以て
念願の戦を急がんとて
非常な力と意気込みで
重要な物資を備える。

騒々しき、張り切れる彼らは
長く味けなき旅の
荷物を素早く整理し
名誉心と勇気に鼓舞されて
休憩を無用の物と見做し
五日以内と定められたあの
全員の熱望する出発の日を
早める様にと急立(せきた)てる。

延引されし楽しみの日が到来し
初の行軍が始まるという時、
ラ・インペリアルより馬を連れ武装した
大勢の友軍が到着した。
彼らはあの折陸路を
(険しく、変化の多い道であったが)
荷物、武器、弾薬、
食糧と共に出発した人々であった。

すでに多数の兵士と武器、弾薬と
全ての物資が整備され
必要な食糧も用意されて
所定の場所に屯(たむろ)していた。
出陣の第一声と共に
各自が己が旗の許に駆けつけるべく
場所と兵舎と中隊が
秩序正しく割り振られていた。

一方カウポリカンも亦
それに劣らぬ周到さろ手筈で
厳しき訓練と戦闘の技において
最大の試練と経験を経た
幸運にして十全なる強者たちに
その軍隊を分けた。
そして万事整いし或る日
兵士たちとその武器を視察せんとした。

分列行進の端緒となったのは
酋長のピジョルコであった。
強力な武器で装備し
右手に大きな鋼の杖を持っていた。
十三列の縦隊を作り
整然と行進する
手馴れし確かな投槍の名手たる
彼の中隊の先頭にあった。

次に最後の兵士たちの後を
強者レウコトンが通った。彼に続いて
重厚な射手の一隊が
多数の矢を射放ちながら通り、
その後を戦棍を操る兵を揮いて
レンゴが荘重な足どりで進んだ。
凛々しく、素晴らしく、瑞々しく、
手には堅き杉の棒を持って。

彼の後に猛々しい様子で
無愛想な、頑強なトゥルコマーラが続いた。
彼は鎧代りに自ら射止めた
虎の皮を身につけていた。
その驚くべき口が彼の額から
上顎にかけて広い顔を覆っていた。
白く、鋭く、滑らかな、
輝く二列の持った歯を見せながら。

荒々しく無骨なる部下の兵士たちが
彼の後を犇きながら行進した。
彼らは動物の毛皮を纏い濃密な
人垣となって彼を囲んでいた。
その後をタルカマビダの兵士が通った。
彼らは勇敢というより端正で
誇り高き若者カニオタロの
支配と保護の下にあった。

最後の列を追って進んだのは
有名なるピコルドの子孫にして
彩色を施せる武器を有する
ミジャレルモなる華やかなる若者、
すべての流れを集め
ビオビオ河に注ぐ
大河ニベケテンの河岸の
住民たちの支配者であった。

続いて新月刀と巾広き盾を手にして
アレマンデが行進した。
伊達者で極めて誇り高き若者、
身の丈高く、総じて筋骨隆々であった。
彼と共に従兄弟のレポマンデが進んだ。
裸体の肩に鋭く長き刃物を掛けていた。
両者は何れも同じ紋所をつけ
武装せる老練の兵士に囲まれていた。

彼の後に整然とレモレモが
強力な槍を引きずりながら
他の隊の中でも一きわ目立つ
隊の先頭に際立っていた。
その少し後をグワレモが進んだ。
彼の父が母を守って倒した
海馬の堅く毛羽立つ
毛皮に身を包んでいた。

寓話か否か、人の言うには
彼女が海で水浴中、一匹の
海馬が突如沖より来りて
彼女を攫(さら)って行った。
されば夫は奪い去られし
愛しの妻の声に馳せつけ
彼女を失うまいと必死に
海中に飛び込みその後を追った。

愛の力の偉大さよ。その勇敢な若者は
海馬に追付く、と海馬は又逃げ出したが
懸命に泳ぎながら彼女を横抱えにし
近くの海岸に近づいた。
海の怪物は海面に姿を見せていたが
（愛はすでに彼をも盲目にしていたのだ）
逃れ易い引潮の波が引いたその瞬間
陸地にさっとばかり跳ね上った。

囚われ者を自由にした海馬は
硬い尾を振りながら地面を叩き
大きな体躯(たいく)を撚(よ)じりながら
気力旺盛なる若者に向って行った。
若者は時を失うことなく
近くにありし武器を取りに行き、
かくして両者は戦闘を開始したれば
それを見んとて海は泣ぎ、太陽も立ち止まった。

だが器用にして勇ましい蛮人は
腕の力と機敏さを発揮して
鍛えたる鉄の棒で
貪欲なる怪物の眉間を割った。
遂にインディオは勇敢にも
難題を見事に片付け、
その場に巨大な生き物を横たえしめた。
それは三十フィートを超す大物であった。

物の本に記すに応わしい
この大手柄を記念して
堅く毛羽立つこの生き物の皮で
彼は丈夫で着易い武具を作った。
グワコルの死後、勇者グワレモが
その武具を受け継ぎ、広大にして
金や家畜を持った裕福な人の
大勢住むキラクラの盆地を支配した。

閑話休題、彼に続いて行進したのは
領地が海に囲まれているタルカグワノであった。
右手に太き帆柱の如き棒を持ち、
宛然(えんぜん)藺草(いぐさ)の如く軽々と振り回す。
聳え立つ羽毛で覆われ、甚だ瑞々(みずみず)しい。
胸の所で斜交(はすかい)に
青、白、赤の懸章が掛っていた。
彼の後に部下の戦士たちが続いた。

その後にトメーが続いた。
彼は一族のプエルチェ人を揮いていた。
彼らの武器は柄(え)のついた槍で
一尋を超す長い丸太の様であった。
剣の名手トゥルロス人たちもいた。
彼らは信念もなく、住みかを転々と変える
余り役に立たぬ騒がしい人たちであり
力は大きいが考えは小さい。

アンダリカンも欠けてはいなかった。
極く上等の鎖鎧を身につけ
頑丈な太い槍を振り回しながら、
規律正しい兵士たちを従えていた。
又未だ成人に至らぬ齢ながら
大いなる希望を抱かせるオロンページョが
右側のオンゴルモと並んで
別の老練の中隊を統率していた。

彼らの後に見事に武装せし
エリクーラが通った。彼は一群の
甚だ誇り高き、凛々しい、
準備万端整った若者たちを従えていた。
その後に堂々たる体格が努力家の
リャウコ人の隊が代赭色に顔を塗って従っていた。
彼らの真中に酋長として
高名なアイナビーリョの後継者がいた。

その後に続いたのはカヨクピル、
老練なる部下たちを統率し、
荘重な足どりと華やかな身形で
有能且つ意欲満々たる事を示しながら。
その次にプレンがこれまた
劣らぬ優美さと気取りにて
厳しき軍務に練られし
勇敢なる兵士たちの隊を導いていた。

巨人の如きリンコーヤが彼に続いた。
その頭は総ての者の上に抜ん出ていた。
強力にして燦然と輝く胸当を着け
兜は冠毛で覆われていた。
彼は見下すような態度で、
足並揃える彼の隊の前を進んだ。
その後に若きペイカビーが
別の勇者の隊を揮いていた。

この閲兵には威儀を正して
厳めしきカニオマンゲも加わっていた。
著名なる老父の死を悼む表情だった。
彼は亡き父の地位を継承したのであった。
白き甲冑はすべて黒く覆い、
嘎れた調子外れの太鼓の
遅い拍子と歩調の兵士たちも
悉くその色を纏っていた。

閲兵には最後であったが
万事第一人者の堂々たるトゥカペルがいた。
煌びやかな面頬を
金色と褐色の巾広い升目の布で覆っていた。
図体は大きく目は無愛想で
威勢よき馬は悠然と闊歩していた。
彼の後には尊大で誇り高き
勇敢な一群の兵士がいた。

偉大なるカウポリカンは
別の残余のアラウコ人の隊と共に
怒れる軍神マルテよりも燃え、
短き杖をば片手に進んでいた。
彼の影と軍旗の許へ
勇者クルゴとマレグワーノが、
更に荘重で雄弁のコロコロが来た。
ミーリョ、テグワン、ランベーチョ、グヮンピコーロも。

やがてその後に部下たちのプリマイケン人、
トウニコ人、ロネゲロン人、ペンコ人、
イタタ人、マウレ人、カウケン人が
色塗りの標旗や幟を持って続いた。
ニベケテン人、プエルチェ人、カウテン人は
勢揃いした歩兵たちや
友人、隣人、外国人から成る
雑然とした大勢の戦士たちを擁していた。

宛然波濤のうねりの如く
武装せる猛者たちは増大する。
数多の足に踏みつけられて
周囲の土地は震動する。
空は大音響に包まれ、
恰も濃霧か暗雲の如く
巨大な渦となって立ち上る
土埃で暗くなる。

さて我が方の陣営も同様に
秩序正しく、ドン・ガルシアは
出陣に際して彼の勇ましき
隊の前に姿を見せ
幸先よき出来事に自信を得た
陽気な態度と表情で
緊張せる兵士たちの心を動かす
次の様な訓辞を垂れた。

「勇敢なる諸君、御身らは
唯々生来の勇気により、
アポロが（空が如何に近くに彼を戴こうとも）
如何なる時も決して通り得ず
偉大な造物主も彼にそれを許し給わぬ
灼熱の熱帯地方と
遙かなる回帰線を越えて
南極の地の発見に趣いた。

「諸君は並々ならぬ熱意を以て
既にこの地にカトリックの旗を齎し、
数知れぬ異国の人々を
イスパニアの支配下に置いた。
諸君、強固なる胸と忍耐力を
真に野蛮なるこれらの人に対し発揮せよ、
この僅かなる事を勝ち取る事により
諸君は全世界を手中に収めるのだ。

「而して徒にこれを延引し
始めし事を完遂さざれば
我らは何ら為さざるに等しく、諸君が
これまでに得た名誉も諸君の物ではない。
何故なら優柔不断のため
猛き敵は戦場での唯一度の戦にて
諸君の有する一切の
名誉と幸運を手に入れるからである。

「余が諸君に頼みたき事は
この合戦及至騒動に於て
仮に敵が諸君を侮辱せしとても
諸君は決して同様に敵を侮辱せざること。
寧ろ敵が手放せし武器を諸君に向け
戦闘において死を避けようとする時は
友として守ってやること。
命を与える方が奪うよりも優る故。

「諸君は常に武器を向けし相手に
万事理性を以て臨むべし。
怒りがその限度を越えるとき
権利は既に犯されその力を失う。
何故なら理性が怒りを制御せず
衝動と過度の激怒を抑制せぬ時
度を過ごした懲罰が
敵の大義を正当化するからである。

「以上がこの事に関し余の云い得る事、
筋道立てて諸君に忠告する事である。
諸君のはやる心をこれ以上
引き止めるのは心苦しい。
されば、いざ、早々に木柵と
大小の天幕を畳み片付け、
幸運がはや我らを招く場所に
全員移ろうではないか。」

忽ち夫々の隊は敏速に
意気揚々と誇らしげに
広く水量も豊かなビオビオ河の
岸の砂地に向って進行する。
そして用意されし舟に乗り込み
間もなくその広き河を渡り
編成された軍は
禁じられた領域に入り込んだ。

だがここで是非もなく終えざるを得ぬ
仕事が持ち上がり、為に私は
十分なる気力を蓄えるべく
些かの休憩をしたい思う。
私はいま疲れのために声も途切れ
奔流の涸渇する気分である。
だが能うる限り努力し
別の歌章で諸氏の満足を得たい。

第二十二歌章

イスパニア人はアラウコの地に入る。アラウコ人は彼らと熾烈な戦闘を展開する。レンゴは自ら大人物であることを証明する。裁判により、勇敢なるインディオ、ガルバリーノの両手が切り落される。

横暴にして不実なる愛よ、汝はそも
わが心を乱して何をしようというのか、
われを苦しめようとするのは
わが約せし事に不満なる故か。
ああ、われははや悩める胸に
燃え盛る火が生まれ、
そこより徐々に血管と
骨に広がるのを感じる。

如何なる処にても汝の時ならぬ想起に
かくもわが身の疲るるは
血腥(なまぐさ)き軍の神の荒(すさ)べる様より
われを遠ざけんとする汝の執念からか。
止(や)めてくれ。誰も汝を讃えぬとて
それを続けるのは止めて欲しい。
汝は何処までもわれを追いかけ
ひたすらにわれを苦しめようとする。

著名なる男子の数ある中で
かくも思想と理性に乏しき
われに物乞いに来るとは
汝にとり不面目なこと、賤しき事ではないか。
しかも汝は干戈と険しさの中で
百千の止むなき状況にあるわれに
恐らくは空しき一つの夢を通して
かくも大きな苦しみでわれを罰するのか。

もう止してくれ。はや近づける
恐ろしき敵の太鼓が
他の事に構う暇を与えぬ故に。
敵がはや戦闘の準備を整え
わが方に向うのが感じられる故。
最も豊かにして比類なき才能を持つ人も
かくも混乱せる騒ぎの中では
その暇はないであろう。

すでに戦場にいて危機に臨むわれに
仮令わが思いが他所に向かおうとも
約束せし事を為し遂げる以外に
そもそも何ができるというのか。
ただ短き言葉に縮めて
廻り道をせず、最短の小道を通り
飾りも技巧も打ち捨て
わが始めし事を続けよう。

物語りに立ち戻って、既に述べし如く、
我々は整然と平原を進み
僅かの時間で長い道のりを歩み
タルカグワーノ河の畔に達した。
だが高き日もはや西に傾きし頃
斜面の麓の水辺の
居心地よき平坦なる地に
我々は最初の露営を行った。

海に面せし広々とした平原に
宿舎を設営したばかりの時、
辺り一面から叫び声が聞えてきた。
「武器だ、武器だ、立ち向かえ、直ちに」
やがて散らばり行きし者たちは
己が所属の旗の下に駆け寄り
命令と規律に従って
隊列を組んだ。

わが方の偵察隊は平原を
広い地域に亘り探索していたが
その果てのアンダリカンの
高い山の近くに小山があり、
そこから彼らは兵士たちが入り込み
左手の通路を塞ぎ、こう云うのを見た。
「待て、待て、止めろ、止めろ、
今日ここで勇者は誰か決めよう」

わが軍の兵士は急坂に守られて
中隊を編成して引き籠り、
勇気横溢(おういつ)の体にて
数に優る相手に対した。
だが寧猛(ねい)なる蛮人たちは
一顧(いっこ)だにせず襲撃し
秩序も道もなく這這(ほうほう)の体(てい)で
彼らを退却せしめた。

時折処々で立ち止まり
彼らは堂々と敵に立ち向かった
そして敗者ながら勇気を奮(ふる)い
驕(おご)れる勝者に襲いかかった。
だが絶大なる力に彼らは余儀なく
撤退を続行した、
隊の落伍者たちを
見殺しにし蹂躙(じゅうりん)されるままにして。

機敏にして大胆なるインディオは
更にその勢いを増し
濃い土埃に包まれながら
追跡を続けていた。
わが軍は拍車をかけ手綱を緩めて
冷静さよりも恐怖を抱きつつ
両脇に鉄をあてがい
疾走する馬に鞭を打った。

だが如何に掛け声と両の腕と踵で
それらの馬を急き立てても
蛮人たちは彼らに追付き足に縋(すが)り付き
彼らを鞍から引きずり下ろした。
遂に、さながら猟犬に悩まされて
避難所と退路を塞がれた
手負いの熊か獅子のように
彼らは余儀なく戦った。

俄に起こった風が大音響と共に
陰鬱(いんうつ)なる雨まじりの突風となり
埃立つ原野と道を
抑(おさ)え難い凄まじさで掃きながら
広大で素早い龍巻となって
あらゆる物を掴み、運び去り、散らかし
その烈しい力で
木の幹を根こそぎにするときの
左程のた易さであの恐るべき
野蛮な暴力により
疲労せしイスパニア人は
抵抗もなし得ぬまま一掃された。
ただ幾人かの者が名誉心に駆られて
立ち戻り、敵に向かったが
更に大きく素早い損害を蒙りつつ
到来した軍勢の波に攫(さら)われていった。

そのようにして好運に恵まれた敵軍は
イスパニア軍を常に虐待し、
怒れる力を屈伏せる彼らに
何の慈悲もなく行使した。
時ならぬ騒音と野蛮なる叫びが
広大な盆地に響き渡り
軽やかな風に運ばれて
その知らせをわが陣営に齎らした。

この時、西の方より
非常なる早さとそれに劣らぬ賑やかさで
ファン・レモンが大勢の兵と共に到着した。
彼らは最初にその知らせを得て
激しく犇きながら堂々と
勇猛なる鬨の声を上げながら
勝利と血を早くも味わいし
怒れる敵軍に襲いかかった。

だが突破を試みる時、
彼らは堅き刃先の壁と砦を見た。
華々しき激突がなされるや
双方に損害が出た。
或る者は腹部を貫かれ
或る者は鞍から遠くに飛んだ。
或る者は傷つき或る者は壊れ
或る者は馬に蹂躙された。

おおわが筆よ、記憶に留むべき
大いなる出来事を、そして
勇敢なる槍や刀が果せしこの日の役割を
かくも手短かに書くのは感心できぬ。
更に優れし詩才も
それらを記し続けるには不足とはいえ
汝の書き得ることの幾許かを
記し讃えるべきであろう。

威風堂々たるリンコーヤは
怒れる表情と勇猛な顔で
確かな足取りで急ぎつつ、
第一の中隊を揮いていたが
瞬時にして太き槍を構え
その端をば両足の間に据え
その頑丈で残忍な鉄で
大胆なエルナン・ペレスを待ち受ける。

右の側を進みつつ、鋭き鉄は
重ね織りの綿入れの銅着と
厳重に編んだ鎖帷子を貫き
甚だしき傷を負わせた。
血に塗れた巾広く堅き鉄は
背中に出口を開けた。
そして肉体はすでに血の気を失い
鞍橋の外に垂れ下っていた。

トゥカペルは威勢よく
分別よりも気力と共に
鉄の踵をゆさぶりつつ
勇ましきオソリオの行く手に駆けつけ
肉体も露わに、時を見計いて
相手をやり過ごし様、戦棍を振り回し
猛烈な力で振り下ろせば
彼の手足も骨も甚だしく傷ついた。

少し遅れて現れたカセレスをも
他の一撃で地面に倒したが、
この男は渾身の力を絞り
盾を腕に、刀を手にして
敵の隊に突進し
単身戦を維持せんとして、
豪胆極まりなき人々をも恐れさせる程の
物凄い気力で立ち上がった。

そして気力の限りを尽くして耐えたが
かくも多勢の前には力足りず、
早くも大声を上げる大群は
雑然たる固まりとなって彼を囲んだ。
だがこの時遇々
新たに加わっていた五十人を越す
レイノーンの揮いる騎馬兵が
その側面を突破しにやって来た。

その攻撃は甚だ激しく、
部厚き刃先の壁ではあったが
十人以上が地面に倒れながらも
その密集する中隊を突破し、
人々に囲まれ、安全を脅かされ
勇気を振り絞って持ちこたえ
敵を殺めつゝ生き延びていた
豪気のカセレスを討ち取った。

ドン・ミゲルと・ドン・ペドロ・デ・アベンダーニョ、
エスコバール、フワン・フフレ、コルテスとアランダは
稀に見る危険を顧みず
己(おの)が隊のすべての重みを支える。
同じ効果を挙げ多くの損害を与えたのは
ロサダ・ペーニャ、コルドバ、そしてミランダ、
ベルナル、ラサルテ、カスタニェダ、ウリョア、
マルティン・ルイスとフワン・ロペス・デ・ガンボア。

しかし間もなくイスパニア人の
血に飢えたアラウコ人は
彼らを無理矢理引き返させ、
尚(なお)も突進を続けさせた。
その後、別な隊が忽ち
無謀にも彼らに激突した。
だが道を一歩も得ないまま
顔と手綱を背(そむ)けることになった。

そして時折、突然立ち止まり
フワン・レモンや他の者たちが奮起はしたが
忽ち新たな損失を蒙り大急ぎで
予定の道を続けることになった。
そして濃い土埃の雲に
双方共包まれながら進んでいたとき
戦闘の態勢を整えた
わが方の陣地が発見された。

血に飢えたアラウコ人は
わが方の槍の列に突入した。
だが我に帰り落ち着きを取り戻し
足どりの勢いを弛めた。
そしてすぐ様引き籠り、整然となり
右手の山の麓の
とある広大な沼地の近くに
平原を横切って後退した。

われわれはわが方の翼より
大挙せる歩兵の犇めきとなって攻め立てた。
われわれは到着と共に忽ち
烈しい攻撃と突然の連射を加えた。
そして沼地の方へ彼らを追い、
決然らる顔と気力で足を止め
刀と刀で戦うべく、
力と武勇を試すべく侵入した。

ドイツ人と雖もかくも
敢然と相対して戦った事はなく
又この両者程に白兵戦にて
力の限りを尽して攻め立て
或は打撃を受けた事はない。
彼らは狭き沼地に入りしため
一歩も退くこと能わず
急ぎ攻めれば同様に攻められた。

或る者は沼に腰まで漬かり
時には二人、三人を相手に戦い
或る者は軽快に身をこなそうとして
かえって増々沼地に足を取られ
或る者は力と運を試して
近くの敵と取り組み
噛みつき、泥で相手の目を潰し
必死に勝利の法を探っていた。

傷つけ殴り合う彼我の勢は
相半ばし、運は疑わしかった。
何れの側にも優位を宣する兆しは
微塵もなかった。
或る者は濡れ鼠となり
或る者は沼に達し、
流された彼我の血で
沼は赤く濁っていた。

わが方の陣営が視界に入るや
憎悪に燃え上がる怒りに
盲目になって死を求めて
突き進むレンゴは
隣の沼地に至り
猛々しき顔と気力溢れる胸を
全ての敵に向けながら
威嚇的な音声でこう云った。

「賤しき者共、我に向って参れ。
汝らの激怒を我に向けるがよい。
我こそは汝らの追撃者にして
わが命よりも汝らの死を望む者なり。
我は最早イスパニアの国の
破滅を見るまで休息を望まぬ。
汝らの肉と憎むべき血で
わが空腹を満たし渇を癒したい。」

かくて天と地を脅しつゝ
沼地の中央に立ちつくし
血に飢えた戦棍(せんこん)を振り回し
気力に劣る者たちを恐れさせた。
だがその声で知れ渡るや否や
彼の力を軽く見た
近くの数多のイスパニア人が
武器を手に、忽ち彼を追いかけた。

この時ヤナコーナの(二)フワンは
他の勇者たちに先んじて
一撃の下に彼の頭を砕き
他の一撃にてチルカの胴体を傷つける。
そして若きスニガ目指して突進し
凄じい激怒で第三の打撃を加えたので
彼は湿った土地に釘を打つように
沼地と胸まで滅込(めりこ)んだ。

濃密な弾丸の雨が
勇気ある胸に向けられ
明るき空をも曇らせつ、
四方八方より急ぎ発射された。
猛き蛮人はこれでも怯まず
寧ろ勢と打撃を倍加し、
腰まで沼に漬かりつつ、大胆にも
部下の兵士の防壁となった。

手負いの猪が
果敢な猟犬に追われ
手慣れた勢子たちに囲まれ
沼地の片隅に追いやられて
猛り狂って荒々しく唸りながら
右往左往し、暴れて
噛み破り、突進し、傷つけ、殺し
繁き矢の雨を蹴散らすように

勇ましき蛮人はその様にして
怒りに燃え憤怒に狂い
汗と血と泥に覆われ
沼地の真中で只一人
あらゆる勢と打撃に耐え
太陽を覆う程に
夫々の手から無数に放たれる
嵐の様に降りかかる弾に耐えた。

すでに広がりし従順なる軍は
執拗に追跡を続行していたが
平原にわが方の兵を発見して
後退し引き籠っていた。
ただレンゴのみが雄々しく大胆に、
深い沼と周囲に多い
繁みに助けられ
劣勢の己が隊を支えていた。

険しき山岳に守られ
原始林の隠れた道を通り
四方から彼を取巻き
調和と秩序を保ちつゝ
急拠襲い来る大軍を前にして
成果は疑わしく損害は確実と見て
頃を見て後退し、部下共々
助かるこそ得策と考えて

彼は皆の者に言った、「友輩よ、
効果無き時と行為に力を費すのは止めよう。
われわれは残されし血を保持するのだ。
最も高価にそれが売れる時のために、
われわれはこの泥の土地にて
敵により逃匿ならなくされ
わが名声を失い、彼らの尊敬を失う前に
この地を引揚げるのが得策。」

やがて、レンゴの声に従い
甲斐甲斐しき腕は止まり、
彼らは狭く最も固き場所を通って
太鼓に合わせて撤退した。
その場所と出口は険しく、
わが軍は彼らを追跡することはできなかった。
彼らのうち何人かは沼に沈み
助けを求めていた。

小高き山の麓から
寧猛なる蛮人どもが出かかっていた。
粗野で血に飢えた泥まみれのレンゴは
悠々と歩む牝牛の群に
強固な首筋と高い額を
辺りに廻らせながら
従い行く嫉妬深き牡牛のように
後衛に位置して彼らを運ぶ。

われらの陣営は命令により縮小され
一切の敵から引き離されたとき
友軍の隊から遠く離れし
蛮人たちの中の一人が捕えられた。
その男は遇々わが兵舎に連行され
辺りの反逆する村人たちの
見せしめとして
両の手を切り落とされる事となった。

幹より切り離された枝の上に
彼はわが眼前で右手を置いた。
それは厳しき一撃の下に切断された。
彼は続いて喜々として左手を差し出した。
それも亦胴体を離れて飛び散ったが
彼は眉を顰める事も額に皺を寄せる事もなく
軽蔑の念を露にしながら
頭を突き出し首を伸ばして

こう言った、「汝らの血に
飢えて止まぬこの喉を切るがよい。
我は死を恐れず、また汝らの
脅かしや苛酷な処置に驚きもしない。
切り落とされし手は無くとも
左程重要ではなく損失も微々たるもの。
剣を巧に操る威勢よき手は
他にも多く残っている。

「わが命(いのち)の果てぬことにより
汝らが何らかの利を得んと考えるなら
此の場で我は死に、汝らを悲しませよう。
仮令汝らが我を生かそうとしても我は望まぬ。
我は汝らの悲しみのため
喜々として死ぬことに満足するだろう。
我は死を以て汝らを不快にしたい。
これぞ汝らを傷つけ得る唯一の道。」

こうして彼は反抗的に
執拗に死を果そうとした
そして一層狂おしく、強情に
血塗れの地面に身を投げ出した。
彼は自らの血の上に横たわって
命を終えようと望んでいた。
血の気を失せた肉体を
もどかしげに噛みながら。

この様に片意地を張り
われらは怒りのため情けを減じたとき
彼は一人の奴隷が山の斜面を
蛮人の遺体を担いで下りるのを見た。
そして宛(さなが)ら猛獣が
群を外れた餌物を見つけた時の如く
激しい勢いで走り
彼を迎えに行った。

そして足と腕を彼に絡ませ
湿気を帯びた地面に彼を倒すと
血のついた堅い棒で
その鼻や目を殴った。
遂になわれらの近くで
もしわれらの適時の救助がなければ
それを貪り食うところであった。
救助は早かったが彼はひどい傷を負った。

地獄の如き蛮人はその不遜なる声で
立ち上がりざま云った、「我には未だ
基督教徒を侮辱するだけの
幾許かの力と血が残っている。
我は本意なくも命を受け容れよう
たとえ賤しき手段にて与えられようとも。
手を失いても我は尚復讐を期す。
仇討ちに手の不足する事はなかろうほどに。

「汝らはここに留るがよい、畜生め、
汝らはこの我に憎悪に満ちた、
他の事で害を与え得なくとも
厄介にして執拗なる敵を見るであろう。
やがて汝らは我が如何に追撃し
また我の死が如何に汝らに有益かを知るであろう。」
この様にして、又その他の事を云って
彼は風のように速く立ち去った。

勇猛にして果敢なる故に
豪胆のガリバリーノと呼ばれし
この執拗なる蛮人の名を
忘却に任せるべきではない。
だが余りに険しき道を歩みし故
わが声も力も尽き果ててしまった。
さればここで一休みしたい、
今は刀も名声も元気もない状態だから。

第二十三歌章

ガルバリーノはアラウコの元老院に到着する。会議が催され、彼は発言して幾人かの意見に反論する。イスパニア人は索敵に出かける。魔術師フィトンの洞窟とその中にあった物について述べられる。

陛下、敵は生きている限り
決して侮(あなど)るべきではなく、
火花が軈(やが)てわれらを焼き尽す
炎となることは周知の通り。
されば我らが最も安全なる時
疑ってみる事こそ賢明というもの。
心地よき凪(な)ぎを楽しむ者ほど
予期せぬ時化(しけ)に遇い易い。

移ろい易き幸運は
ただ死のみを確約する。
恒(つね)ならぬ生命(いのち)の続く限り
不変の状態は続くことなし。
然(さ)れば未(いま)だ幸運を味わぬ者こそ
真に幸運なる人。
而して不幸を懸念する要なきため
繁栄なくとも満足する事を得。

さて吾人は確かなる幸運も安らぎも
決して無いことを既に確信している。
如何に幸運なる人も必らず通るべき道は
あの定めであり命令であることを。
この事に時を費すのは心苦しい。
長々しく煩わしきものとならぬよう、
あの若きガルバリーノを軽視せしが故に
生じたる事のみを語りたい。

その男、負傷し血の気を失ってはいたが
勇気と憤怒に鼓舞されて
カウポリカンの軍の駐頓地、
アンダリカンに到着した。
折しも権威ある元老院が
密かに会議を開き、
軍需物資や必要な品々を準備し
互いに意見を交していた。

或る者は当然の恐れから
幾人かの思慮なき意図を批判し
或る者は己が勇気を示そうとして
如何なる困難も不都合も容易と見做し、
或る者は正当な協調を是認した。
或る者はこれと意見を異にし、
各人理を尽して自らの
意見を強力に主張した。

このような混乱と不一致の折、
カルバリーノが命辛々到着した。
彼の申し出た入室の許可願いは
喜んで受入れられた。
然るべき敬意を表しつつ、
彼はか細き声を振り絞って
血の気のない、血塗れの体で
次のように訴え始めた。

「謹しんで申上げる。常々
異国人の侵略に対し厳しくこれを咎め
且つ又未知の土地や国々にて
その旗を翩翻と翻された貴殿らが
自国の領土内にて
賤しき一握の異国人が
貴殿らを抑圧し征服せんとする今、
咎めの手を緩めるは何故なるや。

「わが寸断されし体を御覧あれ。
これは御身らの体の一部。更なる侮辱のため
彼らは拙者を侮辱で充たし元老院に届けた。
御身らがこの侮辱に気付かんがため。
御身らの勇気は侮蔑された。
彼らは御身らに見立てて拙者に暴行し
酋長は誰一人五体満足には
おかずと誓って言う。

「御身らの祖先が折角手に入れし
数々の栄光と名誉、更に
彼ら自らの力により天まで昇りし
アラウコの名声も空しき業なり。
もし今不面目にも踏躙られ、倒されて
地上の至る所に口から口へと伝えられ、
御身らの高貴なる血潮が冷め
汚れた片隅に流れるなら。

地上普く響渡る御身らの声に
震え上がらざりし地方があったであろうか。
将又恐怖のため或は力に強制され
その軍門に降らざりし国があったであろうか。
それも御身らが絶頂に達した今
その転落が一際目立つものとなり
祖先の評価が達したと同じ高みに
御身らへの軽蔑が達せんがためであったのか。

「さて一握りの外敵が
憐憫と云う理由と名の下に
御身らを友として受け入れようと申出で
御身らを彼らに服従せしめとしている。
そしてもし御身らが屈服せねば罰により
御身らの高慢の鼻を折ると誓っている。
その刃からは老若男女、宗教、
身分の上下を問わず免れる事はない。

「我に帰り給え。彼らの
欺瞞に、扱いに、術策に耳を貸し給うな。
それらは全て御身らの功績を曇らせる
協定を目指すものに他ならぬ。
見知らぬ遙かな海や陸を渡り
彼らをこの地に到らせたのは
此の土地の豊かなる鉱脈に
埋蔵されている黄金への欲望。

「主たる理由は基督教の
布教にありと示さんとするは
空しき外見、単なる見せかけ。
彼らの本心は専ら利害関係にある。
彼らは貪欲な意図に溢れている。
その他の事は一切偽りである。
われらにとって彼らが他の如何なる国民よりも
不純なる泥棒にして且つ高慢な者共である。

「不吉なる運命と酷しき運勢が
われらの未来を拘束するとき
われらは手短かで容易で確実な方法たる
名誉ある死を選ぶことができる。
運勢に対しては決然と臨み
厳しき逆境には厳しい心で臨まねばならぬ。
確固たる心と不屈の気力は
不可能を克服し可能にするものぞ。」

失いし血の余りの夥しさに
彼は失神し、それ以上言えなかった。
今は力なき彼は衰弱し
頭を支えることすらできなかった。
かくて顔面は死の相を帯び
血塗れの地面に横たわった。
そして冷酷極まりなき人々も
予期された死に同情した。

だが死神が宿る程の
大怪我ではなかったため
ひとたび流血が止まるや
不確な命もやがて確実となり
力は時と共に増加し
多くの薬に助けられ
手厚い看護がなされたため
遂に彼は元の元気を取り戻した。

彼の言には甚だ説得力があり
我らに対する彼らの憎しみは弥増し
最も柔和なる者も
激しい怒りに燃え立った。
こうして様々の意見も
唯一の目的と考えに集約され
方策や協約を論じる者たちは
そこより永遠に排除された。

焦立つ若者たちは
干戈を交えんとして豪語し
熱狂的な表情と仕草で
余裕ある時間を敢えて急がせた。
だが成熟し落ち着きのある人たちは
その燃える怒りと
何人かの分別なき言辞を窘め乍らも
全体としての決まりを咎めはしなかった。

一つではなく百の合戦について
その順序、方法、時期と場所を巡り
様々な意見を闘わす彼らの事は
暫くそのままにしておこう。
精鋭の守備兵と万全の準備を整え
その地で満を持していたわが軍の
慌だしい兵舎の事を
些か等閑にしていたようだから。

待ち侘びていた太陽が昇ると
馬上の兵士たちは整列して
後には歩兵と陣営の
全部を残して出発した。
その速さは著しく、正午には
われわれの懸念を深め心を痛めし
基督教徒たちの白骨で充ちた
恐怖の坂道を登り始めていた。

さてわれわれはアラウコの盆地に下りた。
西側は見渡す限り海の波が打ち寄せていた。
食糧も牧草も充分と思しき
とある平地にわれわれは野営した。
その地域を確かなる平和と
基督の御教えの下に要求すべく
道中の安全を約して
近隣の若干の者を使いに立てた。

だが彼らは定めた時刻になるも帰らず
そのようにして数日が経過したため
わが方の間諜の奸計や術策にても
彼らの本心が掴めぬゆえ
何らかの情報を得んものと
細き月の出る遅き時刻に
数名の者が近隣の村落を通り
出発することが決まった。

こうして私は密かに準備を整え
夜陰の静寂に乗じて
繁みと叢(くさむら)をかき分けて行くうち
突然二、三の住居に遭遇した。
そこでは憐れな見すぼらしき人々が
貧しい乍らも穏かに暮らしていた。
彼らは戦乱により住み慣れた土地を
未だ追われてはいなかった。

さてわれらの投宿地となっていた
チャイジャカーノにさしかかった時
私は平原の果ての丘に
近くの小道を通って来た
疲れ切った一人の老インディオを見た。
両の足は辛うじて体を支え
背は曲がり動作は鈍(にぶ)く、弱々しく、肉は落ち
宛(さなが)ら木の根で出来ているようであった。

その老いさらばえし男の
姿と愚鈍なる仕ぐさに驚き
私は彼を助けんとして、又出来得べくば
何らかの情報を得んとして近寄った。
だが猟(りょう)犬の気配を感じて
恐れて逃げる牝鹿も
老人が坂を上って行く程には
素早く逃れはしまい。

私は格別の注意も用心もせず
馬を両脚で強く押さえ、
男は飛ぶが如く去ったが追付けると思い、
全速力でその老人の後を追った。
だがその老人は風を切って
あっと云う間に消え失せた。
残念乍らそれ以上追跡できず、
思い止まらざるを得なかった。

私は急坂を降りて
今は通る人とて無き二本の道の近くに出た。
二つの山裾を取巻いて
狭いラウコ川が流れている。
更に下方の右手の方に
こんもりとした木々の繁みの辺りの
川岸に一頭の温和な牝鹿が
牧草と朝露を楽しんでいるのが見えた。

一頭の素朴なる牝鹿の
川辺に佇む場面に遭遇する筈だと
夢中の私に理性が語りかけた
記憶が徐々に甦った。
私は大いに喜びつつ
一つの道を通ってゆっくりと
丘の中腹を降りて行き
遂に牝鹿の近くに達した。

私は首尾よく接近できた。
山狭の川の流れは川音が高く
牝鹿は足も耳も油断して
柔かい草を自由に食んでいた。
だが近くに私の足音を感じ
そん音に凛とした顔を上げるや
美味なる草と木立ちを残して
狭く阻しい小道を通って姿を消した。

私は愛馬の両脇を蹴って
急拠その後を追った。
だが牝鹿は近くの別の小道を通り
険阻な山あいの道に入り、
雑木の生い茂る
森を目指して直進し、
その繁みの中にとび込んだ。
私もまた全速力でそれを追った。

遂にその足跡を見失い、道は行き止まり、
突如として空は曇り、このようにして
あてどなく彼方此方と
茂みの中をさまよった。
私はわが愚鈍さと見当違いを悟ると
最初の意図を後悔し
それ以上進まず引返したかったが
何の小道も足音も見つからなかった。

このようにして相当の間
隠れた出口に遭遇することなく彷徨った。
その時近くの左の方角に
小川のせせらぎの音を聞いた。
私は音のする方に近寄りながら
川岸にあった樫の木の根元に
粗末な一軒の小屋と
一人の老人の側(そば)に件(くだん)の牝鹿を見た。

老人は言った、「如何なる運又は不幸が
そなたをかくも道に迷わせたのか。
そなたはわしが誰にも遭った事のない
この未開の道と茂みに迷いこんだのじゃ。
もしそなたが苛酷な運勢か思わぬ事情により
そなたの旗を離れたのであれば
わしとしてもそなたが逃れるための
出来る限りの事をしてあげよう。

この不思議な好好爺(こうこうや)の
申出と歓迎に接し、
かかる援助と歓待ぶりに
私は無上の喜びを感じた。
私はここに到った経緯を述べ、
魔術師フィトンの棲む
洞窟を知るための
助言を彼に求めた。

その尊敬すべき老人は
嘆息と優しき感情を表しながら
そっと私の手を取り
粗末な彼の住居の外に出た。
季節は夏のはじめだったため
一面の小石の間より泉の流れ出る
木陰の涼しき場所を探して腰を下ろし
彼は私に次のように語り始めた。

「わしの祖国はアラウコにあり、わしは
不幸なグワティコーロ老人と呼ばれておる。
壮年時代は兵士であった。
職務はコロコーロの先任者にして
嘗てはこの体で、競技場で
助人なしで七度の闘いに勝った。
そして今は禿げたこの年寄りの額は
千回も小枝で飾られたものだ。

「然れどもこの世にては良き事は続かず
一切は変化するのが習い。
わしの幸運は転じて不運となり
わしの名誉は永遠の不名誉となった。
測り知れぬ苛酷な運のために
アイナビーリョとの闘技にて、わしは
かくも長い歳月を費して得た栄光を失い
わが命をではなく名誉を失ったのだ。

「わしは不名誉な身で生き残ったのだ。
(寧ろ千倍も死を望みたい気持だ)
わしは名誉の回復に絶望し
そなたも見る如く、人気(ひとけ)なきこの地に来て
そなたに見られた他は
誰にも見られる事なく
二十年を越す歳月を過してきた。
そなたに会ったのは少なからぬ驚きじゃよ。

「こうしてわしは長い間
孤独なる隔離状態の中で生きてきた。
ところで、さて偶然ながらそなたが
この物悲しき荒家に来られたからには
そなたの所望される事を喜んで致そう。
実はわしはフィトンとは知り合いなのだ。
彼は始末の悪い無骨者だがわしの伯父、
わが父グヮルコーロの弟じゃ。

「人跡絶えて久しき
険阻極まる山の麓の
愉しき日の光を浴びた事のない
隠れたる陰気な棲処(すみか)に
居を構えて奇妙な暮し方をしておる。
それは彼の置かれた状況に最適である。
何しろ並外れて非人間的であり
人間との交りが大嫌いであるから。

「だが石や動植物に関する
彼の知識と能力は夥る大きく
その学問と技術により、
自然の営みの全てを知っている。
そして暗き驚愕の王国において
黙せる地獄の住人たちに
荒々しき呪文により
過去、現在、未来について語らせるのじゃ。

「彼は太陽の照りつける最中(さなか)に
忽然(こつぜん)として大地を夜の闇で覆い
時ならぬ時に穏かなる空より
風の力なしに雨を降らせ、雷を鳴らせる。
河川の水音高き流れを止め、
天翔ける大小の鳥たちも
その激しき言葉によって
突然の睡魔(すいま)に襲われたかのように墜落する。

「薬草をば取入れ時には緑色にし
その一つ一つの効能を理解する。
海に波風を立たしめ、風も
月の力と命令に反し、彼に従う。
その効果ある声により、何の原因もなく
内側から変化させ、動揺させるべき
中心を確(しか)と掴み
確固たる大地も震動させる。

「その他の強大なる要素も
この男の言葉次第じゃ。
そして今述べし理由により
力と効力を失せしめる。
要するに、その知識と魔術により
悉皆の秘密を探り、理解し
影響力をもつ辰星により
人々の運命や運勢がわかるのじゃ。(二)

「わしはこの予言者の魔力を
そなたにどう強調すればよいかわからない。
ただそなたの必要に応じて、
彼の甥として出来る限りのものを提供したい。
だが事が首尾よく運ぶために
わしらは今少し歩いて行こう。
今は暇な時期ゆえ
都合よく中に入ることが出来ようから。」

聴(やが)て我ら二人は立ち上がった。
私は馬の手綱をとり
狭く入り組んだ小道を通って
二人は足早に歩んだ。
小道を少しばかり行くと
陽の光と晴れ渡る空が
暗き大地を決して見たことのない
樹木の生い茂る森に着いた。

繁茂せる樹々の枝に覆われた
とある穿(うが)たれた巌の下に
細き道と狭き入り口が見えた。
その更に奥に、猛獣の頭で囲まれた
小さな戸口があった。
扉は広々と開け放たれていた。
頑丈な老人は私と手をとり
そこから勢よく入って行った。

一抹の不安を抱きつつも
その道を百歩ばかり進むと
われわれは大きな丸天井に着いた。
その中央には絶えず明りが灯っていた。
そして周囲には夫々
整然と置かれた腰かけ台があった。
上書きのある多数の瓶(びん)や
膏薬や薬草や種々の液体があった。(一)

われわれは其処に或る時或る星の下に
取り出された大山猫の
霊験灼(あらた)かな鋭い目と
毒を持つバシリスクの目を見た。
怒れる赤毛の男たちの血、
怒り狂った水から逃れ行く
犬の垂らす唾液の泡、加えて
年老いた双頭の毒蛇の皮を。

又、別の個所にても
堅固なハイエナの関節、
リビアの奥地の熱砂に育つ
毒蛇センクリスの脳味噌、
ハルピュイア(三)の翼の一部、
二つの形をしたアンビスバイナ(四)の胆汁
それに甘さに包み死に至らせる
エジプトコブラの尻尾。

埋葬されなかった人体の
胴より離れた頭蓋骨の黴(かび)、
自然な場所から取り出したものでない
未熟なる胎児の肉体、
またセラスタ(七)の関節の
外れた背骨、
噛まれた者は血の汗を流して死ぬという
毒蛇の硬き舌。

過剰なる自然が生み出せし
悉皆(しっかい)の奇異なる生物の体毛、
毒蛇の吐き出せし液体、
恐るべきヤクロ(八)の両の翼、
噛まれし者は人畜を問わず
忽ち革袋の如く膨れ上り
肉と骨は膿(のう)と化す
セップスの毒牙。

透明なる大きな器の中には
貫かれしグリュプス(七)の心臓があり、
東方にて生きる事に飽きわが身を焼く
フェニックスの灰もあった。
スキタラと云う名の蛇の膏薬。
更には荒海にて船の進路に逆らい
風にも拘らずそれを止める力を持つ
エチネイという名の魚もあった。

蠍(さそり)の頭も不足することなく、
死に至らしめる毒蛇、
蠍と龍の尻尾、
子を孕んだ鷲の石、(八)
腹を空かした鱶(ふか)の胃袋、
鞭打たれた女の月経と乳、
横根、ペスト、毒、自然が
生み出す一切の有害なるもの。

数多の薬品に魅了され乍ら
熱心にそれらを見て歩いていた時
とある片隅の扉より、私は
曲りし杖に身を支えた
衰弱せし一老人が現れるのを見た。
その男、大弓の矢も届かぬまま
坂道を走り去りし男であると
私に知られるや否や

こう言った、「かくも若輩ながら
わしの意志なしには何人(なんぴと)も来ざりし
わが隠れ家に到るとは
其方も並の大胆さではないな。
わしにははるばる此処に来さしめた
其方の意図の真面目さが分っておるので、
兼ねてより独りでは行うまいと思っていた事を
今回、其方と行いたい。」

わが穏やかなる同僚は
かくも無骨にして峻厳なる老人が
柔和になり扱い易くなったため
今こそ好機と考え、
私が彼に返答するのを心待ちに
愛想よく丁重に、先ずは
立ち止まって私を見た。
だが私の黙せる様を見て、彼に答えて

こう語った、「永久不変の道を外れ
その法則に従わずして其方(そなた)に従う
天上の秘密までも見抜き得る
偉大なるフィトンよ、
運命と冷酷なる宿命を
自由自在に覆(くつがえ)し、
自然の秩序を乱し
未来の事を予見し

「魔法の術と純粋なる知識により
虚にして硬き地面を突き崩す人よ、
其方は暗き王国に
天上の光明を齎(もたら)すことができ、
且つ又激しき呪文を以て
永遠の法則をも破る
絶大なる其方の力に怖え震える
地獄の人たちを苦しめることができる。

「其方はご存じであろう、この若者を
此処に至らしめたのは
インディアスの地に遍(あまね)く広まり
南極の地までも及ぶ其方の
驚嘆すべき名声に他ならぬ。
この若者は百千の危険を冒して戦の事や
此の地の血腥(なまぐさ)き破壊の様を賛えんとする
夢を追い求めたる者。

「彼はある夜引き篭って
その日の出来事を書き綴り居し時、
突然の夢の世界に引き込まれ、
ヨーロッパにて起りし全てを見た。
夢の中では又其方の隠れたる洞窟にて
物語を更に豊かにする筈の
記憶されるに応わしき不思議な事件が
知れるとの啓示を得た。

「更に又其方が彼に現在、
過去、そして未来の事ども、
戦の手柄や奇跡的な征服
珍らしき出来事や冒険、
大胆不敵の驚嘆すべき企て、
未だ書かれし事なき事を知らせるだろうと。
これを彼は切望しており
われらは其方の返答を待っている。」

魔術師は自分の名声が
広くそれらの地に轟くのを聞き喜んだ。
そして老顔を私の方に向け、
上から下まで隅なく眺めた。
遂に彼は白髪には応わしからぬ
力強い声で早口に
且つ荘重なる表情で
私に次の様に返答した。

「未だ到来せぬ事象を予言するは
道理に従えば禁じられたる事、
剰え宿命に反して
人の命を短めることながら、
其方が人の通わぬ廃道を通り
態々拙宅に来られたからには
其方を喜ばせたい、わしの甥が
通弁兼付添人として此処に来たほどに。」

こう言って、彼はゆっくりとした足どりで
洞窟の小さき扉より
私の手を引いて別の部屋に案内した。
そして更にもう一つの美しい部屋に。
その不思議な建てつけと飾りは
極めて入念にして高価なものにて
それを語り得る言葉を私は知らぬ。
またそれに勝る空想力もないだろう。

床は透明なる硝子の舗石が
整然と敷き詰められていた。
そしてその間に置かれた色つきの舗石が
仕上げを常ならぬものにしていた。
澄み切った無数の燦めく石の
星のある高い天井があり
そこから反射する様々な光が
大きな部屋全体を心地よくしていた。

周囲には百基の胸像が
黄金の台柱に載っていた。
生き生きとした姿に彫られていて
耳の聞こえぬ者なら話していると思うだろう。
それらに混って勲功を表わす場面が
広大な壁面を飾り、
そこでは文武、徳目、自制の
見事な見本が窺えた。

半マイル四方は有ろうという
この広大な部屋の中央に
表面が光り輝く一つの
奇跡的なる巨大な球体があった。
素晴らしき技術と業により、
宙に浮かんでいた。
その中心部には巨大な輪と
内部の機構が載っているようであった。

壁面や床や天井の素晴らしさと
様々な彫刻を眺め、
数々の名画に貪欲は目を
しばし満足させた後
その魔術師は私を右側の球体へと導き、
そこから顔を像の方に向け
曲った杖で指し示しながら
私に次の様に教え始めた。

「息子よ、よいか、これらの人々は
大方この世を去った人たちじゃ。
彼らは立てた大手柄により
その名声が永久に称えられよう。
その中の何人かは賤しき身分の出ながら
高邁な行為により高められ、
好運により月の角の
いと高き所に置かれたのじゃ。

「偖、其方の見る球体は、そもそも
世界の構造を一際縮小したる物にて
これを作るは骨の折れる仕事じゃった。
わしは四十年の歳月を研究に要した。
だが長き時代に亘り未来の事についても
不動の宿命の秘められし仕組についても
わしに明白ならざるものなく
ここにその証拠も示さぬものはない。

「だが偖、其方の切望することは
戦に関して物を書く事じゃが
厳しき星の力により、其方は
この地でその素材を豊富に持つだろうから
わしは其方にこの球体と世界が内包する
若干の事柄を明かすに止めよう。
そして唯一つ、其方の企にとり重要なる
驚嘆すべき事のみをお見せしよう。

「つまりその、わがアラウコの地には
其方の意図する通りの素材が既にある。
其処では剣と防禦の鎖帷が
他の如何なる場所よりも繁く用いられている。
其方に不足しているのは、
物語を権威づけるべき海戦のみ。
されば、其方は陸と同様
海をも含めた戦の模様を書くがよい。

「其方は此処でそれを見るがよい。
定めしそれを見て目を疑うことであろう。
何せ過去において見られた事なく
未来においても見られ得ぬ驚くべき事じゃ。
そして大いなる地中海は
勝利の人たちにより安全が保たれ
敗北し破壊されし側は
その海軍力を失うであろう。

「それ故、わしの言葉に驚いてはならぬ。
又凄じき呪文の響きにも驚いてはならぬ。
注意深く熱心にしておれば
其方はここに未来の出現を見るのじゃ。
其方の見るものは全て、悉く
宿命の定めるところにして、
わしの確言する通り、其方は目撃者となり
真の記録者となることができるのじゃ。」

私は益々好奇心に駆られて
顔を透明なる球体に近づけた。
そして作られし世界をその中に見た。
それはわれらの世界そっくりであり
円い鏡に映し出されたように判然としていた。
顔を寄せるとはっきりと
内部に広々とした宮殿と
広大な空間が縮小されて見えた。

そしてその場所に荒れ狂う
アウソニオの海が見えた。
カエサル・アウグストゥスとマルクス・アントニウスの
対立に決着のついた所。
この様にして同様に
レパントとファボニオの側に
チュルチュラーレスの港の方に
槽刑船で充ちた広大な海が見えた。

だがそこに示された教皇と
フェリペ王とベネチア人の旗印を見て
私は直ぐさまそれらが開戦に突入すべく
整然と戦闘準備を整えた
異教徒のトルコ人とキリスト教徒の
艦隊であると知った。
尤も私にはそれらが動かず
絵に書いたものに過ぎぬ様に思えた。

だが魔術師フィトンは私に言った、「やがて
其方は不思議な海戦を見るであろう。
そこでは其方らのイスパニアの真価が
明白に示されることであろう。」
彼はやがて怒れる猛き仕草で
大きな球体を斜に或いは真直ぐに
杖で傷つけながら
胸の奥から嗄れた恐ろしい声を出して

こう言った、「(一)黄金のオルコよ、カンセルベロよ！
おお、低き地獄を支配する偉大なるプルトンよ！
おお、年老いし舟人、疲れしカロンよ！
そして汝、エスティヒアの沼とアベルノの湖よ！
永遠の地獄の王国とアケロンテ、
レテオ、コシト、フレヘトンテの湧き立つ湯に
今はの者を住まわせる
おお、汝、デモゴルゴンよ！

「かくも残忍に傷める魂を嘖(さいな)み
地獄の神々も蛇を頭髪に持つ
汝らの額を見て恐れをなす
汝ら、フリアイたちよ！
そしてわが強き言葉に促されたる
汝ら、ゴルゴンの姉妹たちよ！
未来の事ながら、此処に海戦の模様を
明白に見せさせ給え。

「そして汝、くすみて醜きヘカテよ、
我々に見せ給え、わが乞うものを。
これ、何様か、わが恐るべき声に
其方らがなかなか震え上がらぬとは。
よいか、向うの土地をば打ち崩し、
汝らの嫌う光にて汝らを痛めつけ、
そして絶対の力と新たなる権力にて
エレボの(二)定めをば破るぞ。」

彼がこう言い終えるや忽ち
海水は騒ぎ始め
乾燥した東北東の風を受けて
綱や広大な帆は張りつめ、
かの人たちは突然熱意を帯び
少しづつ動き始め、
このようにして全ての物が
その因果関係を発揮した。

驚異を感じ乍らも注意深く
そこにいた人々を眺めていると
私には各人の有する名前と職責とが
その額に書かれているのが見えた。
そして幼かりし頃に知り合った人々が
いまもその活力と瑞々しい齢を保ち
他の華やかな若者たちが既に白髪になって
いるのを見て私は大いに驚いた。

艫(やが)てのこと、基督教徒らは
開戦の印しに大砲を発射し、
磔刑の像を高く揚げて
一際(ひときわ)闘志を燃え上がらせた。
大いなる信仰と敬意を表して
全員が恭しくそれに挨拶を送った。
その下(もと)に両側に忠実なる
同盟者たちの武器があった。

此の時、様々な楽器の音と共に
絶えず近づきつつ彼らは歩いていた。
大小様々な旗が
高き艫(とも)で翩翻と翻っていた。
整然と編成された大小の隊が
武器を振り回していた。
周囲には青銅の火砲と
接舷除けの網を張ったガレー船があった。

だがかくも大いなる事柄を
今の私の月並みな調子で歌うのは相応しくない。
これには確かに新たなる気力と
更に雄弁なる舌と力強き声が必要。
さればこの事をば懸念し、敢えて
私は先を続けぬことにする。
次の新しき歌章にて、陛下、何卒
御好意と熱心なる耳を賜らんことを。

第二十四歌章

この歌章には大海戦、[1]トルコ艦隊の壊滅と敗北および
オチャリーの逃亡のみが含まれる。

偉大なるフェリペ陛下、
アウソニアの海の波間にて決せられし
世界的な大事件を、陛下の御厚情の下
わが声が歌うべき時がはや到来しました。
すなわち崩されしオットーマンの尊大さと
破滅せし彼の海上の勢力と
様々なる宿命、綾なす運勢と
血腥き破壊と生々(なまなま)しき死の模様を。

おお聖きミューズの神々よ、
この海上での戦いの開始と
運命的な遭遇において
一丸となりし人々について
事細かく述べるために、
その泉を開き、わが大胆無謀に対し
新たなる心と気力を、
都合よき文体と言語を与え給え。

編成されし大小の隊と
数多のガレー戦の模様、
多くの国の艦隊の連合、
大小様々な旗、
装備、軍需品、弾薬、
武器の警備の違い、
機械、装置、用具、隊員、家紋、装飾、
これらを誰か能く語り尽し得よう。

我は見た、クロアチア人、ダルマチア人、スラブ人、
ブルガリア人、アルバニア人、トランシルバニア人、
タルタル人、トラキア人、ギリシア人、マケドニア人、
トルコ人、リディア人、アルメニア人、ジョルジア人、
シリア人、アラビア人、リシア人、リカオニア人、
ヌミダ人、サラセン人、アフリカ人、
トルコの近衛兵、トルコ帝国の長官、隊長たち、
警官、高官、大御所たち。

同様に其処でイスパニア国民の
若さと凛々しさの華(はな)を見た。
イタリアとドイツの貴族の、
大胆にして勇ましき一団。
何(いず)れも希に見る豊かさで身を飾り
生気溢るる表情であった。
また艫(とも)の、檣頭(しょうとう)の、前檣の、
三角旗、小旗、細長の三角旗。

扨て、航行を続ける整然たる
二つの艦隊は宛(さなが)ら
次第に近づく二つの
生い茂る森のようであった。
磨き立てたる艦船は輝き
揺れる海面に照り映え
その鋭い光の反射は
遠目にも眩しかった。

わが艦隊の両側近くを
身軽なるフラガータ艦が走っていた。
その艦には一人の若者が立っていた。
外見は堂々として勇ましく
極めて高価な胴当てを着装し、
並々ならぬ威厳を有し、
その素質と容貌と武芸に於て
宛も運命の神か軍の神の子のようであった。

その体躯の堂々たる様に引かれ
誰あらんと思いつつ
注意して彼の態度や
様子、仕草、振舞いを眺めいる中
頑丈なる兜（かぶと）の前面に
血の色の地に金文字にて
国王カルロス五世の子、
ドン・フワンと刻まれたるを見た。

彼は絶えず騒々しき雑踏の中を
彼方此方と動いていた。
また彼の近くのフラガータ帆船には
老齢の秘書フワン・デ・ソトがいたが
老魔術師はその人物について、
万事信頼するに足る人にして
熟考し、経験と十分な能力を有する
熟練の士たる旨、私に告げた。

ドン・フワンはその時彼らを激励し
気力と勇気を以て事に当るべし、
勝利は必らずわれらの物と信じて
戦いと危険に臨むべしと訓示した。
そして恐怖心ゆえに困難であった事も
その偉大なる言葉は容易にし、
部下全員に戦う意欲と
熱意を燃え立たせた。

彼は次のように述べた、「おお勇士たちよ、
難攻不落の教会の壁よ、
時将に到れり。今日こそは
汝らの名を記憶にとどむべき日なり。
死力を尽くして武器をとり、船を漕げ。
而して汝らの手により斃るべき
これら背信の異教徒に対し
無敵の力と不可侵の信仰を示すべし。

「武装せる敵の真只中より
懐かしの祖国の我が家に
生きて帰らんと望む者は
自らの剣にて出口を求めねばならぬ。
されば各自は夫々己が神、己が国王、
己が生命のために戦うものと思え。
敵を死に至らしめぬ限り
他に命を保つべき術は無し。

「真に今日こそ汝らの勇気と剣に
世界の存亡は懸っている。
一切の栄光と目指す報いは
汝らの右手にあると知れ。
我らの運勢を急がせようではないか。
徒に遅らせるは我らの恥辱ぞ。
汝らは眼前の海にて
その望みを遂げ得るのだ。

「いざ勝利を目指せ。
我らを呼び招く好運を止めてはならぬ。
我らは名声をより確かなものとすべく
栄光を呼ぶ運命の道を辿ろう。
蛮人の高慢の鼻を
この一戦で打ち砕くのだ。
而して此の軍の高き響は
地上の津々浦々に広がるべし。

「見よ汝らを愛(いつく)しむが如く、
この海には栄光が用意されている。
神が此処に大軍勢を集め給いしは、
我らの足下に斃されんがため、
そして今日、東洋の総ての
屈せし項(うなじ)を我が首木につけ
オットマンの強力なる皇子や国王らを
我らが支配し、法を定めんためなり。

「我々は今日、彼らの敗北により
世界中に基督教の威信を築くのだ。
回教の誇りと勢いを砕くことを
我らの神は望み給う。
かかる神の御手の下で戦うからには
おお、快男児たちよ、何の恐れがあろう。
神の御手に支配されし汝らの劒に
誰が抗し得るであろうか。

「汝らに余の望む事はただ一つ
汝らのために十字架に止りし基督を信じ、
各国はその御方のために戦い
その御方の軍人に応わしき行為を示さむ事のみ。
各自は確固たる信念を抱き、
勝利か、さもなくば死かを覚悟せよ。
何故なら、勝利が賞に充ちた栄光なら、
神の為の死も、劣らず名誉あることなれば。

「然れば扨て、吾人はこの目的のため
戦いに於て危険と厳しさを覚悟せむ。
吾人は彼の背教の不信心なる者共より
神の掟を守るため此処に到りし者ぞ。
我々の歩むいとも正しき大義の道は
我々に勝利を確約している。
然(さ)れば余は既に天により約束されて
汝らに断言する。勝利は汝らのものなり。」

其処では凍てつく胸も忽ち
高邁(こうまい)なる情熱となって燃え
凍えし愚鈍なる手足から
恥ずべき恐れを払いのけた。
全員が高く右手をかざし、
彼に勝利か死かを約束した、
その時以来、もはや世界の束なす
敵対する力をも軽んじつつ。

その若き勇者ははや
確認された意志を称えつつ
宛(さなが)ら輝く彗星が慌だしく
濃密な大気を突き破るとき
しばし残す航跡のように
白波の航跡を作りながら
素早く海を横断し、
艦隊の中央を横切った。

彼はガレオン船の艦隊と乗組員を
素早く視察し終えるや
旗艦に戻り、陽気な兵士たちの
挨拶を受け、各自に
その部処を指示して
万事抜かりなく整えて
大砲の覆いを取り、準備が終ると
トルコの艦隊に向かって進行した。

彼の右手の艦隊には
広き地中海が永遠に
その名を記憶する
令名高きアンドレア・ドリア(一)の嗣子が、
そして左手の艦隊には
彼に劣らず壮麗なる
元老院の艦隊の調達人でベネチア人の
アグスティン・バルバリーゴ(二)がいた。

扨て偉大なるカルロス[四]の
御子に相応しき彼は
マルタとロメリーノの[五]ガレオン船隊が並ぶ
両翼の部隊を等しく整え、戦を指揮していた。
教皇とベネチアの艦を両側に配置し
こうして彼らは進んでいった。
長さ艫の巾広き櫂を
同じ速度で全力で漕ぎながら。

兵士と大砲を積んだ
六隻のガレアス船[六]が
二隻づつ並んで前を進み
やがて月形に隊形を編成した。
それに続いて全体の救助のための
三十隻のガレオン船が行ったが
そこにはサンタ・クルス候爵が
勇敢なる隊員と共にいた。

先に述べし状態にて
カトリック教徒の艦隊は
背教の軍を目指して進んでいた。
敵は風上の有利な位置にあったが
不意に風は吹き止み
波は鏡の如く凪ぎ、
好運は腕の力と巧さの
度合い如何に懸っていた。

右翼の、バルバリーゴと反対の側には
アレキサンドリアの副王シロコが[七]
当時ネグロポント[八]を支配していた
海賊にして大の巧者メメトベイを伴っていた。
背教者オチャリー[九]は息子のカラベイと共に
左翼に陣取っていた。
そして中央の狭まった艦隊の中に
司令長官のアリ将軍[一〇]がいた。

彼は厳しき宿命と
敗北の最後の時を認めながらも
慎重且つ大胆なる司令官に相応しく
旗艦の高き船尾より
外面を装ったものに過ぎなかったが
陽気で自信に満ちた表情にて
基督教徒の勢力を低く見、
手短かにこう語った。

「兵士諸君、言葉で諸君を
煽動する必要はないと思う。
すでに諸君の示す兆しにより
燃える闘志は明白である。
火の如きその情熱で以て
諸君の怒りと希望を表わすのだ。
いざ武器を取れ。我らの権利は
きょうの諸君の行為に在り。

「我らの目に運勢がかくも陽気に
且つ率直に現われたことは嘗(かつ)てない。
栄光と戦利品を背負いて早くも
我らの戸口より入らんとしている。
この長き戦いの労苦の最後を
諸君、飾ってほしい。
希望と勇気が爾来(じらい)常に来せし
貴重なる名声を確かなものにしてほしい。

「敵の艦隊は接近しつつあるが
外見や騒然たる音に動じてはならぬ。
そもそも動員されたる敵軍の
百千の王国より集められし兵たちは
運命の女神により一つの項(うなじ)に変えられたのだ。
我々は一撃の下にそれを切り落すのだ。
諸君はその手で唯の一日のうちに
偉大なる大君に世界君主国を捧げ得るのだ。

「彼方に見ゆる秩序なき兵士らは
勇気と数に於てわれに劣る。
彼らは我らが全世界の勝利者と
なることを妨げ、阻止しようとする。
武力がその有する力を示す如く、
かくも盲目的に諸君に身を委ねんと
到来するこの相応しからぬ所有者どもより
西洋の諸州や王国を召し上げるのだ。

「高慢なるその隊長は
齢(よわい)も能力も希少にして
分不相応にもその職につき
訓練も実戦の経験も持ち合わさぬ。
されば虚栄心強く、傲慢(ごうまん)で、
若さ故の無謀と手落ちにより
諸君の剣の厳しき勢に遇いて
地獄に落ちるべく兵士を寄越した。

「宿命がこの日の勝利の代価を
高く求めていると考えてはならぬ。
その恐るべき艦隊の殆んどは
ベネチアの高官の所有物であり
訓練も施されず、勤勉でもなく
常に贅沢(ぜい)と華美を旨とし
戦に耐える訓練によりも
歓楽に興味を抱く者たちぞ。

「又その他の騒々しき連中も
雑多の国民から成る粗暴且つ
野蛮なる悪党どもの固まりにして
彼らの中には団結心が皆無である。
剣の何たるやも知らざりし者共にして
戦闘が始まる以前に、
大砲の驚くべき轟音以前に
彼らの騒々しき声が破裂するであろう。

「だが諸君、無敵の男児たち、
厳しき武器と戦と
耐え難き苦難の中で育てられ
幾度となく認められし諸君、
最早恐るべき如何なる危険があろう。
又諸君に恐怖を抱かせるに十分なる
団結せし敵軍がいようか。
諸君の心胆を寒からしめる危険があろうか。

「余には早くも諸君の輝かしい活動による
負傷者や大勢の死者を見る気がする。
彼我の間に横たわる海水が増し
白髪が赤き血の色に染まるのを。
されば突撃し彼らを打破せよ
而して基督教の勢力をば
ガンジスからチリへ、北極から南極へ
一撃の下にわがものとせよ。」

この様にしてパシャーは限られし狭き所で
準備万端整えし兵士らを鼓舞し、
英雄的な企てと高邁なる行為の
目出度き首尾を確約していた。
だが秘めたる胸の奥底では
敵軍の大いなる決意を
すでに逆の兆候と考え、
事態は一層困難に思えていた。

丸腰にて帆柱の高き見張台にいた
徴用されし近衛兵が
其処から見えるガレオン船を
十分に確かめた後こう言った時は尚更だった。
「中央と右翼の船団と
その後に続く救助隊は
私の目に誤がなければ
西方の艦隊(一一)であります。」

パシャーはその信頼する基督教徒が
断言せし言葉を死に劣らず恐れた。
だが気力と豪胆ぶりを発揮して
胸中の苦悩を隠していた。
こうして彼は中央の艦隊に——
偶々戦闘の順番が当っていたのだが——
長く伸びた両翼に護られた
優位なる隊を直行せしめた。

厳確なる運命の示せし
戦いの時がすでに到来し、
同じ敵意と動きを見せる
互いの強力なる艦隊は出会い
時を同じくしてあらゆる個所より
砲弾が発射され、
その恐るべき大音響により
世界中が震えるかに見えた。

烈しい砲弾の吐き出す
煙と火と驚くべき大音響、
船首と折れた檣(ほばしら)との
激突と甚だしき損傷、
武器の立てる凄じき音、
様々な人声、叫び、掛け声、
すべては騒然と入り乱れて
凄(すさま)じい光景を作っていた。

蹂躙(じゅうりん)されしプリアモ(二二)の都市も
かほどに至る処で燃え続けはしなかったし
ギリシア人の剣の生々しき効き目も
火と煙に包まれて
海が燃え、地面が沈むのみか
高き空までも落ち来るかに見えた
トルコと基督教徒の艦隊の
響きほど強烈ではなかった。

威風堂々のドン・フワンは
波を蹴立てて進み来る
正面の敵の旗艦を認めるや
燃え立つ炎の真只中を突進する。
だがトルコの艦隊は勢いよく
彼を迎えに出で、両者は
烈しくぶつかり合い
装甲せる衝角(しょうかく)を打ち砕く。

互いの艦に釣竿がかかる寸前
十分なる武装をせし
トルコのガレオン船七隻が
犇き乍ら基督教徒の艦に襲いかかった。
だがそれに劣らぬ勢いで
教皇とベネチア人の艦船が
左右両側から
素早く援助に赴いた。

そこには第二の権威者として
教皇ピオ五世の将軍として
マルコ・アントニオ・コロナ(一三)が
威勢よき若者たちを連れていた。
その後を最も空いた道を通って
イスパニアと旗艦の守護者が
多数の異教徒の攻撃を突破して
救援に向かっていた。

ジェノアの旗艦に乗っていた
勇ましきパルマ王子(一四)は
逆巻き泡立つ海を裂いて
捕われし艦隊の真只中に突入する。
混乱と猛烈なる騒ぎと
濃い煙の黒雲が
私の凝らす視線を妨げたため
そこでは多くの人が見分けられなかった。

一方、モンス・デ・レニー[一五]は速かに
彼の船で襲撃し、退路を閉じた。
其処にかの勇猛なる
ウルビーノの皇太子[一六]が到着して陣取った。
彼は野蛮なる艦の勢に立ち向かい
希に見る気力と努力で
度胸と能力と勇敢さの
堂々たる証明を行った。

やがて等しき激しさと大胆さで
船は互いに接舷を目指し、
余りにも接近したため、互いに
立止ったまま剣を以て闘うことができた。
攻撃に向かう正面に
胸を狙う大砲が見えても
死は恐怖を抱かせるに十分でなく
危険も拒まれることはなかった。

かくて怒れる兵士たちは
その打撃を加えんものと集結し
宛然荒れ狂う嵐のように
弾丸を発射し高き腕を振り下ろした。
猛き武器を扱う時の
熱意と急ぎぶりは見物であった。
海は俄かに血で覆われ
斃れし兵士を呑み込んだ。

舳先から、艫から、両の舷側から
小止みなく互に攻め合い傷つけ合い、
海に落ちて溺れる者あり、
或る者は剣で或る者は砲火で、
悲運に見舞われた部署には
すぐ様次の者が後に続いた。
死も大砲の威力も
戦いの場を征圧するには十分でなかった。

敵船に飛び移らんとして
その途中、胸を貫かれし者、
不意をつき相手を傷つけんとして
勢いの余り海中に落ちる者、
野獣の如く大胆なる意図をもち
己が泳ぎと力を信じ
憎む敵と組み合い乍ら
荒波に身を投ずる者もいた。

この世の果てと全き荒廃、
夥しき人々の一瞬の死、
無数の大砲、臼砲、カルバリン砲を見て
震えなかった者がいたであろうか。
太陽もその明るい輝きを曇らせ
困惑せる血の色の顔で、
その日のあの破壊を見まいと
黒き雲間に身を隠した。

テシフォンとアレト(一七)を伴い
速かに動く車に乗った
血を呼ぶ猛きマルテが彼方此方を
怒りを露(あらわ)に動き回る。
或る時は武装した強腕を揺さぶり
或る時は盾を稲妻の如く打ち、
猛く勇ましき兵士たちに
燃える激怒を抱かせる。

銃を失い、素早く櫂の断片や
帆柱の破片に手をかける者、
混乱に乗じ漕囚の鎖を解き
その鎖や足枷(あしかせ)を奪う者、
壊れし長椅子、櫂の支え、手摺、
手桶、艙口、砲座、
金属製であれ、木製であれ、土器であれ、
そこにある物で投擲(とうてき)に適さぬ物はなかった。

彼らの投じる槍やその他の投擲物は
（硬き鋼に当って跳ね返ったが）
それらを体に受けた敵共を
血ぬられた波間に沈めていた。
彼らは逆運に屈する事なく
力と生命が共に失せるまで
止むを得ざる最後の時まで
冷たい海中で闘志を燃やしていた。

或る者は己が血を吸い戻して
今はの苦しみを味いつつ海面に浮かび
或る者は板や太綱を掴(つか)みながら
魂を失って釘づけになる。
或る者は最早(もはや)敵を殺めることができず
己より傷の浅い者に抱きつき
敵を殺しつつ死ぬことに満足して
強引に沈み行くに身を任せる。

この甚だしき騒乱と錯綜と
凄じき音声は筆舌に尽し難い。
槙肌(まいはだ)は燃え上る火に包まれて飛び
タール、樹脂、松脂は燃え
素早き焔は瀝青(れきせい)と共に燃え盛り
乾いた木材を舐め回して
凄じい炸裂音と火花と共に
増大し、天上の星を脅した。

或る者は残忍なる鉄と焔の
追跡を逃れんと海中に身を投じ、
すでに溺れかかりし者は
燃え盛る丸太にも抱き付き
この様にして逃れんとの一念から
如何なる空しき策にも縋(すが)り
身を焦がして海中に死し
或は焔の只中で窒息した。

多くの者が、今や死と戦いつつも
強力なる武器が跳ね返す
槍や投擲物(とうてきぶつ)を取り
既に疲れし両の腕を
頼りなき波に浮かべて振りながら
出遇う敵に対し
怒りと残されし僅かの力を籠めて
死に瀕(ひん)し乍らもその名誉を保っていた。

慌だしくも絶え間なき戦闘の
烈しさと荒々しい音は増大する。
海は八方から痛めつけられて
沸騰し、大勢の死体を吐き出す。
そして血塗られ、変質し、掻き回され、
宛(さなが)ら逆風に追い立てられたように
すべては濃き泡となって荒れ、
装甲されしガレオン船を急立(せきた)てる。

高き船尾の軍旗の脇に
名だたる隊員たちに囲まれ、
怒れる軍神よりも更に燃える
気高きドン・フワンの輝く姿があった。
彼は其処より四方に策を伝え
緊急な個所にはその都度救援の隊を派遣し
自ら全員に堂々の勝利と
海の王者の冠を約束した。

片やドン・ルイス・デ・レケセネス(一八)は
危険が彼を最も必要とする処にて
挑発し、奨励し、鼓舞し、煽動し、駆り立て
走り、立ち戻り、歩いている。
左へ右へ、艫へ、舳先へと
物資を調達し、策を講じ駆けつけ、命令し、
指令し、督促し、急がせ、誘い、催促して
高い評価と不朽の賞称を獲得した。

扨てプリエゴ伯爵ドン・フェルナンド[一九]、
勤勉、積極的、且つ慎重にして
あらゆる個所に駆けつけ
策無き処に策を見出した。
こうして基督教徒とトルコの側で
各自は名誉ある最後を探し求め、
敵を殺しつつ、敵の船中で
死なむと努めていた。

勢いの烈しさと慌だしさは物凄く、
宛らこの世の終りを見るようであった。
篠突く雨の如き凄じき砲弾は
明るい空と赤き海を覆った。
怒りは増大し、速やかにして
絶え間なき砲声は止み、
剣の音が遠く離れた海岸にも
響き亘っていた。

全般の救援に備えていた
サンタ・クルス候爵[二〇]は
戦闘の状況に鑑み
且つ彼我の状況の差異を見て
時を移さず、騒ぎと大音響の
真只中に突入し
勢い烈しく混乱と危険の
最も高い処に襲いかかった。

旗艦のガレー船が非常な執拗さで
敵軍に包囲され、更にもう一隻の
増援のための十分武装せる艦船が
襲いかかるべく勢いよく向うのを見て
彼は全速力で横様に発進し
旗艦の防禦についた。
そして迅速なる動きで
蛮人の獰猛なる意図を阻んだ。

軈て怒りを込め、止まらずに走り、
激しい戦闘の中を歩き回った。
突入し、脱出し、又戻っては救援した。
時には三人、四人を相手に耐えた。
此の日、激しい勢いの中で
示された堂々の剱と
トルコ人の血で増水した海のことを
誰が細かく述べ得ようか。

この時腹を立て焦立つドン・フワンは
彼我の血潮にまみれた
部下の兵士たちを叱咤して
遅々たる好運の女神を急かせた。
アリ・バシャも劣らず熱心に
勝利の華やかな報酬と名誉を
彼の部下に絶えず想起させつつ
督励に努めていた。

だがキリスト教徒の旗艦は
艦長の偉大なる勇気により敵に優り
両の腕と剣の力のみにて
厳しくトルコの旗艦に大きく突破口を開き、
そこより武装せる大勢の兵が
抗う敵兵を蹴散らしつつ
突撃、突撃、エスパニア、エスパニアと叫んで
嘗て無き騒音と勢いで犇きながら突入する。

トルコの軍は彼らの船が侵攻されるを見て
恐怖と危険に強いられて
我武者羅に奮起したため
基督教徒らは撃退された。
だが当初の勢いを倍加した
強力なるイスパニア軍は
相手の新たな攻撃を打ち破り
彼らを再度強引に

主檣まで追い詰め、其処にて
新たなる自信と共に顔と足を踏ん張り
戦闘を再開し、更なる凄じき
損害と野蛮なる殺戮を齎らす。
両翼からの援軍を攻撃し、
勝利か絶望的な死の
遅れを嘆かしめ、
疑わしき宿命を急がせる。

戦闘の舞台たる舳先に詰めかけた
夥しい数の負傷者は
しばしば途中立ち止まり
互いに他の者の妨げになった。
然れど医薬を施された彼らは
やがて再び戦闘に戻り
回復の兆の見えた
敵の勢力を抑えた。

他の側面に比して一際激しい
この大騒動と無謀なる行動に
ドン・ベルナルディーノ[二]が来援し
（視力よりも気力に恵まれていたが）
その途中、突然烈しく
強力な大砲により彼は倒され
その厳しい砲撃は
彼の進路と勇図を挫いた。

その打撃の強烈さたるや物凄く
どうとばかり倒れたるばかりか
頑丈なる胸当ても補強せし
試し済みの円盾も耐えることを得ず
かくて彼は遂に名誉ある死で以て
波乱の人生を穏やかにし
彼に対してイスパニアに於て
抜き放たれし千の刀を鞘に収めしめた。

此の時、有名なるマルタ騎士団の旗艦が
三方より襲撃を受け
積年の敵意と狂気じみた勢いで
全面から圧迫され攻め立てられた。
然れどかの大胆なる基督の騎士団の
周知の力と美徳により
異教徒の大軍に立ち向かう中で
次第に事態は好転した。

だがアルジェの副王は熟練の海賊、
それまで只管(ひたすら)観戦に回っていたが
元来十分詰まっていなかった
右翼の艦隊の間隔が開くのを見て
和睦をはからんとするよりも
寧ろ強烈にその方面から突入をはかり、
無数の異教徒を載(の)せし
三隻の艦船を再び投入した。

強国なる騎士たちは奮戦し
相手の衝(しょう)力と動きに耐えるが
遂に、陛下、気力よりも
夥しき人数が勝り、
侵入する非常な敵の勢力は
代償として一人も生かさず斬首し
洗礼受けし血の泡立つ流れは
荒れ狂う海に注がれた。

マルタのガレー船隊は
旗艦が烈しく侵攻されるを見て
猛き敵兵を軽んじつつ
開始された戦いを続け
基督教徒の殉教の執行人たる
異教徒の大軍目指して
怒りも新たに逸(はや)る心で
全速力で突進した。

兵士たちの感情と
復讐への渇きは高まり
トルコの軍を両側より襲って
残虐に傷つけながら侵攻し
斬くして復讐し勝利を収め、
彼らの名誉とガレー船を奪回するが
船の生存者は僅かに将軍と
四人の騎士のみであった。

マルコ・アントニオ・コローナは
敵の勢いと大胆さを軽蔑し、
名誉ある野望と不屈の精神を
等しく持って奮戦する。
扨てセバスティアンベニエロは[二二]
トルコの軍勢の蛮勇に立ち向かい
宜(むべ)なる憤怒を抱きつつ
ファマグスタにて受けし侮辱を雪(すす)いだ。

片やシチリアの旗艦も
ポルタウ・バシャの艦[二三]と交戦していた。
その艦は既に両側より
ガレー船に包囲されていた。
基督教徒たちの勇気は絶大にして
数における劣勢を補っていた。
戦闘を対等に展開するのみならず
海の戦ながら地位を有利に保っていた。

カルドーナ家の血を引くドン・フワン[二四]は
往時からの役目を果たし、
身を危険に曝(さら)して
豪気の程を示していた。
またバルセローナの勇猛なる国民は
刀を束まで突き刺して
敵兵を血祭りに上げ
すべての刀は蛮人の血に塗れていた。

扨て彼に劣らぬ気合いで
聡明なバルバリーゴは
努力が齎した希望と
勇気で以て闘っていた。
或る時はトルコの自信を失わせ
或る時は彼に向けて放たれし
怒りの矢を宙に止め、
死そのものと戦いながら。

サラセンの厳しさに
猛然と立ち向かった彼も
酷しき宿命と言うか、
天命に抗し得なかった。
その宿命の最期の時は至り
突然、放たれた矢は
露なる片方の目を傷つけ、
ややあって、彼は斃れた。

名だたる隊長がこのようにして
斃れた損失とそれを見た悲しみは大きかったが
勇猛きわまるベネチア市民たちの
大胆なる意図は毫も乱れず、
寧ろ憤怒の念を一際燃やし
当然の復讐に心は逸り
殺人者たちを痛く懲らしめ、
彼の死は十分に償われた。

ここにおいて戦闘は
右翼にて熾烈を極め
聡明にして抜け目なきフワン・アンドレアが
歴戦の経験を十分に生かしていた。
エクトル・エスピーノラも亦
左右の敵と戦い
烈しい合戦の中でリグリア人の
本領たる熟達ぶりを発揮していた。

戦闘は執拗にも
優に二時間は続いた。
だが彼我の優劣は決め難く
勝利の宣言も為されなかった。
その時勇敢なるドン・フワンは怒りに燃え
宿命の定かならぬを歎き
何の疑いもなく彼の運勢を
好転せしめ始めた。

この時基督教徒の剛勇により
烈しい勢いと騒音と共に
回教徒の勢いは制圧され
トルコの艦隊は完全に侵攻され
蛮人の軍旗は倒され
歓呼の声の中で
記念すべき勝利と栄光と共に
救世主の十字架が高々と掲(かか)げられた。

もはや乱れしトルコの兵士たちに
忽然(こつぜん)凍てつくような恐怖が走った。
彼らの腕はやおら鈍り
失神し力無く、
剣も心も屈して
惨めなる運勢に身を委ね
先にも述べたように
敵に大きく入口を開いた。

扨て左右の両翼では
血腥い勝利を利して
冷酷にも徹底的に
彼らの首を至る処で刎(はね)てゆく。
胸を裂かれて海中に身を投じる者や
鋭利な刃物を拒んで
火さえ慈悲深いものと考え
焔に身を任す者もいた。

狡猾なるオチャリーは
部下が基督の軍に亡され
艦隊の全てが鉄と火と水に
屈するのを見るや
針路を西にとった。
鉄よ火より辛うじて逃れたる
破壊された蛮人たちの残りの船は
その後を追って惨めな逃亡を企てた。

だがカルロスの子は
裏切りの改宗者の下劣なる意図を知り
勢い烈しく騒ぐ海を乗り越え
遮二無二攻め立て狩り立てる。
バサンの子とオリアの子も
彼に続いて風下に斜に発進し
ガレー船が一団となって
先廻りしようとする。

だが哀れなる彼奴、懸念せし通り
道は狭く海は広大なるを見て
近くの海岸に船首を向け
陸地に向けて凄じい勢いで突込んだ。
宛ら犇く蝗(いなご)の群が
さっとばかり飛び立つように
最も恐れる危険を遁れて
兵士らは荒れ狂う海水に飛び込む。

或る者は腕と肩と顔と胸で
巨大な逆波を掻き分けて進み、
或る者は深さも距離も考えずに
その場で泳ぎを学ぶ。
親類も親友もない。
父ですら愛しきわが子を見捨てる。
尊敬の心なき恐怖心は未だ嘗て
危機に際して友を有した例がない。

然(さ)れば彼らは他ならぬ恐怖心に鼓舞されて
とある砂漠に上陸し、早速
岩山や密生した木々の間を通って
力の限り走り去った。
こうして哀れな蛮人どもは
完全に崩壊し、
対等の武器や兵士を擁し乍ら
アウストリアの名声はオットマンを屈状させた。

約され目出度き首尾を見て
私は大いに喜んだ。
その時件(くだん)の魔術師は
撚じれたる丈夫な杖で
その球体を傷つけつつ
空気を掻き乱した。
すると忽然として大音響は止み
海は霧と暗い影に覆われて静まり返った。

軈(やが)てフィトンは和やかに語りかけ
私を連れて部屋の中を歩き回り
そこにある物を一つ一つ
詳しく説明してくれた。
だが長話が諸氏を煩わせるのを憚(はばか)り
仮令記憶されるに相応しい事なりとも
わが物語と無関係な事、些細な事は
一切(いっさい)割愛することにする。

ただ私が魔術師とグヮティコーロに
大いに満足を覚えて別れを告げ、
仲間たちに行方不明と思われていた
わが宿舎に遅蒔乍ら帰着した事のみ述べておこう。
さて、筆をわれらの物語に戻して、
――私は長い脇道に外れていたので――
われわれは其処に二週間滞在した
偽りの警戒心と空しい期待を抱いて。

だが所詮われわれは用心深き敵に関し
何ら知り得なかったのみか
その意図や心理も理解できなかったので
疑心暗鬼の状態であった。
この事に鑑(かんが)み、われわれは
戦を終えたいの一心から
彼らの言う危険な通路を
敢えて通りながら陸地から入って行った。

或る午後、日が西に傾く頃
多勢の人の住むとある盆地の到着した。
其処には耕された丘に囲まれて
大きな川が流れていた。
其処にあった平地は
適切な場所と思われたので
一行は大小の天幕を張って
隊を成して休泊した。

平原に一行が宿泊するや否や
不意に木の間より一人の
武装せる凛々(りり)しきアラウコ人が
ドン・ガルシーアの天幕を尋ねて現れた。
その蛮人は彼の居所に着くと
礼儀の片鱗だに見せずに
次のように言った・・・。だがここで一先(ひとま)ず
私の長々しい歌を終えるとしよう。

第二十五歌章

イスパニア軍はミジャラープエに陣地を設営する。カウポリカンの部下の一人のインディオが彼らを挑発にやって来る。両者は互いに激しく血腥い戦闘を展開するに至る。トゥカペルとレンゴが際立つ。またイスパニア軍がその日に示した勇猛ぶりについても語られる。

地上屈指の名高き勇者たちが
戦いを通じて辛うじて為し遂げし事を
航行不能の深海に囲まれ
他国の人々との交流なき
知られざる辺境の人々が
かくも容易(たやす)く為し得ようとは
評価され、記憶されるに
相応わしい事である。

詩客たちよ、軍の術を
見出せし者たちへの賛辞を止めよ。
また硬き鋼と金属を鍛えし
発明家もこれ以上称えてはならぬ。
アラウコの国の
辺境の住民も同様に
戦の手筈と訓練を積み、
われらは彼らに学ぶ程なれば。

隊の編成の方法、
戦闘の整然たる展開、
櫓(やぐら)の稜堡の築き方、
防禦物や濠や城壁、
塹壕(ざんごう)その他の考案物、
凡(あら)ゆる軍用品の作り方、
これらを彼らに教えたのは誰か。
全ては彼らの勇気と鍛練を示して余りある。

就中(なかんづく)称えらるべきは
戦における沈黙と従順。
賄賂(わいろ)も脅嚇(いかく)も暴力も
秘密を引き出すのに十分ではない。
彼らに関しては既に述べたように、
経験により明らかである。
乃(すなわ)ち策略によっても間諜によっても
我々は長い間情報を得られなかった。

彼らは突然大勢が
近隣の集落にて捕えられたが
揺るがぬ操(みさを)と断乎たる面構えで
拷問の酷しさに耐えた。
その様たるや甚だしく
我々は誤れる道を教えられた。
彼らの警戒心と我らの間違いが増大し
我らは大損害を蒙るところであった。

だがすでに述べし如く
我が軍が投宿するや否や
一人の凛々しき若者が現れ
隊長の宿舎の所在を尋ねた。
その蛮人、彼の所に着くや
無礼にも語調を上げ、
大勢の集れる所で
こう言い放った。

「おお、基督教徒の隊長殿、貴殿が
獲得されし肩書にて名誉を得んと望むなら
貴殿は栄えある運勢の下、
幸う好機に当地に来られた。
何故なら偉大なるカウポリカンは
評判高き貴殿の勇気を試さんと望み、
貴殿にさような美徳と力があるならば
一騎打ちにて戦いたいとの所望なれば。

「貴殿が若く、華やかなる貴族にて
軍の術に長じ、この地に在る軍の
隊長にして頭目たることは
周知の事なれば
彼は貴殿に有利と思う
武器の選択権を与え、
率直に、如何なる条件の例外をも設けず
その力と運を試したき所存。

さればアラウコの軍と戦う意志が
貴殿にありと解するが故
彼は貴殿にお知らせする、
この平原に夜明けと共に現れることを。
其処にて両者は決然と
平原の真只中にて取り組み合い
もしこの事に異論あらば
武力にて権利を争おう。

「もしも貴殿が闘いに勝たば
此の地は貴殿に従うであろう。
貴殿は尊敬も憐憫の念も抱くことなく
思いの通りの契約と条件で支配できよう。
而してもし貴殿が彼に敗れし時は
優れし身分に相応しく貴殿を自由にするだろう。
彼は勝利の名誉の他は
如何なる賞も栄光も念頭にない。

「今申すことが理解される時にのみ
貴殿は勇者としての名声を得、
太陽が燦々と輝く限り
貴殿の名は人々の記憶に残るであろう。
人々は言うであろう、
貴殿は勇ましく、立派に
偉大なるカウポリカンの
一対一の挑戦を受けて立ったと。

「以上が拙者来訪の目的である。
然れば貴殿は提案された条件での
挑戦を受諾するや否やを
自由なる意志により早急に決められたい。
危険は大にして明白なれど
拙者は貴殿が尊大なる気力の持ち主にして
遂には大胆にも貴殿の尊ぶ名誉と
拙者を遣わせし御方を満足させるものと信じる。」

ドン・ガルシーアは彼に答えて言う、
「余は喜んで闘いを受諾し、彼に確約する、
定められた時刻と場所に
安心して現れることができると。」
インディオは神妙に聞いていたが
欣然として彼に言った、「お誓い致す、
この大胆なる返答により貴殿は
永くその名声を保つことを。」

これにより、後は何も言わずに
彼は踵を返して帰途についた。
その高慢なる言葉には我々を
軽んじる気持が明白であった。
居合わせた者の中には彼の顔に
さりげなく我が方の人員と宿舎と
軍需品を調査せんとする
間諜の色ありと見た者もいた。

軈(やが)て夜の帳(とばり)が下り、われら
兵士たちは戦闘態勢についた。
右の手に槍を握り
眠気と重い武器に疲れを覚えつつ
星の数を数えていた。
われわれはかのインディオを
全面的に信用してはいなかった。
目的は索敵にありと思っていたからである。

長き夜もはや白み
星も色褪(いろあ)せて消えかかり
東に曙光が現れるや
その輝きを奪い去った。
草花は新鮮な香りを四方に放ち、
時ならぬ陰気なる暗黒により
単一の色になっていた
様々の色を取り戻した。

その時忽然として喚声と共に
整然たる蛮人の軍隊が
三つの部隊に分れて
あちこちに姿を見せた。
頑丈極まる兵士から成る
夫々の隊は急ぎ足で
秩序を保ちつつ進み、
わが方の狭い宿舎を包囲した。

騎馬兵たちは準備を整え
手綱を握って敵軍を待っていたが
来襲に先がけて突進し
左手の険(けわ)しい山腹の
敵の部隊に対して
激しい攻撃を加えた。
土塀も強力な城壁も
その猛攻に抗し得なかった。

だがその隊のやや前方で
指揮していたカウポリカンは
部下の処まで後退し、
忽ち槍を構えさせた。
足と腕をしっかりと保ち
鋭き金剛石の穂先で
相手の怒りと稀に見る攻撃を受け止め
敵に多大の損害を与えた。

或る者は翼も無いのに空に舞い
唖然としてその席を空ける。
或る者は足の裏をば天に向け
地面に肋骨を激突させる。
両膝を踏ん張って
地面を舐めるのを免れた者も
勇敢なる証拠は示したものの
この合戦で手痛き打撃を蒙った。

敵の攻撃は的を誤らず
我が方に命中した。
或る者は隊から隊へと横切り
或る者は胸で以て押し倒し、
全員が一瞬にして混り合って
最も接近せる白兵戦となった。
騒ぎと音は物凄く
驚くべきウルカヌスの鍛冶屋(一)を思わせた。

勇敢なる将軍カウポリカンは
槍が折れるや戦棍(せんこん)を掴(つか)み
右に左に振り回して
傷つけ、壊し、殺し、地面に倒す。
ベルソカーノを真近に見るや
歯を喰いしばり拳を握り締めて
怪力で打ち下ろせば
戦棍は面頬兜の頭部に滅込(めりこ)んだ。

彼に続いてもう一人、不運にも
近くに居りし男を斃した。
打ち砕き、切り裂き、
険しき道も踏み均らし
タンボなる名のヤナコーナには
宛ら鷹が小鳩に対する如く
近くの者の援助も空しく
両手で首を締めつける。

この争いに加わらんと
出会いを待ち望み居しベルナルとレウコトンは
互いに烈しく攻め合い
同じ怒りと力で振り下ろせば
兵に毅然と上げたる頭を傾け、
歯と軟骨を打ち鳴らし、
同時に互いに膝をつき
偶々挨拶する格好になった。

だが両者は互いに素早く立ち上がり
猛くも残忍なる闘いを始め、
或る時は足を、或る時は頭を目がけ、
或る時は兜を、或る時は盾を窪ませた。
このような状態は暫く続いたが
襲いかかる大勢の兵が
本意なくも両者を引き離したため
これ以上に至ることはなかった。

ドン・ミゲール、ドン・ペドロ・デ・アベンダーニョ、
ロドリゴ・デ・キローガ、アギーレ、アランダ、
コルテス、フワン・フフレーは危険を冒して
彼らの隊の重き安危を支える。
同様に戦果を挙げ大損失を与えるのは
レイノーソ、ペーニャ、コルドバ、ミランダ、
モンギーア、ラサルテ、ウリョーア、カスタニューダ、
ロンキーリョ、マルティン・ルイス、ガンボア、ペレーダ。

扨てドン・ルイス・デ・トレドは戦いつつ、
カランサ、アグワーヨ、スニガ、カスティーリョは
ディエゴ・カノ、ペレス、ロンキーリョと共に
インディオの隊の猛攻に耐える。
従兄弟同士のアルバラード・フワンとエルナンド、
ペドロ・デ・オルモス、パレーデス、カスティーリョは
血の代償を払いつつ
堂々とその足下に多くの兵を斃す。

中央の隊は右翼の隊の
苦戦の様を見て
速力を上げ
物凄い勢いで救助に向かう、
だが三つに分けられたわが軍が
懸命に迎え出る。
恐るべき大音響と激戦で
大地も縮む程であった。

注目すべき多大の死と
戦棍、投げ槍による一大衝突があった。
槍、長槍、柄のある武器が
無数の破片となって天に舞った。
双方同時に剣を抜き
更に怒れる者は素手にて、
互いに短剣を用いて
深く致命的な傷を与え合った。

猛者トゥカペルは独特の戦法で
力を発揮し、一兵士を殺したが
その巧妙なる打撃に満足せず
磨き上げし細身の剣を奪い
それを用いてギリェルモの胸を刺し、
返す刀で激しく切りつけ
二つの頭を兜ごと
胴体から遥か彼方に飛ばした。

易々と一撃の下にトルボを斃し
フワン・ヤナルーナに重傷を負わせ、
武装した頭が切れて
額から両肩に落ちた。(二)
槍を投げ、勇敢なピコールの
内蔵と命を体外に出させたが
この時不覚にも
十を越す剣により傷を負った。

異国の兵士たちが彼に襲いかかり、
鳴り響く攻撃の音と共に
宛ら猛獣の如く取り囲み
雑然たる多勢の中で彼を疲れさせた。
だが彼は大いなる侮蔑を示しつつ、
意気込む腕を睨みつけ
彼らを懲らしめずにはおかぬ
威力と豪胆さを印象づけた。

苦難と危険が増すほどに
怒りは更に増大し
困難が最大と思しき所に
栄光と名誉を得んとする。
彼は最も疑わしく最も危険、
最も不可能と思しき事を企て、
豪勇と不屈の気力で
不可能も可能にする。

最後にして最大の隊が
所期の目的で行軍を続け
整然と且つ足早に
長い丘の道を登っていた。
片や準備を整えたわが隊は
広大なる平地に完全な姿を現わし、
暫く注意して立ち止まり、
場所とわが兵の確認を行なった。

この隊の先頭には
若きガルバリーノがいた。
切断されし両の腕も露わに
未だ血塗られし体を伸ばし
端から端まで足早に歩き
全員の損害を代表して
効果的な身振りや理(ことわり)を以て
怒りを燃え立たせた。

彼は言った、「おお、勇者と云うに
相応しき兵士たちよ、
今日こそ好運の女神は
アラウコの存在と名誉を
其方らの手中に委ねたり。
勝利を確信せよ。
この騒乱と空しき仰々しさは全て
其方らの打ち負かしたる残りなるぞ。

「其方らのかくも望みし
この最後の戦では
もはや我らを妨げるものはない。
立ちたる槍も刃向かう剣もない。
見よ、敗者のために設けられたる
不名誉の死と悲しき生を。
今日勝者が生存者に断言する
苛酷極まりなき(さいな)嘖みを。

「もしそれこの合戦に敗れるなら
法は死に、自由は地に伏し、
残るは硬き首木に従う
戦に役立たぬ者のみ。
畜生どもと共に首木につき
土地を耕し培わねばならぬ。
屈辱この上なき仕事と
女たちの賤しき仕事につかねばならぬ。

「されば大丈夫(ますらお)たち、
不面目は永遠なりと心得よ。
そして勝利は常に其方らの
功績の全てを確保することを。
兵(つわもの)たちと、其方らには
常に幸運の齎(もたら)す勝利と、
かくも短き苦労によりも齎(もたら)される
大いなる賞と名誉を考えよ。

「立派な武者ぶりを発揮する者は
その手中に己が望むものを得るであろう。
我らの望みしすべてを
運勢が今日我らの為に要求する。
更に考えるべきは、敗者は
反逆者、裏切り者と宣せられること。
何故なら敵が裁くからには
罪無き正しき敗者は存在しないから。」

勇ましき蛮人はこのように
彼らの怒りと希望を駆り立てたため
従順なる部隊も
辛うじて秩序と遅れに耐え得た。
だが最後の合図を感じるや
一大決意と自信を以て
槍を構え、間隔を十分詰め、
勢いに任せて突進した。

矢の届く距離を超える広さの
むき出しの小石だらけの平原に
我が方の部隊も同様に
対決目指して一斉に発進した。
人間とは思えぬ仕草と言葉、
夫々の有する甚だしき怒りで
双方の部隊は互いに攻め立て合い
死体は累々と積み重なる。

槍は完全な形で長持ちせず
裂けて空中に飛び散り、
長々と伸びたる戦列は
互いに破壊し合い、
千差万別の死に様があった。
多くの者が火薬と武器に屈し
傷無くして死に至った。
又或る者は激戦で玉と散った。

湧き立つ如き慌だしさと類希なる怒りを以て
彼我の間に死闘が展開される。
何れ劣らぬ執拗さと
技と迫力の限りを尽くして。
平原全体が轟音を発し
大音響は天にも達した。
地面は死体の
濃い雨に覆われた。

怒りは沸騰し争いは増大し
小止みなき戦いは更に熾烈となり
夥(おびただ)しき死への道をば妨げる
鎖帷子(くさりかたびら)も上等の練り粉もなく、
死は強引に凄じき勢いで
致命的な傷口から
濃く黒い血で広い湖を作りつつ
全てを自らの姿に転換する。

傲慢なるレンゴは左側にて
絶えず戦闘を煽りながら
マタキートにてアンドレアより受けし
胸痛む侮辱に発奮して
嗄れ声と腕を上げ
左右から彼を取り巻く
敵の名を空しく叫びながら
戦場を遠近(おちこち)と徘徊(はいかい)する。

アンドレアも亦雌雄を決せんものと
彼を待ち受けていた。
だが両者が互に探し求めるものを
運命の女神は彼らから遠ざけていた。
このイタリア人の若者は
他の隊に属し、遠くで戦っていた、
合法的とはいえ、希に見る力で
残酷さを発揮しながら。

一撃の下にトゥルーロを斃し
厳しき切っ先でピノールを穿ち
テグワンの腕を削ぎ、遠方に
投げて砂上に転がす。
一刀の下にチャングレの首を刎ね、
ポンの胴体を真二つに截り、
ナルドを胸まで裂き、ブランコーロを
鶴のように一本足にする。

扨てここにオロンペーリョなる男、
死闘を繰り広げつつ現れた。
彼は甚だしき騒動と人声に駆けつけ
広大な原野が死者で覆われるのを見た。
其処に凛々しきジェノバ人を認めるや
戦棍を高く振り上げ凄じい形相で
爪先立ち、仁王立ちになって
宛ら人食い虎のように襲いかかった。

ジェノバ人は戦棍を
兜の高き前立てに受けた。
戦棍は全てを窪ませ
綿の詰め物を施したる錦の防具に食い込んだ。
イタリア人は昏睡状態となり
血を吐き、色を失い
両手を地面につき、
空の薄暗がりと稲妻を見た。

堂々たるその若者は正確さこそ劣れ
更に烈しい勢いで打撃えお加える。
若しもそれが斜にでなければ、二人の間の
この凄じい争いは終っていたであろう。
理性を失い盲目となったジェノバ人は
稍蹌踉めいたが回復し
慮外の素早さで立ち上がり
長い太刀を振り上げた。

そして怒りの限りと渾身の力で
その若者の上に振り下ろした。
若しも鉄で覆った棒に遮られなかったら
彼の体は左右に真二つに分かれたであろう。
彼は木の幹を藺草が雑草のように切った。
若し剱の刃先が曲がらなければ
傷の体の奥深くに及び
若者の命を奪ったことであろう。

アラウコ人は戦棍を失ったが
些かも気力は失わなかった。
寧ろ非常な速さで
その場にあった円盾を取り
時を移さずそれに腕を通し
負傷を物ともせず男らしく
一片の棒切れのみにて
過信せる敵を挑発する。

相手の頭を傷つけ片手で
軽々と器用に跳ねて
身を躱すとイタリア人の
刀は空を切った。
彼は今一度試したが結果は空しかった。
巧者のジェノバ人は避けると同時に
機敏に厳しく踏み込み
相手は別の盾で身を守る他はなかった。

怒りの籠る剣は
厳しく振り下ろされ
防禦の円盾を破って兜に達したので
頭部を防ぐことはできなかった。
剣の一撃は頭蓋までも達し
若者は一瞬呆然となった。
だが我に帰り、敵が真近にいるのを見て
すぐ様強き両の腕を掛けた。

猛き軍神(マルテ)をも切り刻まんと考えし程の
ジェノバの勇者、彼を確(しか)と掴んだが
期待は外れた。何せこの技においては
何びともこの巧者の右に出る者はなかった。
其処此処で二人は取組み合い
脚と膝を絡ませ
巧妙にして紛らわしい足払いで
互に相手の足を攻めた。

ドン・ガルシア・デ・メンドサも
手を拱(こまね)いてはいなかった。寧ろ元気者、
勤勉家として或る時は激しく戦い
或る時は兵士たちを激励した。
フワン・レモンも怠けてはいなかった。
同じ訓練を受けし
兵士として且つ慎重なる隊長として
其の場で職務を遂行していた。

サンティリャン、ドン・ペドロ・デ・ナバーラ、
アバロス、ビエスマ、カセレス、バスティーダ、
ガルダーメス、ドン・フランシスコ・ポンセ、ユアーラ、
敵に死を与え、己が命をば能く保つ。
糧秣(りょうまつ)係のベガ、主計係のセガーラは
一隊を彼方に退けその後に
ベラスケス、カブレラ、ベルドゥーゴ、ルイス、
リベーロスとリベーラが続く。

馳せ参じた大軍から判断して
もしドン・フェリペ、ドン・シモン、プラド、
ドン・フランシスコ・アリアス、パルド、アレグリーア、
バリオス、ディエゴ・デ・リラ、コロナード、
更にドン・フワン・デ・ピネダも加えて
勇敢に戦い
敵の軍を制すことがなければ
別な側にいた隊は苦戦を強いられた事であろう。

フロレンシオ・デ・エスキベール・イ・アルタミラーノ、
ビリャロエル、モラーン、ベルガーラ、ラゴ、
ゴドイ、ゴンサロ、エルナンデス、アンディカーノも亦
多大の損害を与えた。
ここに全ての人の名を挙げなかったのは
私の本意ではなく、罪はこの手にある。
彼らが其処で同時に為した事程に
多くの事を書き得ないのだから。

折しも別の南の中隊で
大音響が轟いた。
猛者レンゴが激昂し
気力と勇猛心に駆られて
どっとばかり戦場の奥深く突入し
自軍に引き返すことが出来ず
夥しい数の敵兵に囲まれ、
手痛い打撃を受けていたのである。

敵に包囲され乍らも
彼方此方に攻勢をかけ
その輪を遠ざけ
多くの者に損害を与えて懲らしめたが
身軽な軍勢は処々で
野獣に対するが如く、遠くから
投石、棒、戦棍などを投げて
彼を手ひどく痛めつけた。

或る者は武具も効なく
不随となり或る者は落命する。
露呈せる部分に打撃を受けた者は
潰れて変形する。
打撃の効果の少ない者も
腕を、脚を、関節を挫く。
潰れた頭に着けたままの壊れた鎧、兜の
何たる凄じさよ。

だが既に述べし如く
彼は戦って不屈の気力を示したが
敵軍は包囲の輪を狭めたので
逃れることは不可能であった。
懸命の努力で彼は耐えたが
所詮生身(なまみ)の感覚を持つ者、
激しく絶え間なき動きにより
力も気力も消え失せた。

既に片膝を地に突き
辛うじて身を支えていた。
血気に逸る兵どもは小隊を成して
意気もつかせぬ攻撃を加えた。
その時彼方の高い丘から
トゥカペールが駈けつけ、
手慣れた頑丈な戦棍を振い
辺りに広い空間を作った。

脚を痛めた猛牛が
早くも舌を垂らし
群衆に囲まれて唸り声を上げ
人々は各自その剣を試そうとする時
忽然として彼方に
別の名だたるハラマ牛が
項(うなじ)を硬(こわ)ばらせ、額を上げて現れ
並居る者どもを倒し蹴散らすように

包囲を狭めし大勢の真只中で
既に地面に片膝を突く
有名なるレンゴが
如何なる疑念をも抱かず戦い居りし時
その叫声にひかれて
残忍にして勇猛なるトゥカペーロが、
其のように振舞う彼を見て躊躇なく
援助のために犇めきを裂いた。

彼が五、六人を地面に倒し
かくて狭き乍らも場所を開けると
敵の兵は円型に散らばり
疲れたレンゴにも俊巡(しゅんじゅん)した。
トゥカペールに対しては勇敢に
武器と叫びを浴びせたが
彼は甚だ巧に応戦し
彼らを十分に遠ざけることができた。

彼はレンゴに近づいて言った、
「敵ながら頑張り給え、レンゴ、元気を出せ、
無双のトゥカペールが付いておる、
然れば貴殿は不運に遇うことなし。
好もしき天命と友なる宿命により
貴殿には最良の死が控えている。
若しも機会が到来し挑戦を果さば
拙者の腕にそれは託されているのだから。」

レンゴは彼に答えた、「かかる大事の時、
恩知らずなら貴殿に対し
将又(はたまた)拙者の義務に対し履行したであろう。
何せ拙者は貴殿の思う程には疲れてはおらぬ。」
この時宛(さなが)ら十時間以上も
寝床にて休んだかの如く立ち上がり
這しい肉体と高々と振り上げた戦棍で
わが方の兵士を襲った。

トゥカペールは答えて、「貴殿の弱みを見、
有利なる時を利して力の限り
貴殿を攻めるは賤しき事、
下劣なる男の所行であろう。
貴殿はその力と堅固さを発揮されよ。
今日貴殿に此処で明確に生を与えたが
此の鉄の棍棒が相応しき刑と死を
貴殿の与える時が来ようから。」

両者はそれ以上は語らず、
アラウコの両雄は
親し気に相伴って宛ら
兄弟の如く歩み
互に相手を援護した。
かくて、甲斐甲斐しく速かな手で
敵の隊を堂々と分断し
己が陣営に辿り着いた。

この時、戦闘は凡ゆる所で
熾烈に且つ残虐に展開していた。
その激しさたるや凄じく
傷つかぬ者も働らかぬ武器も皆無であった。
細い鎖の網が地面を覆い
彼方のトゥルシアの洞窟では
強風に遮られつつ
荒々しい語調が響いていた。

彼我の騒めきと
慌だしき打撃の勢いは
宛ら南東の熱風か西風が
突如として石を飛ばし
木立の枝葉を捥ぎ取り
壁と天井と屋根を
凄まじき勢いで襲うときの
風を孕む暗雲のようであった。

このようにして更に烈しく
彼我の勢力は殺人の武器を振い
厳しく深き傷口から
血塗られた体の血潮は失せた。
大音響と異常な叫声が
近くの山々に反響していた。
海はその轟音に困惑して
膨れた波を引くのを止めた。

だが最初に戦の始まった
左翼の部分では
カウポリカンが勇敢に
厳しい宿命の勢いと
基督教徒の部隊に力を尽して対抗し
基督教徒の軍は敵の堅固さに押され
山麓（さんろく）の茂みの方に
徐々に退却を開始した。

この時の慌だしさと蛮人の
強烈な勢いは甚だしく、
アラウコの軍は響く大声で
勝利を宣言した。
だが戯れ好きな運命の女神は
有利なる者を不利にすべく
一瞬のうちに車輪を逆転し
宣言された好運を打ち消した。

最後の策と希望を託されていし
我が方の隊が
敵中深く突入し
手痛き損害と殺戮（さつりく）を行いしため
そこに居たオンゴルモの勇気も
強力なるリンコーャの気力も十分ではなく
又私もかくも多くの事を語るには不十分。
されば次の歌章に委ねざるを得ぬ。

第二十六歌章

この歌章では戦闘の終結とアラウコ人の退却が扱われる。ガルバリーノの執拗さと頑固さ並びに彼の死。同時に魔術師フィトンの庭と屋敷についても描写される。

何びとも無常の人生の終わりを見るまでは
自らを果報者と呼ぶことはできぬ。
又、港に投錨中でない船は
海の嵐を免れ得ない。
幸福が相次ぐことは極めて疑わしいが
不幸の連続は常に確かである。
幸運な時が永続した例(ためし)は嘗て無く
悲惨な時が永続を止めた例もない。

その良き例がここにある。
新たな歓喜と偽りの栄光が
如何にアラウコ人には儚(はかな)かりしかを
歴史は明確に吾人に示している。
すなわち基督教徒を打破したと考え
既に勝利を宣言したとき
運命の裏切りによって
結局敗者が勝者に転じたのである。

すなわち諸氏に述べし如く、
私を含めた最後尾の中隊は
次第に沈着に前進し
野蛮なる敵を退却せしめ、
先頭の強力なるリンコーヤが
逆運に必死の抵抗を試みたが
わが軍の勢いと怒りに
遂に抗うことはできなかった。

二つの小山の間にあった
樹木の繁茂する急なる崖道を
邪悪にして大胆不敵なる
野蛮なる悪党は面目を失いて
今や愚鈍にも恐怖に支配され
勇敢なりし胸を背向け、
早くも全員が明白なる死から
怒れる顔を背けた。

わが軍は尚も勢いを弛めることなく
勝利への道を突き進み
原始のままに人気もなく生い茂れる森に
秘め隠されたるものを模索する。
多大なる損害と死は止まることなく
茂みや踏み入り難い雑木林の
到る処を剣で突き或いは叩き、
破壊の荒々しき音を立てる。

広く円形に取り囲みつつ
狭い場所に獲物を追い詰め
もどかしげに
逃げ道を塞いで
獣たちに大小の
槍を浴びせる
勢子たちの追い立ても
斯程に周到ではなかった。

基督教徒なりし筈のわが兵は
正当なる限度を越えて
残虐なる武器と非道なる行為で
偉大なる勝利を曇らせた。すなわち
従順と奉仕の誓いも
両手を突いての降参も
魂を失った彼らには
刀の怒りを抑えるのに十分ではなかった。

かくて戦の残酷さに慣れた
わが悟性と筆も
この日父祖の地を衛る人たちの
蒙りし大損害に顔を背ける。
赤き血はすでに小川となり
山峡を通って流れていた。
屈服せし惨めな蛮人たちの
嘆きや呻き声の憐れさよ。

自軍の主力部隊の潰滅を見し
左手に控えたる兵士たちは
気力の総てを失い、嘗て得た
土地と名誉を捨て去った。
こうして退却の喇叭は鳴り、
徐々にながら足並を揃え
旗を高く揚げつつ、
斜面を下って行った。

並外れたるレンゴの勇猛ぶりを
黙して過すことはできぬ。
彼は部下の者が既に散り
惨めなる逃走を企てた時も
猛々しく、高慢に不屈の闘志を燃やし
わが身の危険をも顧みず
鉄張りの戦棍に勢いをつけ
単身、獲ち取りし場所を死守した。

而して無敵なる勇者として
長きに亘りそこで唯一人闘っていた。
だがその奮闘も効果なく
剰え味方の者の誰一人居ぬを見て
悠揚迫らぬ足どりで
時折後をば振り向きつつ
とある森の茂みに入るまで
右手の小道を辿って行った。

其処では既に遁走せし幾人かの兵士が
密かに恐れを抱いていたが
レンゴの到着するのを見て
俄に元気を取り戻し
新たな気力と自信ある表情にて
隊を編成し、結束して
力強い顔と胸を
厳しい運命の流れに向けた。

私はその辺を跋渉し
人声を近くに聞いていたが
森の中で聞こえた叫び声と
新たな甲高い音に
足を早め、声のする方に
急拠駆けつけ、
森の入り口に数名の顔見知りの
イスパニア人が立止っているのを見た。

片側にいたフワン・レモンが叫んでいた。
「貴殿たち入り給え、何も心配はない。」
だが彼らは危険を慮り
不安なる突入を憚っていた。
私はその時徒歩にてこれらの
分別ある人たちの屯する所に着いたが
フワン・レモンは逸早く私を認め
その場で公然と急立て

こう言った、「おお、ドン・アロンソ、
評価を得、優位に立たんとする御仁、
貴殿が際立つ名誉を得る時は今ぞ。
今こそその絶好の機会ぞ。
インディオどもが降参せんとする
この茂みが貴殿の好運を妨げざらんことを。
防禦も堅きこの入口を突破する人にこそ
勝利は帰せられるもの。」

知られたるわが名前を聞き
皆の者が私の方を振り向いたため、
名誉心と羞恥心に強いられ
拒む口実を設け得ぬままに
森の茂みと最も恐れられた所を
危険を冒して私は突破し始めた。
後に続くはアリアス・パルド、マルドナード、
マンリーケ、ドン・シモンとコロナード。

彼らは懸命に
部厚き人垣を形成して
イスパニア人の武器に対抗する
頑強なるインディオたちを攻め立てた。
此の時早くも四方より
わが兵の騒ぎを聞いて大挙して馳せつけ
慌だしい勢いで血腥い
危険な戦を開始した。

破壊が再開され、
気力の最も劣る者も
困難極まる障碍に挑戦して
勝利の行方は不確実となった。
両の腕の激しい動きと
彼我の負傷の様子、
誰が誰の命を奪ったかを
書き記し得る人がいようか。

或る者は腹部を傷つけ
或る者は怒れる胸を穿ち貫く、
或る者は胴体と腿を分離し
或る者は手足が切断され垂れ下がっていた。
激しい打撃の音が森中に雷鳴の如く轟き、
両者の兵は互に肉迫し
中には我慢できずに
腕と拳と歯を用いて戦う者もいた。

だがそこで執拗にして
残虐なる戦いを決定づける死は
勝者に味方してこの
大いなる戦に決着をつけた。
アラウコの兵は僅かの間に
狭き場所にて潰滅し
イスパニア人の憎悪に屈するよりは
寧ろ鉄に命に屈せしめんとしたからである。

不屈の蛮人どもは
戦場に重なり合って斃れていた。
そして他の者どもは先刻も述べし如く
整然と退却した。
然ればはや我が方の兵士たちは
目に入る戦利品を手に入れ
多数の捕虜を引き連れて
われらの陣営の天幕に戻った。

これらの捕虜のうち
最も気慨のある勇者十二名が選ばれたが
彼らは高貴な徽章と衣服を纏い
一際優れた人物たることを示していた。
これらの者はその場にて
人々に脅威と恐怖を抱かしめんため
且つまた見せしめにせんとて
木の枝に吊り下げられた。

私は告げられし時刻に到着したが
残虐なる刑の宣告に同情し、
わが軍の所まで来し事に鑑み
彼らの一人を救おうとした。
だがその男はやがて胸当ての下に
隠していた両の腕を挙げ、
両手の無いことを示した。
その切り口はまだ完治していなかった。

件の人物は先の歌章で紹介した
ガルバリーノであった。
彼は見せしめと懲らしめのため
裁判で両手を切り落された。
だが相も変らぬ大胆さで
それまで秘めし敵意を表情に表し、
死を敬することも恐れることもなく
皆の者を凝視しつつこう語った。

「おお、今日の栄光に相応しからぬ
何たる不実者、嫌悪すべき者どもよ。
其方らの飽くなき喉を
この忌わしき拙者の血で潤(うるお)すがよい。
厳しくも変り易き宿命により
仮令アラウコ人の王制が倒れんとも
われらは死者とはなれど敗者とはならぬ。
われらの自由なる心は不屈なるぞ。

「われらが死を拒むと思うは間違い、
われらの希望はもはやその死に支えられている。
このおぞましき生をば永らえ居るは
更に大いなる復讐を遂げんがため。
若しもわれらの正当なる目的を達せざる時は
われらは剣に自信がある。
その剣は其方らに向けられ、吾人に生を
与え得る栄光をば其方らから奪うであろう。

「いざ、早く、何を待っておる。
拙者に不正なる報いを与えるのに何を躊躇する。
生よりも死が拙者には好もしい。
それにより債務の返済が出来るからだ。
だがもしこの重要にして望ましき事柄に
何らかの不快感と心痛ありとせば
そは此の歯と切断されし両の手にて
先に其方らを粉砕せざりし事。」

このようにして豪気なる蛮人は
大声にて、既に疲弊し
本意なくも長く続きし
不幸なる生の終りを切望した。
そして異教徒としての意図に固執し
わが方を誹謗し
名誉ある刀による名誉ある終焉（しゅうえん）と
惨めなる戦の終束を果たそうとした。

私は彼の横にいたが、その意図の
確固たる様と豪胆さを見て
若干の人の反対を押して、
既に生を嫌う人物にそれを与えようと努めた。
然れど結局、刑の執行人たちは
全員の安全のためと主張し
強引に私を却（しりぞ）け、かくて彼は
酋長らと共に裁きの庭に連行された。

其の場よりほど遠からぬ
山際のとある急坂で――その辺の
リンコーヤの盆地に一直線の
広々とした道が通っていた――
いとも場違いの荘重さで
侮辱と不正な処罰が行われ
多くの人の考えではあるべからざる
命（いのち）を以ての償いがなされた。

刑吏の不足のため――この仕事に
手慣れた者は一人もいなかった――
殆んどその日の方法が用いられた。
未だ嘗て行われた事のない殺し方であった。
すなわち夫々のインディオに
丈夫な綱が手渡され、
銘々樹木を選び、其処にて
自ら首を吊るよう命ぜられた。

歴戦の兵士たちが
鳴り響く攻撃の合図に
梯や槍や丸太を用いて
城壁をよじ登るその速さも
酋長たちが全員、軽々と
大木によじ登り瞬く間に
梢に達した速さには及ばなかった。
彼らは高い枝に宙吊りになった。

だが彼らの一人が自らの
軽率なる早まりと熱情にやや後悔し
はやわが基督の教えに帰依して、
戻って話をする許可を願い出た。
皆の者がそれを認めると
当惑気味の声と表情で
基督教徒らの心を感動させつつ
改悛の面持ちでこう語った。

「美徳の限りを内に秘めたる
勇敢にして不屈の味方たち、
実を申せば拙者は酋長にして
この土地の最も古き家来の子孫。
拙者には父も兄弟も親類もいない。
悉く(ことごと)戦の庭に果ててしまった。
然れば拙者で以て子孫は断絶。
それ故是非慈悲を賜りたい。

怒れる顔で彼を眺めていたガルバリーノが
突如として道に飛び出し
自国の言葉で、こう言って遮らなかったら、
彼は更に続けたであろう、「生地無し、
惨めな奴よ、輝く家系を
汚す者よ、其方は何故
束の間の死を愚かにも恐れ
かくも賤しくなったのか?

「不名誉なる裏切り者、変り易き信念の男よ、
其方は無様(ぶざま)な状態で生きる方が
強き男なら当然の死ぬことよりも
得策にして好運と考えるのか。
運命は逆なれど尚我慢できる、
何故なら苦難の果ては死なのだから。
されば屈辱的な手段を弄して
救いを求めんとするは愚なる事ぞ。」

言葉が終るや否や
気高き酋長は後悔し、
首に滑らかなる綱をかけ
高い枝から宙吊りになった。
彼に続いて勇敢なる蛮人は
死にさえも屈せず、
この事の証人たる樫の大木は
その年珍しき果実を結んだ。

今も述べし如く勝利を収め、
そして敗れた敵が退散するや
われわれは蛮人の遺体の散乱する
不幸なる宿命を後にし
何の不運も妨害もなく坂を下り
嘗てバルティビアが要塞を築き
不名誉なる死を蒙りし
不運なる場所に到着した。

われわれは屋敷を取り囲む
塀を短期間のうちに築き
荷物やその他の品々を
安全に保った。
そして其処から周囲の服(まつろ)はぬ者たちの地を
妨害される事なく襲うことができた、
常に血を見る事なく服従せしめんと
願い努力しながら。

或る朝まだき、私は
蛮人の兵士が居るとの
確かな知らせを受け、
隊員を少し後に残して
土地の巡回に出かけた時、
茂れる森と小高い丘の近くにて
「何処へお行きじゃ、出口は無いぞ」
と言う老人の声を聞いた。

私は振り向き、手綱をば
奇妙な声のした方に向けた。
そこに魔術師フィトンが
蝕(むしば)まれし樫の大木に寄りかかり
金属を貼った杖に凭(もた)れているのが見えた。
彼だと分るや、私は
軽やかに馬から降りて
陽気に礼儀正しく挨拶した。

彼は私に言った、「確かにわしは
其方にも又、外におる其方の側の人たちにも
十分なる復讐をしようと思えば出来たのじゃ。
何せ其方らはわしらに酷(ひど)い殺生をしたからのう。
じゃが仮にそれ以上の理由があろうとも
其方はこのわしを痛く信じてくれているので
其方を殺めたりはしたくない。それは正しくないことだ。
寧ろわしは其方を助けたい。

「この不屈の人たちが罰を受け
且つ神に対し横暴さを示す以前に
敵によりその尊大の出鼻を挫かれるは
天の命じるところじゃ。
また其方の好運がいま如何に募ろうとも
長くは続くまい。何故なら、
他の人に対してと同様、苛酷なる宿命が
其方から差し引くからじゃ。

「いま運命は望み通り
其の方に有利に働いてはいるが
結局、この戦からは唯ならぬ労苦と
僅かの利益しか得られぬであろう。
これ以上言うのはわしの仕事じゃないので、
わしは自分の家に引き篭りたい
何せこっち側にも人には見えぬが
戸口があるでのう。」

私はそのような彼を見、尚且つ
不吉な予言に接して驚嘆し
馬をば杉の木に繋いで
しばし彼に随行しようとした。
たっての願いが聞き容れられた。
案内人は老衰の身ながら、
私共は茂みと不思議な荒地を突き進み
山の麓に達した。

秘かに隠れたとある場所には
隙間も割れ目も無かったが
強力な撓じれた杖で
堅い岩肌を軽く叩くと
軈て恐ろしい響きと共に
狭い扉と暗い口が開いた。
私は髪を逆立てつつ彼に付いて
岩だらけの地面を足で探りつつ入って行った。

私どもは心と目の保養となる
とある美しい緑の牧場に出た。
広々とした四方形の中に
様々な碧玉や斑岩が市松模様を作る
未だ嘗て見たことのない美しい壁があり
夫々の市松模様の端には紫水晶があった。
杉の扉には何れも
百千の物語が刻まれていた。

魔術師が着くとそれは開き
私どもは広々とした庭に入った。
其処には天然と人工の物の総てが
一堂に集っている感じであった。
同じ形の木の葉が
美しい四角形又は円形を作り
清らかな池が中央に位置し
噴水が囁き声を上げて流れていた。

爛漫の春を届ける自然も
あの魔法の庭に見られた程には、
多くの花を贈りはしないし
多様な色彩も生み出さない。
新鮮にしていと心地よき匂い、
小鳥たちの調和のとれたメロディーが
理性も意志も感覚も
奪い去った。

若しフィトン老が頭で私に
合図を送り、呼ばなかったら
長い間呆然としていたため
私は自分の目的も道も忘れたことであろう。
彼は私の手をとり、
明るい石膏の円天井に導いた。
前回すでに来たことのある
奇蹟の球体のある部屋である。

私は球体を見たかったが魔術師の
許可なしには敢えて近寄らなかった。
だが私の気持を察した彼は
私を満足させようとして
手を握り、それに近寄せた。
そして彼自ら私に示し始めた。
恰も現実の真の姿であるかの如く
彼は世界を指し示した。

だが輝く巨大な林檎(りんご)の中で私の見た
一切を順序立てて述べるには
確かに新たなる歌章と
集中的な記憶力が必要である。
されば陛下、かくも夥しき事の総てを
語り尽すことはできませぬ故、
衰えた声を取り戻す間、
暫(しば)し此処にて筆を擱(お)くことをお許し下さい。

第二十七歌章

この歌章では風景や戦いで有名な多くの地方や山や都市について述べられると共にイスパニア人が如何にしてトゥカペルの盆地に要塞を築いたかについて、またドン・アロンソ・デ・エルシーリャが美しいグラウラと出遭った様について述べられる。

宜(むべ)なる理由により短きことは
常に万人に称えられる。
而して会話は短く気取り少なきほど
喜ばれるものである。
冗漫まる話はたとえ有益なる事でも
吾人を疲れしめ苛立たしめる。
こよなく美味なる食物も
多過ぎれば食傷するの理(ことわり)。

扨ても私はそうした危険に陥り、
長々しき話を後悔しているのだが、
如何にすれば迂回しつつ、しかも
味わいのある、耳に快きものになり得るのか。
楽しみを与えるのがわが望みとはいえ、
私はすでに窮地にある。
唯の一歩では多くは進めぬし、
小さな器には多くは盛れぬ。

私の歩みをもどかしく思はむ方は
慣れぬ道であることと、
飛脚も及ばぬ速さで
走っていること考えていただきたい。
出来得る限り、万事端折ることにしよう。
さて、本筋に立ち戻り、
先述の如く、魔術師のインディオは
手にてその球体を指し示した。

輝く球体の大きさは著しく
二十人を以てしても抱え切れぬ程であった。
そこには悉皆(しっかい)の物が判然と
且つ鮮明に見分けられた。
田園や都市が見え、
人々の行き交う様や雑踏や
鳥、動物、蜥蜴(とかげ)をはじめ
果ては微小なる昆虫さえも見えた。

魔術師は私に言った「さて、
此処にはわしらを邪魔立てするものは一切ない。
其方は宇宙の巨大な構造を
細大漏らさず見るであろう。
北から南、東から西にかけて在るもの、
海が帯び、空が抱く一切のもの、
川と山と、沼と
自然の美しさと戦で有名なる土地を。

「先ずはアジアの始まるトラキアの正面の
ボスポラス海峡に近きカルセドニアを見よ、
リディア、カリア、リシア、リカオニアを、
パンフィリア、ビティニア、ガラキアを。
またポント・エウヒニオの近くのパフラゴニアを、
平坦なるカパドキアとファルナキアを、
ペルシアの海に注ぐ有名にして水量豊かな
ユウフラテスの流れを。

「見よ広漠たる地中海を、
神々により奪い去られし約束の地を、
そしてガブリエルがマリアに使者を送りし
パレスティナは幸わうナザレを。
其方は聖なる形見とティトーにより
荒らされし都市の遺跡が見える筈、
その地にて生命の造り主が愚弄され
恥かしき死に追いやられたのじゃ。

「ヨーロッパとアフリカを隔てる
広漠たる地中海を見よ。
そして又反対側の先端にある
モーゼが杖にて海面を割りし紅海を。
見よオルムスの湾とペルシアの海を。
場所により判然とせぬ所もあるが
露なる部分に其方は二つのアラビア、
フェリックスと砂漠が見えるであろう。(一)

「ペルシアを見よ、そして西は
スシアナと境を接するカルマニアを。
そこでは上質の鉄の塊を溶かし
鍛えたる綱が作り出される。
ドランギアーナを、(二)インド洋や
東洋の市場に通ずるヘドロシア(三)を
そしてその同じ道を進めば
熱きアラコシーア(四)が見えるであろう。

「ガンジス川の内と外に
東に伸びるインドの広大な土地を見よ。
カタイとインドの海に建つ
カンタの都市が見えるであろう。
中国とモルッカと
東に広がる総ての海が、
昔は東洋の果であった
有名なタプロバーナ(五)が。

「トラピソンダ(六)に向って伸びる
イルカニアとヒタルタリア(七)とアルバニア人、
ペルシアに貢物を捧げその同盟者たる
その他の地方の小さき王国。
又半日形の狭い土地が
大海の総ての岸辺を占める
ゴルジア人(八)とも呼ばれるイベロ人の地。
貧しきコーカサス人の散在するのが見えよう。

「イベリアとアルバニアを囲み滔滔(とうとう)と
水音高きキルロの流れを見よ。
その頂が大地に君臨する
険しくも高きコーカサスの山。
イアソンが苦難を重ねて
黄金なす羊毛皮を探しに来た
メデアの島で名高き
コルコス王国を見よ。

「名にしおうタウリス(九)の都の故に
忘れ難き大いなるアルメニアを見よ。
その南には突然の天の怒りか稲妻のように
目にする総てを破壊せし
偉大なるタボルラン(一〇)の揮いる
ダッタンの為す術もなき勢いに
無残にも亡ぼされし
信仰厚く崇敬すべきソルタニア(一一)がある。

「エジプトとシリアを尻目に
メソポタミアを区切り
ペルシア湾まで流れゆく
ティグリスとエウフラテスを見よ。
湾曲せる海岸を回り南は
細長く東に広がる
カスピの海、又はヒルカノの海を抱く
パルティアとメディアを見よ。

「言葉の混乱を生みし
アッシリアとその有名なる都市を見よ。
その素晴らしき労作の城壁は
ニノの母セラミスの作りしもの。
其の地では慌だしき性急な死が
アレクサンドル(二一)の行く手に現れ
その隆盛の流れと運命と
命(いのち)の糸を断ったのじゃ。

「アフリカは南の方に広大な
プレスタージョン(二二)の王国を見よ。
選ばれしいと有名なるものの中
スケバがその建物と共に一際輝いて見える。
年に三度果物が取れ、
三度収穫があり緑が蘇(よみがえ)る。
その位置は南極より数えて
二十二度にある。

「ゴヒアとその聳える山々を見よ。
その雄大さは他の山々を凌ぐ。
山あいの道は雪のために白く
麓は巨大な土手をなす険しき岩肌と
生い茂る雑草と茨に覆われた
荒れ地に囲まれていて
熊、猪、獅子、虎、
豹、グリュプス、龍が棲んでいる。

「今日月(こんにち)の山(二四)と呼ばれる
これらの険しい岩山から
有名なナイルの源流が生れる。
そこから名も無き幾多の川が生じ
流れを撚じ曲げつつ遠ざかり
やがて一つの湖に集まる。
湖は甚だ広く、その襞なす波は
三つの地方の岸を打つ。

「すなわち東はゴルヒアとベゲメドロス、[一五]
そして西はダンバーヤ。
而してその側には多くの人の住む島があり
広大な一帯はすべて集落をなしている。
ここより有名なナイルが穏かに生れ
やがて大きさと力を得て
ゴヒアとアマーラ[一六]に向い、
両岸に遮られることなく広々と進み

「遂に両岸を狭め
岩だらけの流れとなる。
其処より喧噪を極めて
滝に注ぐのじゃ。
軈(やが)てより広く、厳粛(げんしゅく)に悠々と
法や習慣を異にする
三つの著名なる国を含む
メロエなる[一七]大きな島を縁(ふち)取る

「カイロを見よ。こは三つの都市と
広大なる一円に囲まれた
ドゥルティベアの王宮と
塔と庭園と建物を含んでいる。
ピラミッドと古代の異教徒の
虚栄を見よ。その出来栄えは
確かに豊かさの徴(しるし)ではあるが、
建造物と言うよりも狂気の産物である。

「荒廃し、乾き、燃えるリビアの
人気なき砂地を見よ。
野蛮なる色黒き人の住む
ガラマンタと[一八]暑苦しい集落を。
そしてガンブラがその流れにて潤す
好戦的な穴居人
すなわちマンディンゴ人、モニコンゴ人、
醜きサペ、ビアフラ、ヘロフォ、ギネオの人を。

「延々たるアフリカの海岸と、
ナイルの河口より
二つの海を相結ぶ海峡に至る
著名な港や町を見よ。
アポロニア[一九]、シルテス[二〇]、そして直ぐ
トリポル、チュニスの町と
更に名高きカルタゴの町の
遺跡が見えるであろう。

「肥沃にして豊饒なるシシリアを見よ。
その先のサルジニアとコルシカ、
そしてイタリアの海岸が西に向って
走る背徳の地。
見よ、高名にして優れたるナポリ、
長きに亘り堂々と
世界を牛耳り、その後
各国により蹂躙(じゅうりん)されしローマ。

「トスカナにてはシエナとフロレンシア、
そして海岸を南に残して
ボロニアとフェラーラと
島の都市の堂々たる姿を見よ。
パドゥア、マントゥア、カルモナ、プラセンシア、
ミラノ、パビアの街の公園。
そこは重要なる合戦にてカルロスが
フランスの王フランシスコを捕えし所。

「見よアレキサンドリアを、そしてリグリアに入りて
壮大なるジェノバとサオナを。
ピアモンテとサボイを横切り
レオン、トロサ、バヨーナ。
そして北西風に乗って
ボルドー、プティエル、オルレアン、パリ、ペローヌ、
フランドル、ブラバンテ、ゲルドレス、フリシア、オランダ、
イギリス、スコットランド、イベルニア、アイルランド。

「デンマーク、ダキア、そして
ダンディスコの凍てつく海のノルウェー、
海の周辺に要塞があり
其処からジーランドへ航行可能なる
ゴットランドと境を接するスエーデン。
太陽の軌道と黄道帯を逸脱せる
彼方のグリンランドを見よ。
其処は六ヶ月の夜と六ヶ月の昼がある。

「人の住む極限の地と考えられる
北方のモスクワ大公園を見よ。
その国境は片や
リフの山々[二一]がこれを画し
長いタナイス[二二]の源流から
イペルボリオの山[二三]と氷の海に至り
サルマキア[二四]とタルタニアと分ち
アウストロを通ってルシアに及ぶ。

「見よリボニア、プロシア、リトゥアニア、
サマゴシア、ポドリアそしてロシアを。
ポロニア、シレシアとエルマニア。
モラビア、ボヘミア、アウストリア、ハンガリー、
コルバシア、モルダビア、トランシルバニア、
バラキア、ブルガリア、エスクラボニア、
マケドニア、ギリシア、モレア、
カンディア、キプロス、ロダスとイウデア。

「西の方にイスパニアと
古く峻厳なるビスカーヤを見よ。
まことに其処より気高さは生まれ
われらの見る全ての地に広まったのじゃ。
雑草に取り囲まれたビスカーヤの都
ベルメオを見よ。港の上手には
その町よりも前に創られた
エルシーリャの広き壁がある。

「ブルゴスとパンプローナを見よ。
そして西に下って左手に
サラゴサ、バレンシア、バルセローナ、
レオンと右手のガリシア。
有名なリスボン。
悉皆(しっかい)の学問に優れたる
コインブラとサラマンカ。
そこでは降神術も教えられていた。

「バリャドリーを見よ。そは燃える焔となって
フェニックスの如く生れ変るだろう。
またはほぼ正面のメディナ・デル・カンポ。
そこで立つ市(いち)がその地を有名にしている。
セゴビアと名高き橋を見よ。
森とフォンフリーダを横切り
パルドとアランフェスに目を移せば
自然はあらゆる花と緑に充ちている。

「やや離れたる高き峠の麓に
未開墾の山地が見えるであろう。
荒れ果てた小石混りの土地だが
軈(やが)て人の住む所となろう。
其処にフランク族をサン・カンタンに倒し
勝ち誇る国王フェリペが
善悪の証(あかし)として
カトリックの勝利の記念碑を建てるであろう。

「そは華麗にして豪壮なる
比類なく有名な寺院となろう。
而してその寺院の構造は
彼の宗教的情熱と大いなる富を示し
測り知れぬ威厳と美しさを有する
永遠の記念すべき建物となろう。
偉大なる基督教徒にして
強力な力を長く保持せる国王の作品なのじゃ。

「次にマドリードを見よ。いと高き天が
此の地に幸運を齎(もた)らしてくれるのじゃ。
また黄金色のタホ河の畔の
堅固なる地に建つトレド、
更に進んでコルドバと
数多の首領の首に喉に刃物を突きつけ
憤りてグラナダを脅(おびやか)す
死神を見よ。

「見よセビリアを。数々の
素晴らしき寺院、建造物や住居、
人々の雑踏と遙かなるインディアスとの
商(あきな)いの規模の大きさ。
年に二隻の船が
金、銀、真珠、宝物を積んで入港し
更に二隻の商船が
人と弾と大砲を積んで出港する。

「かの有名なるヘラクレスが
好運に乗って駆け巡り
誇らし気に大理石にニヒル・ウルトラと記して
二本の柱を建てたカディスを見よ。
だが誉れ高きカトリック王フェルナンドは
記されしその言葉を破り
広大にして新しき世界に道を開いた。
彼は一つの世界に収まらぬ人物であった。

「大洋を下って
湿れる南と西の間の
カナリアの島々を見よ。
とりわけかのイエロの島に注目せよ。
何せ水不足のため自然の力を利用して
鳥も動物も人々も
木の葉より滲み出す
巧みな水盤の水を飲んでおるのじゃ。

「右側にポルトガルの占有する
テルセラスの諸島を見よ。
また南西に目を走らせれば
コロンブスの発見せし最初の島々がある。
嘗て見しこともなき異国の人の住む
それらの土地で名だたるものは
ロス・ルカーヌス、サン・フワン、ラ・ドミニカ、
サント・ドミンゴ、キューバ、そしてジャマイカ。

「ババハマの狭き水路を見よ。
またフロリダを西に辿り、
コルテスが少なからぬ費用と
苦難と生命の危険の下に
イスパニアの王冠と国益を
限りなく広げた
ヌエバ・エスパーニャに通じる
無益なる土地と撚れし海岸を見よ。

「ハリスコと
薬草で有名なミケチョアカンを見よ。
古きインディオの名を今も持つ
大勢の人の住む豊かなるメキシコ。
狭まりつつ南に延びる
人の住む山岳地帯。
二つの広大な海が両側から
その地帯を挟んでいる。

「パナマとノンブレ・デ・ティオスを見よ。
狭い領土を、激しく侵し水浸しにせんとする
二つの相対する海から
必死に守っているのだ。
カピラの険しき山並が見えるであろう。
カルタヘーナとサンタ・マルタ、
ベラ岬からはベネズエラの
湖と都に至る土地が見えるであろう。

「アルマとカリの広き土地と
境を接するボゴタとカルタマ、
ポパヤン、パスト、そして
熱き赤道の近くのキト。
彼方のプエルト・ビエーホを見よ。
そこは素晴らしき緑玉石の見つかりし所。
更にエウロ・ボルトゥルノ及びメディオディア[二五]の
通り道に広がる土地。

「鬱蒼(うっそう)たる山ゆえに
木材の豊富なグワヤキルを見よ。
最初の寄港地にして船舶の投錨する
トゥンベスとパイタの港。
ピウラ、ロサ、ラ・サルサと大山脈。
其処より数多の川が生じ下りて
天水を嘗て見た事なき
優に二千哩(マイル)の大地を灌漑する。

「熱帯の地に雪の降る
巨大なる山脈を見よ。
モホス、ブラカモス、そして野蛮なる
チャチャポーヤス人の住む土地。
戦(いくさ)において常に勇名を馳せ卓越せる
カハマルカとトゥルヒーリョ。
アウディエンシア[二六]と副王たちの館のありし
優れた都市レイエス。

「グワヌコとグゥマンガ、そして暖き
アレキーパとインカ皇帝と若き貴族の
居所たりし名だたる町
クスコの里程標。
常夏の熱帯地域を越えて
様々な野蛮で珍しき人の住む
南の山羊座の地方とそこにある
川や沼や谷や山。

「彼方のチュキアボーを見よ。
片方を南に深く伸ばし、
前方には豊かにして繁栄する
ポトシーの山がある。
其処には値打ちの高き銀が
大地に埋もれている。
鉱山の一キンタール[二七]の土の中の
二アローバ[二八]は上等の銀なのじゃ。

「あれに見えるはラ・プラタの村、
東側の、左手にある最後の村じゃ。
さて高き山脈を横切って
カルチャキー、ピルコマーヨ、トゥコマーノ[二九]、
フリエス人、ディアギータ人と
コメチンゴーネス人の住む岸辺、
そして大平原とガボト[三〇]の要塞に至る
実り易き遙かなる土地。

「海岸に戻り、見えるのは
アタカマに沿って走る丘陵と
荒れ果てた無人の浜、
鳥もいず、動物も草木もない。
大きな弓矢で有名な
優れたるインディオ、コパヤポ人を見よ。
コキンボ、マポーチョ、カウケン、
マウレ、イタタ、ビオビオの河川。

「見よペンコの都市と活気ある
自由にして強力なる土地アラウコを。
カニェーテ、インペリアルとその東方の
ビリャ・リカと活火山を。
バルディビア、オソルノ、湖と
更に有名な島々と海を。
そして海岸を真直ぐ南下して、
チロエー、コロナドスと海峡。

「其処を通ってマゼランは
部下と共に南の海に出で
帰途進路を西にとり
モルッカ目指して北西に進んだ。
正面に見えるはアカカとサブの島々、
彼が遂に戦死したマタン、
ブルネイ、ボホル、ヒロロ、テレナーテ、
マチアン、ムティール、バダン、ティドレ、マテ。

「隠れたるため殆んど見えぬ
散在する土地を見よ。
其処は決して覆いを取られた事なく
異人の足が一度も踏み入れた事もない。
それらの土地は常に隠され
神の許しがある迄、
雲に覆われていて
その秘密は更に増大するであろう。

「扨て地球の全表面の
真の姿を其方は見たが、
時が許せば天空の
他の球体の素晴さしさ、
宇宙の機構と調和、
辰星の有する力と影響、
様々な回転と動き、
自然の荒々しい流れを見せたいものじゃ。

「わしは其方を今少し
満足させ喜ばせたいとは思うのじゃが
日が傾いてから可成りの時が経ち、
剰え(あまつさ)其方の陣地は遠い。」
かくて魔術師は私に同伴し
広い道に案内した。
聽て私は彼方此方を探し歩く
わが方の兵士たちに出会った。

われわれは友軍が守備につく
正にその時、その場に着いた。
われわれはある時は穏やかに
ある時は脅しと罰により
時間をかけて、絶えず
近隣の村や集落を
徘徊しつつ
敵を鎮めんと努めた。

だがこの事に勤(いそ)しむだけでは
又約束や協定や様々な手段も十分ではなかった。
彼らは邪悪な意図と予測の下
益々強硬になっていた。
奥まった土地という
有利な地点を利用し、
熟慮と忠告に従い
その場所を死守することを決めていた。

予想される損害に備えわが軍は
不足する物質の補給をした。
肥沃な土地で豊作の年ではあったが
田畑は播種(はしゅ)の時期のため
ドン・ミゲル・デ・ベラスコとアベンダーニョは
最適の数名の者と共に
私も彼らを護衛し同伴して、
カウテンへの道を直行した。

危険を伴いつつもさしたる妨げ無く
われわれは境界を越えた。
而して予定されし適当な時刻に
恙(つつが)なくインペリアルの町に着いた。
其処では住民の一人一人に
愛想よく言葉をかけ
進んで食物を提供するのみならず
財産や生命までも提供するよう し向けた。

かくて陽気に戦いの気配もなく
パン、果物、様々の家畜を手に入れ
穏かだが懸念を抱くインディオの地を
われわれは速かに一周した。
やがてプレンの山並が見え、
途中の安全の確保のため
危険に備える護衛の兵士を
われわれは見た。

日は既に西に落ち
光は海中に沈み込んでいた。
疲労困憊のわが軍に
夜が安らぎを与えた。
だが払暁と共に、警戒して
積んだ荷物と家畜は
すべての隊に囲まれて
騒々しく進行を開始した。

私は茂みと渓谷を縫って
前列を進んでいた。
その時小走りに道を横切る
取り乱した一人の女が目に入った。
私は馬を急がせ女の跡を追った。
暫くして馬は女に追い付いたが、
この話の結末を知りたき人は
篤と次の歌章を読まれたい。

第二十八歌章

グラウラは不幸な身の上と彼女がやって来た理由を語る。アラウコ人はプレンの峡谷でイスパニア人を襲う。両者の間に激戦が展開される。敵は軍需品を略奪する。潰滅(かいめつ)するが喜々として引き揚げる。

自由に平穏なる生活を営む者は
尚一層慎重に生きるべきである。
なぜなら、危険を考えぬ者は
常に転落する恐れがあるからである。
われわれは幸運が非運に転じ
自由の身が苛酷なる抑圧に転じ
栄光の後に逆境の来るのを
幾度となく見たことがある。

運命の女神は気まぐれで当てにならない。
時たま友となることもあるが
家に不幸があり吾人を疲弊させるとき
戸口を幸福が叩いた例(ためし)はない。
されば幸福を襲はぬ不幸のなきことを
吾人は確かなことと知る故、
吾人はそれが来ざるよう、
来ても不幸の小さきよう切望する。

この種の経験を持つ私には
幸運には懸念すべき部分ありと思える。
楽しき時は束の間に過ぎ
悲しき時は死ぬまで続くのが常である。
この事の格好の例として
諸氏にも述べた通り茂みで追い付きし
衣服より推して由緒正しき筈の
この蛮人女性の話を聞き給え。

大柄で容姿の整える彼女は
明かるい額と美しい目
申し分無き鼻、紅き唇、
上質の珊瑚に象眼されたかの如き歯、
豊かに盛り上れる胸、
美しく品よき手と腕を露(あらわ)にし、
天性の優雅な仕ぐさが
美しさを更に引き立てていた。

危険な森にただ独り
何故に来たのかと、
その美貌と類稀なる上品さに
益々安心せし私は
彼女の抱く不安を取り去った。
彼女は鬼神をも宥める程の
優しさで嘆息をつき
事の次第を語り始めた。

「わたしは身の不幸を歎くべきか
死を受け容れられるよう
わたしに門戸を開いてくれる
宿命に感謝すべきなのかわかりません。
されど、鈍感なわたしの心を
かくも苦しめる不運な出来事を
もし貴方様がお知りになりたいのなら、
どうかわたしの話に耳をお貸し下さい。

「わたしはグラウラという者です。
命名高きフリソの血を継ぐ
善良な酋長キラリーラの娘として
豊かな財と乏しき運を以て悪い時に生まれました。
わたしは血筋と空しい美貌故に
多くの者に尊敬され仕えられました。
でも、ああ悲しや、貧しき農夫の
娘に生まれた方がどんなに良かったことか。

「わたしは父の生家で唯一人の相続人として
勝手気儘に暮らして参りました。
父はわたしを喜ばせることが
無上の幸せ(しあわ)と考えていました。
わたしの意志と命令は全て
侵すべからざる法律として守られ、
わたしにとって満足や喜びが
得難いときはなかったのです。

「さりながら軈(やが)て平穏の乱し屋たる
嫉妬深く横暴な愛はわざわざ
わが地と家にフレソラーノという
力持で豪気な若者を寄越しました。
わたしの不幸な父の従兄弟で
親類というより寧ろ友人のような人で
わたしもその人には気を許し
二人で分ち合わぬ物は無い程でした。

「父は愛する友として
彼を歓待するよう命じました。
わたしは愛想よく、大切に
彼を喜ばせようと努めました。
しかし彼は軈(やが)て心が堕落し
忠実さははや揺らいでいました。
友情を踏み躙(にじ)り、分別を失い
良からぬ道を駆け出したのです。

「彼のわたしに対する付き合い方が
それともわたしの不運のせいか、
恐らくこの方がわたしの美貌に狂ったというより
確かな事に思えるのですが
友人として、又親類としての扱いに
恩義を感ずる事もなく、考えもなしに
勝手にわたしを愛し始め、
思いを遂げる方策を探し始めたのです。

「わたしは彼が仕草や何気ない言葉で
苦しい心を表わすのを見て
彼の意図と良からぬ望みが
限度を越えていることを知りました。
しかしああ、わたしは自分の苦しみの中に
そのさもしき男の苦しみを見たのです。
わたしは遂に駄目になりました。
悪いことと知り乍ら悪いと云えないのですから。

「彼がわたしに偽りの目を注ぎ、
千度も歎息をつくのを見かけました。
また或る時はおずおずと
大胆な動機への入口を手探りするのを。
わたしは危険な機会を避け、
荘重に、正直な言葉で
(これは大胆さを抑える一番の方法でした)
彼の誤った妄想を突き崩しました。

「或る日わたしが彼の大胆な振舞いを恐れ
一人で自室にいましたとき
彼はわたしの前に跪き
すこぶる困惑した面持ちで
震えながら云いました、『おお、私のグラウラ、
今や理性も忍耐力も効き目がない。
この絶大な愛の力に耐え得る
最小限の力も私には残っていない。

『私が初めてここにやって来た
あの幸福な日に、愛は私を
この苦しくも不幸な命の果てに立たせた事を
其方はご存じであろう。
だが私は其方への愛のために死ぬる身、
其方のお役に立ち得るか否かを知りたい。
なぜなら、もしもそうなら、私にとって
それに勝る幸せは無いのだから。』

「如何なる非礼も暴力も
禅らぬ決意を彼に見て
わたしはさり気なく抜け出し
何の敬意も払うことなく
遠くよりわたしは彼に言った、『ああ悪しき人、
縁者ながら不実者の恩知らず、
伝来の親戚の掟と
誓いし友情の破壊者・・・。』

「突然の腹立たしさに思いつくまま
わたしはこのような言葉を口走りました。
その時不意に慌だたしく大音響と共に
基督教徒の兵士がわたし共を襲い
犇きながら突入し、
わたし共の家を取り囲みました。
フレソラーノはわたしの目の前で
当然のことながら抵抗すべく跳び出し、

「こう言いました、『おお寧猛にして
人間に対し残忍非道なる虎よ!
帰り給え、人殺しとなるのは止せ、
基督教徒らに勝手にさせてはならぬ、
帰り給え、其方を得られぬからには
私は此処で命を断ってみせよう。
仮令死はさ程名誉あるものでなくとも
少なくとも其方よりは情深いであろうから。』

「こうして彼は委細構わず
武装した人々の真只中に踊り込むと
軈(やが)て発射された一発の銃弾が
燃える露(あら)わな彼の胸を貫きました。
青ざめた顔と乱れる声で、斃(たお)れながら
こう言いました、『グラウラ、グラウラ、
最後の願いだ、この不幸な体を支えて疲れ果てた
わが心をあの世にて受け容れて欲しい。』

「騒ぎを聞きつけ父が駆けつけましたが
彼の武器はただ力と自信だけでした。
軈(やが)て父も烈しく大胆な敵の槍によって
脇腹に痛手を負い、
血の気を失った体は倒れ、死に至りました。
わたしはわが身の不運と不幸を見て
彼らよりも生気なく
裏木戸をくぐって外に出ました。

「わたしは心を乱して彼方此方を彷徨(さまよ)い
遂にとある山中に身を隠そうとしました。
そしてわたしを転落へと導いて止まぬ
運命に身を委ねたのです。
このようにして最早正気も道も失い
思い患い只管(ひたすら)、遠くへ行こうとしましたが
甚だしい懸念のため
如何に急いでも寸分も動かぬように思えました。

「しかし目前の危険と不幸を逃れても
増水で水びたしの道に行き着き
動けなくなることは
よくあることです。
こうのようにわたしは不幸にも
厚かましくも命を助かろうとして
一つの不幸から他の不幸へと向い、
結局より大きな危険と窮地に追い込まれたのです。

「偖、わたしは憐れにも
絶えず茨や棘や浜菱だらけの土地を
一歩一歩注意深く目を注ぎながら
彼方此方へ行っては又引き帰していました。
そしてと或る林を抜けたとき
二人の黒人が戦利品を担いでいるのが見えました。
彼らはわたしを見るや否や、
この憐れな獲物に飛びかかったのです。

「彼らはすぐ様わたくしの
衣服を身ぐるみ剥ぎ取りました。
衣服と命を失うことは
毫も悲しくはありません。
でも名誉と大切にしている貞操が
あわや失われるところでした。
わたしの歎き声の凄じさは
草木にまでも憐れみを抱かせる程でした。

「天はわたしに慈悲を垂れ、叫び声に
カリオランを差し向けてくれました。
彼は乱暴なる敵の
邪悪無礼の行為を見て
時を移さずその場に駆けつけ、警告しました。
『犬ども、野蛮人、裏切り者、
直ちにその娘を手放し給え、
さもなくば彼女共々命は無いぞ。』

「二人はいきり立って彼に飛びかかると
彼は持っていた弓に矢を番え
前面に飛び出た強気な男の
胸に矢を羽根まで沈め
巧に二歩下って
正確に狙いを定め
もう一人に二番矢を放つと
矢は蛮人の心臓に命中しました。

「男は斃れ、もう一人は重傷乍ら
猛然と犬のように彼に襲いかかりました。
黒人は大男で頑丈でした。
しかしカリオランは勇敢且つ周到で
格闘技にも長けていて
器用さと力を駆使して
男を両腕で高々と差し上げ
地面に仰向けに叩きつけました。

「彼は研ぎすませた短剣を抜き
刃物にて決着をつけんとばかり
露な腹部に、又脇に
血塗れの刃を三度突き刺すと
そこから魂は足早に抜け去り
こうしてカリオランは彼らの侮辱を懲らしめ
わたしの所に折目正しく近寄り
手間どった事の詫びを述べました。

「彼はそこで多くの理由を述べ、
（それは専らわたしへの愛の告白でした）
それ自体名誉の棄損であり悪い兆しでもある
噂となるのをわたしは恐れ
結局、人の噂を避けるため
且つ又あの時に受けた恩を
仇で返す振舞いはすまいと
彼をわたしの衛士として夫として迎えました。

「わたしたちは人々の駆けつけるのを恐れ
人跡もなく道らしきものの名残もない
生い茂る山中に踏み入り
長い間彷徨った挙げ句
日が西に傾く頃
ラウケンの畔に出ました。
折しも基督教徒の一隊が十名のインディオを
後手に縛り此方に向かっていました。

「彼らは忽ちわたしたちを認め、
不運は万事において付き纏ったのです、
犇きながら走り寄り
『待て、待て、止まれ、』と叫びますが
わたしの夫は自分の死よりも
わたしの不名誉を恐れて
彼が死を賭して敵を阻止する間に
森の中に隠れるようわたしに頼みました。

「軈てか弱き純心な一人の女性が
恐ろしい死と貴重な生を前にして、
懸念のため可成り混乱した
わたしを説得しました。
こうして臆病に、小心に、節操なく
本能的な衝動に屈し、
彼らの近づくのを見てわたしは急拠
茂った森の最も険しい所に入りました。

「そして密生した茨や雑草に囲まれた
木の幹の窪みに息を潜めて
生きた心地もせず、辛うじて
恐怖のために荒い息をつきつつ隠れました。
そこから軈て遠く近く、森に轟く
刀や槍や犇めく人々の
激しく戦うような
騒音を聞きました。

「聞えていたその騒音と叫喚は
徐々に鎮まり行くようでした。
その時、恐怖に凍てついていた血が
義務感に温められ、
わたしは危険と死と運命に
夫と共に直面しなかったことの
誤りや裏切りを考え、
自分に対し腹立たしくなりました。

「わたしはその場所を飛び出し
——そこに生き埋めになればよかった——
愚かにも彼を残して
岸辺に素早く走ってゆきました。
さり乍ら彼の足跡も彼を見つける方法も
ないまま独り佇むときの
わたしの気持が貴方にはお分りでしょう。
彼が捕(とら)われからも死からも逃れ得なかったのですから。

「わたしは最早恐れることなく、耳かさぬ
不当で残酷な空に向かって
『わたしのカリオラーノは何処!』と尋ねましたが
その声は空しく谺(こだま)するばかりでした。
わたしは或る時は茂みの中を、或る時は平地を
走りました。鋭い痛みが
体じゅうを絶えず激しく走り
休む暇を片時も与えませんでした。

「わたしの嘆きを申し上げることで
貴方を疲れさせわが身を惨めにしたくありません。
為す術(すべ)も自らを納得させる術も知らず
気も狂わんばかりに彼方此方を彷徨い、
何度も死を決意しました。
されどわたしの中で苦痛がかくも効き目なく
自らの命を奪うのに十分でないとは
余程鈍感で性悪なのでしょうか。

「逆境と疑念と戦いながら
甚だしい苦痛と混乱に見舞われても
苦痛によって命を断つことは不可能と知り、
わたしは遂に彼を捜すことに決めました。
まだ若し不運続きのため、わたしの名誉は
十分な保証なきゆえ
夜間に、遠くから、身を潜めて
敵地の方に回りました。

「あなた方はカウテンを
通って来た旨聞いていましたし
また帰りも是非もなくこの狭い
道の筈であることも知っていましたので
わたしは目立たぬ服装にしたかったのです。
と申しますのも大勢の中に仮装して
運命が私を引き離したあの人の
何らかの情報が得られると思ったからです。

「死は好もしいゆえ来ないとしても
更に大きな苦しみを受けるべく
今は捕われて他人の命令と意志に従う
このわたしに如何なる方策があるでしょう。
然したとえ残酷なる天がわたしに生きるよう望もうとも
所詮多大の苦しみに尽き果てるのは必定。
わたしのいまの状態は厳しいとは云え
何人(ぴと)も己が死の時を選ぶものではありません。」

悩める妙齢の美女が
その不幸な出来事をこのように話していた時
両側で待ち伏せていた
蛮人の大隊が
突然天に向って鬨(とき)の声を上げ
出口や通路を占拠し
このようにして恰(あたか)も雑草から生れ出るかの如く
インディオの数は増えていった。

一と月足らず前の勝ち戦で手に入れた
私のヤナコーナが直ちに馳せつけ
「旦那様(セニョール)、川に飛び込んで下さい。
お救いしますから。土地には詳しいのです。
山から下りて来る者どもに
抗おうと思うのは狂気の沙汰です、
おお、セニョール、私奴を信じて下さい、
命を賭けて貴方を逃して差上げます。」と言った。

その申し出でと好意に感謝し
若者の方を振り向くと
グラウラが夢中で突進するのが見えた。
「おお公正なる神様、わたしは何を見ているのでしょう
貴方はわたしの優しい夫なの。ああ愛しい人。
わたしの腕の中にいるのに信じられない。
これは一体どういう事、夢なの、それとも現実。
ああこれ程大きな幸福なんて本当じゃないわ。」

私はその出来事に呆然となり
グラウラの悲歎が幸福なる
結末となったのを見て
且つは喜び且つは感動した。
だが時は混乱のさ中であり限られていたため
礼を尽す暇もないまま、私は言った、
「友よ、さらばだ。私にできる事は
其方らを自由にすること。」

それ以上の申し出も約束もせず、
私は馬に拍車をかけて軽やかに立ち去った。
だがインディオらが如何に私を急き立てようとも
ここで先ず、陛下、私はお話しておきたい、
茂れる森の入口でグラウラが
生命の危険を恐れて
木の幹に隠れ戻りしとき
カリオンが私の最初の捕虜となった次第を。

聖なる陛下、私は
服(まつろ)はぬ敵を追い
ひねもす歩き続けた末
幾人かの友軍の兵と
捕えし十人の蛮人を連れ
自陣に帰ろうとする時、
平原の果ての山麓の
極く近くにカリオラーノを発見した。

恐怖のため羽根を生やして逃ると思い
直ぐ様彼を全員で追跡した。
だが彼は高慢にもわれらを侮り
弓を構えて立ち止まった。
フランシスコ・オソリオ・イ・アセベドが
射程に入るや、すでに腕に巻いていた
長いマントを取り去り
短剣を抜いて巧に彼を傷つけた。

その大胆なるアラウコの蛮人の
腕の冴えたるや瞠目に値し、
犇めくわが軍勢も
平原を一歩たりとも退かせ得なかった。
彼は彼方此方と飛び回り
或る時は体を躱し
或る時はマントと短剣で捌ね除け
打撃を悉く空しいものとした。

私はその戦いを見るに忍びず、
血気盛んの若者に好意を覚え
その真只中に躍り込んで言った、
「各々方、離れ給え。
勇敢なる若者を死なせてはならぬ。
彼は寧ろ賞讃に値する者、
さればそのようにして命を奪うは
勇気あるどころか卑劣なる行為である。」

皆の者はその行為が
如何に不名誉なるやを知り戦いを止めた。
唯インディオのみが止めなかった。
恰も生き延びる事が苦痛であるかのように。
遂に彼は礼儀に従って
足を止め、短剣を鞘に収め、
私の方を振り向いて言った、「わが命の
長短、其方と如何なる係りありや。

「さりながら其方の情ある所業、
人間味ある配慮には感謝致す。
情とはその意図のことなれど、思うに
非常且つ非人間的とも言い得よう、
何故なら惨めな一生を生きるべき者にとって
迅く逝くことは悪ではあり得ぬからだ。
されば某(それがし)を殺さぬことで其方は
残酷なる憐れみを示したことになる。

されど某(それがし)が其方より授(さず)りし生を
拒みおると云われぬためにも
わが憐れなる運命に屈して
其方に身を委ねるとしよう。」
こう言うや忽ち短剣を投げ出し
今まで御し難かりし男は従順になった。
爾来(じらい)、奴隷としてではなく友として
常に私と行動を共にした。

早くも戦闘は再開し、
大音響や人声が響き亘っていた。
或る者は群をなして彼方に走り
或る者は此方で救助を求めていた。
道は狭く、前にも後にも
動くことが出来ず、
軍需品、人の群、家畜が
通路を塞ぎ、阻んでいた。

プレンの道は真直ぐに
エスタードへの入口に通じている。
軈(やが)て長い間斜に進み
険しき山々に押し詰められ
甚だ狭く迫っているため
辛うじて二人が並んで通れる程である。
然も道に沿って流れる小川が
小道を更に狭めている。

かくてしばしば道の所々で
或る時は雑然と或る時は声を上げ
弓矢の嵐を避けながら
錯雑たる渦となって彼らは歩んだ、
脛当て、胸当て、兜を凹ませ
周囲に響き声を放つ
大石、槍、短槍、弓矢、投石器の烈しさには
焼きを入れた鉄の塊も十分ではなかった。

或る者は全身を打撲し
鞍に身を支え切れずに地面に倒れ、
或る者は蛙か蝦蟇のように打ちのめされ、
動こうにも動けず、
又或る者は四つ這いなり、或る者は疲労困憊し
身を引きずりつつ
旋風から守ってくれる防禦物が小道の凹みに
必死に逃げ込んだ。

何せ敵はこの狭間にて
人員と軍備を整え
わが軍の兵士に対し、
投石の数と坂道の点で優位に立っていた。
私は目撃者として確言できるが
投石の雨は素早くも激しく、
宛ら丘が砕けて
崩れ落ちるかのようであった。

恰も怒れる空が
稲妻と石と嵐を含んだ
濃い暗雲に閉ざされ
大地を沈め荒らそうとする時
飛翔中の鳥たちを殺し
人も家畜も野獣も
避難所を求めて
彼方此方を彷徨に走るが如く、

露にして烈しき嵐に
イスパニア人は余儀なく
甚だしい損傷を蒙り、至る所で
木蔭や岩の窪みを探す。
それらに守られ、稍回復すると
嘗ての高邁な美徳で以て
新たな力と希望を取り戻し
勝利と復讐を切望する。

而して其処より持前の敏捷さで
狙いを定め、彼らに
連発を開始し、
短時間に多数の敵を倒した。
早くも険しき坂道を
肉体と岩石が転り落ちていた。
その勢いたるやまことに凄じく
死して尚相手に損害を与えていた。

偖、このようにして
狭い場所にて両者が戦っている一方、
それに劣らぬ騒々しさで向うの隅でも
人声が響いていた。
インディオたちは著しく統制を失い
早くも軍需品や荷物の略奪を始めていた。
片や守備の兵士や要員にも
多大の損害と犠牲を出していた。

肉を、パンを、果物を、魚を持って
素早く高い山の頂に登る者
柳行李、或いは頭陀袋を担いで
何の苦もなく走り去る者もいた。
高所からも低所からも凡ゆる側から
宛ら夏場の鳩が
撒かれた殻粒に集るように
群衆は掠奪に馳せつける。

われらは結集せる大軍により
為す術もなく敗れ
私はわが軍の命の救いとなるべき
最後の手段を講じようと努めた。
かくて私は突如、塞がり混雑する
道の中央を突破して、
山の窪地に追い詰められた
十名許(ばか)りのいる処に辿り着いた。

彼らに双方の展開する
熾烈(しれつ)なる戦の模様を説明し
山頂を制圧すればわれらの
勝利は確実だと述べた。
何故ならこの土地の者は皆、
今や掠奪と山の高みを制したことで
陶酔状態にあり、されば彼らを打ち負かすには
驚かせるだけで十分であったから。

軈て十一人は全員、決死の覚悟で
共に隊伍を組み、各自は
鞍より高く腰を浮かせて
急坂に向けて馬を駆った。
そして険阻な屹立せる山の
長々しい尾根を通り
草木の生い茂れる
目指す山頂に到着した。

最早其処では役立たぬ故、
全員は一斉に馬を降りた。
馬は全身汗に塗(まみ)れ、動く能わず、
息も絶え絶えに喘いでいた。
われわれは時を移さず、妨害もなく
インディオの最も多くいる
聳(そそ)り立つ巨大な崖の上に
姿を現わした。

そして彼らを不意に
銃や石で攻め立てると
多数の兵士が一度に倒れ
突然の恐怖が一層効果を発揮した。
このようにして彼らは愚鈍にも狼狽し、
その大混乱より察するに
高地でも低地でも激戦の様を見て
彼らは天地が逆になったと感じた事であろう。

驕て自信に充ちた幾人かの兵が
われらの援助に駆けつけた。
彼らは手荒い報復を希い、
敵の損害と恐怖を増大させた。
敵は最早希望を失い
幾人かが退却を開始し、
衣服と生命を免れようとして
足早に逃走した。

彼方でも此方でも人々は
頭陀袋や包を背負って駆ける。
或る者は坂道の茂みに
家畜を引きづりつつ身を隠した。
或る者は空腹と邪な貪欲に駆られて
更に多くを持ち去らんと其処に留り
荷物と度を超えた強欲のため
十人以上が生命を失った。

こうして祭は終り、部分的には
掠奪を蒙ったが、勝ち誇るわれわれは
喇叭や太鼓の音も高らかに
勝利と名誉と宣揚しながら
その響きに歩調を合わせて
勇敢な守備兵と巧妙な斥候と共に
全員創痍の姿で陣営に着き
其処で大いなる歓迎を受けた。

蛮人たちは一斉に退却し、
険しい岩山や雑草の茂る山を通って
合戦での見事な掠奪に慰められ乍ら
大急ぎで立ち去った。
そして総大将の所には辿り着いたが
彼は無秩序と逸脱が
敵に勝利を齎(もたら)したことを知るや
幾人かに懲罰を与えた。

而してタルカマービダに
撃退されし軍の残りを集めたる後、
国事について相談すべく
国の主要なる人物を召集し
最も主要にして好都合なる事を
協議するや、彼らに対し
次の歌章を読む人には分る
全ての事を腹蔵なく述べた。

第二十九歌章

アラウコ人は新たに会議を開く。彼らは自らの家財を焼き払おうとする。トゥカペルがレンゴとの延引された試合の実現を求める。両者は競技場で勇敢に奮戦する。

おお、何という力よ、
おお、人の心を鼓舞して止まぬ愛国心よ、
そは是非もなく吾人をして
一切に優先せしめる。
如何なる危険も死も軽んぜしめ
国難に臨みては
父も子も妻をも捨て、
彼らに勝る身内として駆けつける。

この事の何よりの証拠は、
愛する祖国のために
自らの内臓に刃物を向けた
古人の功績により示されてきた。
マリウス、カシウス、フィロン、コドルス・アテニエンセ(一)、
レグルス、アヘシラウス、ウティセンセ(二)の
栄えある名誉は
著名なる文人の筆により広められた。

扨(さて)このアラウコ人らもその数に
入れる価値がある。祖国のために
多大の勇気と気力を示し
刃(やいば)に自ら喉を曝(さら)したからである。
又彼らの確固たる意志に関しては、
宿命の厳しさが
死力を尽くして襲っても
その気力には何の効果もない。

僅か三ヶ月の間に四度の重要な
合戦に敗れたにも拘らず
悲嘆に暮れる事も意気阻喪(そそう)もなく
先にも諸氏の聞きし如く
寧ろ大いなる勇気と堅固なる志操(しそう)を保ち
作戦の会議に於てはわが方に対する
新たな襲撃を提案した。だが
カウポリカンは指揮権を行使してこう言った。

「おお偉大にして有能なる元老の諸君、
今や勝利か死かを決める時である。
されば最後の手段として専ら
我らの勇ましき腕に託そうではないか。
我らを憩いに誘う家屋と衣服、
役立たぬ家財は焼き捨てよう。
死地に赴く我らにとり、それらは不要。
全ては勝利の後に取り戻すのだ。

「この事の持つ有用性を
弁(わきま)える事こそ必要である。
何故なら、名誉が未だ安住の地を持たぬのに
財産のみが安全にても詮方(せんかた)なし。
兵(つわもの)たる者は勝利に資する物以外の事に
心を用いるは理(ことわり)なきのみか
土地や家屋に執着すれば
燃える戦意を減じようというもの。

「されば、この厳しき戦に臨(のぞ)み
憩わんとする者は、先ず
名誉も財産も富も
敵より奪う他に無きものと思え。
音に聞く腕の力こそ
真の救いとなり友となるであろう。
何故なら斃すか斃されるしか
道はない筈なのだから。」

これを聞いた酋長たちは大方
恍乎(こうこ)として一言も発しなかった。
だが幾人かが当惑した様子で
眉を吊り上げ互に顔を見合わせ、
逸早く沈黙を破り
その事に関し暫く語り合い、
彼の言の正当性を認め、
個々の意見は斥(しりぞ)けられた。

かくて豪気なるオンゴルモは
このような時他の者に遅れまいと
呼びかけに大声で応じ、
直ちにそれを実行すべく申し出た。
プレンも同様の考えであった。
彼は何の仲介も取決めもなく只管自力で
祖国に確かな自由と平和が訪れるまで
町には帰らぬことを誓った。

リンコーヤとカニオマンゲも
遅れず大命に誓った。
彼らは凛々しく、意欲に充ちた人らしく
可能な以上の事を約束した。
レンゴとグワレモも
タルカグワン、レモレモ、オロンページョら
他の誇り高き酋長も前に進み出た。
コロコーロまでもが賛同した。

扨てわれらが此処に述べたる通り
これが決定され布告されると
落着き払って熱心に耳を傾け
沈黙を守っていたトゥカペーロは
騒ぎが静まり
重苦しい会議が終ると
起ち上がって割れんばかりの声を上げた——
彼は優しく話すことの出来ぬ男であった——。

彼は言った、「隊長の諸君、
将軍の提案は正当と思える故、
我輩は一番に賛成する。我輩の有する
一切の物を焼き払い破壊されよ。
その他の事、乃ち腕力に関しては
若し一ヶ月の間保持し得るなら
後になって最大にして最良の分け前を
存分に選べるものと思う。

「而して、かくも正当なる求めに
応じられぬさもしき者は、
祖国の敵となり
軍律を離れるがよい。
最早我が方としては
敗北を伴わぬ
如何なる策も協定もあり得ぬのだ。
この戦いは自由と富とを賭けしものぞ。

「されば我輩も亦、御身らの
誓いと意見に服従致す所存。
我輩が生来の名誉心に鼓舞され
新たなる大義と問題を動議する程に
且つその他の尤もな理由により
極めて混沌とせし時にとは見ゆれど
最早、どうしても
この一大事を放置する事はできぬ。

「諸氏も覚えておられよう、
レンゴと我輩は対決を延引しておる。
又彼の叔父とも試合を行ない
彼は絶望の余り死を選んだことを。
わが甚だしき不名誉と屈辱に鑑み、
加うるに不本意にも引き延ばされしため、
我輩はこれ以上の遅延を望まず
わが義務と望みを果たしたい。

「恐らくレンゴは皆の間で
栄光と名誉を博したことであろう。
何しろ我輩と闘技場に入るのだから。
然るに彼はこのように勿体ぶり、引き延しておる。
だが、機会ある毎に逃す我輩としては
かくも長き遅延に我慢ならず、
われらの闘いに決着をつけたい、
さもなくば我が信用は失われるから。

「扨てすでに思慮なき老人ペテゲレンは
気力無げな風情(ふぜい)にて
死の方が情ありと思いてか
大勢の中に死を求めて突進し
そのようにして巧に我輩から逃れおった。
あれは恐れ以外の何物でもない。
もし彼に栄光への野心ありせば
我輩の腕による死を望んだ筈だ。

「また用心深きレンゴも故意に
約束の不履行の口実となる
何らかの障碍か面子ある方法を探して
敵中深く入りこみ、
気力横溢(おういつ)の外見の下、
片腕を失うか麻痺させ
戦闘不能になることにより
我輩に挑戦した事で名誉を得んとしている。」

高ぶる蛮人がこのように話した時
怒れるレンゴは火を噴きながら
注意も待たず、前に進み出でて
こう言った、「闘いは直ぐにも望む所。
大言壮語する其方の声も顔も
拙者を恐れさせることはできぬ。
自惚れで空威張りに特有の
言葉ではなく武力が証明するであろう。」

若しも此の時カウポリカンが手際よく
時を移さず両者の間に介入し
その声で彼を引き止め
厳しく荘重に
狂気の無謀を窘(たしな)め
両者の強情を終らせ
トゥカペルの要求を認めなければ
トゥカペルは攻めかかったであろう。

偖、その日より四日の後に
試合の日時が定められ、
大喜びの民衆の間で
判じ難き結末について激論が生じ
衣服を賭ける者、家畜を賭ける者、
農地を賭ける者、穀物を賭ける者、
勝ちを望まぬ者の中には
用済みの女を賭ける者もいた。

不屈の二人の男が
武装して一騎打ちを為すべく
広々とした露わな平地の
広場が板で囲まれた。
全ての人に明白となるべく
又知らなかったとの苦情の無きよう
アラウコの言葉と彼らの習慣に従い
試合の条件を触れ口上で周知させた。

大勢が楽しみに待った
予定の日が夜明けと共に到来し
やがて騒々しい人の群が
柵を囲みはじめた。
その混雑ぶりは甚だしく
樹木も壁も窓も屋根も
そこより多少とも見える所は
悉く人で覆われていた。

燃え盛る太陽が徐々に
東方に姿を現わすや
片や精力的なトゥカペルが
賑やかに登場し、
片や劣らず誇らかに
熱狂的なレンゴが姿も凛々しく
同時に現れるのが見えた。
両者共に猛々しく、悠揚迫らぬ足どりであった。

この這(たくま)しき二人は
浮彫りを施せる二重の胸当て、
腿当て、腕当て、兜で身を飾り
足の甲までも武装していた。
鋼で強化されし戦棍、
鉄で出来た部厚き盾、
そして左側には各自、湾曲した
巾広の新月刀を備えていた。

さて陛下、競技場の両側には
矢来(やらい)の如き扉があり、
其処より二人の荒武者が
大きな円を描いて入場する。
華やかに且つ威儀を正して
二人はその歩みを止め
柵に囲まれた大広場の
夫々の側に待機した。

立会い人がその職権を行使して
かかる機会に肝要なる
一切の疑問や不公平の兆しや
過剰な準備を排除させた。
間もなく注意深く見守る観衆は
騒ぎを止め、喇叭の
鳴り響く音を聞くや
少なからぬ人が顔色を失った。

名だたる二人の戦士は
凛々しく堂々たる姿で
互いに相手を狙いつつ同様に
開始の合図を今や遅しと待っていた。
二人の勇者は同時に
両腕を振り下し、力の限り傷つけ合い
そのため両者は一瞬
胸の上に頭を垂れた。

最初の打撃の激しさにも拘らず
更に強き第二の打撃を互いに与えたので
事前の周到な防備と用意なかりせば
この戦いは第三の打撃を見るに至らなかったろう。
これら野蛮なる戦士の猛烈さを
それに匹敵する言葉で表現できぬは残念。
彼らの中に世界中の勇気が集まり
燃え立つ怒りは絶頂に達していた。

トゥカペルが盾の上より
眉間に受けし打撃は甚だしく
彼は暫く五感の機能を失い
無意識の状態になった。
レンゴは素早く次の打撃を加えんとしたが
結果はその意志に反していた。
打撃の大音響と激痛が
トゥカペルを眠りから目覚ませたからである。

巣の中のわが子を守る毒蛇も
烈しく怒る蛮人ほどには
毒気はない。
彼は苦痛よりも名誉を気遣うのだ。
このようにして怒り狂い
魔性の如き自尊心に駆られ
堂々と構えるレンゴに襲いかかり
怒りと戦棍を浴びせる。

猛者レンゴにはその勢いと
加速された気力は有利であった。
鉄で強化された必殺の戦棍の
太き先端は空を切ったからである。
一撃は烈しかったが、錯乱により
その威力が減じたため耐えられた。
もしも外れずに受けていたら、
戦いはそれで終っていただろう。

稍外れたとは言えそのアラウコ人は
それによって僅かばかり呆然となった。
強力なる打撃に耐え切れず
遂に彼は地面に片手を突いた。
されど危険少なしと見て
強力なる相手に立ち向かい、
縦横無尽に戦棍を振るい
相手に優る厳しい一撃を返した。

果敢極まりなき人の
戦いぶりは驚歎すべきものであった。
技量の巧さ、素晴らしさ、
挑発し傷つけ身を躱すその様は
華麗を極め、私の如き愚鈍なる者には
蛮人たちの間に展開される
激烈で又となき闘いの様子を
相応しき言葉で述べ得ないのを恐れる。

かくて熾烈な戦いでは
互いの打撃に優劣はなかった。
最も弱き打撃も肉を傷つけ、
骨を砕かずにはおかなかった。
稠密な空気は辺りに充ち
大音響が近く、又遠くで響めいていた。
騒音と損害は夥しく、
宛ら大軍のようであった。

レンゴは一撃をトゥカペルに与え、
兜を強か打ったので
地面に星が充ちるのを見、
頭は呆然となった。
だが吾に帰ると天に向い罵声を上げ
その優る気力で体を躱し様
素早くレンゴを傷つけたので
彼は備える暇がなかった。

重き打撃は露骨に
レンゴの頭を痛打した。
誰もが彼は死に果てて
永の眠りにあると思った。
だが危険と苦痛から吾に帰り
窪んだ兜を冠り直した。
トゥカペルを激しく打つと
戦棍は手許から折れた。

だが戦棍のない彼を見て、
（二つの断片となって遠方に飛び散っていた）
己が戦棍を軽んじて地面に投げ捨て
大刀に手をかけた。
この時トゥカペルは己が大刀を振翳し
再度攻勢に出た。
レンゴは体を躱し、
大刀に空を切らせた。

刃物は厳しかったが地面を打ち
その大部分が埋まった。
この妨げにあって
トゥカペルは片側に傷を負った。
左の腕当ては斜に切断され
生身と共に地面に落ちた。
再度攻撃を企てたが
巨大な刃物に鋭く貫かれて果せなかった。

レンゴは盾の下に身を竦め
我武者羅の打撃を待つ。
盾は鋼の頭部と頭頂部と共に
真二つに分断され、
蛮人は気を失い、
あわや地面に伸びる所であったが
稀に見る気力を燃やし
激烈な痛みと気絶に打ち克った。

これに怯みて引き下ることなく
寧ろ手痛き復讐を行わんと考え
重なる侮辱で弥増す
渾身の憤怒に燃え、
測り知れぬ力を以て
後方より痛打を加え、
若しも武具が頑丈でなければ
腰の辺で相手を二分したであろう。

余りに深く踏み入ったため、
最早敵から抜け出せなかった。
彼は壊れし盾を投げ捨て
腕の力に頼ることにした。
トゥカペルは筋肉這しき強の者だが
同時に進み出で
硬き樫の大木も折らんばかりの
その腕を彼にかけた。

彼は勇敢さにかけては誰にも劣らぬ
レンゴと組み合った。
十人、六人、二人の中で
彼は最も敏捷で我慢強かった。
目指す相手に近づくや両者
等しき力と器用さで
相手の技と巧に優る術を求めて
あらゆる場所を探り合う。

かくて二人は激しく動き、
胸突き合わせて鬩ぎ合う。
強固な腕を強く絡み合わせたため
吐息をつく事も儘ならなかった。
而して技に更なる力を添えて
各自己が勝利を目指し、
力により敵を地面に
倒そうと努めた。

両者がこのように厳しく固く組み合い
顔を血と汗に塗れしめ、
目を血走らせ、
息遣いも荒く早く、
奮闘に呻き、唸り、
終日、一瞬の休みもなく
何れの側にも優位と好転の兆のない様を
見るのは驚歎すべき光景であった。

だがトゥカペルは憤怒に燃え
自らを怠け者、侮辱されし者と考え
平原を縦横に動き回り、
凡ゆる側から厳しく攻め立てる。
レンゴは器用にして慎重なる策を用い
力を貯め、自制して
その名誉と意図を保ち、
同様の希望を持続する。

偖、相手が稍踏み込むのを見て
レンゴはその右足を撃退せんとした。
だがトゥカペルは素早く身を縮め
胸の上に地面より吊り上げる。
そして硬い筋肉の間に締めつけ
相手を震わせ揺さぶる。
その厳しい締めつけにより
レンゴは地面に着くことも息つく事も出来ぬ。

彼はこうして容易に
戦いに決着をつけ得ると信じたが
極めて器用で勇敢なレンゴは
力を振りしぼって地面に足をつけ
狂気の如き怒りを爆発させ
力強く体を回して相手を振り放ち
苛酷な締めつけの中で掴みし物を
両手にしっかりと捥ぎ取っていた。

トゥカペルは一瞬取り乱し
左右に足払いをかけた、
レンゴは加わった力で
両膝を地面についた。
両者とも早速武器を取りに走り、
最初よりも激しい力と
速かな打撃の嵐で
盾を粉砕した。

二人がすでに千箇所に傷を負い
血が大地を湿うせるのを見て
並居し人々はその頑固さと
強情さと勇ましさに感歎した。
馬具や盾は寸断され
一方が死ぬ事以外
如何なる協定も策もなかった。
尤も両者共に死ぬことがより明白であったが。

レンゴはトゥカペルの円盾を
斜に掴んで傷を与えた。
それは部厚い骨組みに守られていたが
剣は其処に止らず
恰も柔かき靴底の如く、突き刺さり
腿当ての大部分と
部厚い結び目の二重のズボンを切り
肉を貫き骨まで達した。

侮辱に我慢ならぬ蛮人の
恐るべき形相と怒れる様、
破れし盾を遠くに投げ捨て
地獄の如き憤りの虜(とりこ)となり
剣を振り上げる様を見て
胸に何らの鼓動を起こさぬ程に
冷静なる心は、誓って言うが、見たことがない。
其処では身を安全と思う者は皆無であった。

蛮人の刃に支配されしことなき
最も堂々たる手より、怒りにより
加速されし厳しき打撃が打ち下される。
用心せよ、レンゴ、用心せよ、用心せよ。
だがこの闘いの結末を待つ人よ、
話をここで中断することを許されたい。
それにより更なる意欲を以て
お待ち下さるものと思うからである。

『ラ・アラウカーナ』第三部　初版本表紙

第三部

第三十歌章

この歌章にはトゥカペルとレンゴの闘いの結末、及び
アラウコ人プランとイスパニア人の抱えのインディオ、
アンドレシーリョとの間に起った事が含まれる。

如何なる決闘もその意図が
公共の善と普遍の利益を
目指すに非ざる時は
神の掟と自然の法により否定される。
個人的な理由や目的からではなく
公的権威の下に行われる時
忌むべき武器も決闘の場で
正当化され得る。

多くの人は決闘とは慣習として
行使される権利なりと言うであろう。
何故なら人間としての存在と意志が
共に怒りを育んだのだから。
されどそは正しき範囲を越えぬよう
矯正の役を託されし
理性の支配と制御に
従うものである。

しかも予言者は吾人に教えている。
時として直ちに怒るべし。
但し程よく制御し、
度え過ごすべからずと。
何故なら衝動に身を任せば
人は忽ち理性を失うからである。
しかも怒れる男と荒れる狂人とは
紙一重であることは周知のこと。

偖、戦いへと意志が動くのは
生来の衝動と
怒りの興奮によると言われている。
そは真実には違いないが
戦いと雖もその実行に当っては
吾人を導くその情念が
理性の抑制に従わねば
非難され否定される。

その事からも明らかなように
理性に従順である限り
人間にある生来の怒りは
好もしきものと考えられる。
そして共通の大義という視点から
決闘を行なう者は敵手に対し
正当なる敵手に対するものとして
必要な時はそれを発揮することが出来る。

されど若しその戦いが見せ掛けや
虚飾や世人の賞讃、
将又(はたまた)力と勇気の誇示
或いは怨恨、憎悪、復讐のためなら
或いは又証明を武器に委ねた
執拗さの宣言のためなら
如何に習慣により受容されようとも
不正な戦いであり、禁じらるべきである。

吾人は今日ここにレンゴと
トゥカペルの手中にその証拠を見る。
彼らはただ気取りと空しき自慢のため
獣の如く互に引き裂き合う。
そして邪悪且つ残忍なる心を以て
互に死に至らしめんとして励み
二人とも死に限りなく近づいていたが
その争いは正当さからは程遠かった。

抑々(そもそも)決闘は腐敗せる時代の産物として
導入され、行われてはいるが
凡ゆる法に照らして否認されおり、
戦時においては許されない。
但し然るべき時に述べるが
若干の場合にはこの限りではない。
これは吾人が後程見るように
兵士たちにとって重要なことである。

ここではそれを省略する、何故なら
トゥカペルの上げた侭(まま)の腕を見て、
彼を長らくその状態に放置したことで
私は自責の念に駆られているからである。
さて物語を本筋に戻そう。
聞いての通り、レンゴは怒って叫声を上げ
筋肉隆々たる腕の
残忍なる刀を彼に振り下した。

トゥカペルは相手との距離が近過ぎて
降りかかる非常な打撃から逃れ得ぬのを見て
両手で盾を持ち上げ
その下に身を縮めた。
鋭い刃先は其処に止まらず
頑丈な兜も十分ではなかった。
刃は一切を断ち切り、額にまで達し
赤く豊かな噴水を作った。

彼は暫く麻痺状態となり
辛うじて立っていた。
激しき苦痛に気力は失せ
調子を乱して揺れながら歩いた。
だが軈(やが)て気力を取り戻し
最早これが最後とばかり
レンゴと猛攻を加えたので
あわや彼を倒すところであった。

彼が余りにも近くで取り乱すのを見て
トゥカペルは彼を仰向けに倒そうとした。
その凄(すさま)じい力に
レンゴは蹌踉(よろめ)いたが
激しく敵に絡まれるわが身を見て
速かに力を盛り返し
節榑(ふしくれ)立った両の腕を相手に掛け
彼を粉砕しようとした。

そしてその測り知れぬ力で
彼を吊り上げ揺さぶり振り回す。
だが己が力を器用に利する
平静なる男、レンゴは
流せし故の血の不足にも
長く執拗なる戦いにも
その燃え盛る熱と力を減ずることなく
寧ろ勢いは弥増(いやま)した。

この時レンゴは時を移さず足を変えて
確乎(かくこ)たるトゥカペルの右足を捉えた。
そして強固なる両の腕(かいな)で締めつけ
力を籠めて胸を彼に押しつけた。
その力は夥(おびただ)しく、ために両者は
共に本意なくも斜になり
宛ら城壁か櫓が倒れるが如く
同時に地面に倒れた。

しかし新たな怒りと燃える闘志を以て
二人は地面を転がり始め、
同時に一握の土で
互に相手の目を潰そうとする。
その様たるや凄まじく遂に両者は失明し
刀を用いることが出来なくなり、
鋭い爪と歯で以て
噛みつき合い性急に引き裂き合う。

こうして寧猛に血塗(まみ)れになって荒々しく
或る時は下になり或る時は上になりして
嗄(しわが)れた喘ぎ声を慌ただしく
圧迫されし胸から洩らしていた。
にも拘らず彼らは片時も力を抜かず
怒りと勢いを緩めることなく
執拗に長く持続することで
新たな力を養った。

すでに三時間が経過したとき、
勇気において劣らぬ二人も
募る勢いが傾き
致命的な兆候を見せた。
彼らは最後の力を振り絞るも
互いに勝利を収め得ず、
最早どちらへも動かず
宛(さなが)ら死者の如く思えた。

両者は共に意識無く
血と生命力に欠け
波打つ胸を上げ、
埃と血と汗に塗れていた。
腕も足も縺(もつ)れ
感覚のある徴(しるし)もなかった。
ただトゥカペルだけは執拗に
起き上ろうとしているようであった。

彼は右脚と右腕を
相手の上に投げかけていた。
それにより友人たちからは
明らかに彼が優勢と判断された。
これは今日も多くの人の争う所だが、
両者は何れも動く事なく
嗄れた吐息と波打つ心臓のみが
辛うじて生存を示していた。

審判として闘いに臨んでいた
偉大なるカウポリカンは
重大な事態と喪失に気づき
時を移さず、つかつかと
柵で囲んだ広場に入り、
若干の血と命の残れるを見て
十二名の優秀なる兵士に命じて
二人を二枚の大きな板に乗せた。

そして貴族や名士たちと共に
その後に続き、
荘厳且つ華やかに敬意を示して
二人を指定の天幕に運び
早速手当てにかかった。
適切なる治療の結果
血は足りて音を立てて流れ
間もなく彼らは生命を取り戻した。

懸念されていた限界を乗り越え
二人は同時に回復に向かった。
尤もトゥカペルは悔しがり、
強がり、屡々(しばしば)治療を拒んだが。
だが分別のある忍耐強い将軍は
優しく彼の怒りを宥め
徐々に、加減しつつ
平素の理性ある人に戻した。

彼らの間に和解が成り、
残る生涯において
過去の事柄が再発せぬよう
又、先に約せしと雖も公共の場で
新たに生じた事として
闘う事のなきよう、
言葉にても理屈にても争う事のなきよう
二人の間で厳粛な協定が結ばれた。

凡ゆる機会に常に
寛大なる友として遇するよう、
又危機に臨んでは
直ちに駆けつけ助け合うようにした。
このようにして二人の大物は協定を結ぶと
二人の調和を不動のものとすべく
人々の祝福と拍手の下
共に飲食の卓についた。

彼らの事は、互いが納得し
一致した所で措いておこう。
随所で名前の変わる
川の畔に私は戻らねばならないから。
長らく私は其処を離れ
又気になる我らの宿舎の外にいたので
先の戦と危機の後の
状況について語りたい。

与えしものより多くの損害を受け乍ら
われわれは勝利を収めたが、其の後
其処より可成り遠方にあった
砦に早々に引き籠った。
そして間もなく、陛下、われわれは
血と甚だしい苦難を伴いつつ
他にも多くの重要な合戦を行いました。
お疲れにならぬよう手短かにお話し致します。

そして双方にとって血腥き
その他の合戦についても、長くなるので
此処では割愛するが、
これは他の作者にとって垂涎の材料であろう。
扨て二ヶ月を要して蓄えられし
弾薬と兵糧を見て、
レイノーソを隊長として駐留せしめるのが
好都合と考えられた。

その訳は諸都市が過ぎにし戦に
疲弊し、われわれを求めていたのみならず
法律は力なく片隅に押しやられ
彼方より声無き声で叫んでいたためである。
万事はその本来の場所を外れ
混乱に支配されていた。
国は数多あり乍らも統率を欠くため
明らかに滅亡の瀬戸際にあった。

さりながら凡ゆる物の潤沢なる
数多の人々の住むその地域は
都市を創るに最適にして
極めて重要な地と考えられたので
先ず都市の建設が計画された。
それに関しては後刻話すが
正しき原則と十分な根拠に基づいて
後に名前と場所が変更された。

扨て其の他の準備を
最も老練なる兵士たちに任せ、
われわれは戦闘の準備を整え進軍の
喇叭に合わせて禁じられた境界を突破し
プレンの山並みを越えて
空腹と武器の重さに疲れながら
恙なくラ・インペリアルに到着し、
其処に全員が投宿した。

長官は其処に着くや、直ちに
抑圧されていた一切の法を解放し
混乱の時期に腐敗していた
正義と慣習を修復した。
そして新たな貪欲により持ち込まれた
濫用や無秩序を取り除き
他の一切の事において正しき方法で
好都合な場所と規律を定めた。

眠気と空腹に嘖(さいな)まれた
われらの惨めな肉体が未だ十分に回復せぬのに
周囲の全ての土地が動揺し、
交された休戦の契約を破り、
わが兵力が分断状態にあるを見て
要塞も人も生かせては置かじと
彼らは兵力を結集しつつあるという
知らせをわれわれは受けた。

扨て直ちにわが方の最も規律正しき
三十名の兵が選ばれた。
彼らはティルーの森に入り
崖だらけの土地を横切り
歩いてきた道を変えて
少なからぬ不安を抱きつつ
夜も昼も眠らず、止まらず、
イスパニア軍の砦に到着した。

其処ではわが方の兵士たちは既に
協定を交せし土地の反逆を知らされていた。
不思議な事件の発生により
議会とその意図について知らされたのだ。
だが思いがけぬ救援に
陽気に感謝した後、われわれに
その事件の仔細(しさい)を説明した。
それは、陛下、次のようなものでした。

アラウコの軍隊は彼らの好運が
傾きかけたのを察知し
且つカウポリカンが嘗ての
偉大な姿を失いつつあると解るや
秘かに会議を開いて討議し
早くも隊長に憎しみを抱き
自らの威厳を保たんとして
戦いを引き延ばしていると噂した。

その声は最も奔放且つ豪気の者をも
恐れしめる程大胆率直なものでもなく
カウポリカンの命令乃至勅令に
一言半句も逆らうものでもなかった。
彼は恐れられ尊敬されていたためと
その罰と懲らしめが厳しかったため
未だ嘗て大胆にも
彼の命に背く者はいなかった。

だが彼は分別ある人として遂に
為す術なき運命の廻り来るのを恐れ
且つ己が身の憐れな状況を見て
部下たちが従わなくなるのを恐れて
——好運の後には容易に
移ろい易き信念が生じ
不運なる出来事は日毎に
最も熱烈なる忠誠心をも冷ますもの——
運命が全く彼に味方するか否か
今一度試さんと思い
その実行のために
凡ゆる策を試みようとした。
遂に彼は多くの中から一つを決め、
その意図を通達する前に
好都合と思えた速さで命令して
兵糧と武器を調達した。

扨て彼は遅滞によって人々が
恐怖心から危険を憶測する事なきよう
又何らかの椿事や突然の変更により
人々の意欲が冷める事のなきよう
気力と自信の表情を以て
速やかに且つ沈黙裏に
可能な限り多数の兵力を
集めるよう命令を下した。

彼は元老と長々と談合し
結局南のオンゴルモの側より
要塞を攻撃するのが
好都合であると決定した。
彼らは間諜を通じ、
守備の兵士たちが
安心し油断しているのみか少数且つ
未経験で非武装なることを知っていた。

又隊長は精鋭の兵を揮いて
土地を征服するまでは
後へは引かぬと決意して
不在中であり
しかも新たな征服に多忙のため
陣地は救援不可能なれば
容易に攻略し、短期間のうちに
突入し、首を刎ね得る筈であった。

荘重で厳粛な口調の
彼の権威は絶大であったので
彼の見解と意見は反対されることなく
大賛同の中(うち)に受け容れられた。
そして確乎たる気持と意図で人々は
彼に改めて忠節を誓い
如何なる運勢の下でも死に至るまで
その旗に従うことを誓った。

軈てカウポリカンは決意し、
有能なる兵士プランと言葉を交した。
この男、外見は単純にして粗野、
だが鋭く、繊細にして慎重、
周到で聡く、器用で滑稽、
嘘付きで誤魔化し屋で邪悪、
饒舌で異国語を解し、経験豊かで分別があり、
用心深く抜け目なく機敏で思慮深い。

彼は秘かにこのような難事に
必要な教育を受けていたが、
見窄らしい身形で
逃亡インディオを装い
イスパニア人の陣地への道を辿った。
彼は下働きのインディオたちに紛れて
それらしく質素な外見を繕い
基督教徒の区域に潜入した。

このようにして注意深く、
素知らぬ顔で辺りの様子を観察し
それに気づいた素振りを見せず
秘めたる意図を探った。
彼は田舎者の格好で
最も重要と考えられる個所に入り
人数、武器の在り家と状態、
陣地の中の最も強い所と弱い所を見極めた。

他方、稍油断せる人々から
聞き出し、尋ねて
機密やとっておきの事どもを
巧に詮索していった。
そして彼方此方で言葉巧に
人々の心に探りを入れ
己が胸中をぶちまけるべき
器と十分な窪みを探した。

偖て彼は内偵に最も安全と思しき
浅瀬や道を探しつつ
危険から危険へと渡り歩き
結局危険な港に流れ着いた。
すなわちアンドレシーリョと云う名の
この言葉巧な蛮人に瞞されて
彼らは一緒に兵糧の盗みに出かけたが、
これはヤナコーナたちには許されていた。

そしてプランが兼ねてより用意せし
二重の、紛らわしき言葉につられ
相手はアラウコ人の国が蒙っている
屈辱的な事情、すなわち罵倒、侮辱、理不尽、
殺人、盗み、暴力と暴攻を
口にするに至った。
そして失なわれた良き物や過去の自由を
悲しく思い出させた。

信じ易いプランは偽りの友に
かくも早く出遇いしことで
気分と快く聞く耳と
時間と機会の揃えるを見て
偽りの言葉に瞞されて
仮面を剥ぎ仮装を脱いで
秘めし胸中を明かし
隠していた意図を外に出した。

彼は言った、「おお兵士と、もし其方が
歎かわしきアラウコの敗北と
抑圧されしわが惨めなる祖国の
不幸なる状況を悲しまれるなら
きょう、好運と強力なる運勢が
われらに微笑し、
他ならぬ其方の手中に
大勢の人命の救済を委ねている。

「偉大なるカウポリカンは、未だ嘗て
斯様な苦しみも挑戦も受けし事なく、
穏やかなる平和の時も血腥き戦の時も
第一人者の座を占め、服従されているが、
いまや（其方の有する勇気、
非常なる努力、大いなる腕前を見て）
かかる好き機会に、其方の強運を信じ、
其方に国の命運を委ねられた。

「且つまた其方に
この大いなる企ての始終が帰せられ
一切の栄光と名誉が其方のものとなり
権威も利益も其方のものとなりようお望みだ。
但し一つだけわがものとなし
それを以て誇りと、満足したきものがある。
すなわちこの重大極まる試みの遂行に当り
相應しき人物を選んだことである。

「扨て其方の自由に任せることにより
其方の大将は首尾よき結果を期待することができる。
且つ其方の幸せと好運に肖り
それに伴われて冒険したき御所存である。
されば某、其方にそれを伝えるべく
露見を恐れて
見ての通り見窄らしき姿に身を窶し
此処に出向きし次第。

「また彼が、大軍を揮いて
（若し何らかの秘めたる不都合なき時は）
要塞を真昼に攻撃することを
熱望しておられる旨を伝えるため。
何せその時刻には
――ある間諜の情報によれば――
兵士たちは煩わしき夜に疲れ、
各自寝床に休んでいる筈であるから。

「そして鉄にて補強せし扉も分別なく、
何人(なんぴと)に対しても備えることなく
広々と開け放たれた儘(まま)
兵士たちは油断して惰眠(だみん)をむさぼり居るため
攻撃を受けて容易に斃れ
要塞は毀(こぼ)て廃墟と化し
南の地にはわが勢に
抗し得る者は居なくなるであろう。

「されば其方の援助にて
全土が平定されるものと信じ
御大将は夜陰に乗じて
これより三レグアの所に接近した。
其処にて誓いと確かなる信念の下
彼はその軍より離れ、
某(それがし)が其方に概略述べしことにつき
其方と二人で話し合いたいとお望みである。

「大いに胸を張り給え、
其方が若しこの約されし好運を享受するなら
祖国は其方によって救われ
其方は非常なる名誉を得るのみならず、
其方の有する凡ては自らの業の賜物(たまもの)となる。
而して総ての者は其方を生命(いのち)の恩人と考え
其方の手より受けしものとして
われわれは感謝するであろう。

「こは如何に素晴らしき事か。
幸福なる時とは、好機とは何かを弁(わきま)えられよ。
この偉業を其方が受諾するためにのみ
時を与え給いし天に応えねばならぬ。
恥ずべき苛酷なる隷従の下に
亡びゆく祖国にその手を差し伸べ給え。
今や凡てが其方に与えられるのだから、
求め得る物を求め給え。」

穏やかな相手の顔を注意深く観ながら、
彼はここで言葉を終えた。
インディオは話が完全に終るまで
動ずる様子もなく
満足げな表情で
――胸中を偽っていたのだが――
提示された申出での言葉に
遅れる事なくこう答えた。

「かくも貴重なる愛する祖国の
利害が某(それがし)の手中にありと知った
心からの嬉しさと喜びを
十分なる言葉で表現できぬのが残念。
富も名誉も地位も職も
世界の支配も王冠も
某にとってこのような共通の
全体の利益には到底及ばぬ。

「常軌を逸した貪欲なる者どもの
横暴さは耐え難く
又自由の喪失の原因たる
優柔不断な権力と暴力も忍び難い。
されば神の思し召しにより
すでに刑は宣告され
アラウコ人の腕に
当然の懲罰が委ねられた。

「カウポリカンの許に戻り
某の確かなる意志を早急に伝えられよ。
この件に関し其方の敷延したき事は皆
其方の申出でにより判断致そう。
明日必らず、最も荒涼として
人気(ひとけ)なき海岸にて
其方とお会いし、長々と
某の引受ける事に就いてお話し致そう。

「怪しまれては悪しき故
我ら二人は離れ離れになるがよかろう。
して今日のところは別々になり
各自、待っている処に帰ろう。
明日はゆるりと真昼間
もっと自由に談合致そう。
さすれば其方も某の事に一層満足されよう。
遅き故、さらば。さらば、道は遠き故。」

このようにして程なく彼らは分れ
夫々別の道を辿り、
一方はアラウコの陣営に
他方はわが軍の屯する処に着いた。
彼は喜びと邪悪なる心を抱きつつ
隊長に秘かに語りかけ
次の歌章を聴く人には聞える筈の
全ての事を逐一述べた。

第三十一歌章

アンドレシーリョはレイノーソにプランとの間に取り決めた事柄について語る。彼はカウポリカンと用心深く語る。カウポリカンは欺かれ、イスパニア人は眠っているものと思い要塞を襲う。

美しき善意に背く
最高に醜く忌わしき悪意は
培われし友情に対する裏切りである。
それは天と地と、否、地獄をも憤らせる。
何故なら裏切りの主は嬉しくとも
人は裏切り者を嫌い憎むからである。
次下は恩恵に与る者をも怒らせる
忌わしき悪行の例である。

裏切り者にして安全を
保ちし例は稀である。
誰からも愛されず、誰にとっても憎々しい。
行為に関与する者も彼を嫌悪する。
友は常に疑念を抱き、
真実を述べる時も信じられない。
果てはその悪自体の有する
罰から免れ得ない。

戦の定めに於て、敵を安心せしめて
傷つける者が裏切り者ならば、
友人の自由と血を
敵に売り渡す者、
また忠誠を装い
祖国を裏切らんとし
憎悪と怒りの限りを尽くし、祖国の喉元に
鋭き刃を突きつける者は何であろう。

分別ある賢者は公然の敵より
将又(はたまた)邪悪なる乱暴者、悪党より
身を護ることができるが、
一度も攻撃を受けたことがなく
友人の仮装の下に抜き身の刃を匿(かく)す
裏切り者からは不可能である。
不誠実者に対し安全な者はなく
隠れたる敵ほど恐ろしき敵はない。

その証拠が、敵を欺き満足せしめた
アンドレシーリョである。
この裏切り者、大急ぎで
僅かの間に長い距離を駆け抜け
安心し油断し戻りし
レイノーソの前に罷出(まかりい)で
己が悪巧みを鼻にかけつつ
その悪巧みと裏切りにつき報告した。

彼は言った、「実は本日、
運命の女神が御身に有利に
万事うまく働らきましたので
私は御身の為に役立つことができます。
と申しますのも、女神は御身の敵の生死を
私の自由なる意志に委ね
思いの侭の宣告と刃を
アンドレシーリョの両手に付託したからです。

「されど私は自分の国や国民に対する恩義や
当然の気持ちを、尊敬する御身の為に敢えて捨て、
御身のお命をこの窮地から救わん為、
一命を賭して
嫌悪するわが祖国に対し
武器と厳しき命令で臨み
御身の脇腹に向けられし
数多の剣を外らしたい。

この後彼はプランとの間に起った事が
諸氏も聞いた一切の事
――私の記憶に間違いが無ければ
先の歌章にて長々と言及した筈――を語った。
レイノーソは驚きの余り呆然となり
感謝の気持を顔に出し、
情愛を籠めて両の腕を彼の首に掛け
衷心より謝辞を述べた。

そして彼は二心ある契約を成立させたる
その滑稽さと計略を称え
王国と基督教全体に対して為された
顕著にして偉大なる貢献を誇張し
かかる大いなる恩恵は
永く吾人の記憶に残るであろう、
そして今や名誉ある賞で以て
永く報われるであろうと云った。

扨てその翌日、二人は
誰にも気付かれぬよう配慮して
定められた時刻と場所にて
近くにいる隊長と会うことになった。
会って話すことにより
この件につき何が最も好都合かが分かり
彼を言葉巧みに口説き
所期の目的を達する為であった。

彼はそれを実行したが、その前に
生い茂った谷の出口に
早くも彼を案内すべく待つ友人が
歩哨として立っているのを見つけた。
カウポリカンは陽気な仕草で
彼を迎えに数歩進み、
部下の者たちより一歩前に出て
彼を愛想よく礼儀正しく迎え、

こう言った、「やあ隊長殿、きょう
天の思し召しにより威厳を帯びた人、
正当且つ当然に祖国の救済を
委任されし人よ、余はよく存じている、
其方が只管自(ひたすらみづか)らの美徳より生じた
誠の熱意と勇気に駆られて
如何なる人も未だ命名したる事なき
土地に到達せんと望んでいる事を。

「且つ又其方の胸中にある
勇ましき意図と目的を知りし故
慶事を約束する其方の
好運に導かれて
余は決意した、
其方のみをわれらの案内人と為し
多数の兵を以て真昼に
イスパニア軍の要塞を襲うことを。

「余が人知れず秘かに
此の地に参ったのはそのためであった。
此処では其方は如何なる事も要求出来るが
余は其方に正当なる褒美を約束したい。
又其方が託されしこの仕事を望むかどうか、
又我らが頭(かしら)として万事に
命令し、指示し、作戦を立て
其方に託せるかどうか見てみたい。

「名誉の他に余は其方に
元老院からの領土を約束する。
そして強力なるエポナモンにかけて
その地が其方の意志により選ばれる事を誓う。
余は其方の手中に身を委ねて冒険し
好都合と思える命令を其方が下すべく
又所期の目的が滞らぬよう
余の考えを其方の良き判断に委ねよう。

「扨て余に首尾よき戦を約する
其方の援助と余の確かなる期待の下、
余は此の近くの隠れた秘密の場所に
武装せる兵を用意している。
されば何人かに発見され
敵の陣地が準備を整える以前に
（これこそ唯一の危険事であるが）
実行を急ぐことが好都合である。

「おお、勇士よ、其方に期待通り
速やかに決意せよ、決定せよ。
此の山の背後から海辺にかけて
忠実なる大部隊が控えている。
其方はその規律と気力と
武器と兵士を見るべく
其処に着くことができる。余は此処にて
期待と軒昂たる意気を以て待っている。」

強かな裏切り者は、熱心に
総帥の約束に聞き入っていたが
その申出でも約束も彼の企む
醜き奸計を変えることはなかった。
尤もあの大丈夫の勇ましき様と
堂々たる容貌と体躯、
巨人の如き手足を見て
稍臆し、疑念を抱きはしたが。

彼はその頑丈なる巨体に
強力な鉄の鎧を纏い、
兜の前立てには
鱗を浮彫にした竜があった。
右手には鉄で覆った杖を持ち
腰には鋭利な剣を帯びていた。
その背丈と恰好は
正しく怒れる軍神の姿であった。

裏切りと二心ある契約により
如何に容易に悪企みが
成功し得るかをアンドレシーリョは見て
長い距離を短時間で走破し
偽りの心を抱き乍らも
喜々とした陽気な表情で
両の膝を地面に衝き
カウポリカンにこう答えた。

「おお、偉大なるアポ様、何卒
私が名誉や富や身分のために
御身の足許に従い、お役に立つべく
死を決意したとは考え召さるな。
私に対するお申し出での全ては
皆の最も欲しがるものなれど
私を動かす大義ほどには
鼓舞も扇動も致しませぬ。

「御身の思慮深さと勇気に基き
わが希望は早くも順風を真面に受け
港に直行するのを感じ
私は天に感謝致します。
さて、遅れにより害を蒙ることのなきよう
われらの側に有利に働く筈の
好運に従い
御身が作戦を急ぐが上策と存じます。

「敵の軍勢は
奇襲は夜と毫も疑わず
太陽が中空に達する時
武装を解き、裸になって
地面に横たわり葡萄酒と
甘き眠りに埋もれて天幕に憩います。
彼らは燃えるような昼下りを
日が西に傾くまでゆっくりと過ごします。

「されば仰せの通り若しも御身が用心深く
部下の兵士が規律正しき状態ならば
申し上げしこの好機を早速お愉しみあれ。
この凪ぎを無駄に過し給うな。
時は一度失えば取戻すは至難、
就中、遅れにより害の生じるときは。
されば如何なる時も停止せぬと同様、
御身もその運勢を止めてはなりませぬ。

「私は是非御身に勝利を献上したい。
そは報賞を期待しての事には非ず。
善徳は元来報賞を伴うものにして
善徳こそは真の賞にて候。
私は御身にお仕えすることで十分。
されば喜んで御身の手中に
圧制者の生首を
そっくりお納め申す。

「明日、太陽が将に
その行程の半ばにある時
私の所にプランを仮装して寄越されたい。
彼の到来を心待ちに致す程に。
されば開け放たれし広場に入り
用意も主も無き様子にて
普段の油断せる眠りに
身を任せたる兵士たちが見える筈。

「今夜秘かに
道を右手に外れて
要塞より一マイルの至近の地に
部隊を移動されたい。
して東の空に小さき渦となって
日が昇るとき
日の光を頼りに武器を置き
其処にてわが知らせと指図を待たれよ。

「私は万事が喜びと満足を齎(もたら)すために
御身に奉仕致さんとする者、
かくも価値ある意義深き事のために
編成されし貴下の好運なる隊を拝見したい。
その軍隊により間もなくアラウコは
嘗ての力と権力を回復し
イスパニアの圧制を排除し
その王国の名を広めるでありましょう。」

カウポリカンは痛く感心し
契約の内容を確信した。
そして移ろい易き心ではなく
城壁をも動かすような言葉を述べ
誠意のしるしとして
彼らの間で極めて貴重なる
輝く純金の髪飾りと
上等の絹の鉢巻の束を彼に与えた。

そして樹木に覆われた高い丘の麓に
陽気なプランを伴い
多数の勇者から成る
アラウコの軍の潜めるを見た。
裏切り者は些か当惑し
偽りの、変り易き信念は揺らいだ。
二心ある変り易き心には
恐怖が善徳のしなかった事をするものである。

だが既に勢を得し悪意は
彼に充分なる気力を与え、
揺らぐ心を蹴散らしめ
邪悪な意図を前進させた。
裏切り者はこのようにして
その邪悪なる意図を隠し
偽りの表情にて
彼らの場所、規律、武器、兵を絶讃した。

そして必要と思える事を
調査し把握し、
壮大なる光景を見、
武装せる兵士の数を調べ
全ての調査を終えた後
日暮れと共に自陣に帰着した。
其処ではレイノーソが
彼の遅れを気遣いつつ待っていた。

彼は細々(こまごま)とした忠告と共に
自分の行動についての詳しい報告をした。
同時に、時を得た我らの到着が
彼に一層の気力を与えることとなった。
私は、熱心な読者なら覚えているように、
山と麓の海岸を通り、先にも述べた通り
三十名の同僚と共に
同日救援のため到着したのである。

その夜は武器と軍需品の
調達、準備に費された。
濠、城壁、広場に
夫々兵士が配置された。
軈(やが)て夜明けの仄(ほのか)な光に
深い谷間が姿を現わし
夥(もたら)しき流血と死の齎す
悲しき日の兆(きざ)しを見せた。

南限の地では未だ嘗て
太陽が万物にいつもの光と
明るさを拒んで
かくも出遅れた例(ためし)はなかった。
だが遂に兆と共に姿を見せ、
それを前にして欠けた月は
アラウコの地は見まいと
変り易き仄白(ほの)き顔を空に向けた。

双方の陣営で秘かに
同様の意図と希望を抱き、
とは云え軍勢は異なっていたが、
防備を整えていたとき
プランは唯一人
貢物を運ぶインディオの習慣に従い
律儀に白き小麦の束を背負い、
裏切り者を訪ねてきた。

彼は自分の小屋の出口に立って
道を彼方此方と熱心に眺めていた。
取り決めの時刻は未だ到らぬのに
彼には早くも過ぎたと思えていた。
邪悪なる心はすでにかくまでも
彼を駆り立て急がせていた！
人は心待ちにするとき常に
如何なる速さと遅く感じるもの。

プランは着くや否や彼に対し
部隊を二つの連隊に分けしこと、
誰にも見られず気付かれずに
城壁に囲まれし場所を確認せしこと、
並びに密かな足どりにて
一大統率の下、整然と
勇気と武器とを携(たずさ)えて
要塞目指して直行していることを断言した。

己が意図を隠して
アンドレシーリョは喜びを表わし
疑いもなくわが兵が
既に何時ものように眠っていると言った。
軈て素知らぬ顔をして、静かに
欺く者と欺かれる者は
相伴って早速
備えの整える要塞に入った。

彼らは全ての将兵が
その居室に引き籠もり
油断せる風情にて
寝床に眠る様子を見た。
馬具はわざと放置され
馬は鞍をつけず、
一見乱雑な侭、すべては
静かな沈黙と眠りに埋もれていた。

プランは休息と静穏と
要塞の中の手薄な守備ぶりを見て
歓喜に目が眩(くら)み
其処に潜む欺瞞に気付かず
瞬時も止(とど)まることなく
兼ねてより熟知せる近道を通って
足と勇気を頼りに
自陣に待望の情報を知らせに行った。

蛮人が彼方に去るや
アンドレシーリョは大声で言った。
「おお、強者(つわもの)たちよ、われらの望むこの戦の
結末は御身らの双肩にかかっているのだ。
速やかに勝利の武器を取り給え。
今や堂々と沈黙を破る時、
御身にも申せし通り、
敵は戸口まで来ているのだから。」

突然の嵐に襲われ
航海士の叫びを聞いて
毛布の間から飛び出す
勤勉な水兵といえども
アンドレシーリョの高き声に
天幕より踊り出で
近くの武器に駆けつける
わが軍の身軽さには及ばない。

付け慣れし胸当目指し突進する者、
帽子、兜を確(しか)と掴む者、
馬に鞍を置く者、火縄銃、
槍、刀を携(たずさ)え出かける者。
重厚なる砲列が瞬く間に
開かれし門戸に据えられ、
防壁、銃眼には
大小の弾丸の山があった。

陣地が整い銘々が
その部処に付くと
全軍に沈黙が命ぜられた。
全ての舌は結ばれ、音は静まった。
要塞内の余りの静けさに
城外に働き居りし人たちは
その落ち着きたる様子を見て
皆が同時に眠り憩うものと思った。

プランも道を怠けてはいなかった。
何故ならわれらが武装を備えるや否や
敵軍は突如として両側より
近くに姿を現わしたからである。
彼らは武器を下げ、体を低くして
巧に身を隠し、密かに接近したのである。
目が耳よりも速く且つ軽快でなかったら
彼らは内部に侵入を果していただろう。

獲物の居場所を確認した
老練なる狩人は
雑草や茂みに隠れて
身を屈めて迫り
或る時は歩を早め或る時は歩を止めて
音もなく移動し遂には接近して
確かな射程内に
姿を現わすものだが、

それに劣らぬ静けさと優る慎重さで
隠れ居しインディオの軍は現れた。
そして瞬く間にわれらの陣地より
三十歩、否更に近い所に位置を占めた。
そして喇叭も楽器も鳴らさず
黙せる犇(ひしめ)きとなって二千余の兵が
不注意というよりも故意に開け放たれた
城門に突進した。

この襲撃の血腥き残忍さと
同時に起こる
当然の憐れみと当然の憎しみとを
如何なる言葉で表せばよいのか。
或る時は人間的な、或る時は気丈な心が
私を押し止め、別人にする。
もし憐憫の情を満たさば
私は己が行為を悪と断じ罰するであろう。

もしその襲撃と危険より離れても、
私はその中にいる事に変りない。
もしも此処にてそれを止めるなら
私は約束に背くことになる。
されば相反する二つの正しき事と闘いつつ
私の心は動揺し、
助言を必要としているのでこの件は
次の歌章のためにとって置きたい。

第三十二歌章

アラウコの軍は陣地を攻撃するが反撃を受け惨めな損害を蒙る。カウポリカンは天幕を疊み山奥に退却する。アロンソ・デ・エルシーリャは幾人かの兵の懇願により、ディドの生涯について実話を語る。

万人により讃美を受くるに相応しき
いと優れたる美徳、賞讃さるべきもの、
そは卑しき胸に嘗て宿りし例(たぐひ)なき
いみじくも寛大なる憐憫の情である。
そは剣よりも多くの人を打ち負かし
ローマをかくも強大にした、
すなわち王公たちの不屈の頸(うなじ)を手懐(てなづ)け、
その法の下に置いたのである。

勝つことにのみ栄光があるのではなく
また偉大さや優秀さがあるのでもない。
偉大さは勝利を温情により更に輝かす
術を心得ることにある。
勝利者は記憶されるに相応しいが、
それは怒りにおいて反発を呼ぶ。
情ある人の勝利は更に大である。
何故なら心も同時に征服するからである。

されば仮借なき残忍なる隊長の勝利は
さして栄光に輝くものではない。
残忍さの劣る程
一層称えらるべきものとなる。
そして厳しき刃の動きも
激情の続く間は許せるが
止みし後の冷酷さは
復讐となり、残忍となり暴虐となる。

流されし多量の血は
（もしわが判断と考えに誤なくば）
この地の待望の果実を
悉く破壊せし血であった。
何故なら戦の掟や限度を超えて
人非人的な手段により
侵入し征服することにより
未曾有の大虐殺を行ったからである。

私見によればこれはその一つである。
だが所詮、世間と運勢の定めは全て
勝者にとっては正しく、合法なりとする
逆の共通の声が私を納得させようとする。
だが時機を失せる繰り言は扨て置き
私には今や部分的には正当なれど
全てに於て不憫な生々しき損害と暴力の様を
語り始める時と思える。

私はわが要塞に対する蛮人の
激しき襲撃と
様々な種類の武器により用意された
秘めたる死を描いてきた。
扨て駿足にして宿命的、
且つ苛酷なる運命に弄ばれ
大勢の兵士が犇きつつ
欺瞞の門戸に殺到する。

おお永遠なる神よ、何と不思議なる誤算
何という損害と破壊が
憐れにも彼らを襲ったことか。
彼らは欺かんとして迂闊にも欺かれたのだ。
その驚愕すべき深刻なる被害
突如として瞬時に放たれし
凄まじき砲火による攻撃の様を
誰か語り得るであろう。

或る者は体中至る処を貫かれ、
或る者は頭と腕が切断され、
或る者は元形を留めぬ程に砕かれ、
多くの者が槍の一撃に倒れた。
胴体なき手足、手足なき胴体、
肝臓が、腸が、折れた角が、
まだ動く内蔵と煮え立つ脳味噌が
破片の両となって彼方に飛散する。

十分に詰まった爆薬が
大音響と共に炸裂するとき
突然の火勢に塔は吹飛び
建物も倒壊するように
それ以上の音響と破壊力で
火薬の烈しい力は
部隊と共に一切の物を
瞬時にして飛ばし粉砕した。

移ろい易く定めなき厳しき運命は
的を外れる一本の矢もなく
空しく落ちる如何なる武器もなく、
アラウコ軍を粉砕した。
斯程の人が一時に斃れるのを見たことがない。
余りの打撃、余りの死傷が私を引き離し
そのため私は手を急がせるが
付いて行くことができない。

銃砲が十分に発射されぬ中に
わが軍は早くも野戦に出んものと
一斉に馬に拍車をかけ
城門と通路を突破して
思わぬ事態に呆然として身を縮める
二番手のインディオたちに
銃砲の為し得る以上の
損害と殺戮(さつりく)を加えた。

或る者は槍を振るって
其処此処に血道を開き
或る者は右に左に打撃を与えつつ
命を奪う。
傷口を開き深くせぬ
柔な腕も心もなく、
血を滴らさぬ
太く丸い刃先もない。

ここで彼らの様子を詳しく述べ
その死に様を描写してみよう。
或る者は馬に蹂躙され
或る者は胸と頭が裂け、
又或る者は内蔵や脳味噌も露わに
見るも無惨な姿となり
或る者は形が潰れて粉々になり
或る者は頭が胴から取れていた。

叫び声、歎き声、呻き声、
痛切なる悲鳴、
武器と悲鳴の立てる音が、
虚空を満たす。
倒れし者は死と闘いつつ
身を捩(よじ)り地面に反転する。
時を同じくして多数の生命(いのち)が
様々な個所、様々な傷口から抜けてゆく。

突然の驚愕から自由になった
欺かれたプランは城外にいたが
自軍の破壊が確実となったのを見て
裏切り者アンドレシーリョの言が悉く
偽りだったと知り、痛く悲しみ、
逃れようと思えば可能であったが
戦いのさ中に武装を解き
絶望の余り死に身を投じた。

だが大音響のみで済んだ
最後の幸運なインディオたちは
速かに背を向けて
足の裏を見せつつ逃走する。
わが方の兵士たちは追いつかんものと
早駆けにて彼らを追跡し
熱意を敏速さも劣る
逃げ遅れた者共を傷つけ倒す。

だが命(いのち)よりも名声を重んじる
幾人かの勇敢なる兵士が
面と向かい武器を振い乍ら
逃走せんとする兵士を押し止めた。
彼らは大いなる努力で戦いはしたが
研ぎすまされた両者の刀は
凄じい死を齎(もたら)し
勝敗の決定は早かった。

突然至る処に雲が湧き
一方では膨れ上り他方では縮み
片方では再び湧き上がって
空は不穏な状態となったとき
冷たき北西の風が吹き
それらの雲を押しやり、積み重ねて消し去り、
南風によって空が平穏になり
澄み亘るように

多くの群に分れたる
当惑し呆然たる人びとは
何度となく努力して結集して
我が軍に相対し抵抗したが
激しき力に圧倒され
戦場と軍旗を放棄し、
破れし中隊からはその日
多数の死者と捕虜が出た。

扨て彼らが完全に破壊され
追撃が終ると
捕虜と戦利品は分配され
われわれは宿舎に戻ったが
そこには選ばれし十三名の酋長が
見せしめの罰として
太き砲口に縛りつけられ、
火を放って処刑された。

大勢のインディオたちの中には
幾人かの勇敢なる者共も
其処で如何わしき処刑を受けしに非ずやと
尋ねたき人も多いことであろう。
何せ凡ゆる危険なる出来事において
レンゴ、オロンページョ、勇者トゥカペルは
その最前列にあり
常に突破口を切り開いていたのだから。

これに関しては陛下にお答えしますが
著名なる隊長も酋長も現れませんでした。
その訳は油断せる敵を攻略するは
臆病で卑怯なる行為であり、
卑しき手段により得られたる勝利は
栄光も賞讃も伴わないものとして
彼らの間で禁じられている欺瞞行為に
将軍は慣れていたからです。

かくてその高邁なる精神が
彼らを危機と残酷さから救った。
如何に懇願されようとも
武器を持たぬ素手の人を負かすは
恥ずべき行為と考え、且つ
戦の危険こそ名誉を添えるものにして
それ無き勝者は名誉なき者と考えて
誰一人手を貸そうとしなかった。

カウポリカンはこの戦に破れ
潰滅し力を失った。
流した血は多かったのに
報復の効果は少なかったためである。
彼は恐れをなした兵士の群に
熱情も希望も失われたのを見て
今や兵舎を撤収し、疲れし兵士を
休ませることも得策と考えた。

彼は自分が疲弊した運勢の下に
戦っていることを知り、
不利に働く運勢が
過ぎ去るのを待とうとした。
何時(いつ)、如何なる時も
知らせと命令のあり次第
間に合うようにとの命の下、
彼らは各地に分散した。

信頼するに足る勇者たち
僅か十名と共に彼は引き籠り
或る時は険しい山中に、或る時は村落に
足跡を隠して現れ
決して一ヶ所に長く留らず
隠れた場所に宿泊した。
畏敬の念を抱かせるため
見事な髭(ひげ)を蓄えていた。

われわれは定かならぬ足跡を求めて
幾度となく遠征し、
周辺の場所で探さぬ個所はなく
徹夜しなかった個所もなかった。
そして最も人里離れた小道で
早くも戦闘から逃れた
土地の逃亡者の住む
人家に出くわした。

彼らの言によれば兵士たちは皆
荒野に帰りたき気持は山々なれど
総大将が残酷非道にも
彼らを強制していると言う。
従ってもしこの強制が改まるなら
長びく戦に疲れ果てた
兵士たちは武器を捨てる気持で
一ぱいであった。

その言葉は偽りであったが、注意深く
全ての土地を探索し
山、谷、川岸、原野、山地など
人の住まぬ場所も
その蛮人を求めて探されぬ個所はなかった。
だが全ての人に対する凡ゆる試みにも拘らず
われわれは彼の居場所らしきものも
噂も見出すことはできなかった。

脅しも罰も拷問も
彼の行方を探り出す事は出来ず
又、親愛の表現も利益の供与も饗応も
彼らの誰一人堕落させるに十分ではなかった。
われわれは呆然となり、模索状態で
各自思い思いに
眠気と武器に悩まされ乍ら
昼夜を分たず彷徨(さまよ)った。

私が老練の兵士の一隊を
同行の護衛として伴い
人跡絶えた道や峠を
偵察に出かけた或る日のこと
居なくなったインディオたちの
隠れた一軒家に遭遇した。
森が大きく、然も遠方であったため
彼らはそこを安全と考えていた。

刈り取られた雑草の束の上に
頭を負傷した一人の女がいた。
まだ十五にも満たぬ乙女で、
気高き衣服を品良く纏い、
その損われた顔には
血の気の無さが窺えた。
血は細く白き衣服に飛び散っており
憫れみを唆り、美しさを引き立てていた。

何故にかくも人里離れた
狭い所にいるのか、如何にして、
又どのようにして傷を負い、
残忍な仕打ちを受けたのかと私は尋ねた。
女は顔も気力も伏せりがちに
話す口調も弱々しく私に答えた、
「楽しい生活の後には
必ず悲しい死が約束されています。

「人の心の満足の中に潜む
怠慢と移ろいをお察し下さい。
わたしを深く愛してくれていた父が
わたしの選んだ人を夫として許してくれてから
まだ一カ月にもなりません。
その人は夫であると同時に親友でもあり、
数々の優れた資質の持ち主であるため
わたしは自分の望む全てが彼にあると信じます。

「然し彼が最高に恵まれていた
稀に見る努力と勇気が
その早過ぎる死を齎したのです。
わが隊が潰滅したあの日、
わたしは彼に同行していましたが、
近くの弾が彼の脇腹を貫きました。
むしろわたしの胸を貫いた方が
惨さも少なく、当然だったのです。

「夫は斃れ、わたしは生き残りました、
死よりも腹立たしいこの命です。
しかしそのように悲しむのを見て一兵士が
（部分的にはわたしの不運に同情して）
霊魂が解き放たれて夫の後を追い
わたしの不幸の後に幸福が来るようにと
情深いがそれ程の力は無い腕で
わたしを殺そうとしてこの傷を負わせたのです。

「彼は容易にわたしを地面に倒しましたが
雑然たる犇めきと大騒ぎの中の
打撃や怒りは止んだものの
わたしから感覚を奪いはしませんでした。
然し、とある窪みに隠れていた
わたしの縁者の一酋長がわたしを抱いて
大騒ぎの中から引き離し
森のこの隠れ家に運んだのです。

「此処でわたしは寧ろ死を待っています。
だが待ち侘びるものは遅れるものです。
これは普通嬉しいものに云われることですが
待つ人は得てして来ないものです。
確かにもう自分の命は終り近いと感じていますが
夫はわたしと共に終りを待ってはくれません。
それに呼び招く死も思い通りには来ません、
何せ、わたしの望みがそれを妨げているのです。

「このように優しき友でもある夫の死を見て
人生に疲れ、飽き飽きし、
生きる一時間一時間、彼の後を追わぬわたしは
自分が悪事が働いているように思います。
偶々(たまたま)この機会に恵まれたからには
どうかわたしをお憐れみ下さい。
そしてきょう此処で兵士が怠慢にも
始めたままで残した事を終えて下さい。」

こうして若い女は急き立て
私に死を要求した。
単純な男なら彼女の懇願に同情し、
粗野な憐れみを以て応じたであろう。
だが私は暫しその激しい火を
粗雑なわが胸に燃やし
傷よりも愛がより残酷なるを見て
早速生きるための対策にとりかかった。

私は彼女を幾分慰めつつ
死ぬることは悪しき手段であり
亡き夫に対して無礼である旨を
明確に納得させた後
草の汁を宛行(あてが)いつつ
(この人たちの常用する薬であったが)
重大な危険な状態ではなかったが
痛々しいその傷口を圧(おさ)えた。

言葉の分る経験者に任せて
峠や細道を通る時
彼女を危険から遠ざけつつ
ゆっくりと彼女を運ばせ、
私は職務のため其処を発つことにした。
だが彼女から離れる前に
女がラウカという名であり、ミジャラウコの
娘で後継者であることを知った。

他に目ぼしき物も見つけることなく
砦への道を歩み乍ら私は
インディオの女の信念と
（野蛮な人々ながらも）操の堅さに関して
兵士たちと語らい合った。
そして貞節なるエリサ・ディドと雖(いえど)も
夫に対し斯程(かほど)厳格に信念を貫きはしなかったと
彼女らの揺るぎなき愛と忍耐力を讃えた。

だが感動しつつ話に耳を傾けていた
一人の若き兵士が私を制し
自分はディドが左程に
貞節な女とは思はぬと言う。
その訳(わけ)はヴィルギリウスの『アエネアス』には
彼女は淫(みだ)らなる愛に燃え
愚かにもその望みを果たさんとして
シチェオへの操を破ったとあるからだ。

動かし難い有力なる証拠を以て
貞節なるフェニキアの女性に対し
兵士が斯くも注目すべき侮辱と
悪意ある反論を行ったので
彼と同様の意見を抱きつつ
私の話を聞いていた大方の者に
それが間違いである事を示すのが
分別と考えた私は

私は彼らに言った、マントゥア人(二)は
華やぐアエネアスを美化せんとして、
何せカエサル・アウグストゥス・オクタビアーヌスは
その子孫たる事を誇りにしていたからだが、
ディドに対し非道なる仕打ちをし
不当にも偽って彼女の名誉を傷つけた。
時代的に言ってもアエネアスは
ディドより百年も前の人だと。

ヴィルギリウスがディドを斯様に中傷したという
私の話を聞いて彼らは感心した。
彼らは口を揃えて彼女の生涯につき
話してほしいと私に乞うた。
私も亦、多少緊張を解き
楽しもうとして
彼らの希望を容れたが、同時に諸氏にも
その内容についてお話ししたい。(二)

珍しき例と機会が齎(もたら)した
この予期せぬ好機に、私は
名声と評判を傷つけられた貞節なる生涯、
純粋なる信念について語りたい。
この久しく誤まれる評判は
一朝一夕に変えられるものではなく、
知識の半端なる粗野なる民衆に
深く根ざす誤りを取り去ることはできない。

偖(さて)、此処より砦までの間、私は
喜ばしき事も満足すべき事も見出さぬ故、
諸君の寛容を得て
一気呵成(かせい)に
一瞬と雖(いえど)も無駄にせず
何の省略も除外もなく
この余閑(よかん)の一時を
愉しき物語に費したい。

乾燥し荒廃した不毛の
味気なき無愛想なる事柄と
傷ついた両の腕で
切り開きつつ辿った道のため
私は甚だしく苦しみ、ために
疲れる事なく自由に
諸氏の心を愉しませ私も愉しむ事のできる
広々とした平原が欲しい。

調子も題材もそのままに
常に同じ事柄を継続し
騒然たる武器の音で
諸氏の耳を聾(ろう)しそうなので
私は疲れし気分を晴らし
時間を快的で乱れなきものとするため
敢えてこのように話題を変え、
偶々道の長さに合わせて裁断した。

思慮なき虚構により
人の名誉が損なわれるは、よく聞く所。
テュロスの女王は不当にも
謂(いわれ)なき中傷により名誉を傷つけられた。
万人にとって金科玉条たる
真実により、名誉は回復されるが
何故、語られる際、如何なる時も
正確に聞き取られないのか。

私を動かした最大の理由は
(諸氏も見る如く時宣を得ぬ点は別として)
不用意にも損われし
貞節なるディドの名誉である。
されば真実に耳を傾けんとする方は
注意と快き耳をお貸し願いたい。
暇潰しに言われた事も甚だしく傷つけるが
良い事を言うには如何なる時も最良の時である。

カルタゴはローマより約七十年前
ディドにより建国された。
彼女は立派な女王であり、嘗ては
テュロスの国民から女神と仰がれた。
父のベロ王により、彼女は
アルシデス(四)の大寺院の
教皇補佐に嫁せられたが
彼は王に次ぐ権力者であった。

この人こそ先述のシケオである。
ディドは彼への操を貫いたが
彼は儀式や測り知れぬ財産や宝物の
調達に熟達した男であった。
だが安心のために集めしものが
憐れにも彼の死の原因となった。
所詮諸人の欲する物は、これを
誰一人安全に確保することが出来ない。

ベロには子供が二人あった。
一人はピグマリオン、一人はディドである。
彼は臨終の会議において
兄妹愛で結ばれるよう二人に託した。
それは最初の中は続いたが
貪欲(どん)のため兄は堕落し
義弟の宝を所有せんとして
食事に托して彼に死を与えた。

偖、彼女は夫の死を痛く悲しみ
苦しみに耐え切れずに
悲痛なる涙を流した。
涙は血管の如く長々と流れ
悲しくも黒きマントが
彼女の美しき手足と端麗なる顔を覆い
厳粛(げんしゅく)なる葬儀と共に
遺体を立派な墓地に収めた。

そして堂々たる墳墓と碑(いしぶみ)は
彼女の貞節なる愛の徴(しるし)となったが
その建物の大きさも
女王の悲歎の大きさには敵はなかった。
彼女は常に敬虔なる犠牲と
絶えざる号泣と歎きの中に
声の聞こえぬ霊魂を呼びながら
冷たき遺体に寄り添い

こう云った「神々よ、かくも離れたる
孤独なる所に私が残るのは正しい事ですか。
深い悲しみにも私が死なぬのは
暖き愛と誠がある故。
苦しみに堪え抜く人にとって
不幸は大した事なく辛抱も可能です。
だが天は死よりも強き苦しみが永続すべく
私に死を引き延ばしています。」

彼女は力のある邪悪な兄に対する
憎しみと恨みを隠していたが
声なき怒りと烈しき呻きで
絶えず天に向って復讐を誓った。
そして偶々一人でいる時は
あの嘔吐すべき衝動を露(あらわ)にし
低き呻きと共に
抑えし怒りを声に出してこう言った。

「裏切り者よ、如何なる事情により
兄弟愛と偽りの定めの下に
其方と同じ血に対して
かくも憎むべき悪事を犯したのか。
義弟に対する其方の愛情と敬意により
其方の無慈悲と邪悪な怒りを和(やわ)らげ、
富への飽くなき渇望とはいえ
富は奪っても命まで奪うことはなかったのに。

「恩知らずめ、其方が義弟より
受けし恩恵を考えなかったとしても
其方が母の兄弟に対して行った
悪刺な犠牲と
その邪悪な胸に長く育(はぐく)まれし
戦慄すべき悪意を其方は考えるべきであった。
其方は決して偶然の出来事だったとは云えない、
何故なら誰も突然に悪人とはなれないから。

「若しも其方が邪悪なる意図と無分別を
何らかの兆しで知らせてくれていたら、
かくも険しく厳しき手段により
宝を手に入れようとはしなったものを。
だが不幸は運命として到来するとき
未然に防ぐことはできない。
ああ悲しきかな、今欺いて何になろう。
涙を流す時はいつも手遅れである。

「寧猛なる敵よ、何故このようにして
其方は欲望に身を委ねるのか。
其方は富に盲目となり、シチェオと共に
ディドをも殺したのですぞ。
其方は残酷極まる醜悪なる行為により
悪事の口実を世に与えた。
其方の裏切りの嫌悪すべき物語は
永久に記憶されるであろう。

「其方が裏切り者、暴君、
邪悪で残酷、罰当りで人殺しという名と共に
兄という名前を持つことが
許される事なのか、理に適う事なのか。
其方に対し私が納得すれば
私の信用は手から手へと移り、
私の名誉は不当な侮辱を受けるであろう。
名声は正しき人に対しては何も言わぬ故に。

「だが凶暴なる敵よ、私が其方より逃げれば
それは其方による追跡を唆す事になる。
私が夫の運命に従えば
其方の目論む物は全て其方の物となる。
其方が夫を殺めし後、私が其方に添えば
私は名誉を汚し評判を失う。
軽々に容易に許す者は既に
部分的に同意するに等しい。

「天も地もそれに対する策を持たず
運命は私に止むなき最後の手段を取るのを
（私を一層苦しめようと）引き止める時、
この強力な悪に対し私は如何にすべきか。
嗚呼、若し死を選ぶのが悪いなら
好もしき死を恐れるは尚悪い。
悩める者には死は苦しみではなく
苦しみと悩みの終りなのです。

「だが其方は分別ある王となって後
私の正当な復讐を妨げようから
二心ある態度と偽りの兄弟愛で
其方が権力を握らんとする時
私は其方の邪悪な目的を阻むであろう。
其方は私の突然の死により
妹も財産も権利も失い
邪悪なる行為により名誉も失うであろう。」

このようにして悲しみ苦しむ女王は
厳しき奥つ城にて欺き
復讐の時を待ち侘びつつ
悲しき孤独の日々を過ごした。
だが或る名状し難き力により
彼女は慎重に分別を用い
しおらしく、愛想よく
不在中の兄に手紙を書いた。

彼女は兄に自分は嘗て
夫と共に楽しく
暮らしたこの宮殿で
涙と孤独感と
哀れにも悲しき思い出とに疲れ
その苦痛を緩らげたい一心から
涙と訣別し、全財産を持ち
彼の後を追いたいと知らせた。

　さればそのために秘かに且つ迅速に
頑丈なる船団を派遣してほしい、
それが港に着き次第自分は全財産と
部下の者たちと共に乗り込み
万事好都合且つ安全に
自分の願う最後の満足にとって
唯一の心配であり妨げとなる
大海を横切りたいと。

　大望抱く王の許に待ち侘びし
知らせが着くや
幸運の女神が遂に港に
わがものを運んでくれると知り
何時(いつ)になく陽気に、欲深く
早々に人と贈り物と食糧を満載せし
船やガレオン船の
大船団を派遣した。

　思いがけぬ早さと熱心さで
港に待望の船団が到着した。
其処に王の家臣たちは降り立ち
聴てディドに恭順を示しに行った。
彼女は見事な配慮と措置(そち)の下、
一行の到着に祝意を表わし
全員に宿舎を充行(あてが)い
最期に巨り懇(ねんごろ)に饗応した。

　時が到るや慎重なるディドは
家臣たちに命じて用意させ
これ見よがしに公然と
家財を積み込ませた。
一方、夜陰に乗じて密かに
彼女の船に財産を積み込ませた。
いと秘やかなりしため
何人もその行方(ゆくえ)を知らなかった。

砂を詰めて重くし
二重の鉄板に鋲打ちされ
頑丈な錠前のかかった
六十個の箱が用意されたが
これらは公募の面前で運ばれ
全員の前で船積みされ、
その中には金、銀、財宝が
入っているものと思はせた。

軈(やが)てエリサは悲運の町より
淡き感傷と共に船出し、
折しも沖に向けて吹く微風に
早速帆を上げた。
船は静かに動き出し
凪ぎ亘る海を進んで行った。
そして船団は全て
旗艦の進む方向に従った。

その夜とその翌日
船団は順風を受けて走ったが
海岸は悉(ことごと)く海に隠れ
ディドは海岸より遠く離れたため
高貴にして恭順なる随(ずい)員たちを
船の縁に集め
他の人たちにも見せようと
周囲に呼び寄せた。

そして彼らに毅然たる声で、
自分の意図と目的は
不当且つ用心深き兄の処に行く事に非(あら)ず、
彼こそはわが真の敵である、
何故なら反逆的な契約と条件により
兄弟愛と誠の信念という美名の下、
罪深き欲望に駆られて
わがシチェオを死に至らしめたからである。

　されば自分も亦其のように
秘かな欺瞞と裏切りを受けぬとも限らぬ故
愛するわが王国と
館や所有物を一切後にし
不安なる海と風に身を委ねて
彼の支配と暴虐から離れ
安住し得る新たな土地を
探すのだと云った。

　扨てそも彼女の財宝が
身の不幸の原因であり
それ故に夫は殺害され
且つ又彼女がつけ狙われるのもそれ故と、
彼女は全ての財宝を
彼の手中に収ってなるものかと
永遠に失われるべく
海に放棄する決意で持ち出したのである。

　彼女は此の後やおら
砂を入れ封をせし框を取出させ
これ見よとばかりに公然と
海中深く投げ込ませた。
王の大臣らは悲しい仕草で
呆然とし混乱し当惑して
気丈なる女王の見事な業を稀なる事として
互いに顔を見合わせた。

　そして自分たちを黙せしめ驚かしめた
重大な事件に思いを馳せながら
失なわれし財産が募らせる筈の
若き王の怒りを思い
呆然となり如何なる理由を設くれば
又、如何なる弁明をすれば
怒れる王の懲罰を緩げ得るのか
そしてその怒りを免れ得るのか分らなかった。

扨て心得たる女王は
自分に対する恭順が示されるべき
手筈と機会の重なるを見て
時が経ち手遅れとなりて
何らかの事件が起こる前に
恐れをなせる弟の家臣たち
全員を落ち着かせて
次のように言った。

「輩(ともがら)よ、其方らはわが固き決意の証(あかし)と
運命がその気伏なる定めにより
私をこの広き海原に漂わせ居る様を
確とその目で見た。
其方たはいま（愚行でなければ）
引き返して王に沈みし財宝と
未知の土地への私の逃亡という
不快なる知らせを届ける事ができる。

「だが其方らは経験により
彼の憤懣(ふんまん)が是非もなく爆発するのを知っている。
其方らが彼の望む財宝も人質も無しに
彼の前に現れるのを見るや
野蛮なる短気を起こし
理由にも申し開きにも耳を貸さず
罰に悪意を添えて
其方らの首筋に怒りの手を振り下ろすであろう。

「こうしてわが愛する王国より
新しい土地を求めに私を駆り立て
怒れる若き王の意気ごみと
暴政や恐るべし。
私に伴い来たらんと望む者は
決して見放しはしないどころか
私の望む悉皆の利益と幸福への
参加者であり同僚となろう。

「場所も準備も申し分ないが
協議会を開くには時間がない。
それ故、其方らは物知りなる故、各自
二つの不幸の中、少き方を選ぶがよい。
若し王の許に戻らば唯一人逃れられぬ、
してこの苦しみと憐れさのため
私は罰の原因とはならぬ故、
私との同行を其方らに懇願する。

「其方らに対し執行される筈の
死と残酷さを想像し給え。
家、屋敷のことは放念されよ。
先ず大切なのはこの命。
運命と嵐に対しては
助かる事をのみ考うべきもの。
全ての財産は危険と変動に
遭遇するものと心得られよ。」

動揺せる大臣たちは熱心に
女王の言葉に聞き入っていた。
そして当惑せる頭と思考の中で
山なす事柄が錯綜していた。
遂に（目指す所は別々であったが）
彼らは彼女に臣下として従順を誓い
旅の果てまで従うことに
全員の意見が一致した。

忠誠が誓われると
彼らの中唯一人拒む事なく
止まれる船団は帆を上げて
ディドはキプロスに直行を命じた。
其処では彼女らの意図が明かされるや
一同は歓迎を受け、
友好的なキプロス人のうち
八十名の清らな乙女が同行した。

そは望み通りの都市を建設すべく
都合良き土地を探し求め
女王に仕え献身すべく従った家臣たちと
時を見て妻合わせるためであった。
かくて西の方アフリカの路を
順風を受けて航行した・・・。
だが此処で残念乍ら止むなく
この話を二分せねばならぬ。

第三十三歌章

ドン・アロンソ・デ・エルシーリャはセビルタに着くまでのディドの航海につき話を続ける。彼女が如何にしてカルタゴを建設したか、また何故に自殺したかを語る。また此の歌章にはカウポリカンの逮捕も含まれる。

多くの人は勢よく走り
険しい美徳の道に分け入るが
人跡繁き悪徳の道に出くわし
其処より引き返す事は殆んど出来ない。
規律ある生活から奔放なる生活への
道は平坦であり、其処に出るは容易(たやす)い。
悪徳から美徳への道は
美徳から悪徳への道よりも険しい。

然(さ)ればピグマリオン(一)も嘗て
幼き頃は美徳の徴(しるし)を備え
その素晴らしき門出により
公正寛大なる人として期待されたが
貪欲に惑わされて
僅かの間に甚だしく変貌した。
彼は財に対し強欲なりしのみならず
極悪非道で残忍な男であった。

その事は、兄弟愛により確約されて
喜び満足して生きていた義兄弟を
秘かに殺害するという裏切りが
吾人に余すところなく物語っている。
その当時王は専ら(もっぱ)
美徳を好むかに思われていたが
外見的な美徳の齎す(もたら)悪ほど
虚偽と欺瞞に充ちたものはない。

此の度の悪事は彼の思い通りにならず
万事逆となり異なった物となった。
何故なら事が期待通りに運ばぬばかりか
彼の船も家臣たちも失ったからである。
女王は先に述べた通り、追い風を受けて
西に向かって航行し
その途中、船やガレー船は
所々の海岸に立寄った。

彼女は水深深きシルテス(二)を危ぶみ
沿岸を航行しつつ針路を右に取り、
リグディア(三)を望みつつ進み
砂地のアフリカの海岸を走った。
そして常に海岸に沿って航行し
シエルボとランペドゥーサ(四)の間を通って
宿命的な勅令により同行せし船団と共に
恙なく(つつが)トゥネスに着いた。

其の地が果物の成る木々に覆われし
地味肥沃なる豊饒の地にして
空気は澄み空は晴れ亘り
気候は極めて温暖なるを見て
兄にとりては遠隔の地故
疑念を拭い
そこに一つの国を造り
安住の地を設けんと彼女は思った。

そのため早速彼女は
土地の住民たちと交渉して
牛の皮を敷き得る程の
僅かばかりの土地の購入を申し出た。
住民たちはその契約により
齎される利益を考え、
女王と価格の折り合いをつけ
売買の契約を結んだ。

支払いが為され場所が決まると
ディドは熱心に一匹の大きな去勢牛を
探すよう命じ、その皮を剥ぎ
自分の前に鞣した革を広げさせた。
それを細かい断片にして並べると
頗る長い距離になったため
賢明なる女王の稀に見る思慮深さに
人々は欺瞞の名を冠せんとした。

だが彼女は超過分は償い
彼らに支払って満足させ
連れて来た家臣たちに
難を逃れた隠していた財宝を見せた。
彼女は、狡猾さと策略を用いて
砂詰めの框を海中に相次ぎ投じたのは
兄がそれを知らば、もはや理由なしとして
自分を追いかけぬ為であった。

生活上の秩序に有害な
欠点短所が矯正され、
思慮深き女王により
執政官、司法官、役人が選ばれた。
そして教師や建築家や
その他必要な資材が齎されて
この優れた女王は有名なる
都市の機能を開始させた。

甚だ良好なる運勢の下
都市は秩序良く建設され、
軈(やが)て壮大な高き建物により
品格を得、著名になった。
そして新たな共和国が整えられ
国民が理性的に保たれるべく
又政治的に平和に安定して生活できるべく
法律が制定され、様々な職業が設けられた。

そして従順なる民衆を統治する
大いなる勇気と理解力により
人口は絶えず増大し
狭かりし国境も広がっていった。
こうして人々の接触と快的な住居が
喜びと働き甲斐を起こさせ、
異国の様々な土地より
多数の人が移住してきた。

この時代には未だに
後に発明される事になる紙が無かったので
動物の毛皮に書かれていた。
毛皮は何(いず)れもカルタと呼ばれ
その名は今日も尚用いられている。
かくて毛皮にて測りし土地に
建設されたカルタの都市を
ディドはカルタゴと呼んだ。(五)

その都市は僅かの間に有名となり
非常な強大さを誇るようになった。
人々の頻繁なる交流は
将(まさ)に驚歎すべきものであった。
而して優れし女王は国の統治に
極めて思慮深かったため
異国の数多の王や王子たちが
此の新しい都市の法律を採用した。

そして彼女の称えらるべき人格と分別により
人々は彼女を女神と仰ぐようになったが
美しさに於てもその時代の如何なる女性も
彼女と肩を並べ得なかった。
こうして自然の奇跡として、又
希代の人物として人々は彼女を見に行った。
地上にて崇拝される者の中
天は誰を一人者とするか私は知らない。

女性にして名誉のため敢えて
死地に赴きし例(ためし)少なからず
又奇跡的な功績により
国を圧政より解き放てし例もあれど
ディドの兼ね備えし程の完璧な資質は
何人(なんぴと)も有さなかった。
彼女は富と美貌に恵まれ、貞節にして
聡明、誠実にして而も分別があった。

軈(やが)てこの噂がマウリタニアの
実直なる国王ヤルバスの耳に達した。
勇気ある威勢よき若者で
広きアフリカの全域で恐れられていた。
若い気力の充満せる彼は
新鮮にして瑞々しき愛に抗し難く、
議会の最高位者を女王の許に
使者として遣(つか)わし、

彼女故に絶えず味わう
苦しみの代価として
幸福なる婚姻により
彼と王国の主となって欲しい。
さもなくば当然の感情から
(かくて大いなる王を軽んじた女として)
彼女に軍隊を派遣し
彼女の都市も家臣も亡ぼすと云った。

女王は臨席を望まなかったが
使者が元老院に迎えられると
元老たちには懇願と威嚇が
同時に伝えられた。
誠実なる女王が信奉する
貞淑なる誓いと節度ある生活を考え
ヤルバスの意図を嫌悪する
彼らは困惑した。

元老たちは尊大なるヤルバスの
要求を理解するや否や
此の難題を計略により
切り抜けんとした。
されば悲しく臆せる顔(かんばせ)にて
女王の前に進み出で
目を伏せ、当惑せる表情にて
使者に対する不快感を示しつつ

次のように言上した、「ご存じの通り、
ヤルバスは陛下の良き統治ぶりを聞き、
饒舌なる名声に煽られ、
且つ又陛下の都市の隆盛の様を見て
称えらるべき意図に駆られて
時を移さず陛下の議会の
最も教養ある者二十名を
彼の国の法制を改めるべく所望しております。

「飢えし人々の陋習と
旧態依然たる状況を正すため
愛する祖国と心地よき平和を後にし
野蛮なる土地に赴くは
耐え難き事であり
私共の齢と職には相応しく御座いませぬ。
されば陛下の大臣共は全員その要求を拒み
正当な理由の下、断っております。

「帰り来る宛(あて)とてなく、
究極の安らぎの場も失い、
剰(あまつさ)え非情なる要請に同意せずば、
強大なる武力を以て
怒れる若き王は我らに臨み
鉄と烈しき焔により
命名高き陛下の国民と名声を潰さんとて
都市を危機に陥れるは必定。

「これぞヤルバスが
脅迫と共に願い出てたる事。
然れど吾人の疲弊せし齢と
凡ゆる法に照らして吾人は無力で御座る。
何せ、若し理性で以て測るなら
長い苦労の末のわが住居を
人生も終り近くなって
放棄するは適わぬ事。

「吾人は若かりし頃、名誉の為
危険に身を投じたれど
疲弊せし晩年に於ては
手に入れし休息を楽しみ
無常なる死に臨んで
見捨てられし枕頭に
優しく瞼を閉じてくれ
弔(とむら)ってくれる人が居て欲しい。

「とまれ陛下の御耳に
この無慈悲なる要求を届けざるを得ぬ時、
策を用いて周到にその対策と返答を
用意するが肝要と存じます。
陛下の御英断により
平和と愛を保持し得べく
且つ吾らに新たなる働きを賜るべく
モーリタニアの王の齎す不幸を阻まねばなりませぬ。」

女王は熱心に、冷静を装いし
彼らの言に耳を傾けていた。
而して心中では別の事を感じつつも
陽気な表情で荘重な笑みを浮かべつつ
全員に優しさと愛情の籠れる
視線を注いだが彼らがもし
彼女の本心を知ったなら
仰天したことであろう。

彼女は言った、「親愛なる輩たちよ。
私は未だ嘗て其方らが運命(さだめ)に屈するを見た事がない。
其方らは大いなる危険に臨んでも
常に運命に立ち向かってきた。
然れば何故にかくも正当なる機会に
旅の一時の不便を理由に
かくも優れし資質を忘れ
祖国の荒廃を見たいのか。

「市民が都市のために、
その結束せる一員として
自らの安息のみならず生命をも捧げるは
何人にとりても当然の事であり、
そして道理と人の権利よりして
負いたる当然の恩恵に報いるため
公共の安寧を個人のそれよりも
優先させるのは人の務めである。

「いと高く偉大なるユピテル様、(25)
わが命の奉献のみにて済みますように。
軈(やが)て分別のある世人は
如何に喜々として捧げたかを知ることでしょう。
其方らは苦難の道を通り
長旅をしてきたが
その旅を終えるに当り
其方らの為した事の全てを消し去ってはならぬ。」

元老たちはディドが
理性の道を歩んで
彼女自身の言葉により
自ら罠に陥ったのを見て
苦悩の顔を笑顔に変え、
両手と声を高く上げ
声を合わせて彼女に言う、
「陛下の御判断誠に結構と存じます。

「女王陛下、陛下は正しき判断を下され、
私共の疑惑と甚だしき窮状を救って下された。
陛下の御言葉の権威に抗う
如何なる実効ある道理も御座いませぬ。
然(さ)れば徒(いたずら)に時を空費せしめぬため
陛下に秘密をお明かしするのがよいかと存じます。
何せ、如何なる敬意や協定に依るものであれ、
陛下は御自身の御言葉に反し得ないからです。

「女王陛下、ヤルバスは年老いて足腰立たぬ
陛下の元老共を望んでいるのではございませぬ。
良き政治と警察により
国家と国民は正されるものですから。
彼の望みはただ、二千の部下と
有益にして名誉ある条件と、
数限りなき贈物を以て
優美なる陛下を伴侶としたいのです。

「申し上げておきますが、もし陛下が
この聖なる婚姻による結びつきを受諾されず、
而して誤れる合意の下に
彼の寛大なる意志と申出でを軽んじられるなら
陛下は軍(いくさ)の鉄と焔により
カルタゴをば根底より覆(くつがえ)すことになるのです。
然(さ)れば、陛下の御選択と御意志に
戦争か平和は懸(かか)っています。

「若し善良なる市民が喜々として
愛する祖国に身を捧げねばならぬなら
それに勝る理由と緊急の要請により
法律は首長としての陛下に強制します。
陛下には我々に幸福な日々と
望ましき子孫を持たせ
我々の疲弊を救うという義務があり
それを果さずに済む十分な理由はあり得ません。

「陛下が貞淑乍らも実りなき
兼ねての考えを堅持せんとされるなら、
陛下の足下に膝まづくこの都市と、
陛下が意図された休息と静寂よりも
民衆の安寧が大切との
約束と公言の下に
陛下の為に愛する祖国を放棄し
無実の首に縄をかけられる人の事も考えて頂きたい。」

その大いなる要求と提案されし条件に
女王は突嗟に痛く驚き
苦悩を如何に隠さんとしても
遂に顔色に現れてしまった。
だが彼女は生来の分別を優れた知性で
暫く返事を差し控え、
甚だしき困惑のために抑制されていた
温和で物静かな声で
次のように言った、「輩たち、
私は一切の醜聞が避けられるべく
ヤルバスがこれ以上我々を必要とする前に
其方らに返答したいは山山、
然れども事はいとも重大にして
其方らにはそうする方が正直と思えようが
私の身分と偉大さ故に
早急に返答を決意できぬのです。

「貞淑なる意図と誓いし言葉を
若しも最初の説得により変更し
印されし侵すべからざる徴、すなわち
私の初恋を他の愛により消し去ることは
軽率であるのみならず
私の義務と信念に悖ること。
然れば相反するものと戦うため
時間と助言が必要なのです。

「この際わが為すべき事を決め
速やかにそれを決める事により
人々に私に対する満足を与えるため
三ヶ月の間だけ待って欲しい。
口さがなき俗人どもは
貞潔なる事も中傷するものである。
法の制定者として王たる者は
自らに厳しくあらねばならぬ。

「三ヶ月が経つ迄は
ヤルバスも私を敵と見做すまい。
この期限が過ぎれば私は
彼の願いに喜んで答えよう。
私の言うよりも短かい期限とすることは
私の貞節と高き評価がこれを許さない。
弁解は過れる証拠であり、罪を認めるもの故
ディドは敢えてそれを望みませぬ。」

茲で女王は口を閉ざしたため
ヤルバスの使者たちに
女王が結婚を決意するため
指示した期間待つよう再度説得せざるを得なかった。
彼らは元老たちの懇請と
好意に充ちた待遇により
非常なる楽しみと喜びの中に
その間カルタゴに滞在した。

国民の利益と平穏のため
元老は頻りに要請したが
彼らに快く耳を貸し乍らも
女王は返事を遅らせた。
そしてその間にも秘かに
自分の考えを着実に用意していた。
それは変えてはならぬ信念を変える以前に
惨めな生涯を閉じることであった。

不吉なる最後の日が到来するや
民衆は広場に集り
女王は豪華に着飾っていた。
足下には供犠に用いられる
松明のある広々とした
高き玉座に登り、
其処より熱心に取り巻く群集に向い
次のような言葉を述べた。

「おお、わが運命と道に従わんとて
自らの家と祖国を放棄し
凡ゆる仕事において
常に忠誠心を発揮せし輩たちよ、
きょう、運命と苛酷な宿命が
私に対する最後の目的として
この親愛なる諸氏の同伴を
私に諦らめるよう求めている。

「かくも忠実なる其方たちから
離れ行くこの門出にわが心は痛むが
天上の神々に尋ねても
これ以外の事は出来ない。
然ればカルタゴをして恐れしめる
大いなる不幸を避けるため、
私は妨げとなる原因を取り除きたい。
その対策はこの私の手に委ねられているから。

「厳しき天命により
私は幸福を持続することを得ず、
片や困窮状態にあるわが都市を見て
私は自分の信念を曲げざるを得ないため
私はヤルバスを唆す偽瞞の愛の原因を
わが命を終える事により断ち切りたい。
かくして原因を取り去る事により
全ては止むであろうから。

「これは私が自ら命を断つことにより可能である。
諸君には奇妙に思えようが
これが最も簡単容易であり厳しさも少なく
要するに個人的であり害も少ない。
このようにして其方らに危険が及ぶ事なく
誤てるヤルバスもその迷いから醒めるであろう。
そして私は更なる純粋さの中に
貞淑にして孤独なる閨房を守るであろう。

「きょう、一つの短かき命の代価として
私の行為を其方らに強要する
模範と法律を作り上げ、
私はカルタゴを侮辱から救いたい。
此処に撒かれるわが清き血潮により
私は天と地を満足せしめよう。
私は国民の為に死し、初心を
不可侵の愛を以て守り通したい。

「時期未だ早きわが死なれど歎いてはならぬ。
天はそれを良しとし厳粛なものと認める故、
短かき疲れと名誉ある死は
生を確約し永遠のものとする。
怒れるパルカ(七)の刃物が
生きんとする者を恐れさせようとも
ディドの死によって其方が悲しむ事はない。
己が欲する時自ら命を断つ者は生きているのだ。

「いざ、さらば、わが輩たちよ、私にははや
其方らの自由な姿わがと夫の満足ぶりが見える・・・」
彼女はこの残酷なる行為を実現すべく
彼らにはそれ以上何も言わなかった。
かくてシチェオの名を呼びつつ
短刀で貞淑なる胸を切り開いた。
そして間もなく燃える炎(ほむろ)の上に
突然倒れるに委せた。

彼女の死は心より悼まれ
カルタゴは長く彼女のために泣いた。
そしてこの天晴(あっぱれ)な事件を記念して
女王のために荘厳な寺院が建立され
不断の犠牲と崇拝が捧げられ
その間気高き都市は
繁栄を続け、彼女は祖国の
女神としめ崇められた。

そして忘れ難き女王ディドが身罷(みまか)ると
領主と云う呼称を忌避し
百名の博識なる元老により
爾後(じご)国は統治された。
軈(やが)て住民の数が増大し
強力にして恐るべき国となり
最盛期には一時ローマをも
脅かす存在となった。

以上が名誉の危機を救いし有名なディドの
真実にして確かなる物語である。
然(しか)るにウィルギリウス・マロンは不敬にも
その虚構に粉飾を施し
物語と賞讃すべき彼女の貞節を歪曲した。
吾人の見る如く、この不運なる女王は
結婚により焼身を免れ得たものを
寧ろ身を焼く事を望んだのである。

奇妙にして希有なる出来事に
全員は熱心に耳を傾けていたが、
物語りと道中が同時に終り、
われわれは陣地に戻った。
その夜は其処にて休息し
翌朝、われわれは懸命に
探し求める敵についての
情報の入手に努めることに決めた。

然るに油断からか一人のインディオが
わが護衛隊の虜となった。
その男は如何にも豪気の者にて
敏腕俊足の持ち主と見えたが
約束と贈物に抗し得ず
こう言った、「偉大なる将軍カウポリカンを
きょう易々と貴殿らの手中に
委ねることに致そう。

「オンゴルモより九マイル離れた
と或る険しき森の茂みに
沼と濠に囲まれた
天然の要害にその方は居られる。
其処は土地柄極めて安全なため
従者とては僅かに十名、
貴殿らの好運の星が
彼らの勢いを鎮める迄の事。

「気付かれぬよう夜陰に乗じ
人の通わぬ狭き道を通り
貴殿らを案内し
無事貴殿らの兵士をお連れ致そう。
日中の明りが現れる前に
貴殿らはその隠れ家に着くであろう。
其処にて拙者は万事責任を以て事を運ぶ故
違わば首を刎ねてもよい。」

若者の言葉は聞き入れられた。
約束する時の頗る確乎たる様を見て
熟練せる十分な数の兵より成る
一小隊を早速用意し
如何なる疑惑にも留意し
味方のインディオを先頭に
夜の張が降りるや否や極秘の中に
急拠歩いて出発した。

入り組みし狭き道を通り
阻しき坂を登りつ降りつ
熱心なる蛮人の案内の下
一向は足早に進んだ。
だが近づく曙光のため
闇の暗さも薄まったので、注意深く
インディオは石だらけの或る小川の
畔に立ち止まり振り返りつつわが軍に言った。

「是より先へは進み申さぬ、
又これ以上道を続ける事も不可能、
何せ事は重大であり恐れは凄じい故。
吾こそ彼を売りし唯一の
裏切り兵なりと知るに至りし時の
大カウポリカンの拙者に向ける
恐るべき形相を想うとき
わが足は臆して竦む。

「この小川を遡り行き給え。
足跡一つ、小道一つ無くとも
御身らは速に小屋の在所に達するであろう。
そは森と木立の只中にある、
そして間近に迫る日の光が広がる前に
急ぎ給え、山の歩哨に
秘かな御身らの到着とわが大いなる過ちを
発見されることのなきよう。

「拙者は御身らを此処に残す事により
務めを果したれば、是より引き返す。
拙者は明白なる危険を冒し
御身らを無事此処にお連れ申した。
扨て約束の場所に着いたからには
素早く小屋に達する事こそ肝要、
何事に依らず時を失するは
取り返しのつかぬ、しかも危険なる事。

「して若し彼らが到着に気付かば
此処は木々の繁茂する阻しき所、
山の断崖を通って容易に
何の危険もなく逃れることができる。
されば逡巡(しゅんじゅん)は御身らにとり有害なれば
今日、幸運の道を続け給え。
一マイル足らずの道程の処に
御身らの敵はいるのだから。」

優しき約束の言葉も贈物の申し出でも
彼を動かすことは出来なかった。
又死や投獄を仄(ほの)めかす脅しも
蛮人の決意を変えるに充分ではなかった。
且つ時は刻々と迫り、彼らにとって
急ぎは今や緊要(きんよう)であったため
彼らはインディオを松の大木に縛りつけ
彼の言葉に従って前進を続けた。

一マイル程進んだ末、
険阻なる崖の上の
鬱蒼(うっそう)たる茂みの入り口に
彼らは一軒の大きな藁葺きの家に着いた。
広場の周囲は防備が施され
川に面して断崖があった。
近くには蒲で覆われた
幾つかの小屋掛けがあった。

この時歩哨は山の頂上より
わが軍を発見して
不意を突かれし勇敢なる将軍に
合図の声を挙げた。
だがわが軍が犇(ひし)めき合って走り寄り
彼の家を突然包囲した。
猛き蛮人は早くもその時
開いていた戸口に飛び出した。

だが周囲の通路が妨げられ
身の危険を眼前に見て
鋼(はがね)にて補強せし頑丈なる槌矛(つちほこ)にて
自ら突破口を開かんとして
振り下した時最大の力を発揮すべく
爪先立ち、両手でそれを振り上げると
頭上を横切る梁に触れ
其処に食い込み引っ掛かった。

その時彼の前を一人の兵士が横切り
戸口に近づきざま
彼の片腕に打撃を加えた。
一撃は筋肉と露わな肉を貫いた。
インディオは後退りし、
対策と防禦の覚束(おぼつか)無き事を知り
部下たちに抵抗を止め
敵に身を委ねるよう忠告した。

彼は武器を捨てて外に出で
われわれは戦を恐れ逃げ惑う
憐れな兵なれば安心して
屋内に入るよう彼らに告げた。
そして自分は無法者に襲われるのを恐れ
慌てふためき乍ら
手慣れし武器を持ちて
塞がれし戸口に現れたのだと説明した。

彼らは犇めきつつ侵入し
其処に八、九名の主要な兵士を見つけた。
彼らは武器を捨て、何も知らぬ様子で
降伏した。
わが軍は彼ら全員を後手に縛り、
略奪した戦利品を分配し
身分を偽る隊長を
厳重に確保し注意深く監視した。

彼は落ち着いた様子で
自分は一介の兵士に過ぎぬと断言した。
だがその背丈と立派な体格は
大人物である事を示していた。
他の者たちからも情報を求め
この件に幾許かの時間を費したが
皆同様に彼が普通の
無名の男であると答えた。

既にわが軍の間では公然の強奪の
聞き慣れた叫声が猛威を奮っていた。
大小の家や小屋は悉く(ことごと)
破壊され掠奪された。
その時近くの大きな崖の
端にありし小屋から
一人の女が飛び降り茨の茂る
険しき荒地を逃げて行った。

だが、すぐ様一人の黒人が
山腹を通って彼女に追い付いた。
道は入り組み、狭く、
彼女は余り走り慣れていなかった。
胸に粗雑な布に包んだ男児を抱(かか)えていた。
まだ生後十五ヶ月のその子は
捕えられた不幸な父の愛児で
父母の寵愛を一身に受けていた。

捕虜であり、いと重要な女性とは知らず
黒人は彼女を縛らずに連行した。
この時早くも人々は高鳴る小川のように
騒々しく現れ始めた。
悲しき女は自分の前を
捕えられたわが夫が
徽章も着けず武器も持たずに
下賤なる者共の群に引かれ行くを見て、

苦痛を怺え切れずに泣き崩れるでもなく、
弱々しい女たる素振りを見せるでもなかった。
寧ろ激しき憤怒に充ち溢れ
わが子を夫の前に差し出して
こう言った、「其方の女々しい
右手を縛った頑丈な他人の手が、
その臆病な胸を貫いていた方が
其方に対し慈悲深かったろうに。

「其方はそも僅かの間に
幾多の功績をあげ、
未だ見ぬ遠い国々をも
震駭せしめたあの男なりや。
其方はそも軈てイスパニアを征服し
南半球をアラウコの
支配下に収めると
約束せしあの隊長なりや。

「おお哀れなる私、何と欺かれし事よ。
諸人にカウポリカンの妻
フレシアと呼ばれるとき
私は胸を張り、誇らしく思っていたのに。
いま、私は哀れにも其方が
名誉ある死を遂げ得たものを
おめおめと捕虜になったため
全てが一瞬にして空しくなった。

「かくも夥しき血と生命を要せし
あの危険なる試練、
其方があれ程の気力を以て取り組んだ
あの困難な事業はどうなったのか。
その縛られし両腕で勝ち取った
あの数々の栄えある勝利はどうした。
全ては結局この忌わしき者共に
巻き込まれる事になったのか。

「移ろい易き運命の女神に勝つための
其方の努力が足らざりしか、力不足か。
名誉ある死は生命と栄光を
不滅のものとなすを知らずや。
この不幸なる幼な児を見よ、
其方に出来得るのは唯その事のみ。
其方の死を知るや否や
私も喜んでその後を追いしものを。

「いざ、其方の子をば受け取り給え。
そは当然の愛により結ばれし絆(きずな)なれど
甚だしき苦痛と衝激のため
この豊満なる胸も乾き果てた。
雄々しき五体を女に変えた
其方がその子を育て給え。
不名誉なる父親の不名誉なる息子の
母親と呼ばれるのは御免。」

こう云って彼女は怒りも露(あら)わに
幼児を彼の前に投げ出し
激しき怒りに狂えし如く
一瞬の内に其の場から姿を消した。
今やこの残酷なる母親が戻り
あどけなきわが子を受け取りに来るには
如何なる懇願も脅迫も
所詮十分ではなかった。

新しき母が宛行はれると
彼らは踵を返し
大急ぎで道を行った。
途中、用心のため木の幹に縛りおきし
忠実なる案内人を再び伴い
日の西に傾く頃、長い隊列をなして
大拍手と共に華やかに
旗で飾りし陣地に着いた。

見るからにそれらしき男が
カウポリカンなるや否や
一層の正確を期して
インディオたちに尋問が行われた。
だが彼の居ぬ所でも彼の前でも
大勢の中一人として彼が
下層でしがなき給金の
無名の兵以上であると云う者はいなかった。

尤も軈て何人かは
殊更に締めつけられてその気になり
自らの間近き死を確かなものと知り
紛らわしき偽りであったと宣言した。
だが彼の前に連行されるや
恐怖に打ち震え
彼らが隠れて告白せし
確認ずみの真実を撤回した。

一層締めつけられしわが身の危険を見て
遂に隠し通す事は不可能と知り
実効なき方策を止め
取って置きの策を試みようとして
隊長レイノーソを呼んだ。
何事かと駆けつけし彼に
カウポリカンは穏やかで素直なる表情にて
以下の詩行に述べる事柄を述べた。

第三十四歌章

カウポリカンはレイノーソに語りかけ、死は免れ得ぬと知り基督教徒に改宗する。豪気にではあるが惨めな死を遂げる。アラウコ人たちは新たに将軍を選ぶべく集う。国王ドン・フェリペはポルトガルに攻め入るため兵士を召集する。

おお、幾多の辛酸(しんさん)を嘗(な)めし
惨めにして労多き人生(いのち)よ。
衰退せざるもの未だ一つだに無き
無常なる人の世の繁栄よ。
甘く美味なるものにして
遂には苦くならざる何があろう。
悦楽は苦悩の種とやら
相応の差し引き無き喜楽は無し。

この世には名士にして生き永らえし為
名声を曇らせし例(ためし)あり。
若しそれらの人士に死が予告されておれば
世人は彼らを好もしく思った事であろう。
ハンニバル(一)はそのよき例であった。
ファルサリアにて打ち破られし執政官は
長命なりし故にこの世界の輝かしき
第一人者としての地位を失った。(二)

インド・アメリカの地にては
軍(いくさ)にかけては並ぶ者なき
高名なる将にして偉大なる戦士
カウポリカンがよき証拠、
運命の女神は残酷にも
彼に今はの時を引き延ばし
上昇の時よりも遙かに甚だしき
憐れにして唐突なる落下を齎(もたら)した。

彼は部下たちの信念が
揺らぎ躊躇(ためら)うを認め
己が運勢の繁栄の星が
もはや急ぎ傾くを見て
レイノーソに言明する事を望んだ。
彼は事態の推移(すいい)を知るに及んで
全員の集まれる処で
重々しく次の様に言った。

「苛酷にして厳しき運命に拠り、余は
不様(ぶざま)なる状態に置かれる事となり
相応しからぬ隊長の下に
死を迎える事とは相成ったが
己がの胸に自らの刀にて
死への道を切り開き
哀れなる生涯に決着をつけ得ぬ程
この腕は衰えては居らぬ。

「だが余は其方が立派なる人物であり
恥じらう事なく生を受けるに相応しき人と判断し
余にそれが許されるなら
其方に身を委ねよう。
死を恐れおるとは思し召さるな。
そは繁栄する者の為すこと。
余は経験により不運なる者には
生が如何に辛き物なるやを存じておる。

「吾こそは運命（さだめ）に従い
亡び行くカウポリカンにして
アラウコの領土に
絶対の権利を有する者。
余は天命による職務として
全土を統治し支配する者故
和平も如何なる協定の締結も
余の意志次第である。

「余はトゥカペルにてバルディビアを誅（ちゅう）し
プレンの地をば荒廃せしめ
ペンコを潰滅に至らしめし者なり。
幾多の合戦に勝利を収めたれども
好運の星は既に去り
連戦連勝の身より
其方の足下に跪（ひざまず）き
僅かの間乍らも命を乞う身となった。

「余の主張が正当ならざる時も
許す人こそ情ある人と心得られよ。
若し心が復讐へと動く時は
余が其方に命を乞いし事で十分であろう。
怒れる胸を鎮め給え。怒りは
力ある者に相応わしからず。
其方が若し余に死を与えんと決し居るなら
速かに実行するのが情というもの。

「仮令（たとえ）余が此処にて其方の手により死すとも
この国の長たる者に欠けることはない。
カウポリカンは余の他に百千と居り、
然も誰一人余ほど不運なる者はいない。
扨て其方は既にアラウコ人を良く識る人。
余は彼らの中の一兵卒に過ぎぬ。
然れば余の運が斯くも下向せる時
新たに運を試さんとするは間違い。

「其方は自らに勝つ事により多くの者に勝つ。
有害なる怒りの勢いを抑え給え。
怒りは強き男子（おのこ）たるを疑わしめ
許すことは寛大なる復讐なるぞ。
余が若し死なば其方は互いの平穏を壊すことになる。
その下に余の露わなる喉と
其方の運命が一つに重なる
厳しき刀を今暫し措き給え。

「更に多くの大いなる栄光を目指し給え。
今、幸運の女神が
其方に微笑みかくる時、
僅かの水に溺れはならぬ。
時を知り、其方の運勢を篤と考られよ。
余は其方の手中にあり、既に其方の側に居る。
余が死なば、其方の為したる全ての中
無益となりし体しか残らぬであろう。

「おお、隊長殿、もし余のこの不運なる首が
其方を満足させ得るなら
余は喜んでそれを差し出し、其方はその刀にて
此の場にて余の悲運に止めを刺すべし。
だがその死を早めんとする者は
忌わしき生を後に残すであろう。
余の死が世界の平和を乱す
この時に於ては尚更である。

「扨て其方も経験により知る如く、
余は囚われの身に拘らず公然と或いは秘かに
余の兵士たちにより恐れられ愛されており
而して彼らは全（すべ）て余の意志に従う。
余は茲に基督の定めをうち立てさせよう。
さすれば必ず武器を捨て
全土は余の面前にてフェリペ王に
従順を誓うこととなろう。

「余が此処にて申せし事が実現される迄、
余を安全なる牢に幽閉されよ。
余の軍隊と元老院は必らず
余の為すことの一切を是認する筈。
而して一定の期間が過ぎても
履行されぬ時は死んでも良い。
何れの運命にも余は覚悟ある故
其方は最も好む方を選ばれるがよい。」

インディオはそれ以上は言はず
従容(しょうよう)として彼を眺めつつ返答を待った。
そして同じ顔の表情にて黙然と
重要なる生か速かなる死を求めた。
そのためさしもの逆運も
彼を打ちのめす事は出来なかった。
彼は敗れし囚れの身乍ら、万事に
自由なる雰囲気と荘重なる様を保っていた。

既に述べし如く、懺悔が為されるや
慎重に、否、厳しく且つ慌だしく
串刺しと弓矢による射殺の刑が
公式に宣告された。
死も過度なる手段も
彼の堂々たる表情に変化を齎さなかった。
彼は運命の女神の如何なる気まぐれにも
一度として顔色を変えぬ男であった。

だが神は彼に強力なる御業を施し
瞬時にして彼を変え給うた。
即ち信仰と知識の明りにより
彼は自ら洗礼を受け基督教徒となった。
彼を取り巻くカスティリアの兵士は
憐れみと共に満足を覚え、
全員大いに賞讃し
並居し蛮人たちも驚いた。

僅かの時間が与えられた事により
彼が真の信仰を知り
厳かに洗礼を受けし
悲しくも目出度き日に
彼は完全に武装せる
大勢の兵士に取り囲まれ
もはや幸せに望みを託しつつ
同意せる死を受けるべく引き出された。

裸足、無帽、裸体のまま
二つの重き鎖を引きずり
首には太き綱が掛けられ
それをば獄吏が引いて行った。
周囲は武器で囲まれ
群衆はその後方から目を凝らして眺め
かかる事があてよいものかと
己が眼を疑っていた。

偖、このようにして、彼は板の台に着いた。
それは彼らの居る所より弓の矢の届く距離にあり
何処からも眺め得べく地上から槍半分
高き所に設けられていた。
彼は何時もの気力を保ち
動じず、悲しき表情を見せず
突然囚われの身より解放されし如く
階段を堂々と登って行った。

一番高き処に来るや
暫く其処に突立ち、
左右に冷静なる額を向け
集れる群衆を眺めた。
彼らは信じ難き希有なる光景に
運命の神が斯程(かほど)に力を発揮せし事に
且つは驚き且つは感心して
声も無く唯凝視するのみであった。

彼は残虐な刑の執行される筈の
棒の所に自ら赴いた。
その表情には恐るべき瞬間を
毫も気にせぬ泰然たる風情があった。
彼は言った、「偖も運勢の巡り合わせにより
余は死を迎える事と相成った。
然れば来るがよい、そは余の望む所、
如何なる不幸も、最後ならば苦にはならぬ程に。」

軈て勤勉なる獄吏が登場した。
賤(いや)しき身形(みなり)の黒人であった。
予定されし死を与うべく
現れた此の男を蛮人は見て
それ迄の侮辱に対しては
忍耐強く耐えてきたが
今度ばかりは最後とは云え耐え切れず
大声でこう言った。

「何たる事。基督教の正しき心に
かくも法外なる事が為し得るのか。
余の如き名だたる人物に対し
かくも賤しき手が死を与うとは、
大罪を犯せし者は死して当然。
所詮全ては命(いのち)にて償われるもの。
だが余に対しこのような方法を用いるは
人非人の復讐にして処罰には非(あら)ず。

「此処には余と張り合いて
鞘より抜かれしすべての中、
余の惨めなる喉に用いられ
一撃の下に断ち切る刀は無しや。
運命の女神が今日、様々に
その力を余に対し試そうとも
偉大なる将軍カウポリカンに
粗野なる手が触れる事は出来ぬであろう。」

こう言うや、彼は右の足を上げ
（鎖により妨げられていたが）
獄吏を激しく蹴りたれば男は遠く
彼方に転落し重傷を負った。
此の短気の業が咎められ
突然の立腹から我に戻ると
軈て数人の助手の手により
彼は尖れる棒の先に座らされた。

貫き通す鋭き棒は
彼の五体を穿ちその内蔵を
裂いていたがその烈しき苦痛に
彼を屈せしめるには十分でなかった。
彼は平静なる面持を保ち、
唇も眉も微動だにしなかった。
その落ち着きたる様は宛然
切り株に腰を下せし者のようであった。

此の時、その場所より
三十歩程離れし所に
控え居りし六人の弓の名手が
命令を受けてやおら彼に
悪意を籠めし矢を射かけたが
彼らはかくも権威ある偉大な名前の
人物に手を下す事を恐れ
矢を放つのを躊躇った。

残酷なる運命の女神は
その目的を殆んど達していたが
尚も何れかの矢が外れるや
その方向を強引に正し
忽ち空き間を残さず
百本の矢が胸に突き刺さると
遂に偉大な彼の魂は
肉体を離れた。

この野蛮なる出来事を耳にせば
如何なる残忍冷酷な人も
不憫を覚えるであろう。
私は遙かなるまだ見ぬ人々の
新たな征服に向っていた故
その場には居合わさざりしど
陛下、若し私がその時其処に居合さば
処刑は中止させていた筈。

彼は目を見開いた儘であったため
人々は彼がまだ生きていると思った。
黄色き醜悪なる死が
まだ彼を変貌させてはいなかった。
蛮人たちの恐怖心は甚だしく
尚も彼を尊敬し続けていた。
又彼の近くに来て恐怖を抱かぬ
豪胆の士もいなかった。

天空を疾く翔り行く噂は
瞬時にして地上に忌わしき
不慮の死の知らせを広め、
騒ぎと動揺を齎した。
軈て、半信半疑の群衆は
新たなる当惑と混乱を覚え
不安に駆られ、真実なるや否やを
確かめんと駆けつけた。

周囲の土地や地方から
夥しき数の人々が現れ
広き野原も常に
取り巻く群衆で埋まっていた。
其処では彼に手で触れるまで
彼らは己が目を信じなかったのみか
手を触れたその後も
夢幻に思えた。

人々を恐れしめんと執行されし
非礼にして恥辱的な死も
斯様に優れたる人物の不在も
（吾人の期待は将に其処にあったが）
彼らに恐れも怯む心も与えぬばかりか
その侮辱に誘発されて
人々は新たなる怒りに充ち、
残忍なる報復を誓った。

或る者は彼が受けし侮辱に対し
激しき復讐に燃え
或る者は兼ねてより狙い居りし
地位と権威への野望を抱き
騒ぐ民衆の気持が
時の経過により鎮まる前に
全土に怒りを掻き立て
軍への熱と力を集中した。

トゥカペル、レンゴ、レポマンデ、
オロンページョ、リンコーヤ、レボピーア、
プレン、カヨクピル、マレアンデ、
これらの人の意気ごみ様を書かんとすれば
多くの紙面を以てしても足りず
更に大部の書物となろう。
何せ各自は熱狂的に立候補し
選出されんと切望していた。

だが酋長のコロコーロは
多数の立候補は害ありと見て
分別ある識者らしく
僅かの者しかその大役に相応しからずと知り
長老としての権威を以て介入し
人里離れし秘かなる場所に
会談のため集まるべく
彼らに使者を派遣した。

時期を早めんと望む者たちは
早速会合に出かける準備を整え
このようにして多くの者が遅れを恐れて
足取りを早めた。
別の道を進まんとする他の者たちも
態度を明ら様にせんため敢えて拒まず
唯一人欠ける事なく
コロコーロの賢明なる意見に従った。

彼らの間では本人だけが
軽装し、静かに集るよう決められた。
敵がその新たなる会合に
感づかぬための措置であった。
扨て各地からインディオたちを赴かせ
手際よく巧に偽り、謙虚な態度と
悔悟を以て、提案されし和平を
切望している如く振舞わせた。

日時と場所が指定され、
山間(やまあい)の心地よき秘かなる所に
召集されし元老たちは
遅れる事なく到着した。
彼らのうちトゥカペルは
兎も角も己が選出されるものと心に決め
又他の者たちはさしたる根拠もなく
己が考えをば表明した。

思うに、新たなる反目が生じ
一大不和と齟齬(そご)を来たし
人々の心が野心に湧き立ち
古き憎悪と競争が始るであろう。
様々な意図と意見があり
合意の方法も兆しもなく
各自はその愚見(ぐけん)の根拠を
意志と腕力に置くやに見える。

各自その紋章や衣服を身につけ
古き家系に相応しく武装して
集える酋長や貴族たちが
愈々(いよいよ)会議に入るや
聡明にして慎重なる老人コロコーロは
彼らの青ざめた顔色を見て
最後まで時を待っていたが
皆の者に先んじてこう言った・・・。

然れども陛下、若しもお疲れなくば
コロコーロの述べし事を言上する前に
私は別の長い道を辿り
考えをば吾らの例に戻したく存じます。
何故なら、語りたき事は山々なれど
私の扱う事柄はただ
爾来必要とされし事に疲れたる
わが低き声を上げるに十分なだけですから。

若しお許しを戴けるなら
（此の事は適当な時に話すことにして）
道は多岐にして長くはあれど
出来得べくばドン・ガルシーアに追い付きたい。
この御仁は混乱せる王国に於て
国内を大いに改革し
正義と統治をば良好なる状態に置かんと
熱心に努めたる人物。

彼はビジャリーカの肥沃なる地を越えたが
その南方間近かには（人の言によれば）
ウルカヌスの炉なる大火山があり
絶えず火を吐き出している。
彼は其処を右手に廻り
土地を訪ねつつ、遂に
バルディビアの南端にして際果(さいは)ての地なる
広大な湖と大いなる流水口に達した。

彼の足跡を束の間も休まず追い続けて
私も其の地に到着した。
征服と戦闘に慣れし人々が
召集を受け主要な都市から
多数馳せつけていた。
このようにして軍の準備の喧噪(けんそう)は増大し
錯然(さくぜん)たる声となって響き亘り
近隣周辺を怯えしめていた。

それは軽やかな風に運ばれ
噂となって遠くに広まり
只ならぬ不穏な口調が
遠隔のインディオたちの耳に障った。
彼らは困惑して
狼の吠え声に恐れをなし
散らばる羊たちのように
恐るべき新たな残虐の音から逃れる。

俄かに生ぜし暗雲の
黒きベールも
中天を裂き燃ゆる焔に包まれて
響き亘りつつ落つ迅(はや)き稲妻も
将又(はたまた)大地を揺るがす地震も
戦慄(せんりつ)すべき戦(いくさ)の響きが
全土を混乱させ恐怖に陥(おとしい)れる程に
人心を乱し恐れさせた例は嘗て無い。

疑いも無く既に彼らが侵入し
家畜や食糧を掠奪中と公言する者あれば
土地や町々を荒らし
酋長たちの命(いのち)を奪っていると云うふらす者、
貴族の夫人たちが辱められ
又深窓の令嬢が無理強いされ
その他場所も性も年齢も構わず
侮辱や悪事が進行中と言いふらす者もあった。

広まる噂の一つ一つに人々は
懸命する悲しき事の全てを
いとも確実なものと考え
無秩序と混乱は募り行く、
彼らにとって不確実なのは助かることのみ。
この事が彼らを嘖み苦しめ、
叫びつつ彼方に走らせ此方に立戻らせる。
人々は何事をも信じ何事も解決できぬ。

だが全土に蔓延せし
この狂気じみた懸念も
理性の這入り込むべき
隙間が開いていた。
呆然たる民衆は躊て立ち直り
彼らの全滅に思いを馳せ
この状況下に対策として重要な事を
話し合わんと会合する。

度重なるこの会合に
トゥンコナバラなる兵士がいた。
経験豊かにして勇気と理解力を持ち、
アラウコの学舎にて教育を受けたが
或る事件が原因で
故郷と親戚から追はれ
戦の業や騒音を離れて
家庭の仕事に従事していた。

この男、村々に恐怖が募り
混乱の生ずるを見て
――彼らは喇叭の音も聞かず敵兵も見ずに
ただ己が叫びに驚いていた――
有効且つ好都合なる或る場所に
高貴なる者たちを全員集めた。
そして騒ぎと動揺が収まると
皆の者に向かって説得を開始した。

「輩(ともがら)よ、はや確実に戸口に迫る
邪悪なる敵軍により
我々が危機に瀕しおる事は
今更言うまでもない。
我らを悉(ことごと)く疲弊させるこうした懸念が
自由と家屋をば暴君に引き渡し
我が儘なる侵入と容易なる通行を許すべく
我らを促し、我らに強いている。

「此の危機に際し御身らは
一時間と持ちこたえ得る
如何なる濠付きの城に
如何なる砦に、都市に逃れ得よう。
若し御身らが立ち向かい勇気を示さんとせば
我らは抜き放たれし刃に身を挺そう。
武器も隊長も訓練もなき我らが
いま突如として怒りに包まれたのだから。

「世界の財宝を奪う
残虐にして恐るべきこれらの毛深き男共は
頑強、強力にして無敵であり
凡ゆる戦に勝利を収めている。
彼らは唯一の思想の下に統べられ、
戦慄すべき大音響と共に稲妻を投じ
巨大にして勇猛なる
走る動物に跨りて戦う。

「御身たは彼らの武器と勢力に対し
城壁などの防禦物を持たぬ故
その弱点をば気力にて補い
不幸なる結末を未然に防がねばならぬ。
御身らは国内の平穏なる事を示し
彼らに安全なる通行を保証すべし。
友好的な隣国の人としてのその保証は
何人(なんぴと)にも害を強いるものではない。

「而して限られし時間内に
秘かに且つ巧妙に
衣服、食糧、家畜などを
山の奥まれる片隅に引揚げよ。
彼らがこの土地をば不毛の乾燥地にして
貧しく惨めなる人々の住む
気候穏かならざる所と理解すべく
食べ物は極力少な目に残し置くこと。

「これらの飽くなき貪慾(どんよく)者は
土地貧弱にして獲物少しと見て
必らずや考えを変え
この戦いを無益と見做し中止するだろう。
而(しか)して人と物の不足は
荒地と急なる斜面に導かれて
彼らをこの地より急拠追い払い
恐らく当分は戻らないであろう。

「御身らには岩と茂みに閉ざされし
アンクーの狭き峠がある。
其処では大自然が隣の住民との
交流をも妨げ
その夥(おびただ)しき茂みの険(けわ)しさは
動物と雖(いえど)も踏み越える事を得ず
天翔ける翼ある鳥も
飛び越えるのに苦労する程である。

「彼らは其処に差しかかるや、
私見によれば必らずや高き危険なる山を見て
気力も意欲も消え失せ
急ぎ引き帰すことであろう。
而して若し何れかの迂回の道を探さんとせば
此処より道を外れ、この地域をば
価値無きものとして後にするは必定、
かくて土地は許し難き横暴を免れるであろう。

「而してその旅において自由とわが命が
危険に曝されると知りつつも
拙者は田舎風なる素手の連れの者と
旅に出てその途中彼らに出くわし、
無知と喜色を装い、
粗末な衣服を身に纏い
我らの困窮ぶりを推し測らせるべき
惨状を贈り物として彼らに献上したい。

「不毛なる土地と見窄らしき貢物と
人々の血筋と田舎ぶりから
予測し得る貧しさ故に
彼らは骨折り損と見て恐らく
財産と富を探すという
その決意と意図を変更するであろう。
このような巧妙なる策略により
彼らは武器と意図をば他の地に向ける筈。」

インディオが言葉を終えるや否や
人々の間に騒めきが生じた。
彼らは口々に賛意を表し
誰一人異論を唱えなかった。
そして是認されし事の
実行を急いだ。
彼らは家具、食糧、家畜などを持ち
急拠仕事に取りかかった。

既にイスパニア人は何時もの素早さで
これ迄にありし幾つかの堺の
棹尾を飾るものとして
最後的な境界線に達していた。
彼は片足を記されし線に置き
その素早き足を暫し止めて
（若し諸氏の耳をこれ以上疲れしめぬなり）
次の歌章で述べる事柄を言った。

第三十五歌章

イスパニア人は新たなる土地を求めて奥地に入って行く。途中、トゥンコナバーラが彼らを待ち受け、一行に引き帰すよう説得するが効無しと見て彼らに一人の案内人を提供する。案内人は彼らをひどい岩地に連れて行ったため彼らは甚だしい苦労をする。

貪欲は阻しき山も平にし
如何なる困難も打ち破る。
欲故(よくゆえ)に忠誠心も堕落し
健全なる心も腐敗する。
其(そ)は人間生活の規律を壊す。
貪欲により、変更又は中断されざる命令は無く
容易に開け放たれざる
狭き通路も閉ざされし扉も無い。

是こそは親兄弟の関係という
最も強き絆も解き
友情を転じて敵意となし
心地よき愛を冷淡に変える。
其(そ)は災難と悪意の発案者にして
理性を蹂躙(じゅうりん)し運勢をも変える。
氷を熱くし火を冷まし
川を逆流させて坂を登らしめる。

然れば其は夥しき兵士をば休みなく
幾多の危険なる道と
前人未踏の深き海を渡らしめ
未知なる際果ての地に齎した。
而して彼らは刺激的なる私欲に駆られ
遠き不毛の道を通り
広大無辺なる大地に潜みたる
悉皆の物を審にせんとする。

先にも述べし如くドン・ガルシーアは
百戦錬磨の優秀なる隊と共に
未だ嘗て何人も達せし事なき
有名なるチリの南端に到着した。
而して二つの新世界を隔てる
線をば真中に片足を踏ん張り、
私もその場にいて注意して指令を待ったが
彼は一同に向い次のように言った。

「その不屈なる胸にとりて
危険も耐え難き苦難も
怒れる海も逆う風も
その他千万の不可能と思しき逆境も
星の力も四大も
妨げとはなり得ざりし国民、
そのような全ての物を打破し
限りある世界の果まで到達せし国民よ、

「汝らは今、困難なる道を切り開き、
汝らの腕に依りてのみ得られたる
天が現今迄隠しおりし
新しき世界をば眼前にしている。
多大なる労苦の確かなる報いと
運命の女神が約せし全てを見ている。
かくも偉大なる事業の実行者たる汝らは
無限にその主であらねばならぬ。

「扨て、饒舌なる名声の神は
地球の隅々までも歩き亘り
過ぎにし手柄を述べるに当り
汝らのこの功績を第一に挙げるであろう。
何せ二つの大いなる世界に収まり切らず
第三の世界を征服すべく此処に来たのだ。
汝らの有する浩然(こうぜん)の気は
衰えるどころか弥増(いやま)すことであろう。

「吾人は今や重要なる時期にある。
その事に関し今更説明は要すまい。
余は汝らの運勢を止めるのを望まぬのみか
これ以上演説に時間を浪費したくもない。
いざ、全員一丸となりて
この新しき土地を己が物とせよ。
運命は汝らのために多大の栄誉と
富を揃えて扉をば開いているのだ。」

話が終るや否や
全員は犇き合い乍ら
異国人の足が踏み入った例(ためし)なき
新しい土地を自由に踏んだ。
そして秩序よく勤勉ばる足どりで
悪路の続く狭き小道を通り
整然たる長き列を為して
最初の遠征を開始した。

我々は唯太陽のみを頼りに
険しき岩山や断崖に通じる通路や
閉ざされし道を切り開きつつ
足跡を残すことなく幾日か歩いた。
嘘吐きの束の間の案内人たちが
我々を誤れる場所に導き
そのため如何に巨人と雖(いえど)も
前進も後退も不可能に思えた。

既に最初の勢いを失いて
太陽が向きを変え西の方に
湿れる魚の額を熱しつつ
世界を四周し終えていた。
その時、とある山峡の下り道で
茂みと雑木の荒れ地の間より
突如十名のインディオが
裸のまま、群をなし駈け寄ってきた。

彼らは風と雨と太陽に鞣(なめ)され、
濃く長い体毛に覆われ
褌を紐で締め
胸巾厚く、頑丈な首を有し
顔も目も生き生きとし
爪は伸び放題、頭髪は長く
粗野な田舎者にして
獰猛(どうもう)な面構えの持ち主であった。

骨太の老人が先頭に位置していた。
粗末な布の破れた合羽が
その男の半身を覆っていて
惨めな貧しさぶりが窺(うかが)えた。
この男が先にも述べたように
トゥンコナバーラであった。
彼は二心ある助言と道理により
我らの意図を翻(ひるがえ)さんとしていた。

彼らを山からの逃亡者と見做し
我々は直ちに襲撃した。
だが彼らは我らの進路を塞ぎ、
早足に坂道を登り始めた。
そして小川の切れて広がる
高い巌(いわお)の麓で立ち止まると
全員が弓矢を地面に置き
何ら疑う様子もなく我々を待ち受けた。

聽(やが)て老人は大声で
通詞(つうじ)にのみ解る聞き慣れぬ言葉で
斯(か)く語った、「おお、偽り欺かれて
蛇や有害なる獣が
辛うじて棲息し
野蛮に生まれたる人の子が
原始の木の根に生を営む
この山中に来りし不幸なる人々よ。

「如何なる不吉な知識がかくも
其方らの無敵の心を駆り立てるのか。
如何なる邪悪な助言が
其方らに不可能なる物を提供したのか。
称賛に値すれどもその欲望を抑え給え。
企は困難にして恐るべきもの故。
疑いもなく其方らは悉(ことごと)く欺かれて
惨(みじ)めなる死を宣告される筈。

「敵の兵士の姿は見えずとも
其方らの通路は妨げられ
山の後に山を見出し
茂みの奥に茂み又茂みを見出すであろう。
土地の険しさは夥(おびただ)しく、
草や滋養となるべき物の不足により
又空気の汚染によりて如何なる生き物も
その不毛に耐える事は出来ぬ。

「其方らも見る如く、吾は野獣の如くなり
野蛮なる生活を営みおるが
何を隠そう、嘗ては一人の兵士であり
武器も携(たずさ)えていた。
然れば、吾の述べし道理により
其方らが道に迷えるを見て
是より先を越える事なく引き返すよう
其方らに忠告致す。

「寒冷の南の地に続く
この不毛の原野は
其方らの好運なる遠征の
終点であり墓場であるに違いない。
野獣の如く生きる
この蛮人の姿を篤と御覧あれ
然れば些少なる自然の恵みの
粗末なる贈物をば持参仕った。」

この時彼は海藻で網の如く編みし
頭陀袋より、山の産物たる
堅く未熟なる野性の
不味き果物と
乾燥せし野獣の肉と
その他の野性の粗末なる食物、
乾燥せし稲子や蜥蜴、
様々な醜き昆虫を取り出した。

一際目立ちし彼の蛮人の
異様なる風体、
甚だしき野蛮さと粗末さ、
猛々しく手に負えぬ様、
山の険阻さと茂み、
惨めなる土地の産物、
荒廃し人気なき不毛の地、
隣人との疎き付合いに我々は驚いた。

それ故我らは彼に質問した。若しこの地を
進み続かば行く先は山岳地かと。
老人は微笑しつつ、状況は益々険しく
困難となると答えた。
そして山は次第に増大する故
自然の神秘により其処にある
雑草と茂みを踏破する事は
不可能にして無謀の業なりと。

だが常に前進せんとする
我らの意欲の程を見せ
我らを後退せしめるには
偽れる、悪意ある忠告にては事足りぬと考え
優しく愛情を籠めて
悲しげなる外見を装いつつ
暫し考え込み、軈て
確かに近くに別の道があると断言した。

既に生い繁れる草に隠されてはいるが
西の右側の処に
左の山を越えて
昔、人の通った足跡があった。
距離は長く人気もないが
其処ならば安全に通る事が出来る。
その為に彼自身が我らのために
経験豊かな通詞（つうじ）と忠実な案内人を提供しようと。

この言は我らにより十分聞き入れられた。
何せ既に幾人かは疑問を抱き
受け取りし贈物にも疑念を抱いていたから。
而してその返礼も心が籠っていた。
赤く染めし綿の合羽、
柔かき孤の尻尾、
硝子の数珠十五連、
加えて十二の響き良き鈴。

贈り物は彼らの珍重する品物なれば
老人は謝意を表し、
そして到来せし熱心なる案内人と
其の他一切の物を準備して
我々は行軍を開始した。
インディオたちは二日の間我々に同行し
其の後、件（くだん）の者に後を託して
別の細道を通り帰途に就いた。

其の男は常に我々に対し
大いなる富と家畜と集落を確約し
偽りの絵空事を語りて
鬱ぐ心を元気づけて
こう言った、「ホイポス(二)が六度巡りて
この地域を照らす時、
命を賭けて其方らに約束する
其方らの欲望が十二分に充たされるであろう。

我々の尊大さと
凛として瑞々しき気分、
財と富に対する期待、空しき計画と
私は知らぬ、空しき考えを表すべき言葉を
丘も山も険阻なる岩肌も
容易にして平坦なる道に見えた。
そして途方もなき危険や労苦は
最早我々の前にはあり得なかった。

われわれは食糧の事も念頭になく
彼是の思いの中に
空想や妄想を描きつつ
峰又峰、深き谷間、連なる山々を進んだ。
このようにして誇らしく陽気に
満足を覚えつつ最初の三日を過ごした。
だが四日目の陽が昇る頃、
われわれは欺く案内人に逃げられた。

奸計が発覚し
厳しき労苦の倍加するを見て
不吉な兆しと確かな疑惑に
さしも士気高き者も動揺した。
だが荒廃せし道無き土地も
襲いかかる甚だしき危険も
将又重なる空腹と疲労も
われわれの足を一歩も止め得なかった。

われわれは斧や大小の山刀で
閉ざされし茂みと通路を切り開き、
更なる茂みと雑木林を見出しつつも
常に前進した。
傷つき躊躇(ためら)う馬が
その自信なき脚を安全に踏張れるよう
鶴嘴(つるはし)や鍬を用いて
岩や懽木(かんぼく)の根を取り除く者もいた。

数多の障碍物を以て
人間の通行を妨げる自然の力も
素地と茨と木々の織り成す
この防備の固き道には敵わぬ。
これ程に木々がその高さを
天と競わんとした例(ためし)もなく
夥(おびただ)しき雑草と茂みが
かくも多き岩山や沼地に混りし例もない。

そして反逆を誓いし空は
濃き陰欝(いんうつ)なる雲で一面を閉ざし
僅かな濁れる光もわれわれに隠し
日中を暗黒の夜に転じ
霰(あられ)と嵐を帯びて
非常なる厳しさで通行を妨げしため
今や空の戦いの方が
地上の苦労や危険に勝る程であった。

或る者は深き雑草に埋もれて
速かなる援助を求め
又或る者は沼地に足を奪われて
口々に叫び声を挙げ助けを求めた。
或る者は木に登り、或る者は転倒し
足も手も顔も甚だしく傷ついていた。
空しい叫び声を聞く者も
救いの手を差し延べる事が出来なかった。

堪え難きは、悲鳴を聞き
行く手を阻(はば)む邪魔物を見、
四肢を折りて元気なく
倒れし馬を眺める事。
わが粗末なる衣服は
茨によりて寸断され、
人々は素足で裸体のまま武装し
全身血と泥と汗水でずぶ濡れであった。

堪え難き苦難に加え
早くも水と兵糧が不足し
哀れにも惨めなる空腹が
拷問の綱を締めつけた。
而して疑わしき首尾と疑う余地なき不運が
体力も気力も萎(な)えしめ
生気なく冷たき汗が
疲れし五体の力の全てを奪った。

だが直ぐ又苦難の彼方の
栄光に思いを馳せた。
精神は手足は力を与え
如何なる困難をも軽んじ
強力なる障碍に対抗し
起り得る一切の事を容易にし
障碍の力が増大すればする程
更なる勇気が湧いて来た。

かくもわが軍が唯
希望をのみ糧として突き進み
只管(ひたすら)腕の力により宿願の
隠されし宝を次々と探し出した。
茨の網も既に綻(ほころ)び
木々に閉ざされし森も
交錯せる枝葉を引き離して
道を開き進入を容易にした。

既に彼方此方にて
光の通路が開かれ
不毛の岩山や険阻な坂も
その高き峰々を平坦にしていた。
立ちはだかる凍てつく濃霧も
部厚く湿る蒸気を吐きて
薄まり拡散し、最早
見通すことが出来た。

妨げられし路を鉄以て切り開きつつ
われわれは七日間彷徨した。
その間疲れし五体を
傾ける場所とて無かった。
遂に或る朝、われわれは広大にして肥沃なる
アンクーの原野と
阻しき山の斜面の麓に
広漠たる海とその雄大なる岸辺を発見した。

それは心地よき無数の島の点在する
広大な多島海であった。
岸から岸へとゴンドラや迅き丸太船が
行き交っていた。
未だ嘗て絶望を知らぬ海の男たちが
揺れる波のさ中で
われわれが開けし道を見た時の如く
歓喜と共に近づく港を眺めた。

聴てわれわれは跪き
喜びも新たに優しさに充ちて
危険と不運を免れしめた
神に感謝を捧げた。
而して数々の疲れも忘れ
慶事と好運の後に従い
希望と瑞々しき気力を抱いて
足早に愉しき原野に繰り出した。

痛める者、傷つける者、自由を奪われし者、
片手、片足の者、衰弱し不随(ずい)の者、
裸の者、素足の者、弊衣の者、
失神せし者、痩せたる者、空腹の者、
彼らは皆健全となり堂々たる勇者となりて
再度活力を得、勇気を漲(みなぎ)らせて
地上の全土も物足らず
天の征服も容易なる風情であった。

このような努力の甲斐あってか
海辺に下る時、山地の処々に
見事に実を結んだ
銀梅花の木を発見した。
野山に育ちし自然の味だが
十分に熟していて美味であり
天上のマナとエジプトの鍋(二)も
これ程に食欲を唆りはしなかったであろう。

時として人類に大災害を齎(もたら)す
蝗(いなご)の群が飛来し
撓(たわ)わに稔る稲穂に集り
音も無く触れては食い尽す如く
兵士たちは三々五々群をなして
平原全体に散らばり
最も繁れる銀梅花の
果実、枝葉を捥(も)ぎ取った。

時ならぬ空腹を覚えて
或る者は手掴(つか)みにて果実を食し
或る者はもどかし気に
枝や葉までも嚥(えん)下した。
横取りされる恐れなく
折りし枝を食さんものと
隠れ場所を探し求めて
群を離れる者もいた。

宛ら多数の牝鶏(めんどり)が
閉ざされし鶏舎より原野に出で
彼方此方で一心に
落穂の小麦を探し
足と嘴で土を掘り
幾許かの埋もれし食物を見付け
それを咥(くわ)えて立ち上り逃げ出し
軈(やが)て他の牝鶏に追はれる如く

可成りの量を奪いし者は
誰彼にとなむ追い駆けられ
逃れては軈(やが)て秘かに食すべき
安全なる場所に身を隠す。
若し何かを手に入れても誰も分配せず
又分ち得る時までもなかった。
縦令(たとえ)慈悲心はありても
隣人に及ぼし得なかった。

このようにして野生の食物を
食し味わっていた時
十二本の長き櫓(ろ)に推されて
湾曲せる一隻の軽舟が到着した。
鍛えられし乗組員と用意を整えし者たちが
岸辺にさっとばかり乗り上げると
親し気で率直なる素振りで
忽ち陸地に遠慮なく飛び移った。

だが彼らが何者なるや又何故に
来りしかを知りたき方もおられようが
今は此処にて言う事が出来ぬ。
私はこの長旅に疲労困憊致しおれば
その間私が回復し私に耳を貸す
諸氏を退屈せしめぬよう
更に都合良き時期が来る迄
此の儘にしておくが良かろう。

第三十六歌章

酋長が小舟から陸地に出る。彼はイスパニア人に旅に必要な一切のものを提供する。彼らは旅を続け艫て多島海の水路に道を阻まれる。ドン・アロンソは十二人の兵士と共に一隻の丸木舟で横断する。一行は宿舎に戻り、其処より別の道を通ってシウダー・インペリアルに戻る。ドン・アロンソ・デ・エルシーリャはイスパニアに向け乗船しヨーロッパの各地を旅行する。国王ドン・フェリペはポルトガルに赴くため動員を行う。

多くの土地を見る者は多くの物を見、(二)
人々は物語を通じてそれを判断する。
而して驚歎すべき物ならば尚更、
控え目に語る者こそ慎重なる者なり。
疑わしき事は敢えて語らず
明白なる危険に身を曝さぬが賢者の道。
然れども人が如何に絵空事と言わんとも
私は此の地上にて実際に見た。

私はわが領土とは無縁の
此の土地に寛いでいた。
此処では未だ嘗て虚偽、欺瞞、策略が
歓迎された例はなかった。
然れどこの事は扨置き
先に約束せし如く早速
舟を漕ぎ続け勢いよく砂地に乗り上げた
多数の乗員の居る処に戻ろう。

其処に一人の優雅にて端麗なる容姿の青年が
十五名許りの人たちと共に現れた。
縮れ毛の黒髪の、邪心なき様子のその男は
一行の中の主要なる人物と思われた。
男は謙虚で荘重なる言葉で
散在せるわが隊員を集め
われわれに丁寧且つ陽気に挨拶し
異国の言葉で次のように言った。

「此の神聖なる森と山の
閉ざされし阻しき内部より
天上の力に依りて生を受けし人々よ、
又は粗野なる神々たちよ、
其方らは如何なる理由、如何なる運勢により
かくも知られざる道をば通り、
混乱と騒動とは無縁の
わが貧しき際果ての地に来れるや。

「若し其方らの考える目的が
より広大なる土地を探すことならば、
又その目的の追求のために
必要とする物あらば
其方らはこの周辺一帯の地にて
気前よき手と好意を、
凡ゆる便宜と用意を、
道中にて容易に見出すであろう。

「又其方らが若し此の地に住まわんと望むなら
住むべき土地を献上致そう。
山岳地帯の方が楽しくお気に召すなら
其処に安全にお連れ致す。
其方らが友情を望む時も戦を望む時も
万事平等の法律にて遇したい。
よき方を選び給え、某は
平和と友情を選びたい。」

此の堂々たる若者の
態度、風采、衣服と
我らに斯様(かよう)に鷹揚(おうよう)に語りかける
言葉遣いとその内容、
宿舎などの寛大なる申し出で、
立派なる外見と背丈、
合羽とゆったりとした衣服を纏(まと)える
頑丈にして端正なる姿に我々は好感を抱いた。

彼は先の尖った飾り付きの
帽子を冠っており
その先端は後方に垂れ下っていた。
両側の顳顬(こめかみ)に正しく合い、
波打つ上等の羊毛と
雑多な色の巻き毛でできていた。
若々しく華やかなるその装束は
土地の気候の寒冷なる徴(しるし)に思えた。

彼の申し出でと示された好意に対し
我々は感謝の言葉を述べ、我々も亦
彼らの利益と幸福を願い居る旨の
確かな意志を伝えた。
だが遂に我々の物資不足と
空腹に苦しむ様が明らかとなり
我々は彼に支払いを約して
飲み物と糧食を頼んだ。

聽て彼は我が方の啻(ただ)ならぬ困窮に鑑(かんが)み
熱心なる声で急拠
備えおきし係の者に命じ
ゴンドラにて運び来し物全てを取出させ
それをば全て空腹の隊員たちに
惜し気もなく分配した。
誰からも髪一本受け取ることなく
又感謝の言葉も受取ろうとせずに。

このようにして元気を得、
同様に希望も甦り
我々は例によって秩序を保ちつつ
岸辺を通って行軍を開始した。
而して可成りの距離を進みし頃
住み心地よしと思えし最初の土地の
水辺の適当なる場所に
最初の露営をした。

我らの野営地が確定し
その他の物資の配置が終るや否や
彼方より、又此方より
小麦と果物と魚を積んだ
何隻かの速き丸木舟が
泡立つ水面を切って到着し、
気力の失せ、金も無く、手段も持たぬ
困り果てたる兵士たちを甦らせた。

土地の素朴なる住民の
心からの善意と好意から、
貪慾（どんよく）は未だ此の地には入って居らず
悪意も、盗みも不正も
（これらは戦（いくさ）の通常の糧であるが）
此の地に入り込む余地を見出さず
又自然の法律をも壊すに至っておらぬ事が
十分に窺えた。

然るに程なく我々は行く道々
手に触れる物を悉く（ことごと）破壊し
慣れにし横暴なる振舞にて道を開き
古来の習慣を新たなる侮辱によりて損じ
且つ腐敗せしめて
彼らの間に広がる端緒を設けた。
貪慾は此の地に軍旗を
他所よりも一層安全に推し立てた。

その日の夜が過ぎて翌日、
知らせは全ての島に広がり
二人の酋長が共々現れ
我らの到着を歓迎すべく
飲料水や食べ物や
山にで素手にて捕えし
一頭の毛深き羊、二頭のビクーニャ(二)その他
心籠れる素晴らしき品々を贈った。

色白にして金髪、体毛濃く顎髭(あごひげ)を生やし
耳馴れぬ言葉と服装の
嘗て見た事なき人々を見て
彼らは驚き且つ珍しがった。
荒々しいが訓練された勢いのある馬を
彼らは繁々(しげしげ)と眺めていたが
就中(なかんずく)彼らを一層驚かせたのは
初めて聞く火薬の物凄い炸裂音であった。

我々は湾曲する海岸を辿り
土地の緯度を測りつつ
海峡(三)を目指して
進路を真直ぐ南方にとった。
然し我々が距離を延ばすにつれ
彼方に道が外れ、
無数の島々の見える
壮大なる多島海が広がった。

途中多くの酋長が奇蹟を眺めるように
我々を見ようと姿を見せた。
だが何ら贈物を持参せぬ
吝嗇(りんしょく)な者は誰一人いなかった。
或る者は上等の甘露の容器を
或る者は縮れ毛の羊の脚を
或る者は弓と矢筒を、法螺貝を、
また或る者は珍しき色の亀甲を携(たずさ)えて来た。

常に未知なるものを調べ
学ぶを愛好する私は
多大の労苦とわが星の力により
此の地に到来したが、
若干名の若者を連れ
速きゴンドラに乗り
平和なる住民の地と思しき
近隣の主要な島に渡ってみた。

壁も屋根も粗末なる
インディォたちの家並みと
木々や栽培されたる植物、
果物、種子、野菜類を私は見た。
中でも祭礼、儀式、風習、
彼らの社会生活、仕事、
生活の中での法と秩序の遵守等、
目ぼしき物をば書き留めた。

私は多くの人の住む肥沃な海岸を跋渉し
更に他の二つの島に移った後
次の島へ渡った時
土地の幾隻かの小舟に取り巻かれ
それらの舟人から若干の
珍らしき事につき詳しい説明を受けた。
軈て夜の涼風に誘われて
私は岸辺に恙なく帰着した。

扨てその翌日、原野を歩いて
――我々にとって三度目の旅であったが――
既に三時間許り進んだ時
最後に、水量豊かにして
流れも速き水路を通じて
この大湖が海に繋がり
その流れと広々とした水路が
通路を妨げているのを知った。

此の広大にして豊かなる流れにより
我らの行く手が遮断さるるを見て
兵士たちの心と顔に
甚だしき不安と悲しみが浮かんだ。
端綱を取り馬たちを泳がせ
この奔流を横切るのは不可能と思えたし
狭き丸木舟も、斯程の重みに
耐えるには十分ではなかった。

然りとて甚だ堪え難き
過度の苦難に鑑み、引き返しても
一人たりとも無事に帰着するは
彼らの判断では不可能と思えた。
其処に留る事とて出来ず、
又皆の意見と十分なる考慮に反して
始められし行軍を続行せんとするは
大胆と云うよりも無謀な事であった。

我らの歎きと苦悶を見て
通弁と思しき一人のインディオの若者が
引き返すための他の道を
喜んで教えようと申し出た。
幾人かの兵士の喜び様は格別であった。
斯くして、既に厳しき冬の季節は南方に
その気配を見せ始めていたため
早々に引き返すのが我々にとり好都合であった。

だが私の真の意図は
此の遠征の終点を見る事にあったため
十人程の親しき友を連れ
——彼らは凛々しく勇敢なる兵士であった——
舟の漕手を補強して
大いなる水路の激しき流れを越え
そして粉々になり乍らも
櫓と腕の力を尽くして対岸に辿り着いた。

我々は通弁も情報も無く
運に任せて歩いて行くと
小石だらけの処々に茂みのある
砂地の土地に出た。
だがそれより先に進むは狂気の沙汰と見て
その企てに疑問を抱き
早々に丸木舟に立ち戻り、
再度勢烈しき水路を横切り帰還した。

だが更に先なる地に足を踏み入れんとの
望みを果さんとして私は
その地域の境界の確認を装い
――これは発見者にとりて常に重要なる事――
半マイル程走り進み、
其処に確かなる印(しるし)を残さんとて
最も太き木の幹を見つけ
小刀にて樹皮にこう記した。

前人未踏なる此の地点に
ドン・アロンソ・デ・エルシーリャ、
僅々十名の者と共に一隻の小舟に乗りて
水路を横断し、初めて到達す。
時に千五百五十八年
二月は最終の日の
午後の二時、而して再び
残せし隊に引き返す。(四)

扨て出発のため我々を待っていた
宿舎に帰着した時、
人気(ひとけ)なき平原には
早くも厳しき冬が始まろうとしていた。
土地に慣れた味方のインディオの案内で
兵士たちは陽気に歩き進めた。
道は閉ざされてはいたが
過去の記憶に照らして容易に思えた。

常にその言に忠実なる
島の蛮人は約束を果たし
鬱蒼と茂れる森を通って
我々を言葉通り土地の外に出させた。
この件に関しては冗漫を避けるため
苦労話は多々あれど
端寄る事が肝心なれば
極力簡潔に済ませたい。

我々はラ・インペリアルの町に着き
其処にて寛大なる隣人たちに
種々の食物を贈られ歓待され
貪慾なる胃を満足させた。
扨てこの町にかくも堂々として威勢よき
若者たちの集える事に鑑み
各自がその気力を披露すべく
馬上試合が行われることになった。

不慮の事件のためその催しは妨げられた。
而して裁きの素早さは著しく、
大いなる理由無くして抜かれし事なき
剣に手をば掛けしのみなるに
罪が甚だしく誇張され
人々は声高に囃し立て
私は既に裁きによりわが喉を
鋭き刃に委ねられていた。

此の椿事、此の事件こそ
是非も無きわが追放の原因であった。
事件の後、私は最初の罪[五]を償うべく
長い間囚われの身であった。
然れど斯様なる侮辱は受けたれど、
私は如何なる時も常に
（忍耐力と硬き鉄にて身を固め）
戦いに加わり、辺境にて昼夜尽くした。

其処には血腥き小競り合いと
不断の奇襲と計略と
激突と危険なる戦闘と
欺瞞的なる珍らしき戦術と
襲撃と指示されし合戦と
前代未聞の狡猾さと用心深さがあり、
それらは部分的には有利であったが
我が方を困らせる時もあった。

だが夥しき武具が寸断され
多量の蛮人の血が流れし
キペオの防壁における
恐るべき襲撃と激戦の後、
砦と城壁が築構されるや
私はわが突然の出立を急いだ。
何せ、あの日の屈辱が日毎に鮮かとなり
絶えず私を刺激し嘖んだからである。

而して高々と帆を上げ出帆を待ち居し
大型の商船に乗り込み
わが情熱と血を注ぎし
今となりては不快なる彼の地を後にした。
而して何の障碍も奇襲もなく
吹き来る南風を船尾に受け、
海岸より海岸へ、そして時には湾に入り
名だたるリマのカリャオに着いた。

私は人々がマラニョンの大河に
至るまでその地に留ったが、
その河ではペドロ・デ・アギーレが遠征の途中、
ネロやヘロデよりも残虐に
己が死の道連れにせんとする他
如何なる理由も原因もなく
多くの友人を愛する娘と共に
刃にかけて葬った。

而して行程は二千マイルを越し
然も処々に無人地帯があったが
更に長き旅に慣れていた私が
軈て其処より海路を辿り
パナマに着いたが、遇々その日
暴君の敗北と死を
風の便りに聞き、かくて
わが折角の急ぎも徒労に終った。

或る長く不思議なる病のため
私は陸地に滞在していたが
回復を確かめて、
テルセーラス諸島(六)を経てイスパニアに戻り、
其処で僅かの期間滞在した後
フランス、イタリア、ドイツ、
シレシア(七)、モラヴィア(八)を始め
ドナウ河の流れるパノニア(九)のポソニアに赴いた。

私はこれらの地域や其他の多くの地域を
阻しい道を通って幾度も跋渉した。
色々な国民と交り
珍らしき事柄や事件に遇い
様々の不思議なる状態や
陸や海の動物たちや
未だ嘗て天水の注がれし事なき土地や
永遠に雨を宣告されし土地を見た。

何と私は話の本筋を離れたことか。
最初の道を外れて先を急いだことか。
始められしアラウコの約束と
演説をこのように何故忘れたのか。
諸氏の楽しみを損う恐れなくば
私は置き去りし企てに戻りたい。
只管諸氏にとり楽しかるべき事のみを
語るべく努力したい。

私は彼の著名なる隊長たちの
始めし会談(一〇)に話を戻したい。
先にも述べし如く、それは論争の部分にして
様々な人が様々な意見を述べた。
私はかくも熱心なる領袖の選出ぶりと
彼らが如何にして遂に妥協したかを語ろう。
襲撃と合戦の模様を
語るべき場所も必要である。

隠れたる未知のインディオとの戦いを求め
際果ての地を通り
さなきだに疲れし頭脳と五管をば働らかせて
此彼にて武器に躓き
戦の凄じき騒音と響きが
耳に高鳴るを覚え
大地の全てが燃え上るのを感じる中で
私は何をすればよいのか。

私にはイスパニア全土が騒ぎ立ち
勝利の武器に覆われ
挑発的にして不穏なるフランスが
その疑わしき旗を広げるのが見え、
イタリアと遙かなるゲルマニアでは
響き高き太鼓を奏で
凡ゆる国にて人と武器と兵糧が
結集されるのを感じる。

かくも大いなる動きと
甲高き戦の喧騒を述べるには
努力と広大なる気力と
陛下の恩恵が必要である。
然れど無謀にして大胆なる心が
私を此の大いなる湾に齎したからには
陛下の御援助を仰ぎ必らずや
わが疲れし船にて港に着いて御覧に入れます。

わが拙き文の構成に
臆して声も止まり勝ちなるも
有難き御心遣いにより御耳を拝借すべく
内容は確約致します。
然れど私、かかる大企画を始めし以上、
それを語るべき力を取り戻すまでの間
不安なる心を取り払うのが
陛下、賢明かと存じます。

第三十七歌章

この最後の歌章では、如何に戦が人間の権利に拘るものであるかについて扱われる。又、国王ドン・フェリペがポルトガル国に対して行った権利の宣言と、その武力を一層正当化するためにポルトガル人に対して行った催告についても扱われる。

私は正当なる怒りと抱負に駆られし
カスティリアの民の憤りと
血腥き武器に身を委ねし
ルシタニア(一)王国の権利に就いて、
又怒り狂う不和に転ぜし
平和と団結と、基督教の絆と、
血縁者の胸に向け投ぜられし
双方の怒りの槍に就いて歌おう。

抑々戦は天に由来し、
人間の血統に移譲されしもの。
その時我らの本性は
用意されし果物により腐敗した。
戦によりて平和は保たれ
人間の不遜は抑制される、
戦により時として神は世界を苦しめ、
懲罰を与え、改め、正し給う。

不遜なる反逆者たちに対し
戦によりその傲慢を抑え彼らを従わしめる。
強力なる者共を蹴散らし、倒し、
飽くなき野心を押し止める。
戦は人々の権利の為の物にして
軍の秩序と訓練は
国家を支え保ち
政治と法律を維持する。

だが平和の目的を逸脱するや否や
復讐のため或いは盲目的怒りのため、
又は特別なる目的によって始まる時、
戦は不正なるものとなる。
何故なら安寧が公共のものである限り
それを乱す理由も公共のものでなければならぬ故。
一員は決して全員の
平和と団結を破るべきではない。

我らは究極にして永遠なる聖書に於て(二)
耶蘇基督に薦められたる
神における兄弟としての愛の
結びつきをば信じおれば
若しも公的原因乃至公的争いに依るか
或いはそれを衛る国王の権威に依るに非ざれば
此の全体の平和と結合をば
何人を雖も破る事は出来ぬ。

その時罪なき天使の如く
視線をば普遍の大義に置き
兵士は武器を取り
その怒りを敵に移す事が出来る。
而して個人的な尊敬又は個人的な目的にて
その腕を緩め、縮め、引き籠める時は
その事により危険に陥るのみか
公共の権利にも違反する。

然れば許されたる正当な戦に於て
怒れる征伐の兵士は
敗者の兵を傷つけ、捕え、殺し
自由の身を従順なる奴隷と為すことが出来る。
抑々(そもそも)一つの生命の主であることは乃(すなわ)ち
既にその人の肉体の主であり、
敗者に対し正当に思うに任す事が出来る。
何故なら勝者には全てが許されるからである。

扨て凡ゆる時代と機会に於て
共通の大義の下に編成されし軍の兵士は
如何なる咎(とが)も無く
自由に武器を用いる事が出来る。
又、正にその合法的理由により
徒歩、騎馬、武装の有無を問わず
又広野にてであれ囲いの中にてであれ
一対一の戦いは合法的である。

其の御手と権力の下に
国家の秩序が委ねられている
国王の権威が介在する
正しき戦に於ては挑戦も正当である。
然れども若(も)し個人的な場合乃至(ないし)意志による
戦は非難され抗議される。
即ち挑発者又は挑発を受けし者は
非合法であり咎められるべきである。

又基督教徒たる国王は努努(ゆめゆめ)
憎しみ、復讐、又は競争のために
凶悪なる武器の用いられる事に
組したり許可を与えてはならぬ。
力に依りて宣告を下し
大義を定め、或いは試してはならぬ。
何となれば秘めたる理由により、時として
罪ありし者が勝者となるを見るからである。

且つ血腥き武器による裁きは
当然の事乍ら咎められる。
我々は至高の神の攝理に従い
思わざる結末を見るからである。
蓋し悲しき事や幸福なる出来事が
邪心や大義を作るに非ず、
又正義は何事に於ても
偶然や運に左右されるものではない。

更に言えば、勤勉なる兵士には
戦が正しきや否や、好都合なりや否や
或いは不当なるや正当なるやを
審にする義務は存在しない。
公正に大義の有無を調べるのは
当然の理由から
国民が従え仕える
統治者としての国王のみ。

然れば首長たる国王に
戦の重みと重大なる責任はかかり
戦に起因する一切の損害と不幸は
全て彼の双肩にかかるものなれば
王たる者は己が為さんとする事をば熟慮し
勢いの赴くに任せる前に
準備されし武器が貪慾、野心に
依らざる事を確かめねばならぬ。

明白なる義務に強いられ
法律に従い正当に
認められし武器を取り
権力をば力に基づけることなく
又その王冠は
太陽の没する所迄広がり居る故
支配欲に駆かれる事なき
此の度のフェリペ王の如く。

彼は健全なる者を腐敗せしめ汚染する
野心と強欲をばかなぐり捨て
権利と正義の名に於て
反逆する王国に親しく赴き
彼の王冠を否み妨げる
悪意にもめげず
武装せる手によりて
固く閉(とざ)されし理性の扉を開かんとする。

而して仮令(たとえ)義憤に駆かれてとは云え
その実力をば隠し
振り翳(かざ)せし腕を止め
流血による結着を延引する。
而して分別と我慢により
その剣と意図を正当化しつつ
軈(やが)て頑迷なる反逆を
手厳しく打ち砕く事になる。

彼は力と怒れる手にて
裏切り者の高慢の項(うなじ)を圧し
彼らを支援するフランスの海賊共の
勢いづく艦隊を粉砕するであろう。
而して許されたる厳しさにて
平和を乱す者共として
彼らの領袖フェリペ・ストロッィが死せば
全員が刃による裁きを受けるであろう。

此の邪悪なる敵共の血は
彼の慈悲心を汚す事にはならぬであろう。
何となれば高慢の罪甚だしき時
其を罰する者こそ慈悲あり情けある人なる故。
悪を許すは軈て更なる大罪を
犯すを許すことになる。
全ての人に全てを許す人こそ
決して許さぬと同様残忍なる人である。

若しも厳格さが必要にして重要なる時、
許す事は慈悲に非ず。
現前の悪を捉え罰する人は
将来残酷となる事を免れる。
悪意を懲らしめぬ者はそれに同意し
加担する者と云えるであろう。
悪しき衆生を許す者は
国を損ない汚す者。

慈悲と云う貴重なる美徳を
軽んずべしと云うには非ず。
許しは栄光ある勝利にして
強者が行う時最も称讃に値する。
然れど斯様に有益なる共通の平和も
正義なくしては永続は不可能。
即ち賞と罰を適宣に用いてこそ
国家は保たれるのである。

而してこの世の暴力と悪の総てが
修復され罰せられる訳ではない。
全てが急ぎそれに続かぬためには
時として時間と機会が必要である。
全ての事を知らんとする国王は
大いに許す義務ありと心得うべし。
万事に於て骨まで肉を落とすこそ
強力に作用する薬である。

他ならぬ敵に対する慈悲心は
憎悪と憤怒の気分を和らげ
敬虔なる心を宿し、友を生み、
好感を抱く人々の愛を引き寄せる。
不断に厳罰を以て臨む国王は
憎々しく且つ疎(うと)ましき存在となる。
法なる刃物を鈍らせる事は
王たちに相応しく又王ならではの務めである。

而して既に過ぎ去りし悪事は
若しそれにより悪人が
新たなる侮辱と罪悪を惹起するに非ずんば
看過し得べき物と云える。
罰への恐れが邪悪なる心を
抑えることは明白
将又(はたまた)罪を犯せし者の罰さるるを見て
人は悪を改め悪者は更生する。

然れど又、罰は
病軽く傷浅きに
健全なる個所に刀を入れ
手を触れずとも治るものを
有害なる鉄により害する
無学、残酷なる外科医の如く為されてはならぬ。
痛みよりも厳しき
治療は好ましくない。

熱心なる読者は
私の言に処々矛盾ありと言うであろう。
即ち時として公然の罰が必要不可欠とあらば
罰する事は美徳なりと。
力ある者が忘恩の敵の
侮辱を許すのは
それが特殊であるかさもなくば
懲罰無くして償い得る時、美徳であると。

時間は短く語る事は多いのに
私は徐々に本筋から逸脱している。
荷を下ろすどころか私は疲れた両肩に
更に重い荷を背負い込んでいる。
然れば以後、さして重要でなく
又荷の重過ぎる出来事は端寄り
筆をポルトガルに戻し
此処にて手短かに概要を述べたい。

こはそも何たる事ぞ、おおルシタニア人よ、
汝らは欺かれてその頑迷なる胸を向け
罪深き武器をば取りて
法と権利を犯さんとしている。
何たることか共通の平和と公共の利益、
親類、宗教、自然、
フェリペ王の力と偉大さに
汝らの損われし心が動かぬとは。

見よ、何たる寛大さにて彼は
汝らに止むなき状態を強いることなく
寧ろ秩序ある隊を成したまま、
財産と自由と恩恵を賜りしかを。
宛ら父親が慈しみつつ
我儘息子を説得するが如く
陰口を云われ乍らも武力を停止して
道理もて汝らの納得に当った。

如何なる盲目的野望、如何なる誤解、
如何なる的外れの頑なる情熱が
欺くの如く理性をばその元来の場より外し
汝らの心を乱しているのか。
秘蹟により結ばれし基督の
十字架で示されし一つの国民が
残忍なる凶悪の武器に囲まれて
自らの内蔵に傷つけるとは。

将又同じ一つの表徴と旗が
異なる宿舎より現れ
数多の異国の民を引き入れて
罪無き者たちの血を流さしめ
染まり易き横柄なる悪徳という
誤れる方法を導入して
その散布されし害毒にて
カトリックのイスパニアを汚すとは。

永遠にして至高なる父よ、
肝要なる恩恵と恩寵を垂れ給え。
御身の名によりて総ては動かされる時なれば
何卒(なにとぞ)我が手を動かし給え、
特別の敬意もその他の好意も
私を正義より外らしめる事なく
ポルトガルとカスティリアの人々に
正(まさ)しく彼らにとり当然の物を与えんがため。

扨て人々の心をば動かす
正しき心を御存じであり、
良き意図と善き行動をは
原則としておられる御方よ、
私に同様の精神を与え給え。
斯くも微かなる力量にて斯くも大いなる行動を
大胆無謀にも敢えて企てる
我が筆が記すべき理由を与え給え。

ルシタニアの王、セバスティアン(二)は
若々しき情熱と行動により
異教の無謀を抑えんとして
広大なるアフリカの国境を破らんとした。
彼はその尊大にして高尚なる思想により
入国を容易なるものと信じ
短期間にその王国の
富と権力、力と人々を動員した。

だが国王ドン・フェリペは
甥が斯くも軽々にその企てに赴くを見て
真(まこと)の父親の如き助言にて
その誤れる意図に反対し
甚だしき断崖に到るべき
その道より外らしめんと考え
其の件に就き語り合うべく
グヮルダーペにて会合せんとした。

慎重なる伯父君の
十分なる道理の説明も懇願も説得も
川から後退せしめ得ると思えし
数多の不都合なる事柄も
大勢の人々の項(うなじ)を一撃の下に
世界を欺くも撹乱せんとする
変り易く素早き女神の意志に
従わせることは出来なかった。

何故ならその誇り高き若者は
正当なる恐れにより困難と思えし事を
分別ある論議に反発して
妨害する一切の物を蹂躙し
自由なる意志を追い求めて
その死と破滅を早めんとしたからである。
蓋(けだ)し勅令と運命の宣告には
助言も忠告も役立たぬもの。

譬(たと)え絶妙の声を持ちても
彼(か)の痛ましき出来事を誰が歌い得よう。
又彼の戦(いくさ)と統制を欠く兵士たちの
斯くも血腥(ちなまぐさ)く惨(みじ)めなる結末と
王国の完膚なき迄の破滅と
僅か一日にして失われし古き名声を。
全ては理由もなく副次的要件に動かされた
一人の燃える若者の意志によるものである。

最も悲しき人々の惨めさをも凌く
彼(か)の不吉なる日に就いては別人が語るがよい。
わが筆は血に塗れたりとは云え
余りの涙に走ることが出来ぬ故。
若し天上の神が気力を我に給うなら
私は始めし道を続けたい。
何故ならこの辺(あたり)から早くも
暗雲の湧き出ずるのを感じるから。

直向なる若き国王が
アフリカの軍を襲撃し
埃立つ夥しき騒ぎの中で
錯然たる魂となりて戦死し
運命が激しく往来する中で
西方の武器を駆使して
四人の王を斃し数多の人々の名声と
評価を奪い去りて後

軈てポルトガルに於て祖父の弟
ドン・エンリケが玉座に就いた。
彼は枢機卿にして叙階せる司祭、
極めて熱心なる宗教家なるも
齢と病によりて衰弱せる状態にて
この世の為よりも天国の為に
運命は余命少なく世継ぎの者とて無き彼に
王国をば提供したのであった。

偉大なるフェリペは衷心より
王国と今は亡き王の不運を悼み
病めるドン・エンリケの
重ねし齢と定かならざる余命に鑑み
甥にして後継者に相応しく
彼の傍系の近親者を通じて
諸々の王国と肩書きに対し有する
彼の権利を明確にせんとして

熱心に且つ讃えらるべき措置により
私欲と野心の全く無き
立派なる基督精神と適性を有する
いと博学なる人士をば集めしめた。
歪曲されし道や道理に従うことなく
彼らが権利と良心に従って
彼のいる階位よりして
主張する王国が彼のものか否かを知る為である。

片やベルガンサ候爵夫人
ドーニャ・カタリーナが
ドン・ドゥワルテ王子の王女として
王国は当然彼女のものと主張し
片やドン・アントニオも
王冠と勿を巡って対抗していた。
だが国民一般の好評にも拘らず
彼は嫡子ならざる故を以て除外された。

而して斯くも困難なる事柄に必要なる
調査が行なわれ、各自に
何の遠慮も忌憚(きたん)もなく
自分の考えを自由に述べさせた。
平穏にして適切なる時に
最も好都合な風に用意して
若しも王国が理性に従わぬ時は
その武器と力を正当化する為であった。

彼らは皆、明らかに
平明なる法律と定めによる傍系親族が
父親を正当に代表する者に非ずと見るや
最も近き合法的な血縁者が後継者となり、
女性よりも男性を優先せしめ
年少者よりも年長者を優先せしめ
こうして優先的後継権は
遺産相続よりも血筋の権利に基き

神の摂理と人間の法律により
ドン・アントニオは除外され
同等なる家系の子孫なる
ドン・フェリペとドニャ・カタリーナの
権利も同様に調査された。
彼はエンリケの甥にして彼女は姪、
彼は男性、彼女は女性、彼は恐れられし王、
成年にして彼女よりも年長、

法典に、又慣習に忠実であり
多くの事柄の実行と判断に
正しく、平等に、且つ健全に臨む
ドン・フェリペは法に従い
王冠の下に征服されし
土地、海域、肩書及び諸国の
正当なる継承者として、
満場一致で宣言された。

扨てドン・フェリペは斯くも権威ある
多数により宣言されたその正当性に鑑み
開放されし下層なる人々の
憎しみと悪意を、且つ又
多数の人々の胸中に根ざす
本質的なる旧来の敵意を懸念し
この新たなる状況の下にて
国民の気持と意志を試さんとした。

而して敬虔なる熱意を以て
王国の安寧と民衆の平和を願い
燃え盛る火に如何にして水を注ぐかを
当惑せる心中で画策し
そして全ゆる手段を用いて
既に公然と、改まる事なく
国民の中に見られ始めし
不穏の空気を鎮めようと努めた。

そのため早速彼は
ドン・クリストーバル・モラを選んだ。
王は彼に大事業が必要とする
数多の様々なる資質を認めていた。
彼はポルトガルの名門の生まれであり
彼に就いては国王が臣下として
安心と希望を以て
信頼し得ると考えられていた。

暴力的な手段による事なく
無秩序なる状況の意志にもよらず
純粋にして厳格なる正義と
法と理性と法典と自然により齎らされた
国王の大義と宣言されし権利の
効力と根拠を彼が理解し、
幾度となくその熱意と堅き意図を表明した事を
承知していた。

これが彼により認められるや
いとも公正なる王として期待される如く
祖国と基督教の置かれし
大いなる危険に目を向け、
現存する騒乱状態を
鎮め給うために
然るべき形に於て
彼を正当なる継承者として宣言した。

それにより秩序なき民衆も
稀に見る騒動をば中止し、
而して彼の宣言は大いなる侮辱と
予期される害を食い止め、
彼が常々行う形にて
その幸福なる時代の今後のために
王国をして法典に従い彼を
正当なる国王として誓わしめるであろう。

ドン・クリストーバルが大使となり
ドン・フェリペの意図を伝えるや
エンリケはこれに真剣に耳を傾けず
曖昧且つ軽薄なる返答をし、
斯くも明白に国王の正義が
彼に伝えられたにも拘らず
それを明確に宣言しようともせず
様々な理由を設けて回避せんと努めた。

扨て斯くも重要にして困難なる事柄の
実行が遅れるを見て
――それは民衆の大胆さに
一層の力を与えることになった――
ドン・フェリペは新たに大使として
何らかの決定を引き出すため
絶大なる権力と十分な権限を与えて
オスナ公爵ドン・ペドロ・ヒロンと

博識なるグワルディオーラを派遣した。
共通の平和と安寧に対し
遅延の齎す緊急の害に鑑み、
一層の熱心さと要請を以て
斯くの如き一大不和と相違に於て
国王が勅令により
その件を一刀両断する事が如何に重要なるやを
明確に分らせる為であった。

而して又凡ゆる瀬踏みを
洩れなく行ない
盲目的な熱情により
国の平穏が乱れる事のなき様、
隠れたる憎悪の念が裂ける前に
彼は枢密院に居し
二人の著名なる人物をば
最終的にドン・エンリケに派遣した。

乃ち一人はロドリゴ・バスケスにして、
慎重さ、実直さ、学問と修錬にかけては
既に証明済みの、経験豊かなる人物、
優れたる判断力と無双の博識の持主であった。
今一人は文才を以て知られたる
モリーナ博士にて前者に劣らず立派な人。
両者共、選ばれし稀有の大人物との
評判高き人であった。

目指すは、エンリケが彼らの報告を受け
既に召集されし閣議に対し
一切の疑念を払拭せしめ
且つ又彼の有する権利に就いて知らしめ
反抗的で情熱的なる国民に対し
全体の利益を強調して
法律と自由を約束し、
彼の権威に帰順せしめる事であった。

而して慎重なる老王はこの事が
万人にとり好都合とは知り乍らも
――何せ正しく明文化された法律により
王国は彼の甥に帰属していたのだから――
老王は臣家と諸国を
より有利に活用せんとして
非礼な延引を弄び
交渉を中断の状態に保った。

扨て悠長なる疑い深き国王は
返答の期限をば延滞せしめたる故
神の摂理により定まれる
死期が慌だしく到来した。
それ故、後継者は止むなく
硬化せる反抗的国民を見て
彼らの目的と邪心に対抗して
正義と武力を重ね合わせた。

だがその前に皆の者と、彼の動議による
和睦のための様々な手段を試み、
頑固執拗なる者に対しては
賄賂や、利益の約束等にて彼らを懐柔せんとした。
然るに執念深く強情なる国民は
差し出されし財を評価せぬ許りか
敵意を露にして
権利と理性に対し門戸を閉ざした。

響き亘る喇叭(らっぱ)の音、
風に飜(はた)めく軍旗、
ポルトガルとカスティリアの
整えられし血を呼ぶ武器
軍需品と戦の道具、
陸海の合戦など
ここで私の脳裏に浮かぶ幾多の事を
出来得る事ならば悉く伝えたい。

猛々しき武器の合間に
権利と正義の話題や
慈悲と偉大さの見本、
邪悪にして反抗的な敵意、
貪欲(どんよく)の袋を脹(ふくら)ませた
寛大にして雅量ある振舞い
その他文士を喜ばせる
生き生きとした色彩が有る筈。

今日よりは才ある人ぞ歌うべき、
而して数ある詩行を飾るがよい。
フェリペは豊富なる材料と広々として
果てしなき肥沃の野を提供するであろう。
その目出度き機会と好運は
私が絶えず望みて適(かな)わざりし
不毛の働きの如く
成果なき業に優るであろう。

如何に多くの地、多くの国を私は歩きし事か。
凍てつく北方の地を横切り
将又(はたまた)南極の地に下り、
未知の地の果てを征服しつつ
様々な気候を経、星座を変え、
航行不能の湾を行き
而して、陛下、陛下の王冠をば
寒き南極の地に及ぼしました。

又陛下の為された陸海の旅で
私がお供しなかった事があったでしょうか。
陛下が国王として迎えられた時、イタリアへ、
アウガスタへ、フランドルへ、イギリスへ。
其の地より烈しき戦の響きに
更に陛下に御仕えすべく、
夥しき剱が怒りを露(あらわ)にして
陛下に抗うペルーへと赴きました。

而して反逆のインディオは懲らしめられ
その王国は従順を誓うこととなり
私は遥(はる)かなるアラウコに赴いたが
その国民は驚き、首木を揺さ振ったが
長引く戦の末に平定され
止むなく支配下に置かれた。
私は更に前人未踏の際果ての地の
征服を続行した。

渇き、飢え、暑さ、寒さ、
是非もなく不足した衣服の事など
蒙った尨大なる苦労は私事故
陛下のお疲れを恐れ割愛したい。
私が通った幾山河、
踏破されし事なき不毛の大地、
まだ語るには時期悪しき
危機、窮地、不運など。(四)

思慮なき若き隊長の
惹起せる事件のため私が
公衆の面前にて絞首の刑に処さるべく
不当にも広場に引き出されし事に就いても、
又其処にて不当にも罪なくして煩わされし
わが長き獄中の日々に就いても
又死よりも耐え難く重大なる
その他の幾多の苦難に関しても語るまい。

未だ嘗て疲れを知らぬわが意志は
陛下の御為に今日も尚健在なるも
常に流れに逆らうわが様を見ては
失望のため衰弱する。
而して斯くも長く大いなる遠征の旅の果てに
わが疲れし船は
逆運に妨げられて
望む港に程遠き所にいる。

然れどわが星の執拗さ故に
斯様に投げ出され打ち拉がれても
正しく困難なる道を私が進みし事を
人々は分ってくれるであろう、
そして又仮令わが不運は更に迫ろうとも
褒賞はそれに価する事を為した事にあり
名誉はそれを持つ事に非ずして
唯それに価するに至る事にあることを。

私を最も惨めなる状態に
閉じ込めている卑怯なる冷遇が
私の手を止め
わが筆を折らしめんとしている事を。
然れば私は是に終止符を打とう。
限りなき事例を挙げ
陛下の御業と高き御心を記すには
別の詩才、別の声、別の調子が必要と思える故。

扨てわが船は既に最後の目的地、
終着点よりさして遠くはない筈。
そして恐れられる疑わしき停泊地は
最も詳しき案内人にも分らない。
時間の短さを考え、
斯くも長き歳月に亘り彷徨せし
不確実なる人生の不確実なる航路が
終る前に私はこの生命を終えたい。

仮令私はこの事に於て遅れ、
今は最後の時を待つのみなれど
私はよく知っている、何時、如何なる時も
神の許に戻るには遅過ぎぬ事を。
神は決して偽りの慈悲を用いた事なく、
従って罪深き者も臆することはない。
侮辱を忘れても奉仕を忘れぬ
立派な神が在(いま)すから。

而して人生の最も華やかなる時
手綱も無く世間に飛び出し
常に阻(はば)しき道を通り
空しき希望を追い求めし私は
挙げし成果の些少さと
神に対し犯せし罪の深さを知り
わが誤りを認めて今日よりは
唯泣きて、歌わぬ事こそ理(ことわり)であろう。

訳注

第十六歌章

一　アミクラスの小舟。嵐の海に挑戦してシーザーをイタリアの海岸まで運んだ無欲で謙虚な航海士に因むもの。

第十七歌章

一　つまり八月某日から九月某日までの間。南半球では冬の終り。

二　ローマ詩人ウェルギリウスの長篇叙事詩『アエネイス』一の四二一〜四三六を参照。

三　アドリア海岸のディラキウムにおけるポンペイウスの陣地をシーザーが封鎖しようとした故事。ポンペイウスはシーザーの娘ユリアと結婚していたが彼女は紀元前五五年に死亡した（そこからこの詩の中にある「娘婿」と言う言葉が生じた）。封鎖はもっと後の前四十八年に行われた。

四　カルロス五世、千五百五十五年一月十六日にスペイン国王の位を退き、息子のフェリペに譲った。この連は南米においてこのニュースが知れた後に書かれた（か修正された）ものと思われる。

五　第二歌章の訳注一二参照。この詩の中に現れる唯一の神話的人物。叙事詩によく用いられる手法ではあるが、エルシーリャはこれを嫌う。第九歌章における聖母マリアの出現を思い出されたい。

六　フリアイ、［ローマ神話］復讐の三女神。

七　ここにも証言者としてのエルシーリャの姿勢が見られる。第十二歌章の序文、更に第二十歌章にもくり返し見られる。

八　第十八歌章のドニャ・マリア・デ・バサンの姿が予告されている。身内の事を詩の中で述べるというアリオストの手法の影響については Chavalier L. *Arioste en Espagne*, Bordeaux, 1966, p152を見よ。

九　出典としてフワン・デ・メナ（Juan de Mena 1411～1456）の『運勢の迷宮』（*Laberinto de la fortuna*）の中でベリョーナにより導かれる夢の旅がある。

一〇　コンセプシオンの要塞への攻撃とサン・カンタンの戦いの日付の一致（千五百五十七年八月十日）はすでに第二部の「読者に」においても指摘されているが、これは詩的なものに過ぎない。エルシーリャはそれが処女座の時だったと書いている（第十七歌章二十三連）。この戦の詳細についてはラピエドラ（Luis M. Cabello Lapiedra）の『サン・カンタンの戦とそのスペイン芸術への影響』（*La batalla de San Quintín y su influencia en las artes españolas* (Madrid, 1927)）を見よ。

一一　ピカルディア知事、コリニー提督。サン・カンタンはピカルディアのエオーヌ（Aione）郡にある。

一二　この戦で名を馳せたイスパニアの軍人。

一三　第十八歌章訳注一参照。

一四　フリアン・ロメロ（Julián Romero）隊長のこと。次の歌章でも述べられている（第十五連）。

第十八歌章

一　恐らくダンドロー（D'Andelot）大佐のことと思われる。彼はコリニーのサン・カンタン防衛者の義兄弟で包囲された軍隊の援助に派遣された。彼の指揮下の歩兵隊はマンスフェルト（Mansfeld）伯爵と第十七歌章で述べられたナバレテ隊長の揮いる分遣隊により壊滅した。

二　スペイン人の証言によれば、軍隊の行動は極めて

模範的とは言い難いものだったようである。(L. Pericot-García, *Historia de España* (Barcelona, 1937, 108))

三　サボイ公爵(Duque Filiberto de Saboya,1528～1580)。サン・カンタンにおける勝戦の長。カトー・カンブレシス和平協定（一五五九）によりフランス国王フランソワ一世により一五三六年以来彼の父が失なっていた領地を回復した。

四　フランス国王アンリ二世とカタリーヌ・ド・メディチの娘イサベル・ド・バロワについての言及。フェリペ二世の第三番目の后で一五六〇年に結婚し一五六八年に亡くなった。次の三行の詩はこの死について述べている。

五　ジブラルタルの大岩。

六　本来は特にキリスト教に改宗し、スペインに残留したモーロ人のことだが、ここでは単にモーロ人。

七　カルロス五世とその唯一人の后イサベル・デ・ポルトガルの娘。ドイツのマクシミリアム皇帝（一五七六年、ラティスボナで没）と結婚、一五五二年にはスペインの攝政、六四年にはドイツの女王、一六〇三年マドリードにて彼女と妹ドーニャ・フワナの設立したデスカルサス・レアレス修道院で亡くなった。

八　二人とも王女マリアとマクシミリアム二世の息子。ロドルフォ（一五五二―一六一一）はハンガリーとボヘミアの王（一五七五）であり一五七六年にはドイツ皇帝だった。エルネスト（一五五三―一六一二）は低地国の総督（一五九四）だった。

九　又はディートリヒシュタイン（一五二七―一五九〇）。ドイツの外交官でマクシミリアム皇帝がマリアと結婚するに当りての随員としてバリャドリーまで同行した（一五四八）。

一〇　Juan Parissot de la Valete, gran Maestre de los Caballeros de Malta. この教団はすでにト

ルコのスルタン大ソリマンによりロダスとトリポリから追放されていた。

一一　島にあった要塞の一つ。トルコ軍の包囲に一五六五年七月まで抵抗したが遂に占領された。

一二　双方の軍の犯した残虐行為についてはペリコ＝ガルシアの本（訳注二）を参照。

一三　守備軍の状況が絶望的となったとき逡巡と遅延の末、フェリペ二世により派遣されたシチリア列王ドン・ガルシア・デ・トレドの指揮下にある艦隊についての言及。

一四　ソリマンはヨーロッパ大陸遠征隊を組織し、現在のハンガリーまで達した。

一五　クワアチアの誤記。名称は幾分漠然としているがほぼ現在のルーマニアとハンガリーを含む地域に相当。

一六　又はツィゲ（Szigeth）、現在のハンガリー領の都市、そこで一五六六年九月五日ソリマンは死んだ。

一七　Ana de Austria（1549－1580）ドン・カルロス王子（一五六八年没）の婚約者。フェリペ二世の第四番目の后でフェリペ三世の母。

一八　一五七〇年十一月十二日。

一九　神聖同盟すなわちローマとベネチアとスペインの間でトルコ軍の地中海拡大を阻止するための同盟。一五七一年五月二五日に宣言された。

二〇　ベリョーナが彼に予告したエルシーリャの妻。（第十七歌章訳注六）

第十九歌章

一　トロイ人パンダロの兄弟で彼も弓の名手として名高い（『アエネイス』・495）

第二十歌章

一　**ダイダルス**［ギリシャ神話］ミノス王により自ら建てた迷宮に息子イカルスと共に幽閉されたが羽

毛と蝋で作った翼のおかげで脱出した。

二　夜の八時から十一時に相当する。

三　『怒れるオルランド』第二十四歌章八十一の七・八参照。

第二十一歌章

一　**ユディト**。聖書に出て来るユダヤの若い未亡人。アッシリアの武将ホロフェルネスの寝首をかき、ベトゥリアの町を救った。

カミーラ。ウィルギリウスの創作による伝説的な女戦士で狩人。父によりディアナ神に捧げられたが女神に献身し、彼女の評判に引かれて近寄る男たちを悉く退けトゥルヌス王の軍に加わりトロヤ人と戦って死んだ。（『アエネイス』）

ディド。フェニキアのテュロス王の娘。カルタゴの建設者と呼ばれる女王。

ペネロペ。ギリシャ神話に現れる、オデュセイウス（ユリシーズ）の妻。夫の長期不在中、貞節を守り通した。

ルクレシア。ローマの貴族。伝説によるとローマの最後の皇帝タルキニウス尊大王の息子シストゥスにより侮辱された。暴行の事実を公表した直後自殺した。

ヒッポ。純潔の鑑とされたギリシアの乙女。敵軍の水兵により捕えられ暴行を受けたがその名誉を救うため紅海に身を投げた。

トゥシア。またはトゥッキア。有名なローマの巫女。不当にも貞潔の誓いを破ったと非難された。

ビルヒニア。多分ルキウス・ボルピヌスの妻で、ローマの巫女たちを嫌い、自分の家にプレベイア・プディキティアのための寺院を奉納した。又、ルキウス・ベルギニオの娘の可能性もある。彼女はアッピオ・クラウディオの淫乱から救う

ために父により犠牲にされた。

フルビア。　クロディオ、イリオ、そして最後にマルコ・アントニオの妻。野心家で意志強く、マルコ・アントニオに対する情熱的な献身は彼以前の男性とのふしだらな生活と対象的。

クロエリア。　ローマの包囲者ポルセンナに人質として差し出されたローマの乙女。囚われの身から逃れ、ティベル河を泳ぎ渡った。ポルセンナに引渡されたが彼は彼女の勇気に感心し自由にした。

ポルシア。　カトン・ウティセンセの娘で、シーザーの暗殺者M・ブルータスの妻。夫の死を知って後自殺した。

マルシピア。　ローマの上流婦人でフルヴィウス・フラックスの妻。その振舞いの純粋さで有名。

ビーナスの像を奉納するためにローマの最も貞節な女性たちから選ばれた。

アルセステス。　テッサリアの王アドメトの妻で、二つの伝説の主人公。エウリピデスが用いているものは夫を救うために我が身を差し出すと云うもの。

コルネリア。　グラッコス兄弟の母で伝説的にローマ人の献身的な母親の典型として知られている。

第二十二歌章

一　**ヤナコーナ**　イスパニア軍の下で働いていたインディオのこと。ケチュア起源の言葉。

第二十三歌章

一　この個所はウエルギリウス（『アエネアス』の第四章、四八七―四九一）やルカーヌス（『ファルサリア』の第六章四六一以下）などにもすでに見られる自然に対する魔術の力という伝統的なモチーフを取り入れたもの。

二　ここに列挙されている魔力のある物質は大部分ルカーヌスの『ファルサリア』第六章四四〇以下の文より取ったもの。

三　［ギリシア神話］鳥の体に女性の顔と胸を持つ怪物。

四　［ギリシア神話］双頭の蛇。

五　目の上に角のような突起のある蛇。ツノクサリヘビ。

六　毒蛇の名。エルシーリャはこの動物に翼を持たせている。

七　［ギリシア神話］鷲の頭と翼、ライオンの胴体を持つ怪物。

八　英語では eagle stone。クルミ大の鉄鉱石の凝塊。鷲が卵を産みやすいようにその巣に運んだと昔信じられていたもので、流産よけや安産の護符、夫婦和合のまじないとして珍重される。（小学館ランダムハウス英和大辞典）

九　アクティウムの合戦についての言及。この地でオクタヴィウス（後に元老院によりアウグストゥスの称号を得たが）は紀元前三一年M・アイントニウスを破った。

一〇　クルゾラレスとも呼ばれるイオニア海に浮かぶ諸島、コリント湾の入口にあり、そこでアンドレア・ドリアが一五七一年トルコ軍を撃ち敗った。

一一　ギリシア、ローマの地獄の神々を呼ぶ言葉。**オルコ**（Orco）は死と死者を司るローマの神。**カンセルベロ**（Cancerbero）は地獄の門番をする百の頭を持つ怪物。**カロン**（Caron）は死者をエスティヒアの沼とアケロンテ湖の彼方に魂を導く案内役。**エスティヒア**（Estigia）と**アベルノ**（Averno）は地獄の地域の詩的な表現。**アケロンテ**（Aqueronte）、**レテオ**（Leteo）、**コシト**（Cocito）、**フレヘトンテ**（Flegetonte）は地獄にある四つの川。**ゴルゴン**（Gorgonas）蛇を頭髪にし、

その目を見た者を石に変えたという怪物。［ギリシア神話］。ステンノ、エウリアレ、メドゥーサの姉妹。

一二　**エレボ**（Erebo）冥府、地獄

第二十四歌章

一　**大海戦**　レパントの海戦のこと。一五七一年、フワン・デ・アウストリアはトルコ軍に対しこの戦で勝利を収めた。

二　ジアン・アンドレア・ドリア（Gian Andrea Doria（1539―16060））で Fieschiの陰謀(1544)で死んだジアネッティーノ（Gianettino）の息子。

三　ベネチアの貴族。レパントではセバスティアン・ベニエロ（Sebastian Veniero）の揮いていたベネチアの艦隊の調達係長でこの海戦に加わり戦死した。

四　カルロス五世とバルバラ・デ・ブロムベルク（Bárbara de Blomberg 1545―1578）の息子フワン・デ・アウストリア（Juan de Austria）のこと。この歌章の第八連参照。

五　恐らくジェノアの銀行家として有名なペドロ・バウティスタ・ロメリン（Pedro Bautista Lomelín）により借り上げられた艦船のことであろう。

六　十六―十七世紀に地中海で用いられた戦闘用大型ガレー船。

七　Mechemet Siroko 五十五隻から成るレパントのトルコの右翼艦隊の司令官。

八　又はエウベア（Eubea）とも言い、エーゲ海のギリシア領の島。

九　又はウルチ・アリ（Uluchi Al）。ナポリ生れの海賊。アルジェの長官となりトルコの艦船の近代化に尽くした。

一〇　アリ・パシャー（Al Baja）は二百五十隻の艦船と十二万の兵を擁する艦隊の司令長官。

一一　原文は ponentina つまり「西（el Poniente）に属する」。連合軍のガレオン船団のこと。

一二　いわゆるトロヤ戦争の舞台となった古代都市トロヤのこと。

一三　Marco Antonio Colona, el joven.(1535－1584) はレパントにおける教皇のガレオン船団の将軍であった。

一四　アレハンドロ・ファルネシオ(Alejandro Farnesio 1546－1592)。フェリペ二世の甥。レパントでは叔父で幼な友達でもあったドン・フワン・デ・アウストリアの主脳部の一員であった。

一五　Monsiuar Leni。サボイ公爵により派遣された三隻のガレー船の司令官だった。

一六　ウルビーノ(Urbino)の皇太子フランシスコ・マリア・モンテフィエルトロ(Francisco María Montefieltro)はサボイ公の旗艦に乗っていた。

一七　ギリシア神話のエリニュスたち、すなわち復讐の三女神、のうちの二人。ローマ神話ではフリアイ(Furiai)に当たる。

一八　カスティリアの騎士団長ドン・ルイス・デ・スニガイ・レケセンス（Don Luis de Zúñiga y Requesens）はドン・フワン・デ・アウストリアの副官として旗艦にいた。一五七三年フェリペ二世によりネザーランドPaíses Bajosの長官に任ぜられた。

一九　ドン・フェルナンド・カリーリョ（Don Fernando Carrillo）は第七代プリエゴ伯爵。ドン・フワン・デ・アウストリアは彼を教皇ピオ五世にレパントの勝利を知らせる大使に任命した。

二〇　ドン・アルバロ・デ・バサン（Don Alvaro de Bazán 1526－1588）はレパントにおけるキリスト教徒の艦隊の護衛の司令官であった。

二一　Don Bernardino de Córdoba。ベテタ（Beteta）候爵。レパントの旗艦の船尾の隊長でこの海戦に

おいて戦死した。

二二　Sebastián Veniero。ベネチアの提督で、レパントではベネチアの艦隊の司令官であった。

二三　Portau Baj 又はPertew Baj。トルコ艦隊の中央部（九十六隻のガレー船より成る）の艦長の一人。海戦で戦死した。

二四　Don Juan de Cardona。シチリアの艦船の将軍、その中三隻は前衛に位置していたが彼は自らそれらを指揮していた。

第二十五歌章

一　**ウルカヌス**　（ローマ神話）火と鍛冶の神。ギリシア神話のヘパイストスに当たる。

二　ウェルギリウスの未完の長編叙事詩『アエネイス』第九章七五三―七五五を参照。

三　新カスティーリャ（Castilla la Nueva）にあるハラマ河の畔の牡牛の勇敢さは十九世紀まで有名であった。エルシーリャは牡牛をスペイン文学に導入した最初の一人である。（J.María de Cossío. Los toros en la poesía castellana, I, 85）

第二十七歌章

一　エルシーリャはこの歌章で中世からルネッサンス時代の伝統的な世界観を展開している。

二　**ドランギアーナ**　現在のアフガニスタンのほぼ南西部にある地域。

三　**ヘドロシア**　古代ペルシアの地方で今日のベルキスタン。

四　**アラコシーア**　古代ペルシアの一地方でドランギーアに近い。

五　**タプロバーナ**　昔のスリランカ。

六　**トラピソンダ**　黒海の南岸に位置するビザンチン帝国の一部及びその首都。

七　**イルカニア**　アジアの一地域。カスピ海の南東の海岸沿いにある。

八　イベリアは大体現在のグルジア共和国の領土を占めていた。

九　**タウリス**　タブリス（Tabriz）のこと。

一〇　**タボルラン**　タメルラン（Tamerlán 1336－1405）のこと。有名なダッタンの征服者。

一一　**ソルタニア**　スルタニアのこと。古代ペルシア中部のタブリスに次ぐ重要な都市。

一二　**アレクサンドル**　マケドニアのアレクサンダー大王のこと。

一三　アジアにキリスト教王国を築いたと言われる中世の伝説上の王。なお十五世紀の末にポルトガル人がアジアの架空の王国と混同してアビシニアの皇帝につけた名前という説もある。

一四　クラウディオ・プトレマイウスの『地理』に基づくもの。彼の説はコペルニクスの学説が現れるルネッサンス期まで支配的であった。

一五　アビシニアの地方。

一六　アビシニアにある。

一七　ナイル河の中流の湾曲した様を述べたもの。

一八　リビアの地方。

一九　**アポロニア**　アフリカの海中海岸にある都市。

二〇　シルテス北アフリカのチュニスの海岸に臨む湾。

二一　地理学者プトレマイオス以来、タナイス川の源流があるとされた仮想の山々。

二二　**タナイス**　ドン河の古名。

二三　北極のこと。

二四　ビストゥラ河とボルガ河の間にある地域の古名。

二五　エウロは東風、メディオディアは南風、ボルトゥルノは日の出と共に起り日没で吹き続ける風。

二六　カスティーリャと新大陸に設けられていた聴訴院。新大陸では司法機能のほか行政機能も兼ねていた。

二七　**キンタール**　重量の単位で四十六キログラムに相

当する。

二八　**アローバ**　重量の単位で国や地方により異なるがカスティーリャでは十一グラム強。

二九　現在のトゥクマン。

三〇　**ガボト**　セバスティアン・ガボト（Sebastián Gaboto）は一五二六年、ラプラタ河の探険を行った。

第二十九歌章

一　**マリウス**　ローマの人民党の党主でシラのライバル。シラはサクリポルトゥスで紀元前八二年に彼を倒した。プラエネステの要塞で包囲され、元老院でシラの盟友たちを抹殺する様、ブルートゥスに命じて後自殺した。

カシウス　シーガの暗殺者の一人。

フィロン　プブリオ・フィロのことか。第三歌章の訳注五を参照。

コドゥルス・アテニエンセ　アテネの王。伝説によれば薪売りに仮装し侵入したアンティカのドーリス人に殺させた。アテネの神託によればコドゥルス王の生きている限りアテネは征服される筈だった。

レグルス　ローマの執政官でポエニ戦役の司令官。二五五年カルタゴ軍に敗れ、捕虜となる。元老院で和睦交渉を行うためローマに送られるが、彼はその提案の拒絶を申し出る。カルタゴに戻り獄死したか、伝説に従えば拷問で死んだ。

アヘシラウス　スパルタ王（前四四四―三六〇）軍事的才能で有名。

ウティセンセ　三頭政治のシーザーの政敵、ポンペイウスの死後、カルタゴの西北ウティカにて歿。

第三十二歌章

一　ヴィルギリウスの叙事詩『アテネイス』に現れる人物でカルタゴの女王。彼女の辿った運命はガルシラーソ（Garcilaso de la Vega 1501－36）以来スペインの詩歌において好意的に扱われてきた。

二　ヴィルギリウスのこと。彼は紀元前七〇年、マントゥアに生まれ、アウグストゥスの友人であり被保護者であった。

三　ディドが貞節な女性であったとする見方はスペイン文学でしばしば現れる。

四　又はヘラクレス。アルシデスは「アルセオの子孫」であるが、彼の義父アンフィトリオンはアルセオの子であることを思わせる。

第三十三歌章

一　**ピグマリオン**［ギリシア神話］自作の象牙の女人像に恋をしたキプロスの王。

二　**シルテス**　北アフリカのリビア領にある二つの湾の古代の名称。

三　**リグリア**　イタリアのジェノーバ湾に面する地方名。

四　ランペドゥーサ地中海のアフリカの海岸に面する島々。ランペドゥーサはトリポリの向いにある。この語源説はもちろん作者の空想の産物であり、根拠のあるものではない。

五　**ユピテル**［ローマ神話］ローマ神話の最高神であり、ギリシア神話のゼウスに相当する。

六　**パルカ**［ローマ神話］普通は複数形で用い、生死を司る運命の三女神を指す。転じて「死」をも意味する。

七

第三十四歌章

一　有名なカルタゴの将軍で優れた戦略家（紀元前二四七－一八三）

二　シーザーによってファルサリアにて亡ぼされた（紀元前四八）ポンペイウス将軍についての言及。

第三十五歌章

一　**ホイポス**［ギリシア神話］太陽神アポロの呼称。

二　**マナ**［聖書］イスラエル人がエジプト脱出後、荒野で神から与えられた食べ物。

三　エジプトの鍋豊かで快適な生活について述べる時に比較的に用いられる。旧約聖書の出エジプト記十六の三及び民数記十一の五を参照。

第三十六歌章

一　此の前口上がアリオストの『怒れるオルランド』の影響であることは既にメディーナも指摘するところ。

二　**ビクーニャ**　アンデスの山中の高地に生息する動物。その柔かな毛は珍重されている。

三　マゼラン海峡のことか。但し実際、エルシーリャはるの到達した所はその海峡からは遙かに遠いチロエ島であった。

四　チロエ諸島の主要な島チロエに上陸した千五百五十八年二月末日という日付はチリ遠征に関する歴史的資料としても重要である。メディナ（José Toribio Medina）の *Vida de Ercilla*［1917］の七十九ページ以降を参照。

五　フワン・デ・ピネーダとの公衆の面前での喧嘩のこと。長官ドン・ガルシア・デ・メンドーサは二人に絞首刑を宣言した。騒ぎの原因と経緯についての詳細は拙文「『ラ・アラウカーナ』の推敲における一側面」*Estudios Hispánicos* 11, 1985.（大阪外国語大学イスパニア語研究室）を参照のこと。

六　現在のアゾーレス諸島。

七　**シレシア**　ポーランドのスランスクのこと。

八　**モラヴィア**　旧チェコのモラヴァ川流域地名。

九　**パーマニア**　今日のオーストリア、ルーマニア、ハンガリーの一部にまたがる地域でドナウ河が流れる。

一〇　第三十四歌章第三十八連以下を参照。

第三十七歌章

一　**ルシタニア**　ポルトガルの古称。

二　聖ヨハネの福音書第十五の九と十二に言及したもの。

三　**セバスティアン**　一五五七年から一五七八年までポルトガルの国王であった。生年は一五五四年、アルカサルギビールにてアフリカのムーア人と戦って死んだ。

四　実際第三十五歌章とその次の歌章では「際果ての地での危険や窮地」について述べているのだが。なお、この物語は第三部の初版にはなかった。

訳者あとがき

一昨年の第一部の出版に続き、その続編たる第二・第三部を合冊としてこのたび上梓することができたことを素直に喜びたい。思えば第一部は一九九二年すなわちコロンブスのアメリカ大陸到着五百年記念の年に刊行され、そして今回は作者アロンソ・デ・エルシーリャの没後四百年目というこれまた記念すべき年に当る。

すでにこの作品に関しては作者の生涯ともども第一部のあとがきで大略述べておいたが、全部が終了したのを機会に、文献の補足など、若干の文言を加えておきたい。

先ず、『ラ・アラウカーナ』が叙事詩かどうかと云う問題については、従来から多くの批評家たちによって論争がなされてきたがその理由はエルシーリャの作品が古典的な叙事詩に必要な三つの条件つまり、一、詩を開始するに当たり、ナレーターが序文で、この仕事の困難さと人間としての力の限界を克服すべくミューズの神の加護を祈願すること、次に歌う内容を紹介すること、最後に順序立てて歌い出すことが『ラ・アラウカーナ』の場合、必らずしも厳守されていないことの他に叙事詩のナレーターの本質的な特徴である全知という特徴が薄れ、作者自身が作品の中に登場するといったユニークな性格を有することにある。ともあれこの作品が、評論家コロミナス氏も指摘する如く、文学的に見て特異な存在であることは間違いない。因みにメネンデス・イ・ペラヨは「イスパニノアメリカの詩歌史」の中で『ラ・アラウカーナ』には戦争のクロニカ的なところもあるが、叙事詩であると認め、文学史家A・バルブエナ・プラットは本質的に戦を扱った詩であると定義している。またチャールス・オブランはこの作品に関して興味深い分析を行ない、

全体を三つの文学的ジャンルに大別している。すなわち一五六八年に出た第一部はこれを韻文による戦争の記録と見、一五七八年の第二部は騎士道的エピソードを含んだ叙事詩、そして一五八九年の第三部はジャンルの曖昧な文学作品として位置づけている。スペイン・ルネサンス期の詩人ガルシラーソ・デ・ラ・ベガやセルバンテスと同様、エルシーリャは完成された人間の見本としてこの作品の中に現れている。ルネサンスの極めて重要な一面は一人の生命を芸術作品に変えることであった。その点エルシーリャもガルシラーソも人生そのものが芸術的であった。彼らは文学作品の中に、いやそれ以上に自分の生き様の中に永遠の美の概念を形成しようとした。その美は実際の人間行動の中では善意となって表わされる。従って、特にスペインではルネサンスの美学は同時に倫理的でもあった。

さて『ラ・アラウカーナ』の最も特徴的な面を挙げてみると、先ず、この作品の中に、叙事詩としては珍らしく作者自身が暗示されているのみならず、ドラマチックな存在として現れていることである。その目的は察するにこの当時の征服のクロニカにしばしば見られる如く、詩人の個人的な業績を強調するためと思われる。これは『ラ・アラウカーナ』の執筆の動機とも深く係っているが、詩の中心的な目的は飽くまでもフェリペ国王の統治するイスパニア帝国の偉大さを謳(うた)うことであった。だがエルシーリャの場合、例えばメキシコ征服史を書いたベルナル・ディアス・デル・カスティーリョと異なり、物質的な形での報酬を期待してではなかった。

『ラ・アラウカーナ』を他の叙事詩と隔てるものは、人間の情念ないし悪徳に関しての珍らしくも深い観察である。このために作品はメディーナも言う如く物語としてのみならず、詩人であると共に道徳家でもあったエルシーリャの産んだ哲学的な叙事詩と考えられる。先にも少し触れたように、そして既に多くの批評家の指摘するように『ラ・アラウカーナ』には考えられているよりも

遙かに鮮かに作者エリシーリャを垣間見ることができる。チリの評論家メディナの引用するバンセルの言によれば叙事詩というものはその時代の思想や情熱の反響でなければならない。その点に於て『ラ・アラウカーナ』は正にルネサンス期のスペイン人の思想の反映と見ることができる。

エルシーリャにガスパール・デ・カスティリオーネの『廷臣論』の影響が強く現れていることがこれまで余り指摘されなかったのは些か意外な気がする。彼がボスカンによるスペイン語訳で読んだのみならずその精神を吸収同化した事を実証して見せたのはコロミナスである。エルシールリャがとりわけスペイン・ルネサンスの詩人であった事については先に述べた通りである。十六世紀後半のスペインの精神文化の一つの柱としてプラトンの思想、特に愛に関する思想が挙げられるが、これを普及させたのはカスティリオーネの前揚の本とレオン・エブレオの『愛の対話』である。従ってこの当時の文化人にとってこれらの作品は当然よく知られていたに違いない。

カスティリオーネが完全なる廷臣としての必須条件として挙げた第一は高貴なること、つまり由緒正しき出自である。高貴なることによって諸々の徳性は自ずから備わるわけである。エルシーリャの家系に見られる高貴さと、そこから来る高貴な精神は『ラ・アラウカーナ』の随所に表明されている。第二十歌章のテグワルダとクレピーノのエピソードは全く廷臣としての高貴さを示すものである。彼女が数ある求婚者の中からクレピーノを選んだのは彼が一連の競技に勝ち抜いたことも然り乍ら真の動機は彼女が彼の態度振舞いに高貴なるものを見たからであった。この高貴さは、その他にも例えば彼が総司令官たるガルシア・ウルタード・デ・メンドーサにより手ひどい仕打ちを受けたにも拘らず、敢えて復讐の気持を作品の中に一言も洩らさなかった事からも窺える。

一方、文化人としての教養もカスティリオーネの唱えるものと合致している。すなわちエルシーリャが『ラ・

アラウカーナ』を書くに当ってスペイン内外の幾多の詩人の作品に霊感を得ている事はすでに知られているが中でもルカーヌスの『ファルサリア』はマリン・ラソ・デ・オロペサのスペイン語訳が一五四一年に出ている事もあって影響を与えているし、イタリアの詩人アリオストの作品も一五四九年のウレアによるスペイン語訳本で読んだものと考えられる。『ラ・アラウカーナ』第一部が出るまでにすでに第四版が出ている。因みに第一部の冒頭の詩はアリオストの『怒れるオルランド』のそれに対する暗黙の言及と考えられる。スペインではガルシラーソ・デ・ラ・ベガの作品を好み愛読したと彼自身述べているが、特に女性の性格づけにおいて影響を受けている。例えば『ラ・アラウカーナ』の第二十歌章に出てくるグラウラという土着の女性はガルシラーソの「相聞牧歌」第二の羊飼いの少女カミーラという女性と酷似している。又特に風景描写においても同様のことが言える。同じ歌章の、テグワルダとクレピーノの出会いの場所の描写は「相聞牧歌」第三を思わせる。ルネサンスの人間らしく風景も現実のものよりも理想化された風景を求めた。従来、エルシーリャの読書量はやや限られたものであったとする否定的な評価が支配的であったが近年そうした評価は可成り改った感がある。作品に表われる古今の人名や神話に因んだエピソードも、彼の豊かな教養を窺わせるのに十分である。例えば、『ラ・アラウカーナ』の中では詩人はベローナ女神に連れられていつの間にかサン・カンタンに達するが、同じ女神にさらわれる詩人の話は、同国の詩人フワン・デ・メナにもすでにある。戦闘の描写の仕方が正確且つ写実的なことや第十六歌章の嵐の描写は、シーザーの『ガリア戦記』のブリタニアに上陸する場面の描写を彷彿させるものがある。

エルシーリャのアラウコ人、更にインディオ全般に対する考えについて言えば、彼はラス・カサス神父が嘗て唱え、更にモンテーニュによって引き継がれた思想、すなわち土着の人びとの持つ諸々の価値を認め、それを尊

重する態度とほぼ同じである。しかしラス・カサスとの違いは、エルシーリャは被征服者をスペイン人に同化させ得ると信じていた事である。価値観と信条を同じくする事が平等の基本となる筈だと考え、この点においてエルシーリャはインディオの価値観、具体的には愛国心、自由と勇気を尊ぶ心などが結局彼自身の大切にするものと大差のない事に気づいたわけである。ラス・カサス神父は平等は同一であることを必らずしも要さないと主張し、従って土着の人々は神を彼ら自身の伝統に従って解釈することができるとしたが、エルシーリャはキシスト教がインディオの宗教的信条よりも上位にあると常々考えていた。しかし、彼のこの思想も現実にスペイン人の新大陸における行動をつぶさに見て揺らいでいる。土着の人々は彼によれば誤れる信仰あるいは迷信に導かれているとはいえ彼らの祖国愛と誇り、そして又スペイン人が遙か昔に失った純粋な気持を保持しており、一方スペイン人の多くは貪欲で私利私欲に動かされていたからである。

『ラ・アラウカーナ』は歴史と言うよりも戦いの歌ではあるけれども焦点はヨーロッパ人とアメリカインディアンの衝突というよりもスペイン帝国の価値観と土着の人々のそれとの間の思想的相剋に当てられている。インディオがスペイン人と同等であるためには真の宗教に欠けているとエルシーリャは見たが彼のそうしたインディオの宗教批判は同時に彼のスペイン帝国に対する批判的な見方と相まっている。スペイン帝国の偉大さの象徴としてのサン・カンタンの戦いとレパントの海戦更にフェリペ二世の下のイベリア半島の統一をめぐって彼の分析が行われている。こうして『ラ・アラウカーナ』の中の一見無関係なエピソード、つまりディドの話やサン・カンタンにおけるスペインの勝利はこの作品の構成上本質的な機能を持つことがわかる。サン・カンタンの戦いはスペインの覇権の絶頂を示すできごとであった。当時の列強の一つだったフランスにフェリペ二世は屈辱感を与

えたのであるが、その僅か二十年後に、スペイン人は遙かなチリの僻地で、神を持たぬ蛮人に包囲された。エルシーリャは意図的に、アラウコ人により包囲され苦戦するペンコの要塞の模様とフランスにおける勝利を並べた。

エルシーリャの作品にはこの様にしてスペインの運命そのものを問う内的な論争が含まれている。『ラ・アラウカーナ』の第二部の出た一五七八年には一五五七年のサン・カンタンの戦いの栄光はもはや一つの郷愁としての出来事となっていた。スペインはすでに自からの運命を見失い始めていたのである。オットマン帝国に対すレパントの戦いでのスペインの勝利の叙述も同じ意図の下に行われたものと考えられる。一五七一年、フワン・デ・アウストリアの揮いるキリスト教徒の艦隊は地中海における海賊的行為やアフリカにおけるキリスト教徒の奴隷交易を終らせようとしたのであるがスペインの勝利によって決定的に異教徒に勝利を収めたと考えられている。この勝利は先のフランスに対する勝利と共にスペインにとって無敵の感を与えたのであったが、エルシーリャはこの考えに必らずしも同調しなかったふしがある。というのも彼はレパントの海戦を反乱するアラウカの酋長ガルバリーノの勇ましい演説の後に置いているからである。この二つの出来事を繋ぎ合わせることによって作者は征服を支えそれを信じさせていたキリスト教の原理に対して問いかけることになるのである。彼自身は歴としたキリスト教徒ではあるがその掟を無視する征服者たちの個人的な物欲のために用いられたキリスト教の原理に疑問を抱いた。スペイン人が為した数々の犯罪的行為を彼は知っていたが、この犯罪は地中海やアフリカでキリスト教徒に対し行われていたトルコ人の行為と何ら変らぬ事を悟ったに違いない。

第三部は無敵艦隊壊滅の一年後、一五八九年に出たが、ここでは戦争の展開の模様よりも寧ろ理論的な考察に重点が置かれている。ここにおいて彼の叙事詩はエルシーリャと幾人かの同僚が友好的なインディオとチリの南部

で遭遇する時の彼の抱く希望と関心に変身する。彼はインディオとの新しい経験に大きな影響を受けると共に、文明が腐敗や貪欲や不正を齎すことに深く思いを致し、インディオたちに次第に大きな関心を抱くに至る。そして彼にとってキリスト教徒の征服の理想は悪夢となり歪んだユートピアとなる。エルシーリャの戦いに対する態度も、それを正当化することと否むことの間で揺れ動きはじめる。戦争は国王により宣せられたものである以上廷臣として正当と認めなければならない。このことはフェリペ二世の下でのイベリア半島統一の場合についても言えることであり『ラ・アラウカーナ』の最後章でもこれについても言及がある。征服の戦いに対しエルシーリャが否定的な気持になったのはスペイン人が無差別に個人的欲望を満たす行為をとったからである。インディオたちはそのために虐待されたのだ。彼らはその領土と自由を守るために戦っているのである。この様なインディオの態度の象徴として叙事詩の中にディドのエピソードは持ち込まれたわけである。ここではヴィルギリウスの作品の中のディドとは違ったディドの伝説の異端的な解釈がなされている。つまり亡き夫の尊厳と名誉を守るために主人公が犠牲になることに重点が置かれている。リビアの暴君ヤルバスとの結婚に抗い且つ又都市の破壊を恐れる市民の圧力に耐えたカルタゴの女王エリサ・ディドの死は利己主義と裏切りに対する勝利を示したものと解すべきであろう。エルシーリャは第一部の冒頭で恋の話はしないと云明しているだけに些か意外に思えるが、よく見ると彼の扱う恋愛は戦争と深く係っていて、然もスペイン人とアラウコ人との両面から語られている。貞淑なる女王はアラウコ人の自らの土地に対して抱く価値観を表わしている。そうなると、ヤルバはアラウコ人に対するスペイン軍の象徴とも言える。伝説の中のディドは森や山や戦場を夫カリオラーノを探して彷徨するグラウラという架空の土着の美しい婦人となることによってアメリカ化される。彼女の夫は偶々エルシーリャにより

助けられて彼女と再会するが、彼もエルシーリャを敵の待ち伏せから救うという風に二人とも劣らず立派な人物として描かれている。スペインで当時流行していた「モーロ人小説」の世界を彷彿させる場面である。ルネ・ハラがいみじくも言う如く、もしもこの作品において勝利があるとすればそれは死に対する愛の勝利であり、戦いに対する平和の勝利であり、征服と破壊に対して生の大切さを肯定する詩の勝利である。

最後に、第一部の場合と同様、この長く厄介な仕事の遂行に向けて絶えず貴重な助言と励ましを下さった本学の客員教授クラウディオ・バスケス氏にこの場を借りて心よりお礼を申し上げたい。また、わざわざ拙稿をワープロで根気よく清書して下さった本学大学院生の磯野吉美さんにも深く感謝します。そしてこのたびもまた丁寧に目を通してくれた妻にも謝意を表します。

一九九四年六月

研究室にて

追加参考文献

Alborg, J.L.: *Historia de la literatura española*, Gredos, Madrid, 1972

Alegría, Fernando : *La poesía chilena*, México, 1954

Aubrum, Charles : *Poesía épica y novela. El episodio de Glaura en La Araucana de Ercilla,* Revista Iberoamericana, 27 (1956) 261-62.

Balbuena Prat, Angel : *Historia de la literatura española*, 8ª ed. Tomo IV, Gustavo Gili,Barcelona, 1968

Corominas, Juan María : *Castiglione y La Araucana.Estudio de una influencia*, Madrid, 1980

Foster, David William : *Handbook of Latin American Literature*. Second ed. Garland Publishing, Inc.N.Y.1992

Goic, Cedomic : *Los mitos degradados. Ensayos de comprensión de la literatura hispanoamericana.* Atlanta G.A, Amsterdam, 1992

Menénder Pelayo, Marcelino : *Historia de la poesía hispanoamericana*, II, Obras completas, Tomo 28. Madrid.

Pierce,Franc : *The Heroic Poem of the Spanish Golden Age,* Oxford, 1947

trad. *La poesía épica del Siglo de Oro*, Madrid, 1961

訳 者 紹 介

吉 田 秀太郎（よしだ ひでたろう）

1931年香川県に生まれる。1953年大阪外国語大学イスパニア語学科卒業。1956年3月チリ大学文学部イスパニア文学科卒業。1971年より大阪外国語大学教授。イスパノアメリカ文学専攻。日本イスパニア学会会員。日本ラテンアメリカ学会会員。共編・著書－『ラテンアメリカ文学を読む』国書刊行会（1980）、『和西辞典』白水社（1979）、『現代スペイン語辞典』白水社（1990）、O・パス『孤独の迷路』新世界社（1976）、A・ロア・バストス『汝人の子よ』（1984）、カブレラ・インファンテ「平和の時も叩きの時も」国書刊行会（1977）など。

大阪外国語大学学術研究双書12
ラ・アラウカーナ（第二・三部）
アロンソ・デ・エルシーリャ

1994年9月30日発行

訳・解説　吉田（よしだ）秀太郎（ひでたろう）

発行者　〒562　箕面市粟生間谷東8丁目1番1号
大阪外国語大学学術出版委員会

印刷所　〒531　大阪市北区中津6丁目13番20号
㈱アイジイ

ISBN4－900588－12－1

無断転載を禁ずる。

大阪外国語大学学術研究双書 既刊

1．レフ・トルストイと革命運動（1990）	エルヴィン・オーバーレンダー著 法橋和彦	 監訳・解説
2．ロシア語アクセント研究（1990）	神山孝夫	著
3．社会言語学（1991）	フリチョフ・ハーガー 乙政潤	等著 訳
4．Dwelling Space in Eastern Asia（1991）	Richard ZGUSTA	著
5．ラ・アラウカーナ（第一部)(1992）	吉田秀太郎	訳
6．私の精神鑑定集（1992）	志水彰	著
7．モンタペルティ・ベネヴェント仮説（1993）	米山喜晟	著
8．古代ブルガリア語文法（1993）	イヴァン・ドブレフ 石田修一	著 訳
9．世界の中のポルトガル語（1993）	河野彰	監訳
10．ルーマニア語史概説（1993）	アレクサンドゥル・ニクレスク著 伊藤太吾	 訳